

奇譚クラブ

奇譚クラブ

奇譚クラブ 昭和四十九年九月一日発行 九月号(第28巻第9号) 毎月1回1日発行 昭和三十二年四月二十一日印刷 国鉄大島特別機承認誌第230号

THE KITAN CLUB

Published Monthly by
Akatsuki Shuppan
Osaka Japan



9
1
1
9
7
4
9

1974.9

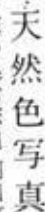
9

新しい風俗文庫誌

雑誌 2805-9

¥6000

△女体緊縛写真集Ⅱ 定價一〇〇〇円（送料510円）



女体緊縛の華

・本誌写真部構成

緊縛女体の光と影

·編集部構成

痛柱海奔妖酒な可は美荒柱

逆愛俯黑身本浮麗秀

カメラ・ハント楽我記……辻村
女体緊縛の醍醐味を語る……塚本鉄三 降

本誌愛読の女性の方々へ

◆本誌二百号突破記念◆

一、形式は、小説、創作、読物などのフ

シ、フ、イ、ク、デ、モ、ト、物、白、体、験、手、記、の、よ、う、な、
 実、見、談、や、レ、ポ、ン、ル、ボ、結、構、だ、す、見、聞、記、
 飲、の、は、添、布、し、ま、す、一、つ、幸、い、更、に、参、考、資、料、な、
 七、の、イ、ム、め、に、下、さ、し、ま、す、手、紙、の、随、筆、論、説、リ、意、限、り、が、
 など、セ、イ、ム、の、如、何、感、に、下、さ、し、ま、す、手、紙、の、随、筆、論、説、リ、意、限、り、が、
 一、の、模、倣、を、選、る、形、式、の、も、随、筆、論、説、リ、意、限、り、が、
 く、一、の、模、倣、を、選、る、形、式、の、も、随、筆、論、説、リ、意、限、り、が、
 作、家、の、野、心、を、出、し、な、新、流、は、絶、筆、の、限、り、に、排、下、さ、い、
 者、の、方、は、登、竜、門、と、し、て、本、誌、の、試、み、て、下、さ、い、

▽規 定△

一、応募作品は、すべて未発表又は自作品に限
 ります。原稿は、必ず二百字以上、四百字以下に
 稿用紙を御利用願います。枚数は三十枚以上、
 一、百枚以下に制限致します。
 入選作品は、規定の賞金を贈呈致します。掲載
 掲載の同時、発表の支障ありと思われ、尚し
 削除の際、原稿の返戻は、御承願を。
 故、原稿の返戻は、御承願を。
 つて、原稿の返戻は、御承願を。
 一、区別する。第一、一般に、読者原稿、読者原稿
 と、区別する。第一、一般に、読者原稿、読者原稿
 下さい。ペンネーム、匿名に、自由にお書き
 住所（又は連絡先）は、必ずお書き願います。
 応募者の氏名を公開したり、他へ洩したりなど
 性は、絶対の奇巧に作品を発表、御安心、下
 と、手腕を、どうか發揮して下さい。貴方の力
 の一、原稿の送付先は、大阪市住吉区大領町四
 の六（第一種郵便）出版株式会社編集部宛、必ず郵送
 込みは、固くお祈り致します。直接の訪問並に控

浜名湖畔の一夜

塚本鉄三・撮影



疼痛と羞恥を耐える

△矢島靖子▽

昭和四十九年

九月号目次

△第二十八卷 第九号
△通刊第三一九号▽

フォト「可愛いM女の横顔」△南加津子▽…………井上章太郎…………(29)

「カメラ」と「ペン」のルポルタージュ
△矢島靖子のM性の謎をえぐる▽

浜名湖畔の一夜…………塚本 鉄三…………(30)

マニア通信

浣腸の使徒・恭子の近況…………村田 恭子…………(64)

連載Mグループ作品『女の虜囚』(7)…………佐治 麻造…………(66)

読切S小説『朧月夜の薔薇奴』…………城崎 狂助…………(80)

SMプレー・レポート

妻貸し出しの記……………後藤 執生…………(93)

連載M派交友録(58)『マリファナ・パーティー』…………鬼山 絢策…………(98)

連載小説『大噴火』△第七十回▽……………千葉 青鬼…………(112)

連載時代S小説『紫蘭の門』(36)……………風流極道軒…………(120)

随想 肛門飲酒のすすめ……………三木 令子…………(134)

M女通信 高村浩子の告白

禁断の木の实を食べてしまった私……………高村 浩子…………(136)

告白(懸賞入選)

「S氏」と「M氏」の告白……………虻野 譲治…………(144)

妊婦マニアの告白

妊婦ヌードの魅力……………高野 原美…………(152)

須坂旭様のプレゼントにお応えして

奴隷妾まりこの妄想……………北川まりこ…………(166)

「S研」レポート△プレイ会▽顛末記

(渡部好美夫人が悦虐にすすり泣くとき)

『畜生の烙印』……………塚本 鉄三…………(176)

「S研」ニュース特報・森田美美子との邂逅

白豚々 志願の女……………塚本 鉄三…………(200)

読者通信……………編集部選…………(260)



海老と股間縛り

＜矢島靖子＞



逆^{ぎやく}吊りの陶醉



＜渡 部 好 美＞



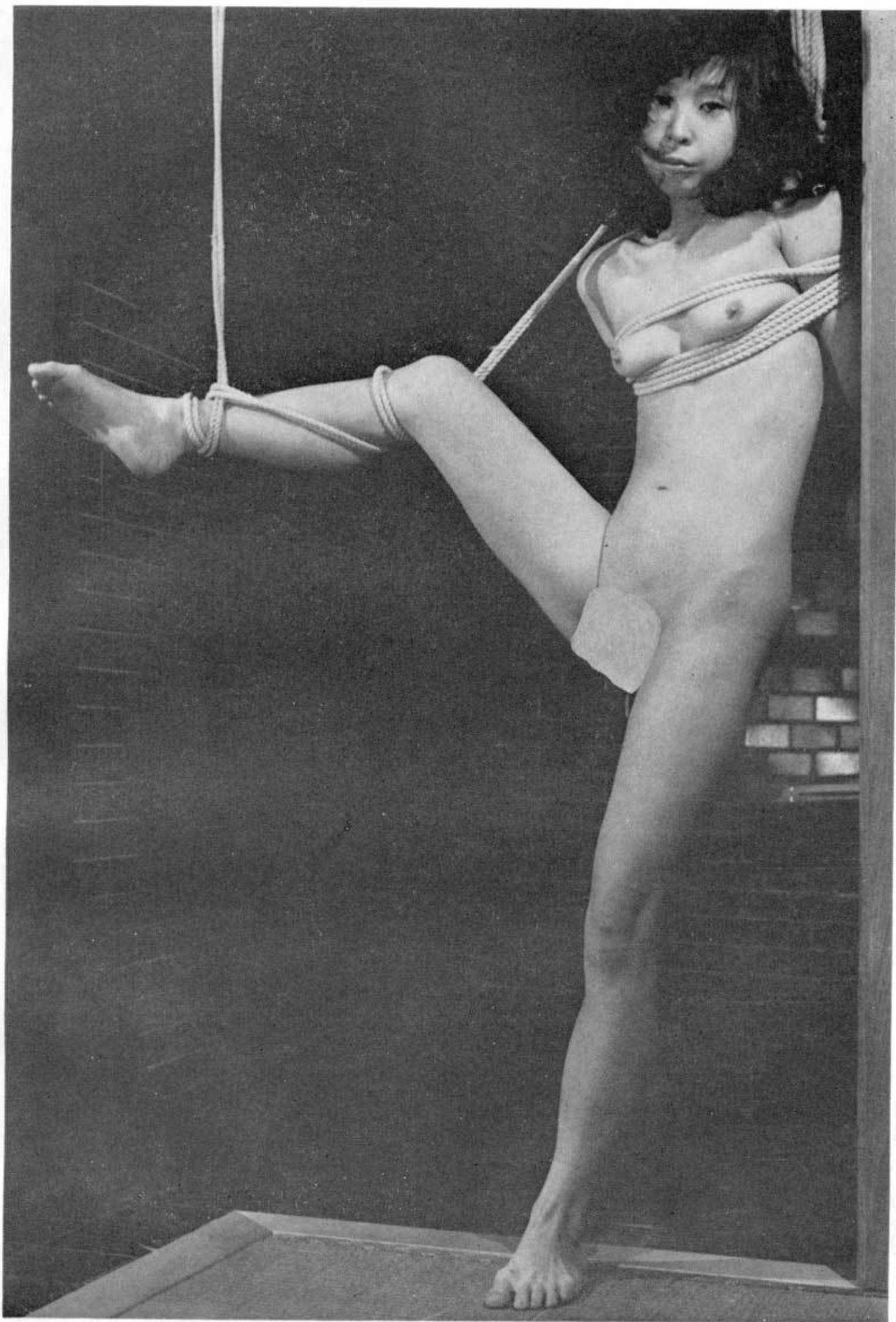
どこまで上るか、脚！

＜矢島靖子＞



燭台と化した女体

〈渡部好美〉



脚線美への挑戦

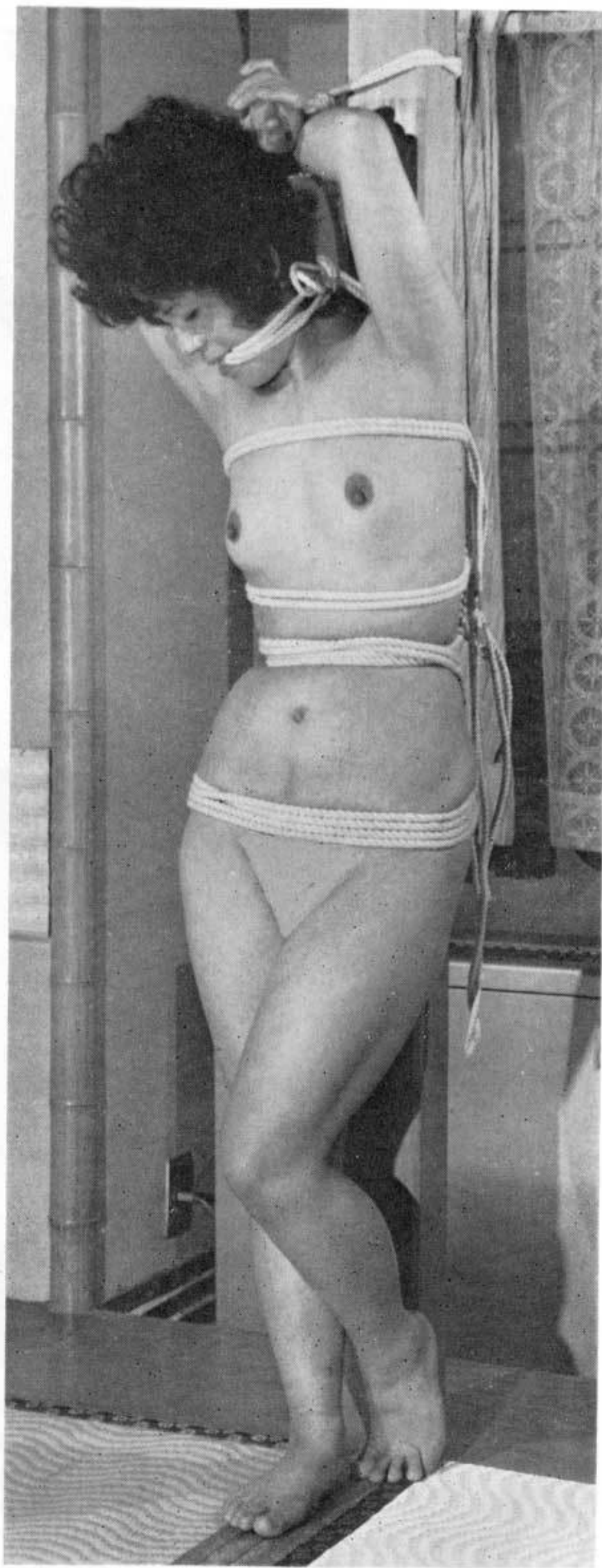
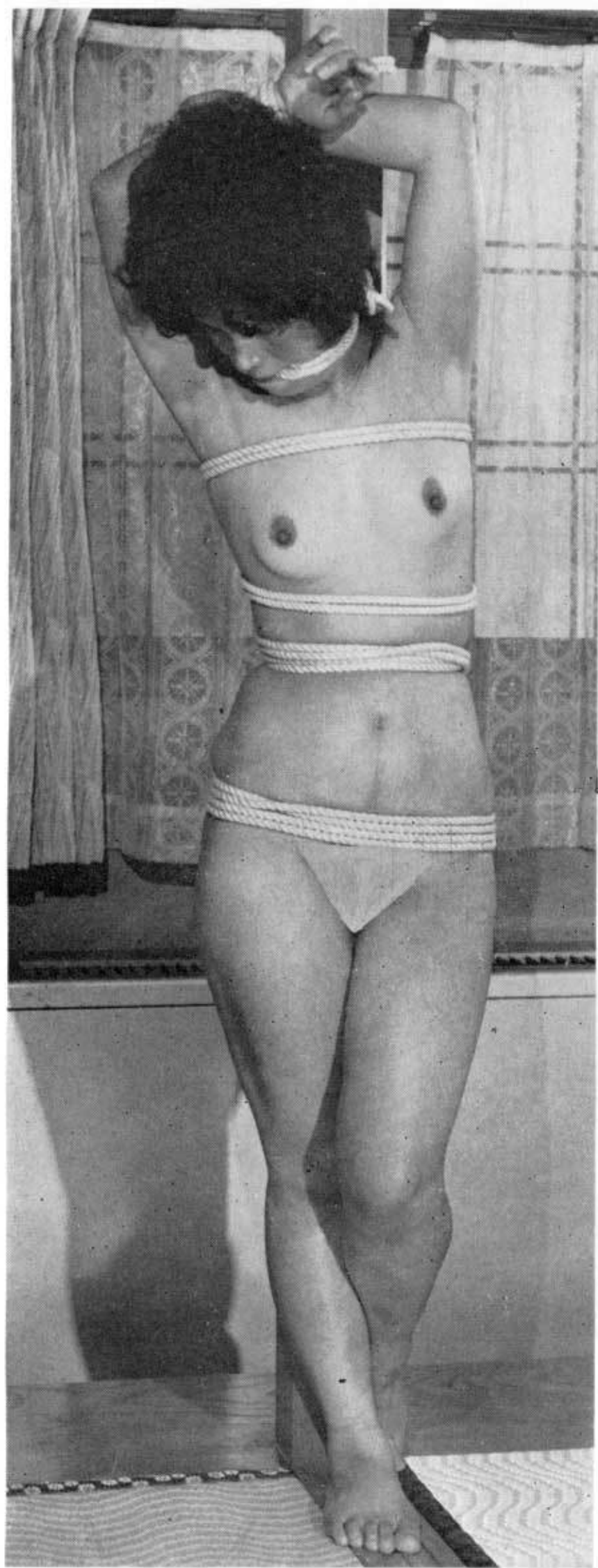
〈前田真知子〉



オシメカバーを当てる

＜渡部好美＞

裸身の品定め



＜矢島靖子＞

吐息が聞えそう

△玉木章子▽



麻縄慕情

△福井桃子▽

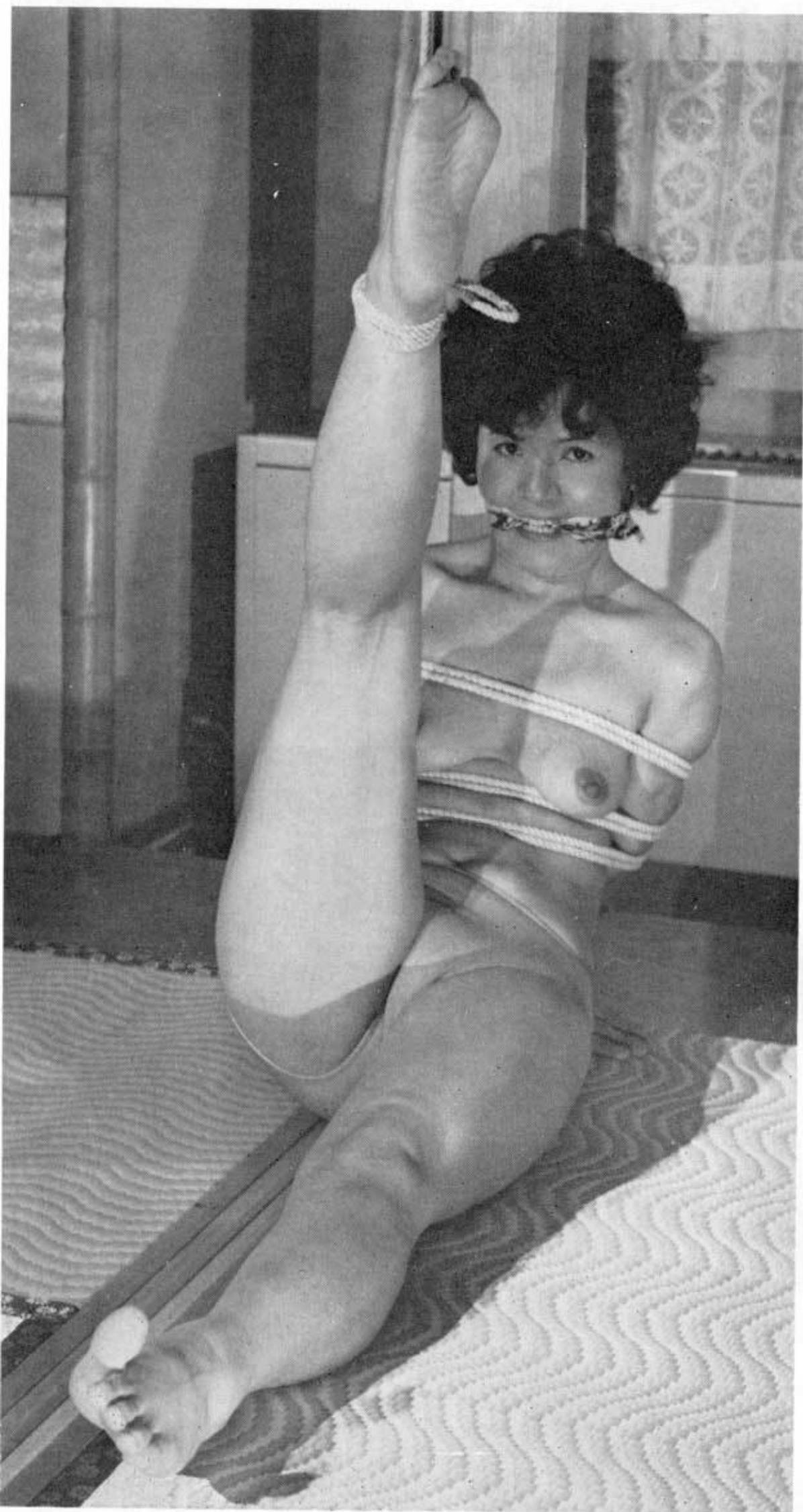




黒縄記の実践



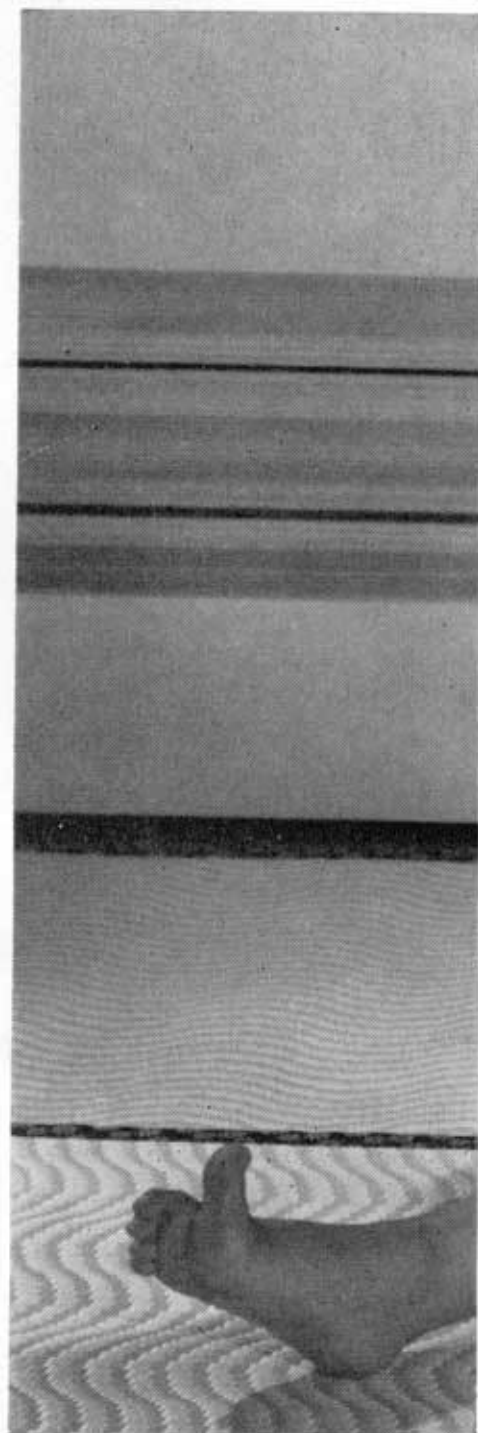
柔 軟 な 足 の 表 情



＜矢 島 靖 子＞

縄
の
感
度
抜
群

△矢 島 靖 子▽



△前 田 真 知 子▽





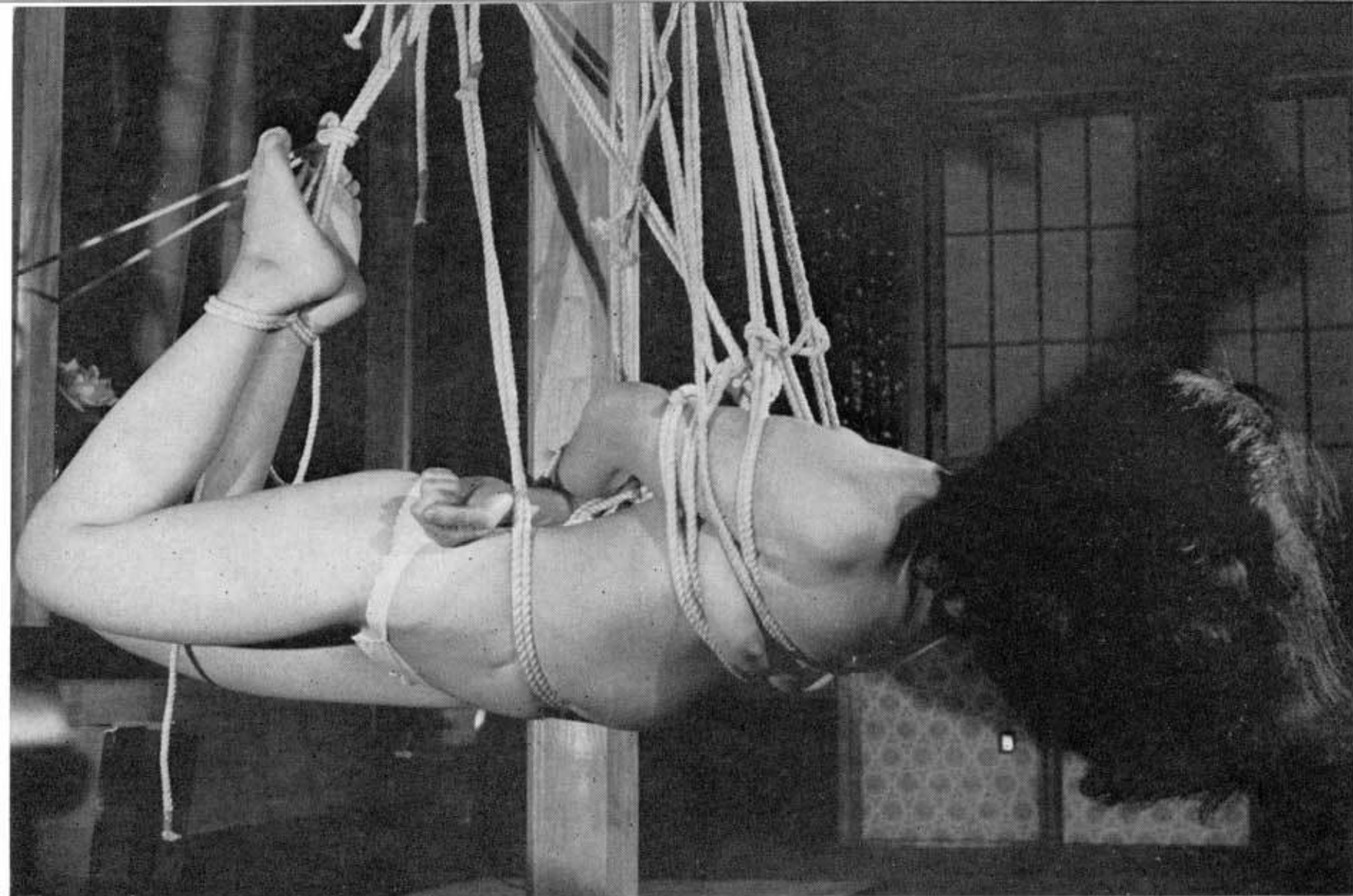
菱縄縛りの悦虐

＜渡部好美＞

密室の中の妄想

＜高村浩子＞



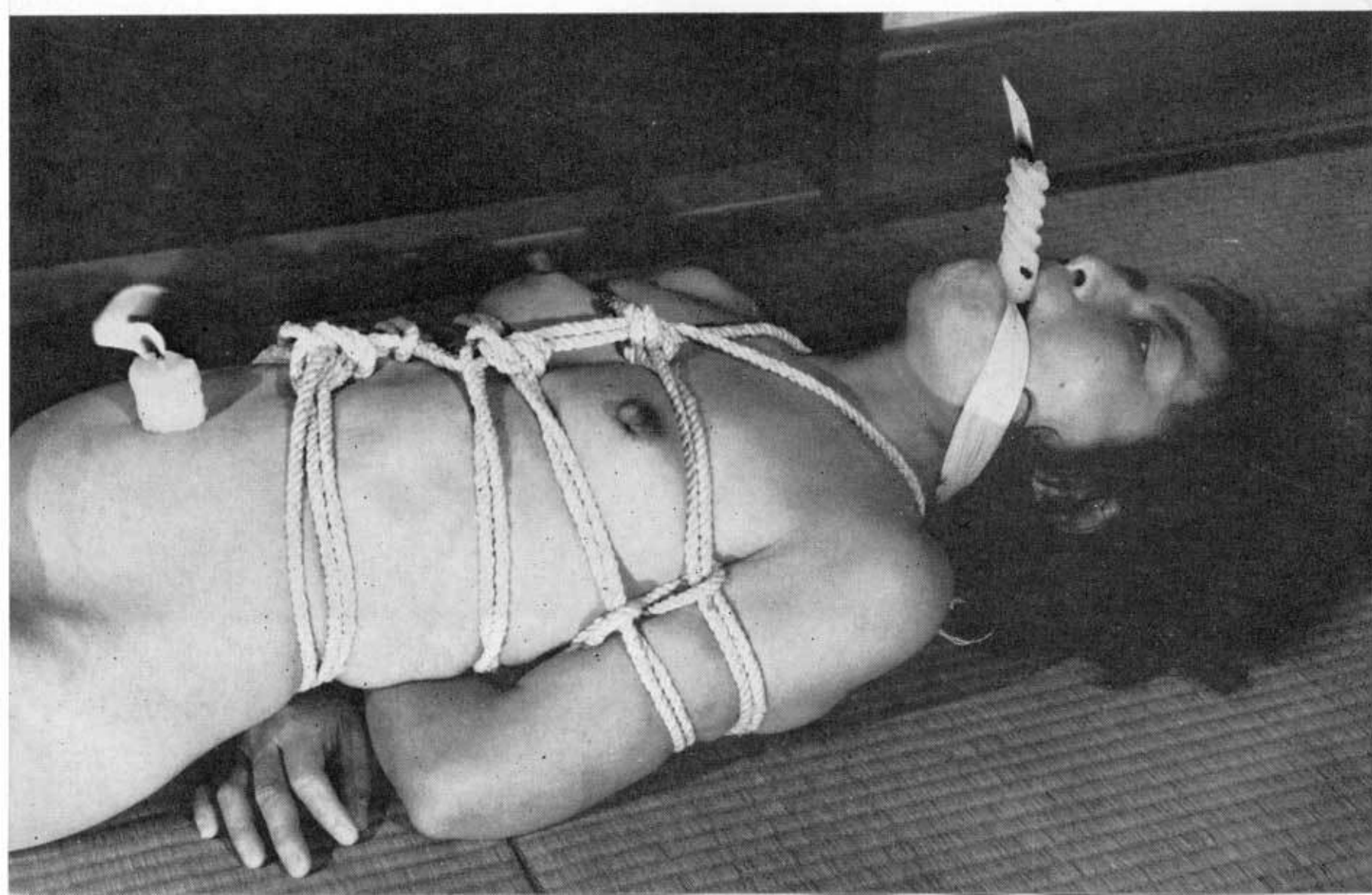


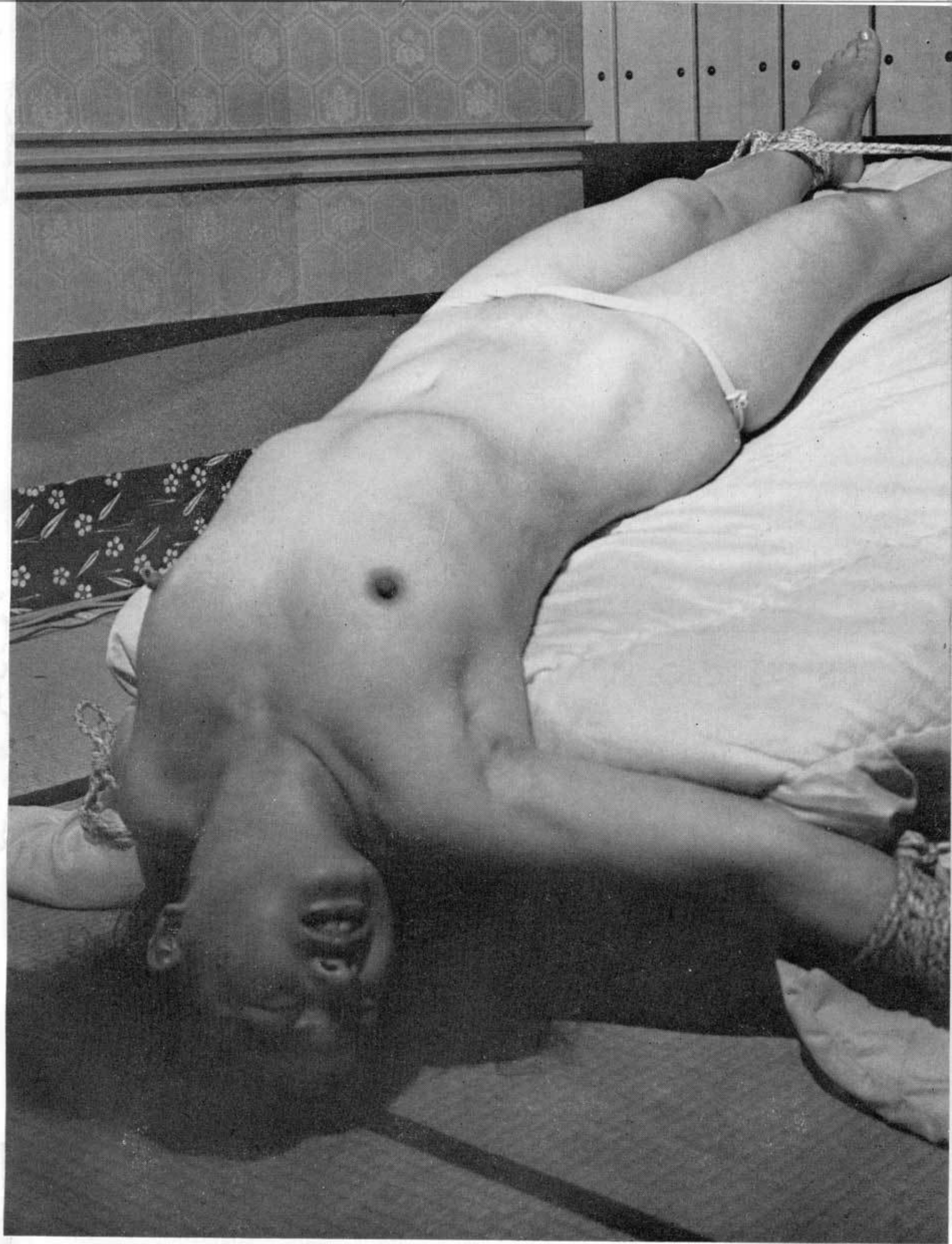
〔S 研〕での吊り

＜前田真知子＞

ゆらぐ蠟燭の火

＜渡部好美＞





ムチの味を噛みしめる

〈関谷富佐子〉



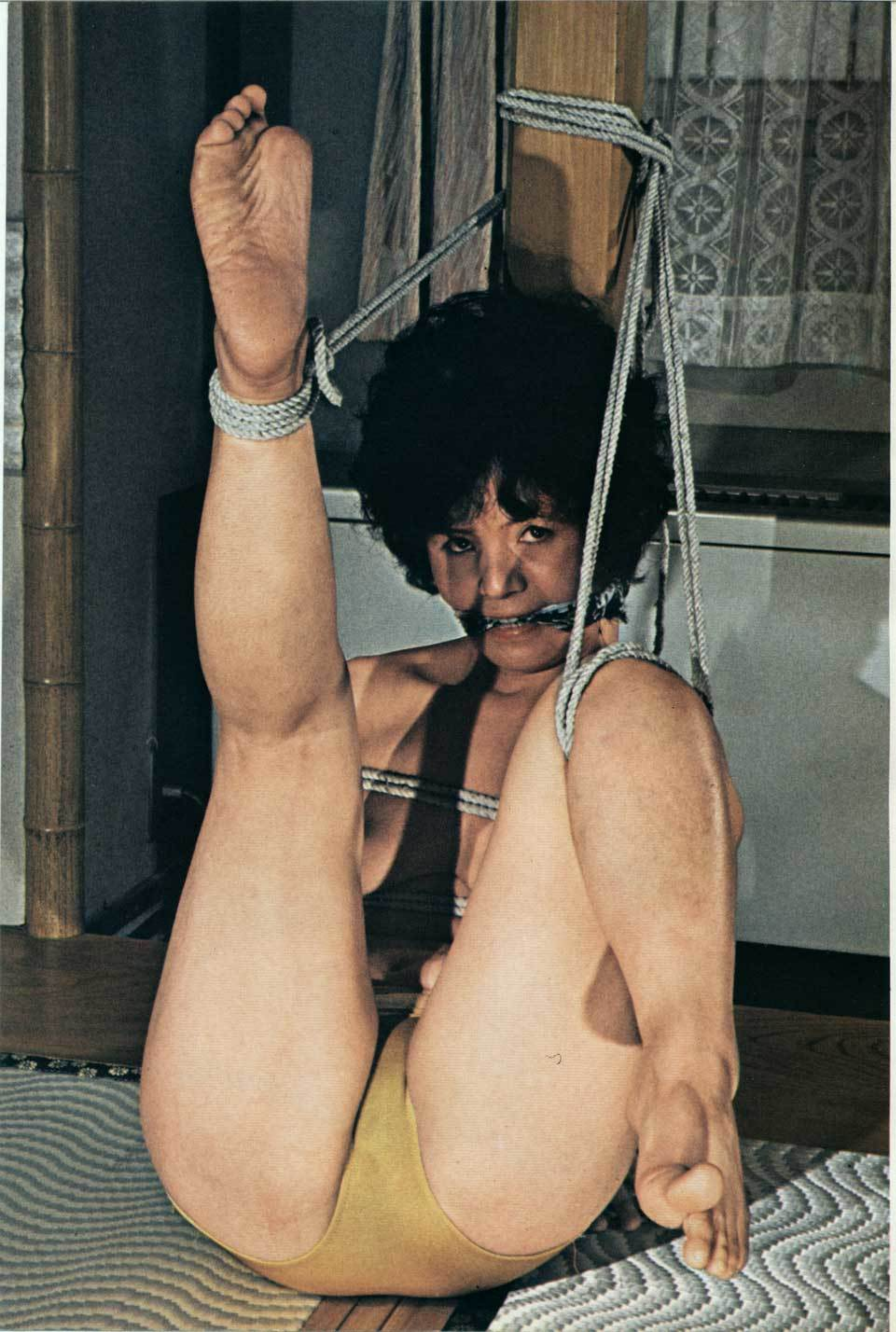














奇

譚

ク

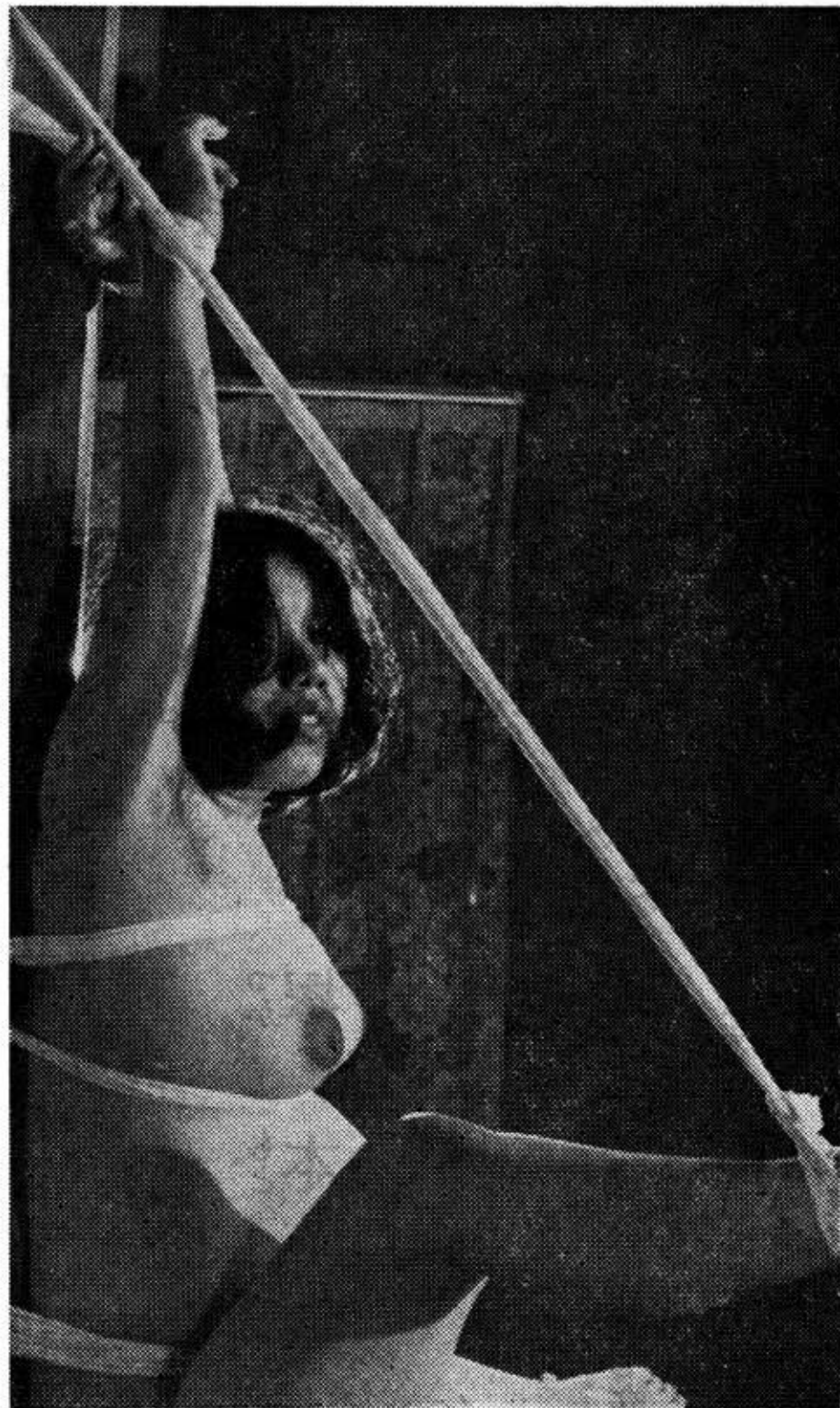
ラ

ブ

1974

9月号

〈第28巻第9号・通刊第319号〉



可愛いM女の横顔

——モデル……南 加津子——

女の手足の自由を奪うのには、なにも麻縄や荒縄やロープを使わなくても、大型のハンカチ一枚で事足りると言っていた宝塚二三夫氏の言に私は賛成している。痛い事をされるのを好むのであれば、いざ知らず、可愛い女性を羞恥責めにするのだったら、荒縄でなくともよいのだ。私刑や処罰ではないのだから、私は、それが当然だと思っている。

南加津子さん——読者通信から始まって、

奇クサロンの数々の投稿によって、私の頭の中に、彼女の可憐さ、可愛さが、強く印象づけられている。そして、私は、彼女の投稿と写真とによって、そのマゾ女性としての成長を温かく見守っているつもりだ。こんなに素直で、純情で、そして可愛いM女が、この世に、またといるだろうか。

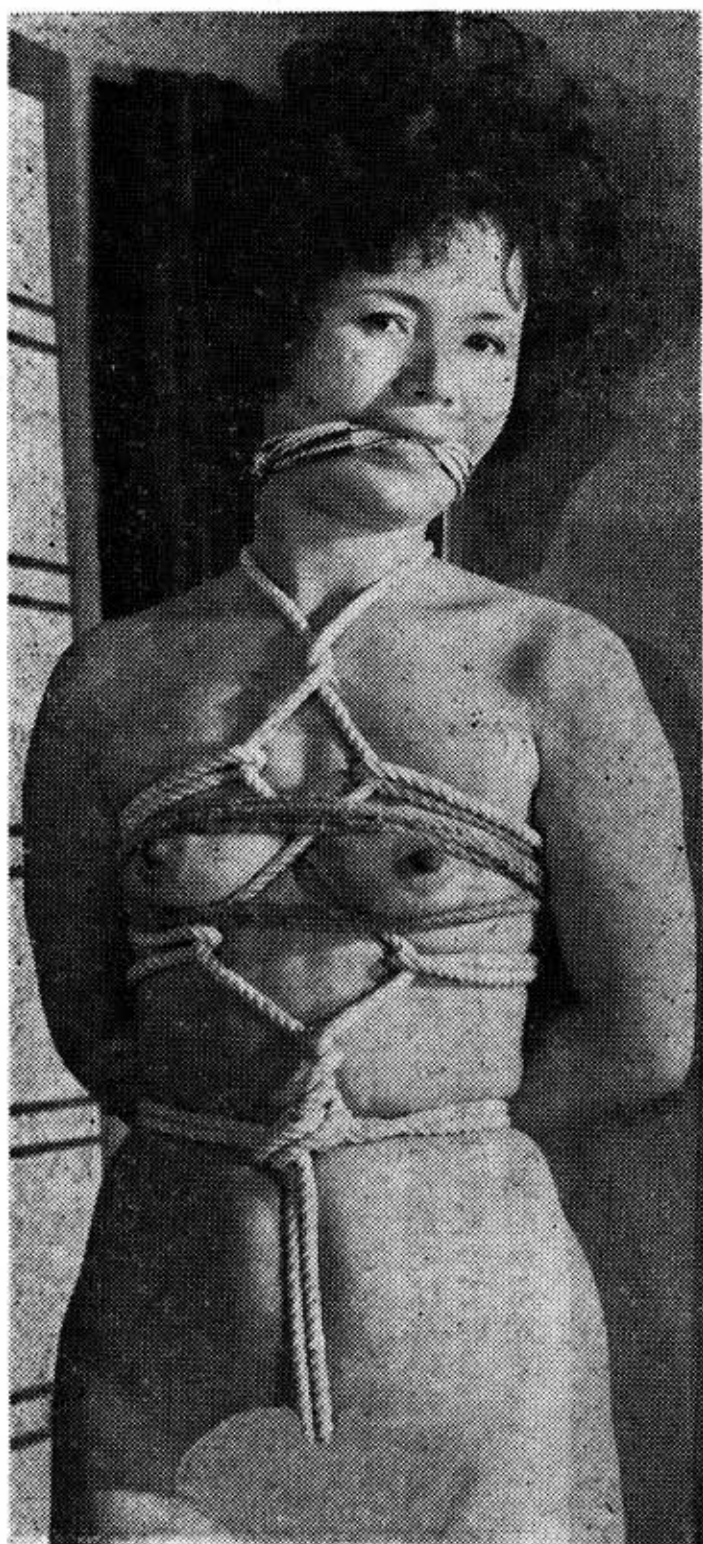
(井上幸太郎・記)

「カメラ」と「ペン」のSMルポルタージュ

浜名湖畔の一夜

〈矢島靖子のM性の謎をえぐる〉

カモシカのように、よく動く靖子の肢体からは、むせかえるようなネバツこい色気がムンムンと漂っていた。私の眼の前で自分のすべてを、さらけだしてしまったという安堵が更に彼女を大胆にしていた。これがM女の本性なのだろうか。予想外な下半身の脂ぎった肉づきの良さは、私の目を眩らせた。足の裏も腋の下も、手を触れたら最後、ねばりついてしまいそうになる粘着性のある肌だった。



塚本鉄三

肥瘦論争

S研のダベリ会に出席したいと便りを寄越し、所用を兼ねて東京から、わざわざ飛来した矢島靖子を、とんだハプニングから四名のS研メンバーの手で縛ってしまったことは、既に五月号に書いた。

それ以来、私の手元には矢島靖子賛美の手紙と共に、俺にも縛らせろ——という要求がわんさと集まってきた。

次に、矢島靖子を囲むダベリ会やプレイ会をやるときは、是非共、私を出席させてくれというのだ。

苗木陽子ばりの肥満体好みの人も案外、多いことは多いのだが、反面、あの超弩級のポリウムには辟易するという向きも、決して

少なくなかった。そうした人たちが、矢島靖子の、あのほっそりした肢体に、ぞっこん参ったらしいのだ。

五月号に載った、私の彼女に対する初縛りの写真が凄く、お気に召したようだった。

殊にカラーフォトの足の拇指の曲り様なんかは、これは只事ではないという、その人気には私自身、意外に思ったくらいだった。

あのときの会合に出席したA氏、B氏、C氏、D氏からも、このメンバーで、もう一度矢島靖子を、こっそりと責めようと、やかましく言ってきたのは勿論である。

私は今までに、何回かのS研の会合を持ったが、その都度、参集したメンバーは、やはり或種の近親感を持ち合わせるのだろうか。次にも、この同じ顔ぶれで会合をやろうと、よく言い合ったものだ。

私に対して玉木章子を呼んでくれと言ったり、深田菊子がいい、いや高村浩子がいいと言ったり、また前田真知子に憧れたり、苗木陽子の肉体美を愛したり、松本たえの真性Mに興味を持ったり、そして、この矢島靖子の新鮮な魅力を味わってみたい——と、それぞれ対象となる女性に好みがあったとしても、やはり気心の知れた仲間と一緒にダべったり

プレイをやりたいと考えるのは、単なる仲間意識としては片付けられない人情の然らしむところであろう。

中には、参加者は他の人は一切、呼ばずに自分一人だけを招待してほしい——という希望の人もあるにはあったが。

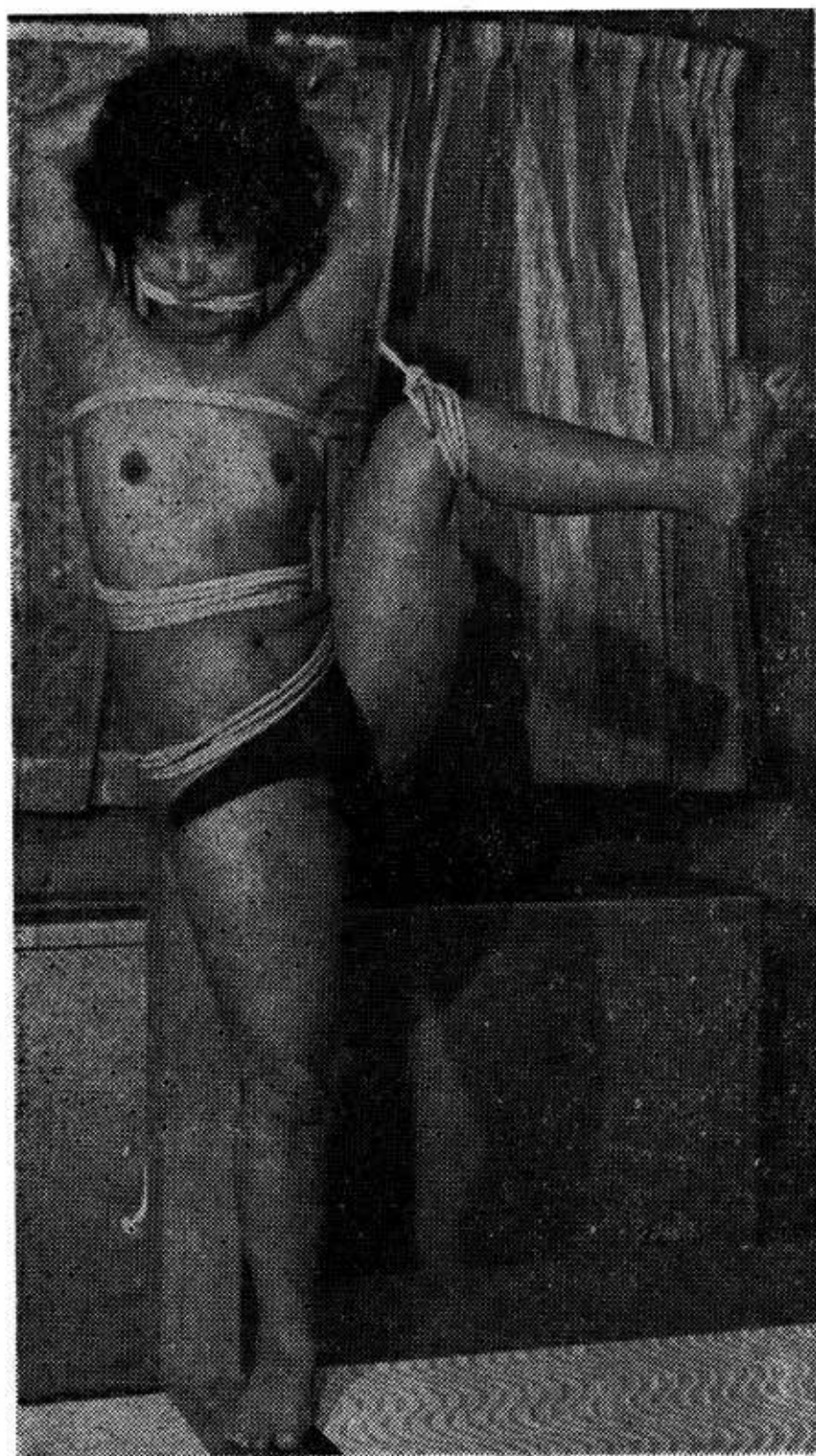
そんなわけで、私は矢島靖子に対して、もう一度、S研会合に出席してくれるよう懇願した。次に大阪へ来る用があったら、何はともあれ、連絡してほしいと頼んでおいた。

彼女からは快くOKの返事が来たので、私

は△S研ニュースVに、そのことを書いた。それが更に矢島フアンの思いに拍車をかけたのだろうか。矢島靖子を囲むダべり会プレイ会に対する出席希望者が次第に増えてくるのだった。

そこで私は、彼女に対して、会合に出席してくれるかどうか打診の手紙を出した。

△五月号に掲載したS研ダべり会の『羞恥のなかのSM談義』は大変好評でした。特に貴女の縛られたポーズには、多くの読者の方々から反響があって、貴女とプレイしたいとい



う希望のS研の人たちからは、沢山の便りが来ました。みんな熱心な人たちで、貴女の顔を見たいと言ってきています。もし、大阪へ来られる用件が近々ないようでしたら、こちらから、東京まで出向いて会合を持ちたいと思いますので、是非、お顔を、お見せ願いたいです。貴女の御都合を、至急お知らせ下さるよう、お待ち申しておりますV

☆

東京——大阪間。それは新幹線という大量輸送の大動脈で結ばれているだけに、都心と郊外といった時間的早さのつながりで連なっているわけだ。

五月末、矢島靖子から私に対して、返事の手紙がきた。

☆

お手紙受けとりました。この前は、ただ、お話を伺うだけのつもりが、ひょんなことから、あんなことになってしまって、ほんとうに恥かしかったですわ。もう、あれきりで、勘弁してほしいと思っていたのですが、お便りを拝見したら、また、あんなプレイをしてみたくなくなってしまいました。

でも東京でだったら、いやなのです。と申しますのも、東京は私の生活の本拠で、お友



達も多くて、どうしても顔がさします。それと、都内におりますと、お仕事の延長みたいで、くつろげないのです。やはり旅の空が、解放感があって、のびのび出来て、いいですわね。といって、今のところ、私のお仕事で関西へ参る用件はございません。

それと、もう一つ。私、次のプレイには、塚本さまと二人っきりで、思いつき、責めて頂きたいと願っておりますの。

それで、大阪と東京以外の旅の空で二人っきりで、お逢いできませんでしょうか。日曜日がお休みですので、日曜日はさんで一泊

ぐらいでしたら、いつでも参れます。

大変、勝手なことばかり申し上げまして申しわけございませんが、よろしく、お願い申し上げます。

なお、私の部屋の電話番号を書いておきますから、お返事は電話で頂ければ幸いです。

部屋には私一人しかおりませんので、もしベルが鳴りましても出ません節は、不在ですので、お掛け直し下さいませ。かしこ

五月二十七日

矢島靖子

塚本鉄三様

☆



手紙を受取るなり、私は早速、ダイヤルを回していた。

幸いにして彼女は在宅していた。

「東京で会合をするのは、おいやだそうですね。東京以外の所だったら、いいのですか」
「そりゃ、東京でしたら、知った方に逢うかも知れませんが。それに、東京って、私にしたら、ビジネスの場ですよ。ですから、やはり、遊びの気持ちになれる場所がいいです」
「それから、お手紙では、何か、私と二人っきりの方がいいとか書いておられましたね」
「ええ、ソレ、私の本心ですの。いいんです」

よ、その方が……。よくご存じのクセに」

「そりゃ、まあ、それでも結構ですが、一泊でも、いいんですか」

「ハイ、貴方様さえ、およろしければ……」

「それじゃ、きまった。日は六月二日の日曜日。そして、東京と大阪を、お互いに、ほぼ同時に新幹線で出発して、丁度、中間の浜松駅のホームで待ち合わせしましょう。時間は一時三十分、これでいいでしょう？」

「ええ、結構ですわ」

というわけで、話は簡単にきまった。私は矢島靖子を、S研の会合に出席させることは

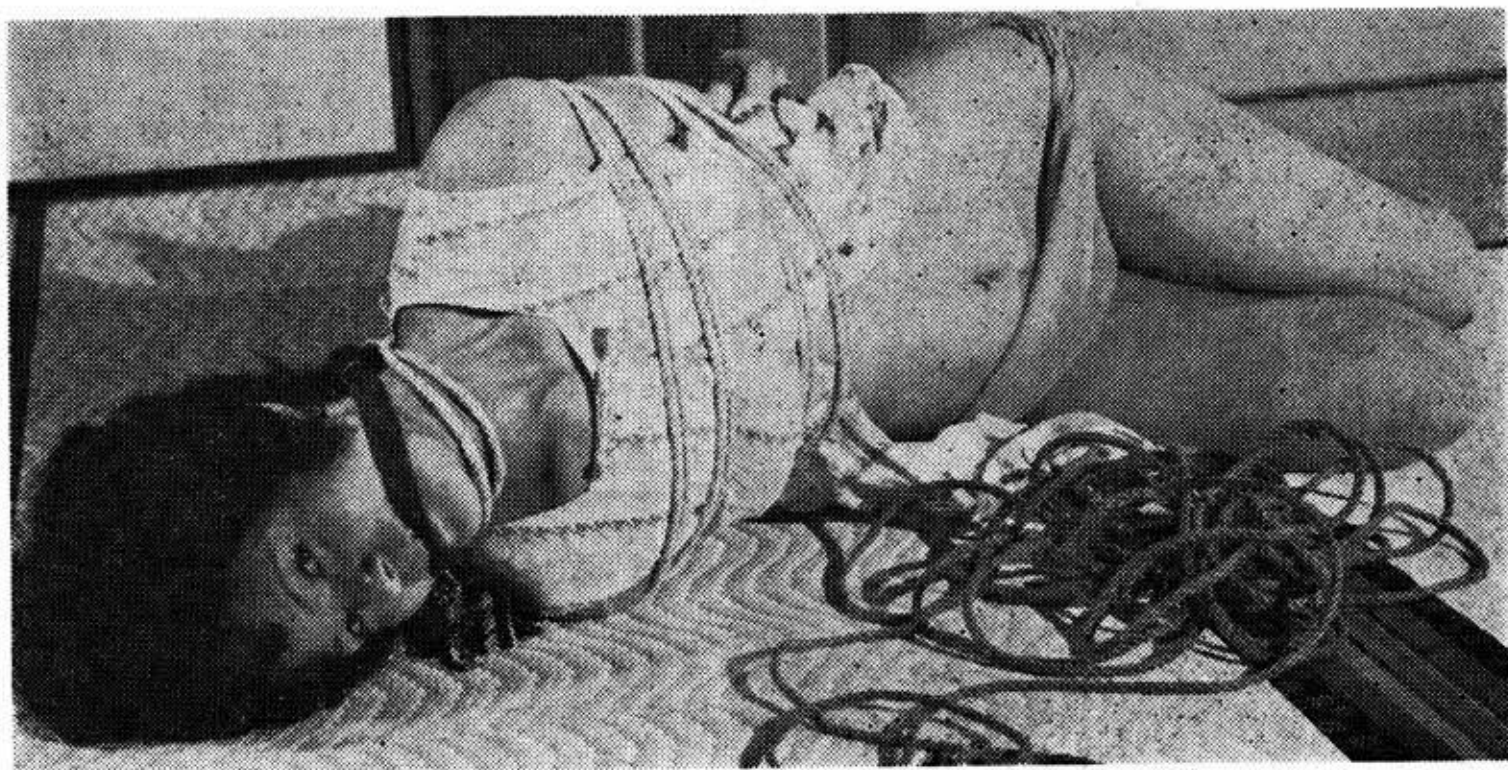
一応諦めて、カメラ・ルポのヒロインとして取扱おうと、このとき決意したのであった。

矢島靖子という女

六月二日、日曜日。

朝、目が覚めて硝子窓越しに空を仰ぐと、一片の雲もない青空がきれいに晴れていた。新大阪駅九時十五分発のこだまに乗り込むため、私はカメラ二台を入れたショルダー・バッグを肩に、照明用具と縄などを入れた白のポストン・バッグを手に提げて家を出た。いつもは、カメラも四台持つところを、モノクロ用、カラー用の二台に限り、グリップも取りはずして重量を軽減したのだが、それでも、ずしりとした重さで革紐が肩に喰い込んでくる。縄類も必要最小限に減らしたのは勿論である。

ホームで朝刊を買い、と社会面のトップには「牛田日本熱学副社長投身自殺か」という大見出しで、青函連絡船内に、牛田次郎副社長の遺書らしいものが発見されたと、殆ど一面を使って、報道されてあった。日本熱学の倒産は、戦後最大の規模と称されるだけあって連日、大きく記事に取り上げられてきていたが、余りの乱脈ぶりにあきれ果てて、今更、



読む気もしない。

ビジネス特急と言われる国鉄新幹線。いつも、こいつに乗ると、どうも仕事に行くような気がしてならない。しかし、今日は違う。物見遊山、レジャー、お遊び——といった気分が濃厚である。しかも、単なる変った景色の所を眺めに行くのと、わけが違う。

矢島靖子という類稀な^{たぐい}「SMに凄く興味と理解のある奇譚クラブの愛読者」とデートをしに行くのだ。

私は彼女の、あのしなやかな小麦色の肌を思い出して、わくわくした。

彼女も、丁度今頃、東京を出発しているのに違いないと思うと、俄然、楽しくなって心が、うきうきしてきた。

空は明るく晴れていて、車内の隅々にまで陽光を注ぎ込んでくる。

列車は緑の平野を快走していた。

このときになって、私は矢島靖子に関して読者の皆様に、何一つ話していないことに気がついた。

年令についても、職業についても、それは五月号の「S研ダベリ会顛末記」でも一言も書かなかった。カメラ・ルポではなくて八羞恥のなかのSM談義Vを交わすというのが、

第一目的でもあった。大体が、あんな風に矢島靖子縛ってしまったとしたら、記事にする意欲も湧かなかったに違いない。

それが、とんだハプニングから、初対面で初顔合わせの彼女を縛ってしまったのだから私も驚いてしまった。

彼女にしても、「旅の空」という解放感が多分にあったことだろう。それに、「空港」という、なんとなくエキゾチックでエトランゼの集まってきたきそうなムードが、「旅の恥はかきすてよう」式の無責任な気持に、みんなをさせていたのも確かだった。

あの五月号の「顛末記」では、私は^{はや}逸る心を押えながらも、あった事実を、そのままに報道しようという気持で書きなぐった。

「矢島靖子」という一女性が突然、飛びだしてきた、そして「縛られてしまった」という唐突な感じを抱かせてしまったかもしれないが、しかし、これは小説ではない。伏線をはったり、起承転結の筋書きを練る必要もないと考える。そんな小手先の舞文をするよりも肉迫的に事実をお伝えする方が、より効果的だろうと、私の嗅覚は鋭く感じとる。

時速二〇〇軒で疾走する車中で、私は矢島靖子という女性のことを考えてみた。

といっても、私は、彼女が奇譚クラブの愛読者であるということ以外は、さして詳しく知っていなかった。僅かに、彼女が私に対する私信で、「S研の会合があったら、是非、出席したい。とても興味が持てます」と言ってきたのが参考になるくらいのものである。

最近の若い女性が行動的なものには驚かされる。そんな手紙が私の手元に舞い込んでくる。から、すぐ、所用で大阪まで行くので、大阪国際空港で落ち合いたいと言ってきたのだ。

そんなわけで、私は矢島靖子のプライベートルな面に関しては何一つ知らない。私が知っていて隠しているのではなからうかと、疑う人もあるが、それは邪推である。

只、私の類推するところでは、彼女は東京都郊外のマンションでの一人暮らし。職業は、かなり広い範囲に都内を歩き回るセールスのような仕事で、決して水商売のような接客業でないことだけは服装や応待でわかった。

東京生れの東京育ち。きびきびとした歯切れのよい東京弁も好感が持てたし、思い切りのよい、さっぱりした態度は、やっぱり江戸っ子だねえ——と思わせた。

イヤなればイヤ、ダメなればダメをはっきりと返事をする代り、OKとなれば、徹底的

にOKだ。一步も後へは引かない潔い態度。これには好感が持てた。

私も両親が東京育ちで自分は東京生まれ。子供の頃から、家庭でおハチと言ひ慣らされていた飯櫃が、関西ではドンブリ鉢のことであったり、トウナスが南瓜カボチャで、唐紙が襖と、随分まごつかさせられたものだ。

と、そんなことを考えているうち、列車は浜名湖の鉄橋を轟音と共に通過したかと思うと、浜松のホームへ滑り込んでいた。

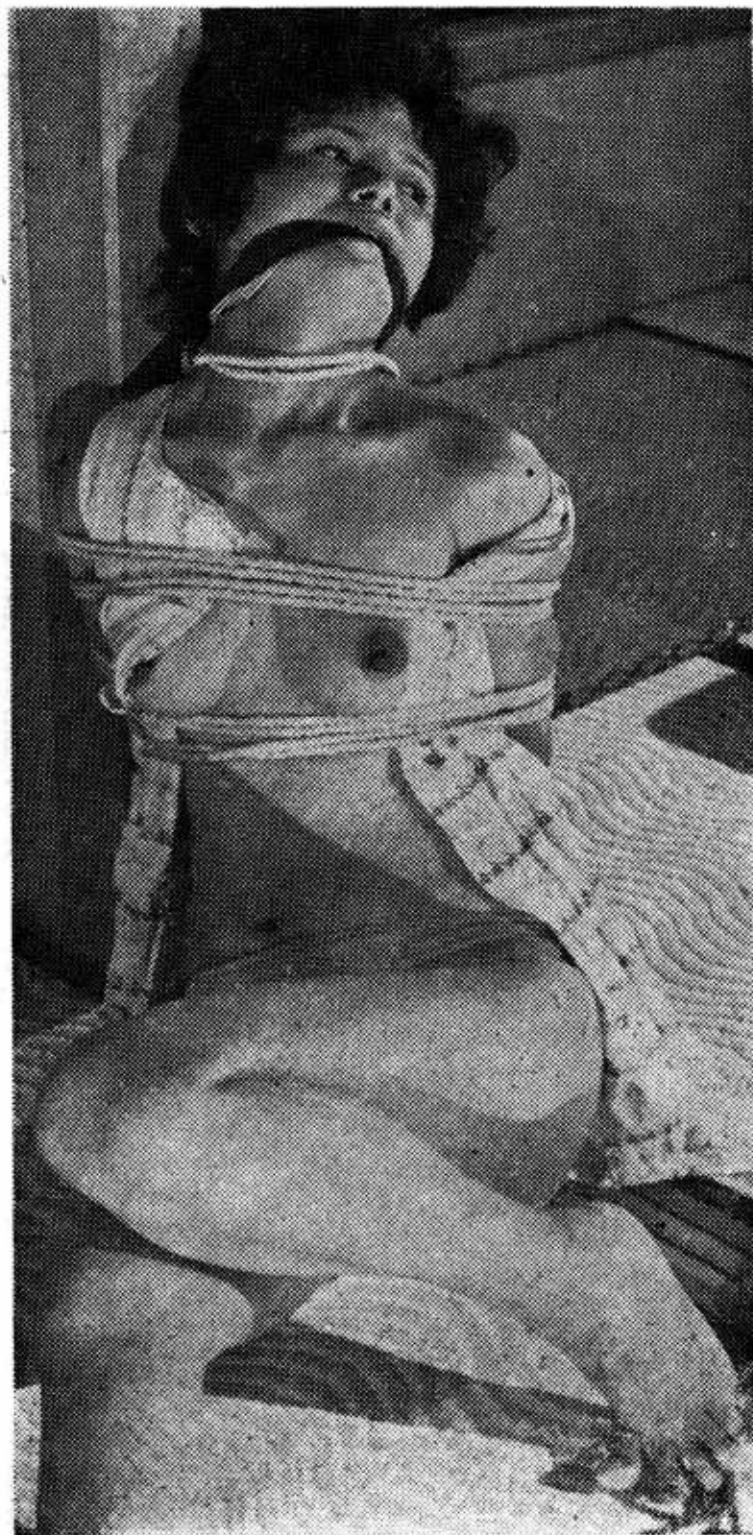
十一時三十分に少し前。列車が通過してしまつと、向い側のホームに、濃い水色のワン

ピースを涼しげにまとった矢島靖子が、こちらを見て嫣然と、ほほえみかけていた。手を振って、同時に出札口へと向う。

「ちゃんと、時間通りに来て下さったんですね。もし、すっぱかされたら、どうしようかと思っていましたよ」

「まあ、そんなこと、おっしゃって。私、子供の遠足みたいに、楽しくって、昨夜は眠れなかったくらいですわ」

「嘘でも、そんなに言ってお下されば嬉しいですね。まあ、とにかく、お逢い出来て、ほくほくです。今夜は泊っても、いいんでしょ」



「ええ、そのつもりで出てまいりましたの。明日中に東京へ帰りますれば……」

「じゃあ、とにかく、荷物もありますから、タクシーに乗りましょうか」

「大変なお荷物なのね。一つ、お持ちしましょうか」

「重いですよ。カメラですから……」

私がカメラ——と言った途端、彼女の目のふちが、ポツと赤くなった。

何を連想したのだろうか。

空は、あくまで青く晴れ渡り、私の心もまた、明るかった。

「私、いつも、電車の窓から見てるだけなんですけど、浜名湖へ行ってみたいと思って、ゆうべ、ちょっと地図を見ていましたの」

風が階段の下から吹き上げてきて、彼女のワンピースの裾を、さっと捲くりあげる。味の良さそうな靖子の脚が眼に痛い。

二人は駅前からタクシーに乗った。

姫 街 道

「弁天島から浜名湖を一周して、豊川稲荷を回って貰おうか。それから、途中で昼食したいから、湖畔の景色のよいレストランへ着けて貰って、一休みするからね」

私が行先を告げると、「一寸

待って下さい」と、四十格好の

人の良さそうな運転手は車を放れて、向い側に駐車している同僚の所へ行って、何か声高に話し合っている。会社へか家族へか伝言でも頼んでいらっしゃる。

彼女は、その間にアイスクリームを買ってきて、その一つを私に手渡してくれる。

車は国道一号線を西へ指して快走した。

薫風が吹き込んでくる新緑の香りだ。

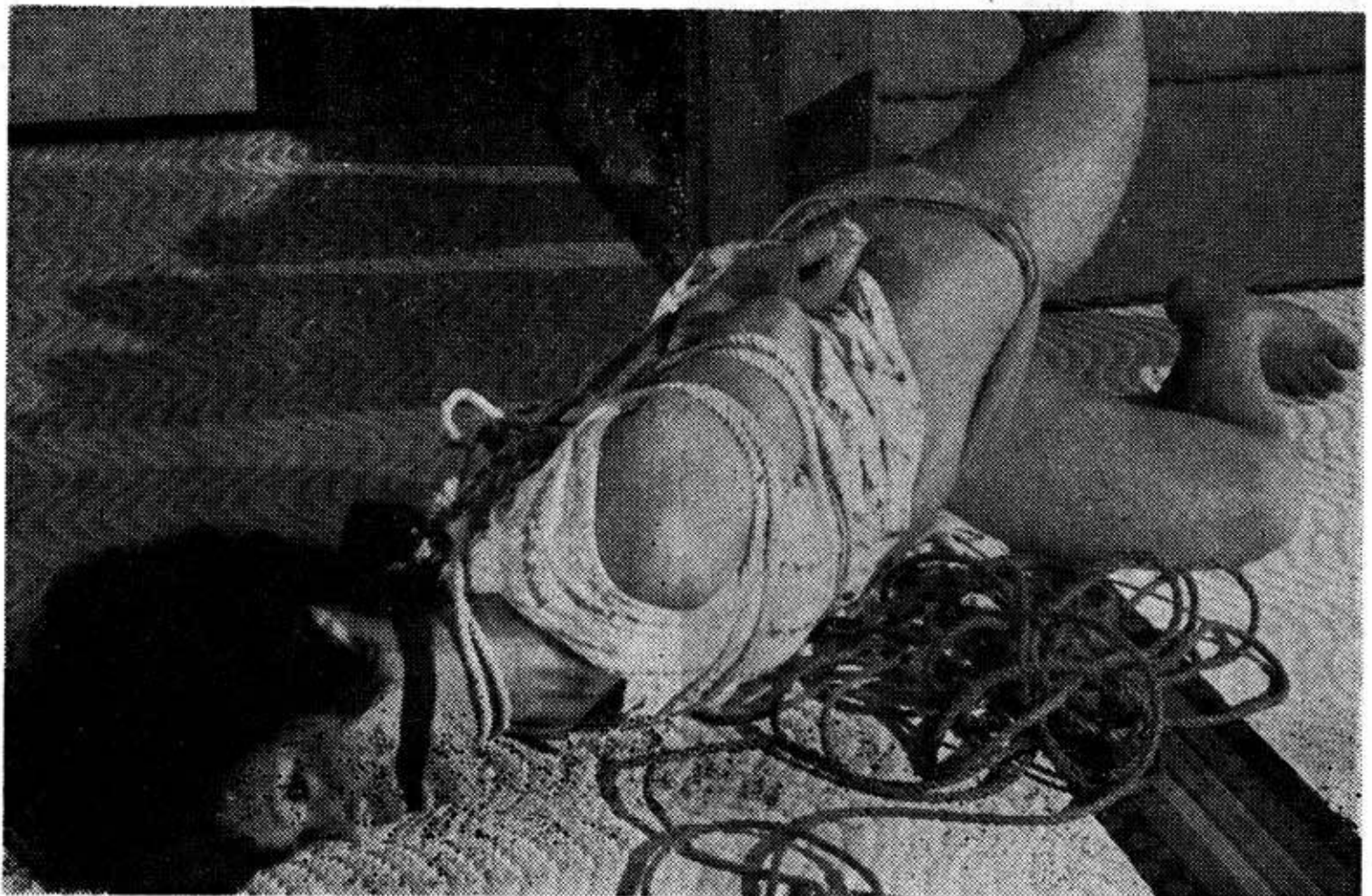
日曜日とあってか、行き交う車も、そう多くない。一直線の見通しのよい道を走る。

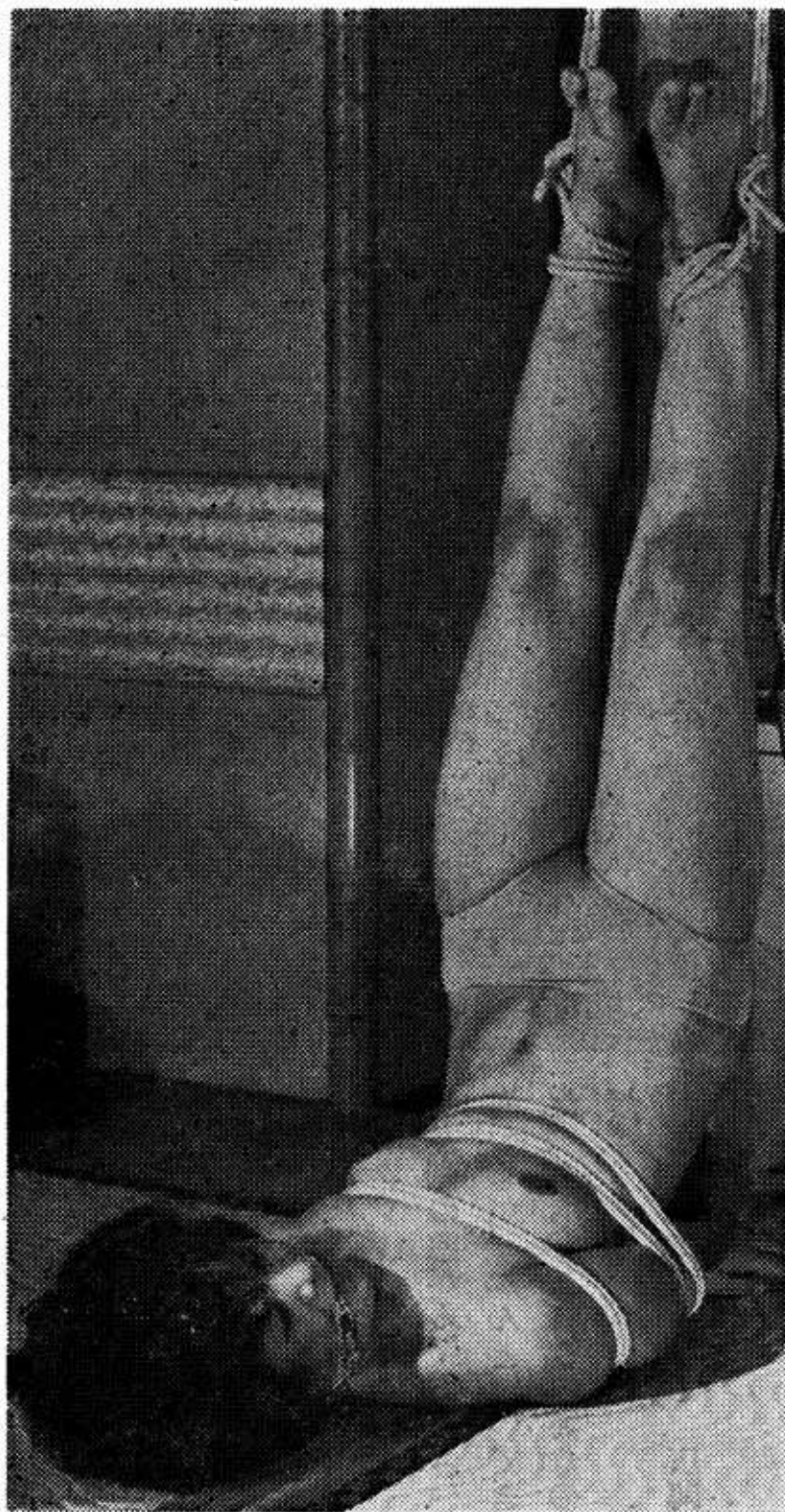
私は手を伸ばして彼女の膝の上に置く。裾をめくると、肉づきのよい小麦色の肌があった。

濡れたように光っていて、汗ばんだ肌が掌に、べったりと、ねばりつく。

「ねえ、塚本さん……」

彼女は、そんな執拗な手を軽





くいなしながら、私に語らいかけてきた。

「私の年のことや、未婚か既婚か、それに、お仕事のことなど、お聞きにならないの？」

「戸籍調べですか？ 日本人はすぐ、年は？ 家族は？ 仕事は？ と、聞きたがるのですね。私も興味はなくてもいいですが、それよりも、ねえ、ほれ……あの方が……」

運転手は前方を注視したまま、無言で運転に専念している。とはいっても、これは、二人きりの密室のマイカーとは違う。まさか、△奇譚クラブの熱心な愛読者である貴女の、SMに対する好奇心を暴きたいVなどとは、

あからさまには言えない。

ぐいと体を寄せて、彼女の耳元へ口を当てると、小さい声で、ささやいた。

「年なんか、どうでもいい。それよりも、ほら、この前に素っ裸で縛られたらどう？ その素っ裸の体を、私の目の前にさらけ出してこの手で縛らせてくれよな」

「まあ、イヤらしい。こんなところで、そんなことを言うなんて……。あのとき、私の体は隅から隅まで、ごらんになったじゃありませんか。あれ以上、もう見せるところなんて、私にはありませんわ」

「それが違うんだナ。私が風呂へ入ってるあいだに、四人の男たちに責められたらどう。あんな責めを、今日は、私一人でやりたいんだよ。一体、どんなことをされたんだい？」

「どんなことをされたと思う？ せいぜい妄想を働かせて、楽しむといいわ」

そんなことを囁き合っていると、運転手が願って言葉を掛けてきた。

「旦那。やがて弁天島ですが、どこかレストランへ駐めましようか？」

はっと気がつき視線をめぐらすと、急に外部が明るくなって左側に広々とした海が見えてきた。と思う間もなく、舞阪町の松並木を越すと、右側にも蒼い水面が見えてきた。

風が軽く頬を、なでつけてゆく。

矢島靖子という女性が傍らにいと、同じ景色でも、このように心に沁みってくるものなのか。見るものすべてが明るく、そして南国的な陽気な景色だった。

右も左も海だ。

車は海の中を走っていた。

「まあ、きれい。私、こんな景色、大好き」矢島靖子は、思わず私の肩にしがみついてくる。両側の紺碧の海の色が、そのまま、こちらの体に染まってきそうだ。



私は彼女の首に左手を回して抱え込みながら、移りゆく景色を、目で追っていた。

カチツ、カチツ……と、せわしい音を立てているのはタクシーのメーターだ。

左側の窓から、磯くさい海の香が、ぷんと漂ってきた。ああ、これこそ海なのだ。

底抜けに明るくて、広闊としていた。

毎日を都会生活の煩わしさの中で生活している者にとって、ここは別天地だった。

美しい景色の中で矢島靖子の肉体が、一層素晴らしく思えたし、彼女が存在すること、この弁天島の風光が一段と明媚に見えた。

此所へ来てよかったと思った。

「旦那、食事を先になさい

ますか？ それとも、浜名湖大橋を先に渡りましょうか」

「食事が先だ。待ち時間は払うから、キミもゆっくり食事してきたら、どうだ」

私は運転手に食事代として、千円札を一枚与える。

「こりゃどうも、すみません」

彼はペコリと頭を下げて、向いにあるラーメン大学の店へ駆け込んで行った。

『今日は、この辺りで泊りたいものだ』

私は、この両側を海に挟まれた明るい風光が殊の外、気に入っていた。

“M”というホテルのレストランで昼食を摂った。例によってライスもパンも食べずに、肉と魚と野菜とだけをムシヤムシヤ食べた。

「ねえ、今日は余りひどい縛り方しないです、私、縛られるより……」

「縛られるより、なんだね？」

「あら、そのあとも言わすの。意地悪、わかっているでしょ。塚本さんだったら、おわかりになるわ、きっと……」

「わからないネ。さっぱり」

「可愛がって……いじめてほしいの。ねえ、わかるでしょう？」

都会で仕事しているのと、こうまで、まる

で違うものなのか。あたかも、外国へでも来ているような気持だ。

東京と大阪から、近々二時間余りで来れるところに、このように素晴らしいところがあるのだ。いつもは、電車の車窓からだけ眺めていた浜名湖の風景が、今、手にとるように觀賞することが出来るのだ。

駐車場に駐めてあった車には既に運転手が来ていて、私達が戻ってくると、「待ち時間はサービスさせて貰いますから」と、帽子へ手をやってアイソ笑いをする。

私は、それに答えず、王侯貴族にでもなったような気分で、ゆったりとリヤシートに腰を下した。傍らの矢島靖子という女性は、侍女か下女か、或はもっと成り下って奴隷女というところか。なににしても、今晚は夜を徹して、責めねばなるまい———と思った。

さて、責めるといっても、どんな口実で責めてやろうかな。なんなら、この前のS研の四名に責められた手口でも白状させてやろうか———と、そんなことを考えている私の腹の中も知らぬげに、彼女は、いそいそと、私の傍らに座を占めた。

有料道路の浜名湖大橋を渡る。通行料百五十円は、彼女がハンドバッグから出して払っ

た。左手に見える浜名湖は思ったより浅いのか、数百人の人たちが汐干狩をしていた。

再び弁天島から国道一号線を走ってから、新居関址を見る。

特に興味があるというわけでもないが、江戸時代には、箱根と共に東海道の二大関所と言われたところで、昔の関所の建物が、そのまま現存しているのは此処だけだということなので、一寸、覗いてみることにした。

そこから湖岸沿いに一号線をはずれると、すぐ、東海道新幹線と立体交叉する。折しも

下り列車が頭上を通過した。なんと、その通過音の激しいこと、全く驚いた。

東海道本線のガードを潜ってから、暫くして三叉路を左へ取ると、淋しい山道だ。すぐに多米峠有料道路に入る。程なく豊橋市に着いて右折すると豊川市へ入った。

白壁の立派な塀の続いている社、それが豊川稲荷だった。信仰心はないのだが、車に待っていて貰って境内を見物する。稲荷神社形式の曹洞宗の寺と云われても、さっぱりピンとこないが、お賽銭がよくあがるのか裕福そ



うなお寺、いや神社かな。

「旦那、戻りは姫街道を通って浜名湖へ出ましょうか、同じ道じゃ面白くないでしょう」

この運転手、今日は最後の最後、ホテルの玄関まで、私達を送るつもりでいるらしい。

「姫街道っていろいろがあるのかい？」

「そうです。さっき見さんした新居の関は、滅法、女に対する取締りが厳しかったので、それを嫌った婦人の旅行者は殆ど脇街道の本坂峠を越えたんです。それで姫街道って言うんです。一車線のかかなりきびしい峠ごえですが景色はいいですよ。私らでないと、普通のドライバーは、余り知らん道です」

「よし、その姫街道を行こう」

「舗装はしてますがね、道が細くて、すれ違ふのに困るんです。もっとも、余り車は来ませんかね。私らも、そう通りません」

両側の新緑の樹々の枝が車に当りそうになる。萌える新芽の薫りが、むっと鼻をつく。

本坂峠までは急な坂道が、つづら折りだ。

昔は、こんな峻しい道を婦人の旅人が歩いたのだろうか。今はエンジンの音高く、右に左に蛇行しながら車は急坂を駆け登る。峠を越すと視界が、ぐっとひらけて、青い樹林が目の下にひろびろと見渡すことが出来た。

坂を下りると湖面が見えた。浜名湖かと思うと、猪鼻湖だという。水際に沿った湖岸道路を南下する。豊富な水が、どこまでも続く美しい水郷の景色だ。

メーターが一万円を越したので0に戻って再び数字を刻みはじめる。

湖岸道路を更に疾走する。夕陽が湖面に当

ってキラキラと銀砂のように輝いている。奥浜名湖のこの辺りは、まだまだ俗化されていなくて、牧歌的な情緒が濃厚に漂っている。

浜名湖周遊道路のゲイト附近で小休止してコーラを三人で飲む。

湖畔のホテルへ着いたのは、夏の長い日が海の彼方に暮れなずもうとしている午後七時少し前だった。

さすがに海から吹きつけてくる汐風は涼しくて、いささか汗ばんだ肌に快かった。

一日中、快晴で過した空は、ほんのりと茜色に染ま

って明日も天気だと思わせた。運転手は鞆を運んでホテルの者に手渡してくれた。

夜の海浜

部屋へ案内されて窓を開けると、目の下に海が見えた。





「どうだ、食事と風呂と、どちらにする？」
「私、お腹すいてないから、お風呂を先にしたいわ」

「だったら、八階にジャングル風呂があるから、一緒に入ろう」

「貴方と二人っきりだったら、いいけど」

「どうせ今頃、誰もいないさ。それに、もし人が入ってきたら、ジャングルの中へかくれるんだ。面白いゾ」

「いやだわ、そんなの……」

とかなんとか言いながら、エレベーターで八階までやってきた。予想した通り、誰も入っていない。濡る彼女の手を強引にひっぱって、とうとうジャングル風呂へ入れてしまっ

た。ジャングル風呂といったって、普通の浴室に熱帯樹の鉢植えが、所狭しと置いてあるだけだったが、私は誰か他の男性客が入って来ないものかと期待し、彼女は、もしも他人が入ってきたら、どうしようかと危惧していたようだが、シーズンオフの六月のこと、誰も入ってこなかった。

裏側には広々とした海で何一つ、見えないが表側には、国道一号線、東海道新幹線、東海道本線が通り、その先には浜名湖が見えた。その浜名湖の突端には東名高速道路が走っている筈だ。

誰も他人が入って来ないとなると、女は大胆である。素っ裸のまま、総ガラス張りの

洗い場を矢島靖子は、うろうろ歩きまわっている。下半身は案外、肉づきがよい。

私は今宵のSMプレイのことを思うと、知らず知らず、顔がほころび、そして、口の中に唾液が溜まってくるのであった。

そこを出ると、部屋へは戻らずに一階の食堂へ直行した。

風呂上りの咽喉に冷えたビールは美味しかった。遠慮していた彼女も、コップに三杯ばかり空けた。

「ねえ、海岸へ行ってみない？」

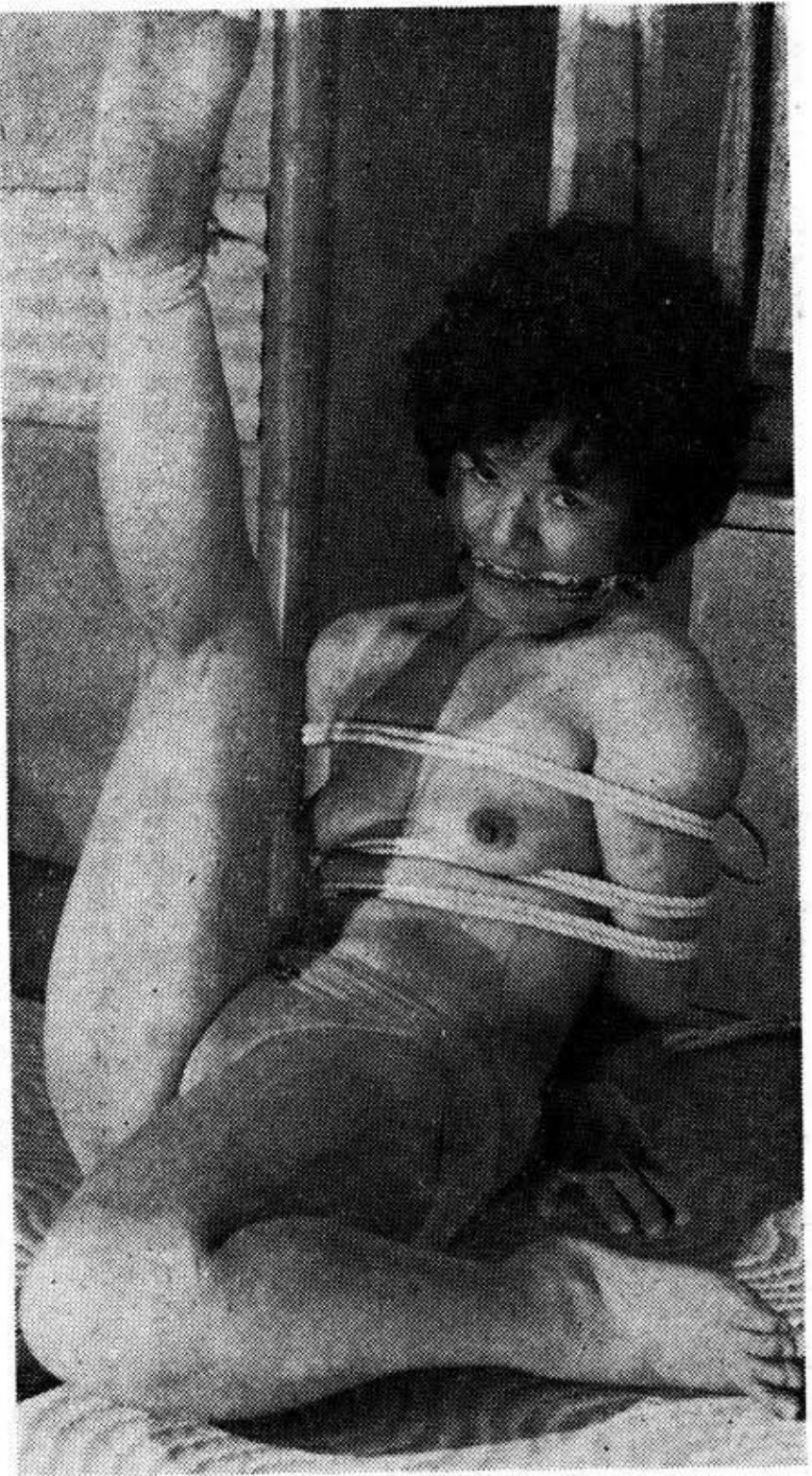
彼女は私を誘う。ホテルの裏へ回ると、すぐ海辺だった。砂浜が広くて、さざ波が静かに打ち寄せていた。

「ねえ、私、本当は貴方の書かれたカメラ・ルポの愛読者だったの。読んでいて、体中がしびれたわ。なんだかわからないけど……でも、そのこと、恥かしくて言えなかったのよ。それで……」

「それで……どうしたの？」

「S研の会合に出たって、お便り出してしまったの。大阪へ行く用があるって言ったのも嘘なの。ほんとうは、貴方に逢いたいために、わざわざ大阪まで行ったのよ」

陽は、すっかり落ちてしまっ、彼女の顔



も定かに見えない。ただ、声だけが澄みとおったように聞えてくる。

「じゃあ、初めから、縛られるのを覚悟の上で、東京から大阪まで来たってわけか」

「いいえ、そうじゃないの。私って、奇譚クラブは読んでいたけど、あの日までは縛られたことなんて、一度もなかったのよ。でも、貴方にだったら、素っ裸にされて縛られてもいいって、思っていたわ。だから、あのときも、自然と、あぁなってしまったの。でも、他の人に、あんなにして責められるなんて、

思っても、いなかったわ」

「しかし、四人の男たちに囲まれて、結構、楽しく責められていたじゃないか」

「だってエ、いくらなんでも、皆の見ている前で……駄々もこねられないじゃないの。今度もネ、私、大阪へ行く用がないって言ったでしょ。貴方一人を引っ張り出そうと思ってそう言ったの。わかる？ この気持」
「二人っきりだったら、何をするか、わからないよ。それでも、いいのかい」
「いいわ。思いつきり、責めて……」

そのとき、夜釣りへ行く連中か、三人の黒い人影がホテルの裏口から出てきた。

それをしおに、私は彼女の腋の下に手をさしのべて、ぐっと引き寄せた。水母くらげのように力のない上半身が、ぐったりとしている。

からむようにして二人は砂浜の上に尻餅をついてから、ゆっくりと倒れた。

「いけませんわ。人が来ます……」

その口を、私の口が押えた。

空には銀砂のような星がきれいだった。

私は彼女の浴衣の紐を解いて、それで彼女の両手を後手にして括った。

浴衣を脱がして砂の上へ敷いた。

浴衣の下はシュミーズ一枚である。

すべすべとした二の腕、肉づきのよい太股の肌の感触。私は掌で撫でさする。

「少し寒いわ。それに、人がきたら、どうするの？ こんなに括られてしまっ……」

「暗いから、わかるもんか」

「ねえ、ほどいてよ。お部屋に戻ったら、どんなにでもして、いじめられてもいいわ」

「だったら、S研の人達にも、この前のように責められてもいいって、約束するかい？」

約束するんだったら、解いてあげよう」

「約束する。だから、ほどいて……」

動くたびに砂が舞い上ってきて、浴衣の上
が砂だらけになる。私は後手に括ったままの
彼女を立たして、下に敷いた浴衣の砂をはた
いて腕にかけた。

「さあ、このまま、歩いてごらん」

「いやよ、いやよ。早くう、ほめて……」

「ホテルの裏口まで、このまま、歩いて行く
んだ。歩かないと、ホラ、こうするよ」

私はシュミーズの裾をまくってズロースの
ゴム紐の間に手を挿し入れ、お尻を掴んだ。

「ああ、いや、いやっ」

「こいつを、ひんめくられてもいいのかい。」

素直に歩いた方がいいと思うがナ」

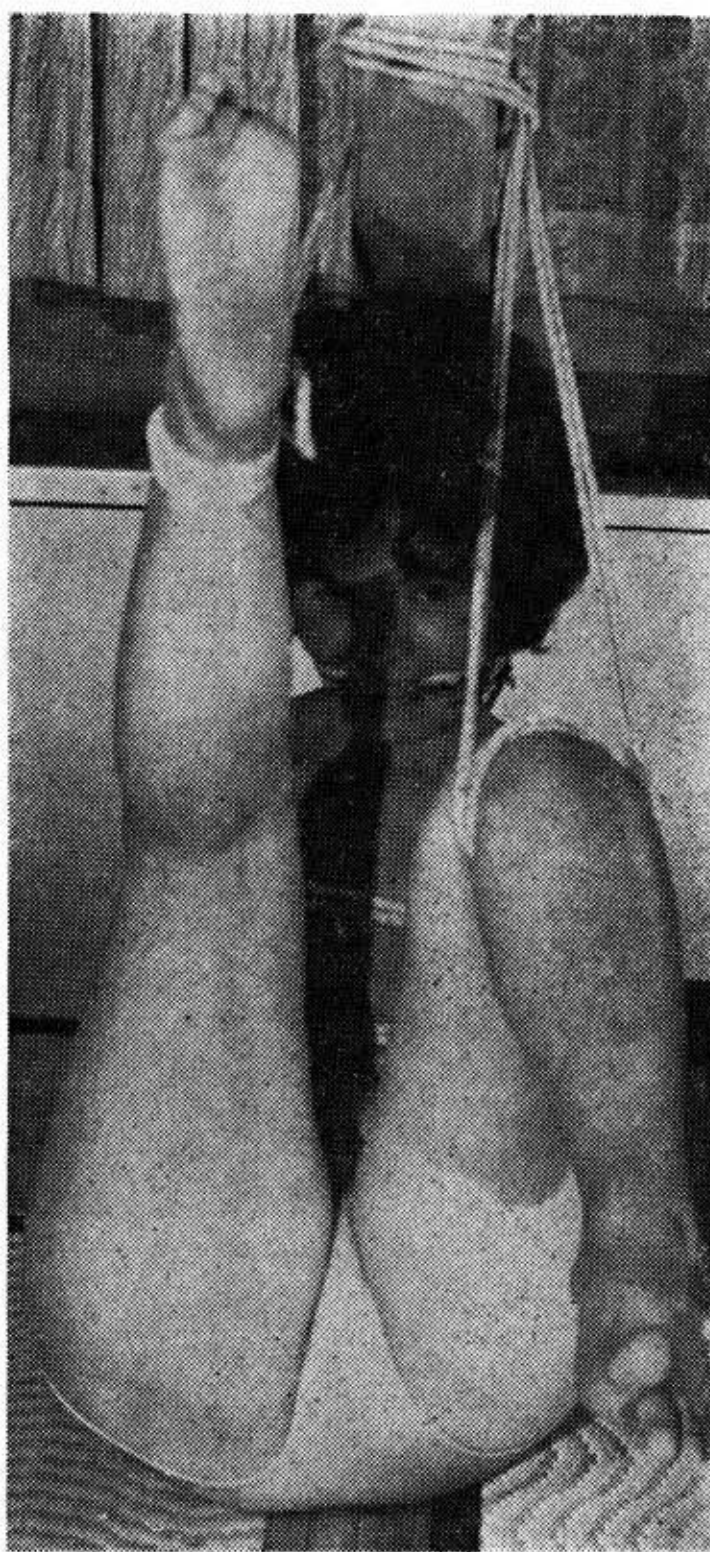
「それだけは許して。早く、お部屋へ戻って
から、いじめて頂戴。私、寒いのだよ」

夜ともなれば、やはり海の風は冷たい。

私はズロースの下のお尻や、そのあたりの
肌の感触を存分に楽しんでおいてから、後手
の紐を解いて浴衣を着せかけてやった。

「くの一」 忍者

部屋へ戻ると、暗さに慣れた眼には、照明
の明るさが、まぶしい位だ。殊に新しい畳に
天井の蛍光灯の光が反射して輝いているよう
だと思ったら、これは従前のイ草で編んだ畳



表ではなさそうだ。この異様なまでの光沢は
新建材並みのビニール製畳表らしい。

その畳の上を歩く矢島靖子のきれいな足の
指に、海岸での砂が罌粟餅のケシ粒のように
可愛い、ついている。

「足に砂がついているよ」

「ええっ？」

彼女がうつむいて下を見た途端、私は、そ
の瞬間の隙について飛びついていった。

「ねねね、なにをするのよ。乱暴しないで。」

着物が破れるじゃないの」

私の両腕の中で彼女の肉体は、もがいた。
ほっそりとした骨細の体つき。それでいて

しこしことした筋肉が、私の胸で押さえつけ
られながら、微妙にうごめくのだ。

「いいから、いいから。じっと、大人しくし
てるんだ。足についている砂を、私が、とっ
てやろうと言ってるんじゃないか。ね、いい
だろう？」

「それだったら、私、自分でとるわよ。足を
他人に触られるなんて、恥かしいわ」

「ふん、足の砂をはらってもらうのが、そん
なに恥かしいのかい。この前は、みんなの前
で、さんざん責められて、足の拇指をポンと
反らしていたじゃないか」

「まあ、そんなことまで、ごらんになってい

らっしゃったの。いやだわ」

私が押えている力をゆるめると、彼女は忽ちにして、跳ね起きて逃げて行ってしまいそうになる気配なので、私は、じつくりと押えつけないが、足の方へ手を伸ばしていった。

「いやよ、いやよ」

彼女は、もがく。

必死になって、私を跳ねのけようとする。

私の腕と胸のなかで、微妙に蠢動をつづける彼女の肉体は、私の嗜虐心を一層あふりたてるのだった。

足の方に伸ばしていた手を返して浴衣の襟に手を掛け、それを一気に引きむしろうとした。彼女は、そうはさせじと、片手で襟を、片手で私の手首を握った。

その間、私は遊んでいた左手で浴衣の紐をすりと解いていた。

脅えたような彼女の目。口からはハアハアと熱い息が荒々しく吐かれている。

海岸での行為からの延長で、彼女の目ばかりか、体全体から憎悪が漲っている感じだ。

今日のヒル、浜名湖を見て、「まあ、きれい」と嘆声を洩らしていた矢島靖子と、これが同一人物か、と思えぬほどの堅い表情だ。そのときの私の形相も、きつと見られたも

のではなかっただろう。

拒まれれば拒まれるほど、意地になって、相手を屈伏させたく思うのだ。

素直に応じないのなら、もっと手ひどく、そして、荒々しく、むしり取りたかった。

畳の上をいざって逃げれば、掩いかぶさって押えつけ、浴衣の肩を脱がした。

肌の色は、どちらかといえば、小麦色の肌。健康色だ。少々擦っても、抓っても、いささかも動じないといった成熟した女のための持っ色香が、プンプンと匂っていた。

△この女、自分からは喋らないが、一体、いくつぐらいだろうかな？

そんなことを考えながら、私は彼女に馬乗りになって、浴衣を脱がしにかかった。

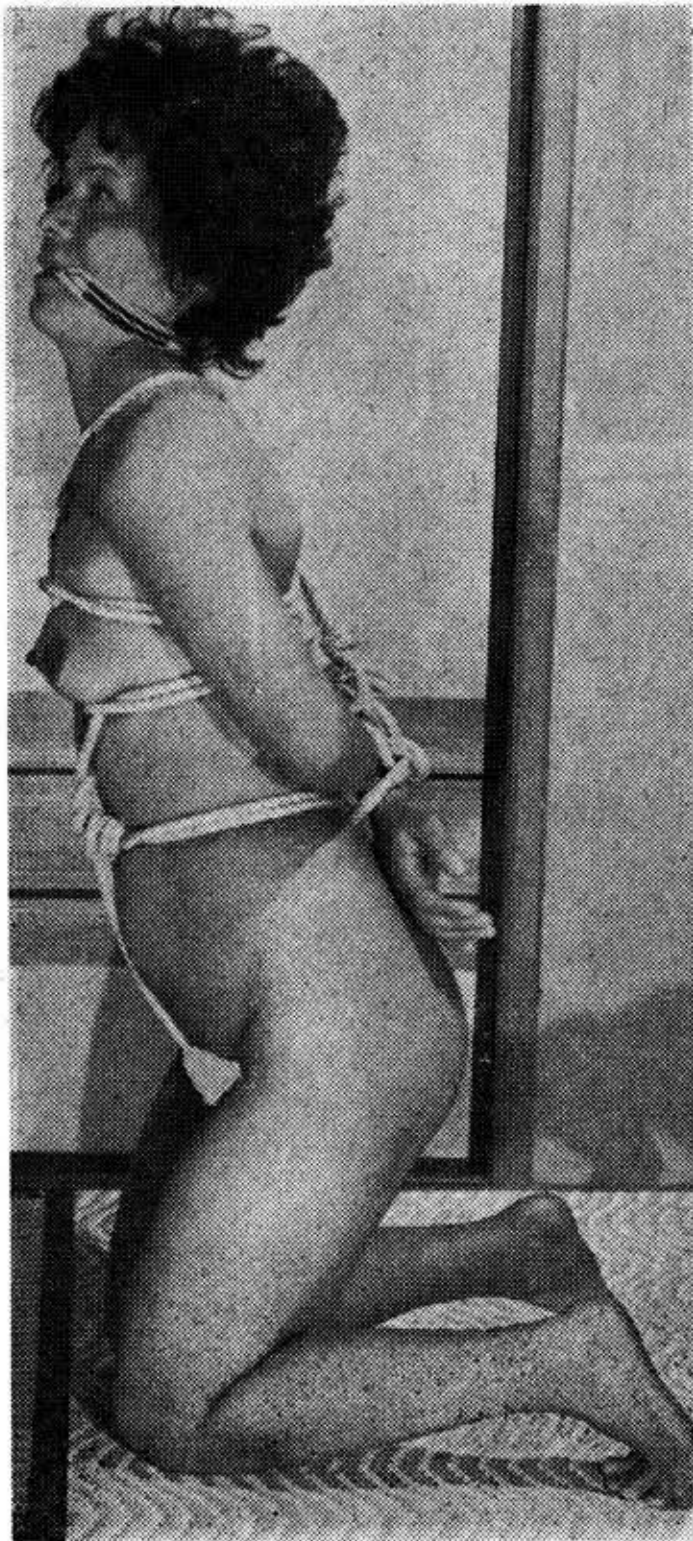
両手が自由なだけに、その手が私の作業を妨害してスムーズに、ことを運ばせない。

私は、いらだててきた。

憎悪をむきだしにして、彼女の手を膝頭の下に組み敷いた。額から、首筋から、にじんだ汗が玉となって、ポタリポタリと、彼女のシミーズの上に落ちた。

なにがなんでも、自分の手で引き剥がさなければ、気がすまなかった。

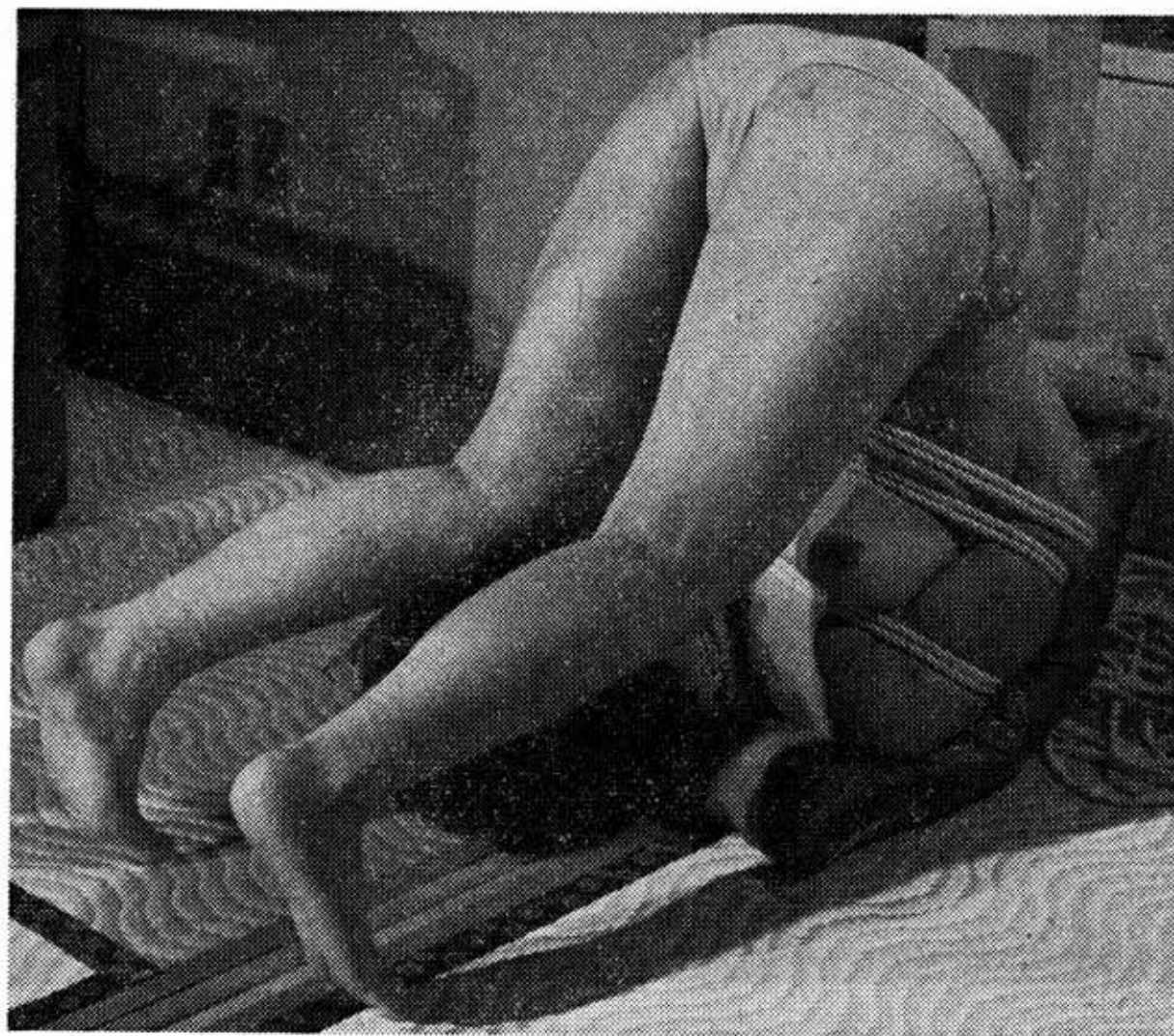
彼女の両手の動きを制しておいて、自分の唇を彼女の顎の下から喉元へと執拗に這わし



ていった。

「くくくく……、くすぐったい……」

彼女は馬乗りになった私の体の下で、しきりに悶える。そして、いつしか、浴衣は、すっかり脱がされていた。



私は五月号の『羞恥のなかのSM談義』で矢島靖子のことを、へいくら責めても責めても、燃えるのは燃えても、絶対に参らないという「女忍者」のような女Vと書いた。

そして、こんな女忍者タイプの矢島靖子をこっそりと念入りに責めてみたいと思った。

あのとき、初対面の彼女に対して、私は、「女忍者くの一」ではないかと疑った。

今、その矢島靖子が、私の尻の下に敷かれて、畳の上で、もがいているのである。

私は、ふっと或錯覚に陥った。

私は塚本城の城主、塚本鉄三だ。

矢島靖子は、私の寝首を掻こうと狙う敵方の放った間者なのだ。

天井から忍び込んだ「くの一」を、危ういところで膝に組み敷いたところだ。

ああ、なんという妄想であろうか。

私は、自分の奇妙奇天烈な妄想に酔いながら、膝の下に組み敷いた矢島靖子を、ぐいぐいと締めつけていった。

「さあ、白状せんか。どこの誰に頼まれて、この俺を刺そうとしたのだ」

「く、くるしい。手をゆるめてヨ」

「ゆるめてやるから、素直に白状するんだ」

「ええっ、白状って、何を……？」

「いいから、大人しく、このシューミーズを脱げ。やはり女はしぶといから、素っ裸にしてから責めるに限る」

私が手をゆるめた隙に、靖子は体をすくめたかと思うと、さっと身をひる返して、組み敷いている私の両股の間から逃れた。

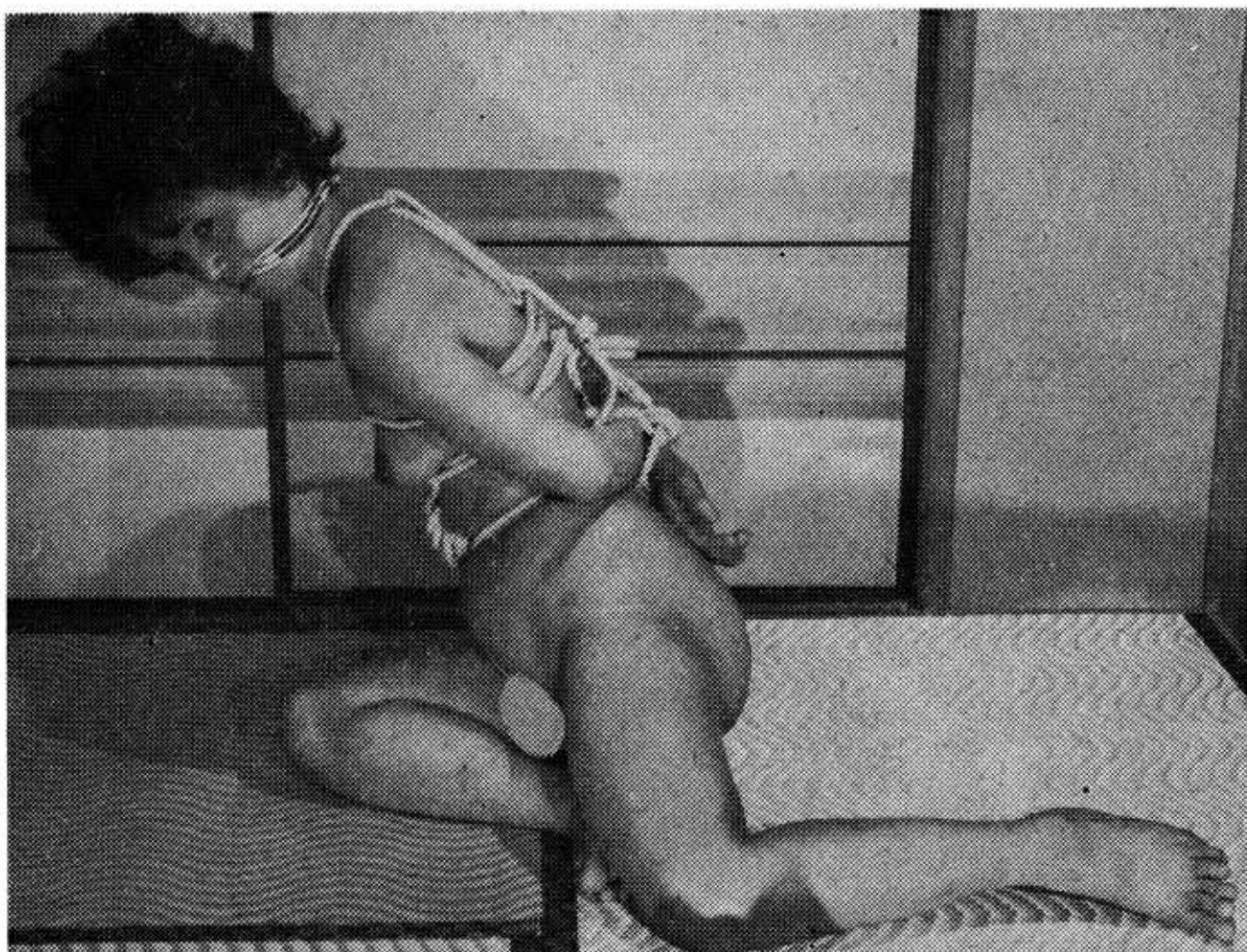
その敏捷なこと、やはり「くの一」だけのことはある。こんな身軽な女は、至って責め甲斐があるというものだ。

私は、ほくほくした。

いくら責めても責めても、参らない女。

そんな女を、私は責めたかった。

柳の枝のように撓むだけ撓んでも、決して折れたりもしない強靱な肢体、しなやかで、小麦色をしている、その肌が「女忍者」のよう、しぶとさを見せていた。



私は立ち上って彼女の前に回るなり、さつとシュミーズの裾を捲くりあげた。
あっ！

触ったら、こちらの手も濡れてしまいそうだった。
私は、忽ちにして欲情した。

皮を剥ぐように、彼女の肌からシュミーズは、一片の布となつて、取り去られていった。

反射的に胸を両手で押える彼女――。

私は浴衣の紐を拾うなり、胸に当てている右手首に巻きつけると背中へ回し、その上へ左手首を揃えて括った。

矢島靖子はパンティ一枚つけたままの裸身を畳の上に、ころがしていた。

ただ、ごろりと、ころがっているだけだったが、なんとも云えない、熟れきった女の色気があった。

小麦色の肌が、爬虫類さながら、濡れたように光っている。

不思議な女の肌だ。
ネバネバとしていて、手で

「この女、わざわざ、東京から、何のためにやってきたのだろうか？」

私は自分の心に兆した劣情を恥じた。

写真を撮りたかったが、まだ何一つ、準備はしていなかった。

鞆を開けるのが煩わしく、そして、嗜虐心だけが、しきりに熾った。

目の前の畳の上にくるがっている女体、女忍者のような矢島靖子に襲いかかって犯してしまえと、悪魔の囁きが耳元です。

「早くやってしまったわいか。彼女も、それを乞い願っているのだぞ。早くやらないか？」
妖しい囁きが繰り返される。

「ねえ、私、貴方と二人っきりで、思いっきり責められたいの。ねえ、この気持、わかって下さるでしょう」

電話で言っていた彼女の言葉が、強い誘惑の言葉となつて私の胸に、つき刺さる。

私は物に憑かれたように、彼女の裸身の上に、がばと掩いかぶさると、パンティのゴム紐の間から手を差し入れて、ねっさりした臀部を撫でさすった。

「ああ、あああ、いやよ、いやよ」

彼女の脚が空をきって派手に跳ねた。

その跳ねまわる足を押えつけるのは、S好

みの男にとっては、とても興味があった。

両手が括られているのだから、よく動くのは脚だけだった。私は、ずるずるずるっと下着をずり下して、剥玉子のような新鮮なお尻を剥きだしにしてしまった。

よく引き締まった、とても味のよさそうな魅惑的な丘陵だった。

真白じゃなくて、適当に浅黒くて、無駄な贅肉というものが、いささかも見受けられないお尻だ。それでいて、太腿のつけ根あたりから、グツと太くなった円柱が、臀部に至って更に瑞々しく膨れて食欲をそそった。

私は手にした下着を部屋の隅へ、さっと投げ捨てる。それは白い花びらをつけた造花のように、ころがった。

後手に括られた全裸の女体を目の前にして私は、しきりに欲情した。

この矢島靖子という女は、そのことのみの



ために、今、ここに横たわっているのだ——という気がして、ならなかった。

私は浴衣とパンツを脱ぎすてていた。

自分を狙った、この「くの」を、自らの手中に収め、そして自らの手で成敗したいと近寄っていった。

矢島靖子は、もう、どうでもして呉れと言

わんばかりに、裸身を「くの字」に曲げて、ふてくされたように横たわっていた。

足の裏を彼女の太股に当てると、べったりと吸いつくように、ねちゃりつく。

私の足が脂足なのか、それとも彼女が特異体質の肌の持主なのか。いや、多分、その両方なのだろう。

爬虫類のような濡れた肌を持つ女。こんな女の味が悪い筈はない。

私は足を揚げて、彼女を仰向けにする。

裸で立っている私を見て、彼女は初めて、脅えたように起きあがろうとした。

「お、おおお、お……」

そこで私の嗜虐心に火がついた。

「女忍者奴、成敗してやる！」

勝手な理由をつけて、私は彼女の裸身に襲いかかっていた。

「イ、イイイ、イイ……」

声ならぬ声が、彼女の口から洩れた。

彼女の足の踵についていた砂が、私の太股に、ざらつく。

お尻の肌が殊に、ねばっこかった。

真新しい畳が、このときほど、堅く感じたことはなかった。私の腕のなかで彼女の裸身が活魚のように跳ねまわった。

☆

この前、大阪国際空港のコーヒー・ショップで四人のS研会員と共に、ダベリ会をやったときも、この女は、自分のことに関しては何一つ、喋らなかった。

もっとも、参加したA、B、C、Dの四氏にしたって、自分の本名はおろか、職業や年令については一切、語らなかったのだから、一概に、この女を責めることは出来ない。

矢島靖子という女について、私は具体的なことは、少しも知らない。

知っているのは、今、目の前で後手に紐で括られて素っ裸でころがされている、この女の体だけだ。隅から隅まで知りつくした気ではいるが、しかし、縄と羞恥責めに対して、どのような凄惨な反応を示すか、その未知数の魅力が、私の心の底で、うずいていた。

いぎたなく、畳の上にボロ屑のように寝ころがっている女を放っておいて、私はバッグ

からカメラを取りだしていた。

女が素っ裸のまま部屋の中にいても、それは、それなりに一つの好ましい風景になるのに、男が素っ裸になっていると、何故かサマにならないのだ。ましてや、素っ裸のままでカメラをいじくっている図なんて、凡そ、しまらないこと夥しい。

白いバッグから、縄とコードとを、ずるずるっと、引き出す。

「あら、お写真、撮るの？ それだったら、お手伝いしましょうか」

彼女は左の太腿をかい込んで起き上ろうと上になった右足を伸ばして弾みをとる。

「いいから、お前は、じっとしとれ！」

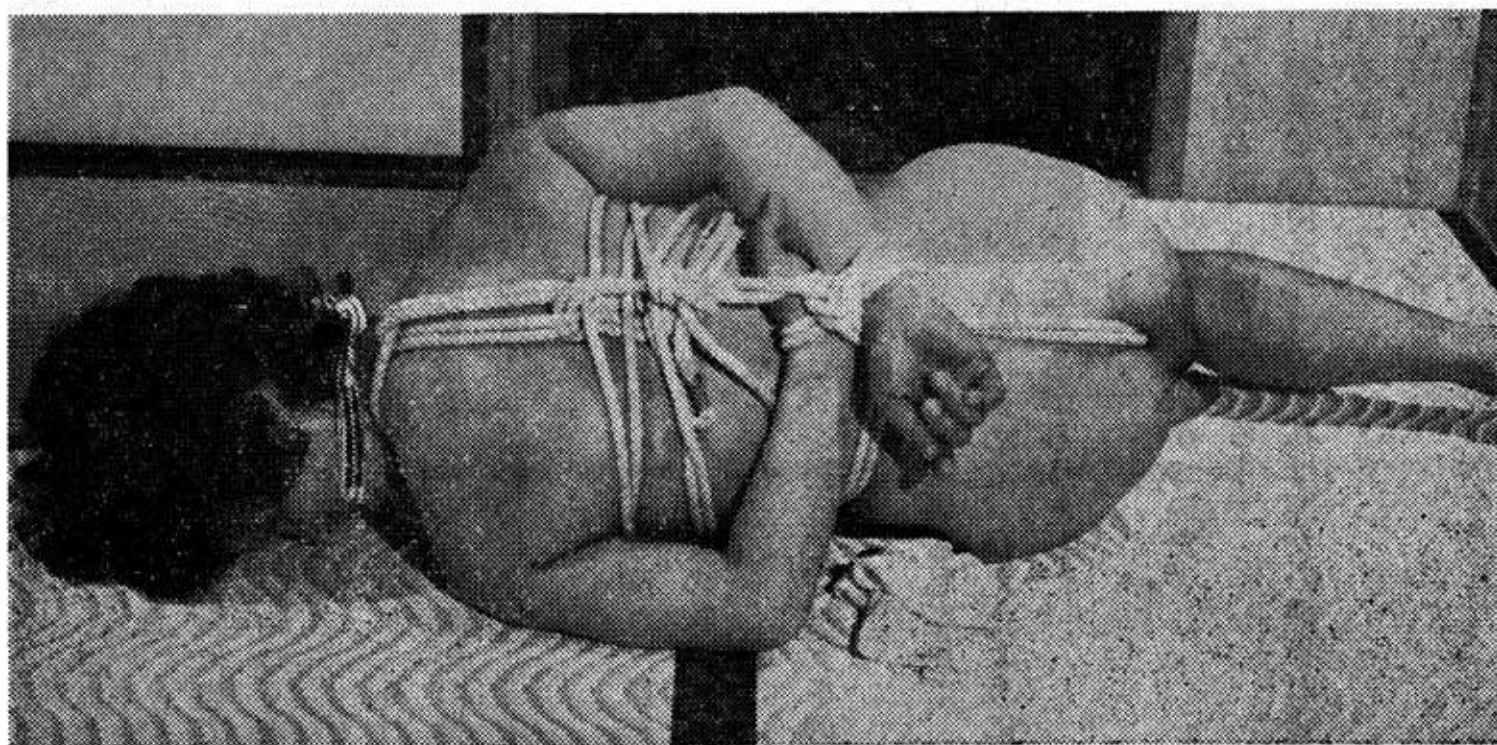
弾みをとろうとピンと伸ばした彼女の右足に手を掛けると、仰向けにひっくり返した。パツと、しなやかな両脚が宙に舞う。

私は、つと足を伸ばして、彼女の口もとへ差し出した。

「さあ、舐めてみる」

男の足を喜んで舐めるようだったら、これは、もうM女としての資格十分だ。

私は彼女の両脚が宙に舞ったとき、その間隙にチラッと覗き見て、そこに歴然とした欲望の証しを見たのであった。





これはいける——そう私は信じた。
もし、矢島靖子が、真正銘の「M女」だったとしても、何の前ぶれもなしに、ムード作りもせずに、無茶に責めたとしたら、これはどうだろうか。手ひどく拒絶されるのがオチであろう。

今は最高に燃え上っている——と、私は、そう判断して、足を差し出したのだ。
へいつ、どんな場合でも、男の足を舐めるようであれば、M女とは云えないVと言う人があるが、果して、そうであろうか。

ムード作りをやらずに、ムヤミヤタラに責めまくるのは、準備運動をせずに海へ飛び込むようなものであろう。

——足舐め——それ自体、とりたてて、セクシャルなものでもない。しかし、優越感を覚える点で、相手に屈辱感を与えるという点で私を、いたく満足させた。

足の指を舐めさせたあとで、彼女の舌が足の裏へ移っているとき、私は自分の足の指で彼女の鼻を摘んでいた。

そのとき、私は、やっぱり矢島靖子は女忍者だと思った。いつの間にやら、後手に括られていた紐をほどいて、私の足首を両手で捧げるように持っていた。

男の足の指や足の裏を喜んで舐めるような女だったら、ホレ、お尻による「口封じ」だって、やってやれぬことはないだろう。

だが、今の私は、お尻をデンと彼女の顔に据えての「口封じ」から、「アヌス舐め」の責めをやるまでもなく、「足舐め」と、足指による「鼻摘み」をやっただけで、とてもじゃないが、隠しきれないくらいにエキサイトしてしまっていた。

蛇のように、私の裸身にまつわりついてくる矢島靖子の粘っこい肢体。彼女もまた、私と同様にMの心情を燃えに燃え上らせていたのだ。冷たく濡れている爬虫類の肌、そのぬめぬめした肌に、私は溺れていった。

縄が乱舞する部屋

私が提げてきた白色の靴のなかには、そう沢山の縄が入っていなかった。重量を制限するために三脚も一脚にとどめ、照明器具も最少限必要なものだけにした。縄は嵩ばるので白ロープ他、数本の縄を忍ばせただけだ。

私が、その中の一本を手にして彼女に近づいた途端、なで肩がビクッとふるえた。

それは、もし、服か着物をつけていたら、私の目にはわからなかったろうが、素っ裸だったので、その肩口の表情が、はっきりと目にうつったのである。

私は縄を手にしたまま、彼女の上半身を、



ひしと抱きしめた。両腕のなかに伝わってくる彼女の全身のオコリのようなおののき。

私は暫く、じっと抱きしめていた。

手にした縄を見ただけで、このようにまで

彼女は全身にショックを受けるのだろうか。

それは、私にとっては、快いおののきだった。

彼女を一層いじめたくなった。

「ねね、ねねね……。お願いがあるの」

矢島靖子は濡れたような瞳をあげた。

「なんだね？」

「私を縛る前にトイレへ行かせて。そして、

出来たら、お風呂へも入りたいわ。このままだったら、私、恥かしいの」

「恥かしいの」という彼女の言葉を耳にして

私の「心のなかの悪魔」が、さわぎだした。

「トイレへ行って、彼女がやることを、目の

前でやらしてみたら——」

彼女の、そんなところを見るのは初めてだ。

なんとしても見てみたい。

それに……。今、そこが、どのようになっ

ているか、それも見たかった。

嘗て、私が松本たえを、さんざん、口先で

いたぶった末、縄を持って近づいたことがある。例によって、羞かしがって嫌がるのを、

なんだかんだ言いながら無理矢理に縛り上げて、さて、開股縛りにしようと、抵抗する彼

女の脚を、やっと上げたところ、ああ、どう

だろう。必死になって、彼女が拒む筈だ。

そこに、私が、この目で見たものは、一体

なんと表現したら、よいだろう。

その歴然たる……を、ぶちやけたような明

らかな痕跡に思わず啞然とした。

縄を見ただけで、縛られただけで、忽ちに

して、このような有様になっていようとは、

流石の私も、思ってもみなかった。

S好みの男性ならずとも、少なくとも男性

であったならば、この有様を見ては生唾を飲

み込むぐらいでは納まらない。全身が、かー

っと、燃えるように熱くなって、前後の見さ

かいもなく、狂ったようになって女体に襲い

かかってゆくことだろう。

今、この矢島靖子は、どうだろうか。

私の手に提げた白いロープを見て、これほ

どまでにショック症状を示す彼女のことだ。

△さぞかし、あの方も……△

そう、私の第六感ハピンときた。

「うん、トイレへは行かせてあげよう。だが

ね、その前に、あんたの縛られた美しい体を一度でいいから見ておきたいんだ。まだ、照明の準備はしていないから、写真には撮れないが、この目で、しかと見てみたいんだ」

「えええっ、それは……。それは、今は勘忍して頂戴。お風呂から上ってからにして。さつき、海岸を歩いて、足も汚れていますし、それに、ホラ、こんなに身体中、汗ばんでしまっていますもの」

「その汗ばんだ肌が魅力的なんですヨ」

彼女は両股を、ぴったりと合わせていて、私の手の入るスキさえ見せない。

へひょっとしたら、この前、四人のS研の悪友の目の前に、その落花狼藉の光景を、彼女は披露してしまったのではあるまいか

私の心の隅に、そんな疑心暗鬼が生じた。

ひょっとしたら、そうだろう。いや、ひょっとしなくても、十中八九、多分、そうだろう。と、すると、今日、私と二人っきりで逢いたいと言っていた彼女の真意は――？

私は、虫に刺されたアトを羽毛で、さか撫でされるような快感を覚えていた。

「トイレなんかへ行かしてやらない。このまま縛りつけて、ここでさせてやる。そして、この目で、しっかりと見てやるのだ」

「いや、いや。そんなの、いや。こんな畳の上で、縛られたままでするなんて、それは無茶だわ。ねえ、トイレへ行かせて……」

彼女は、私の両腕のなかで悶える。

「いかん、いかん。このまま、ここで、両手を縛られたままでするんだ。それとも、沢山の男の人たちの見ている前の方が、やり甲斐があるというのかい。それだったら、S研の有志を集めようか？」

「お願い。そんなに苛めないで。このまま、トイレへ行かせて。もう、私、辛抱できなくなったの。ホラ、こんなに、お腹が張ってるでしょ。身体に悪いわ。ねえ、お願い」

「フン、そんなに、お願いするんだったら、トイレへ行かせてやってもいいが、その代り一つ、約束をするかい？」

「ええっ、約束って、それ、なんのこと？ 私に出来ることだったら、いいけど……」

「ああ、出来ることだよ。ほら、ね」

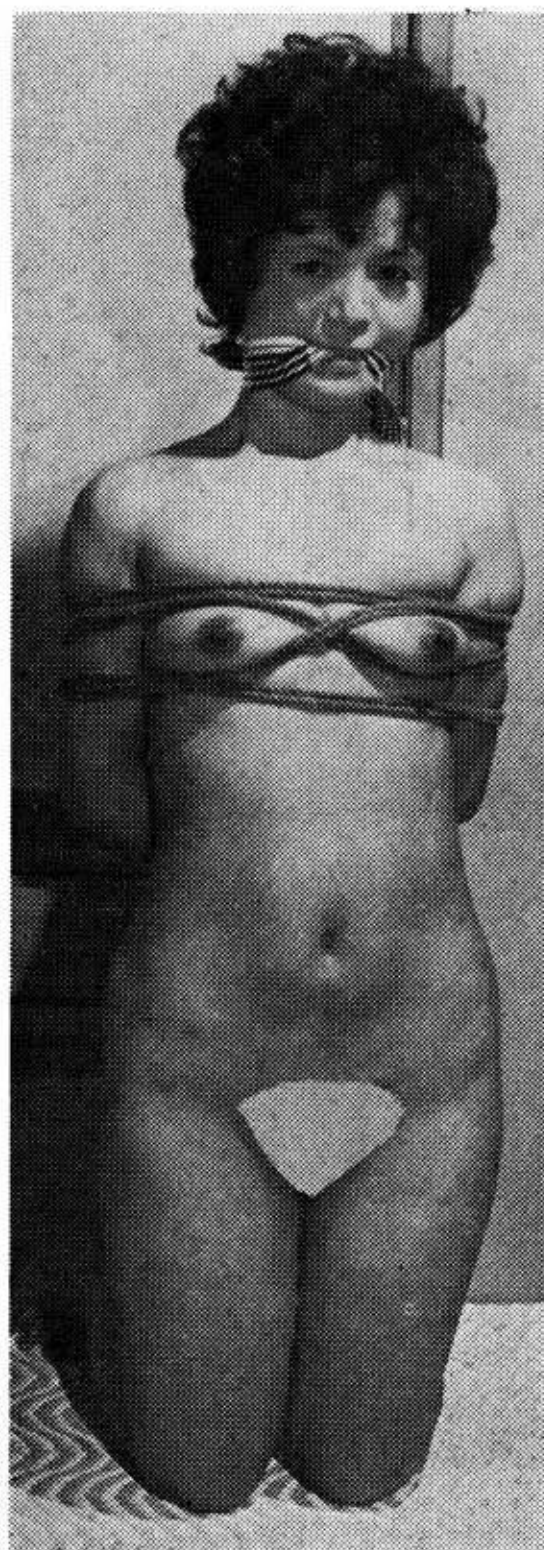
私は彼女の耳元へ口を寄せて囁く。

「いやヨ、絶対にいやっ」

「それだったら、トイレへは行けないよ。それでも、いいのかい。あんたの言うように、これ以上、辛抱したら、身体に悪いよ。それとも、今、ここで私の見ている前で、さっぱりと、やって見せるかい。私の方は、それでも、いいんだよ」

「そんなのはイヤよ。とても出来ないわ。無理を言って、私を困らせないで……」

「ほら、お腹が、こんなに張ってきたよ。早く返事をしないと、だんだんと溜まる一方じゃないか。約束をするんだな。あんたにとっ



でも、そう悪い取引きだとは思わないがナ。
この可愛い口で答えるんだ」

「だったら、仕方がないわ。私、約束する。
だから、トイレへ行かせて……」

彼女は浴衣を羽織って部屋を出て行った。
浴室で湯の出る音がする。

私は照明の配置をやりだした。

☆

ライトの準備を終わっても、彼女が風呂から
上ってくる気配がなかった。

そういえば、一緒にジャングル風呂へ入っ
たとき、彼女に石鹸で身体を洗わせる暇も与
えなかった筈だ。きっと、そんなわけで、急
入りに磨きたてているのに違いはない。

私はマットレスの上に仰向けに、ひっくり
返った。疲れは少しも感じないが、やはり横
になっているというのは楽だ。

今朝からのことを考えてみると、今、こん
な浜名湖畔のホテルの一室で寝ころがってい
るということ自体が不思議な気がする。

タクシーで走り回ったことが走馬灯のよう
に臉の裏を去来するが、それすらも、僅か数
時間前の出来ごとではなくて、遠い遠い昔の
出来事のようにさえ思えるのだ。

何故、矢島靖子という女性と、私は、こん

な所まで来てしまったのだろうか。

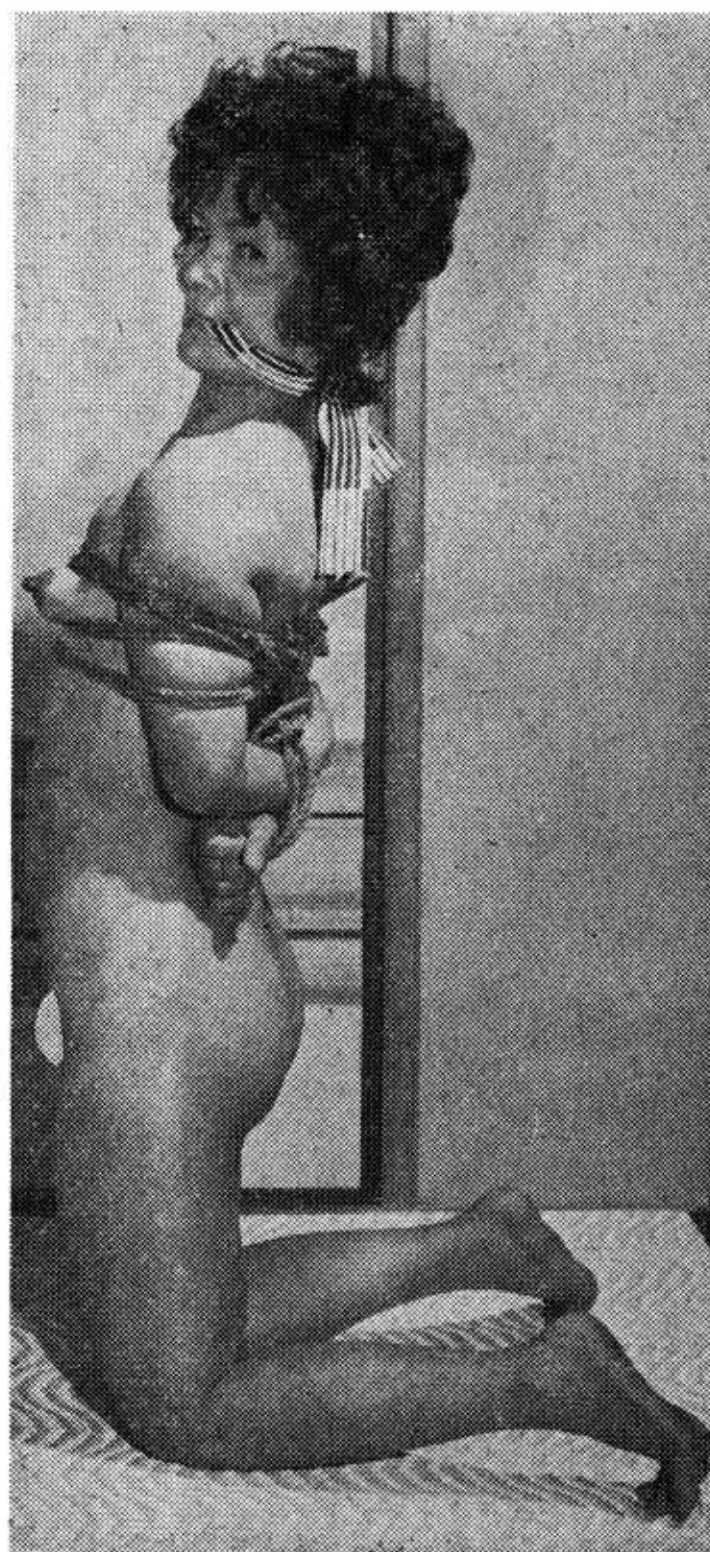
そして、彼女も、また、どういう謂れで、
東京から、わざわざ、浜名湖くんだりまで出
向いてきたのだろうか。

私には、そんなことが皆、なんだか一幅の
戯画のように、ふと思えるのだった。

こうしたことが過去に於いて、対象の女性
を変えて幾度となくあったが、とりたてて、
今、このような気持になるのは、やはり、旅
の空という気持のなせる業なのか。

△一期一会△という念が、しきりにする。

そうだとすれば、これからの矢島靖子との
接触を有意義なものにしなければならぬ。



と、そんなことを考えるともしに考えて
いると、彼女が風呂からあがってきた。

ほんのりと上気した顔。

それが、てかてかと光って新鮮なのだ。さ
ては、何か、化粧品を塗ってきたな。

それは、彼女は別に持ってきたのか、浴衣
じゃなしにワンピースを着ている。

「それ、どうしたんだい？」

「私、浴衣は余り好かないので、パジャマ代
りに着古したワンピースを持ってきたの。こ
れ前開きでしょ。だから便利なのよ」

彼女は、私の目の前でチラッと服の前を開
いて見せる。



「用意周到だな。アレッ、それ、なんだ？」

「ゴムのパンティよ。ウフフフ」

下半身にピッタリと密着した生ゴムが、彼女の肉体の線そのままに張り切っている。

「ううん、これは参ったな。あんたに、そんな趣味があるとはね。見直したよ。それにしても、お風呂は長かったナ。アソコも綺麗に洗ってきたかい？」

「いやよ。そんなこと、言うの」

彼女の肌という肌からは、つきたての餅のように湯気が立っている。

「僕のアソコというのはネ。ホラ、あんたのあの美しい足のことを言ってるんだよ。この前は、Aさんが、その足を舐めただろう」

「まあ、よく、見てらしたのね」

「いや、実は僕も、羨ましいと思って眺めていたんだよ。出来れば、Aさんのように舐めるんじゃないくて、歯で噛んでやろうかと思っていたんだが、そんな機会がなかったネ」

「あら、あんなこと、おっしゃって……」

「縛られたとき、あんたの足の指がピンと、そりかえっていただろう。アレ、天下一品だと、みんなの評判だったヨ」

「だって、私、縛られたら、とっても、気持ちいいんですもの。自然と、ああなってしまふんです。でも、そんなところまで、見ていらっしゃるなんて、私、恥かしいわ」

「足の指だけじゃなしに、もっと、他のところ

ろも見ているよ。ホラ、こうしてね」

私は縄を持って靖子に襲いかかった。服を脱がす余裕なんて、なかった。

腕を荒々しく捻じ上げて、両方の手首にロープを回すと、彼女の肩口がブルブルと、ふるえた。

縄に対する反応は凄い。

胸、二の腕へとロープを這わすと、彼女の上半身はガタガタと激しく、ふるえる。

それを見ると、抱きしめてやりたいような憐憫の情と、反対に、もっともっと、ひどい苛め方をしたいという嗜虐心が、しきりに起ってくるのだった。

肢体は、極めて柔軟だ。

縄に逆らわずに、縄によって下肢が面白いように、動いた。

ぎゅう——と、ロープを引き絞る。

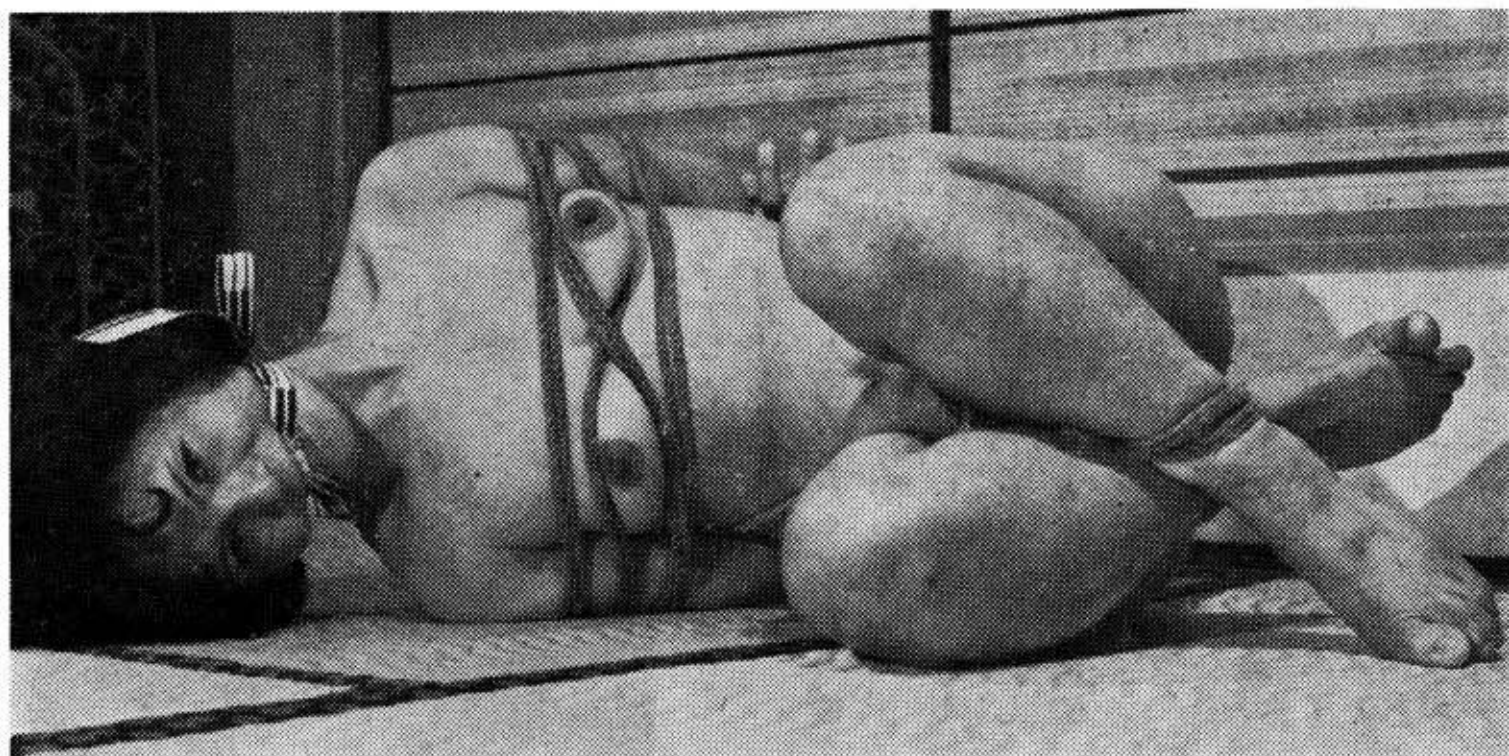
例によって足の拇指が、くいと曲がる。

「ね、ねねね、縛られると、私、凄く、気持ちいいの。もっと、きつく縛って——」

「この前は、そんなこと、言わなかったネ」

「だってエ、沢山、男の方がいらっしゃったもの。それに、あの日、初めてでしょ」

「今日は、二人きりだから、好きなだけ声を出すって、わけか？」



「ええ、思いつきり、声を出さして。その方が私、本当に苛められてるって、気持ちになっちゃうの。うんと、うんと苛めて、私を、泣かせて頂戴！」

「頼まれなくなつて、責めて、責めて、責めまくって、泣かせてやるさ。そのゴムのパンティがベトベトになるまで……ね」

私は縄目へ手をこじ入れて、乳房をワンピースの襟から剥きだしにしようとした。

「あつ、あつ、あーあ」

膝が激しく屈伸したかと思うと、ごろりと横倒しになり、首縄が締まる。

足の指の表情が豊かだ。

私は、お腹へ手を当てて抓りまくる。

「ク、ククク、クク……」

ひどい、もがきようだ。

額に、汗がにじんでいる。

私は唇を噛んだ。

洋服なんて、邪魔だ。引き剥がうとするが縄が邪魔して脱がすことが出来ない。

「ね、さっきの約束、アレ、やるね」

私は、彼女の耳元で妖しく、ささやく。

「ええ、約束したんですもの、覚悟はしてますわ。でも……」

「でも、なんだネ？」

「やっぱり、言うの、やめますわ」

「こら、言いかけて止めるなよ。気になるじゃないか。言ってしまえよ」

「喋っても笑わない？」

「うん、少しも笑わないよ」

「それだったら言うわ。耳を近づけて……」

彼女は近づけた私の耳に熱い息を吹きかけ、つぶやくように、ささやく。

「そ、そんな馬鹿な……ことが出来るか。ウフフ、なんということを考えつくんだ。アッ、ハ、ハハハ」

「笑わないって、おっしゃったでしょう」

「うん、そうだったナ」

私は縄を解くなり、ワンピースを引き剥いで部屋の隅へ投げすてた。

華麗ないたぶり

彼女がパジャマ代りに着ていたワンピースを剥ぎとって投げすて、ねちゃったとした裸身に、私は縄を掛けていった。

私の手にした縄を逃げるというよりも、むしろ、一刻も早く、嚴重に縛り上げてほしいという協力的な仕草であった。

「快感」に対して、人は或種の、後めたさというか、羞かしさを覚えるものだ。それが、

縛られることによって「快感」を覚えるM女の羞恥心のあらわれであろうか。

だが、動物の一種である人間は、やはり快感原則に従って行動する。今の彼女も、羞恥心よりも、快感に誘われて、自ら進んで私の縄目を受けようとしているのか――。

それとも、この私に対して、本来、羞恥心の滅殺をきたしているのだろうか。

M女を馴致し、飼育し、訓練し、そして仕置や拷問を経て、自分の思い通りの「芸人」に仕込んでゆく過程で、いろいろな謎に逢着して迷ってしまうことがある。

読者の方々の投稿を読んでいると、自分がSだからという理由で、M女と出会ったならば、忽ちにして、激しいSMプレイが展開し挙句の果て、M女はS男の前に屈服して、あらゆることを易々諾々としてきく――という空想、いや妄想が展開する。

果たして、実際は、そうであらうか。

私は今までに、そうしたM女のデリケートな心情の変化について、いろいろな場合を、具さに体験してきた。そのことに関しては、いずれ稿を改めて詳述したいと考えているが、さて、この矢島靖子の場合はどうだろうか。生ゴムパンティのボディウェアは、下半

身にぴったりと密着していて、まるで、何も着けていないように見える。

彼女の協力的な仕草によって、私の早縄はあっという間に、彼女の裸身にまつわりついた。この時点では、女を縛りたい――という私の意図と、男の手で縛られたい――という彼女の願望とが、ぴったり一致していた。

私は、この次に行うべき彼女に対する羞恥責めの展開を思い浮かべて、身体中がゾクゾクした。女を縛り上げてしまって、さて、これから――という気持、これは、たしかに、たまらない快感だ。

後手高手小手に縛ってしまった女。もう、どんな抵抗も許さないのだ。これからは、思

いのままに料理できるのだ――と、思ったとき、私はぐぐっとエキサイトした。

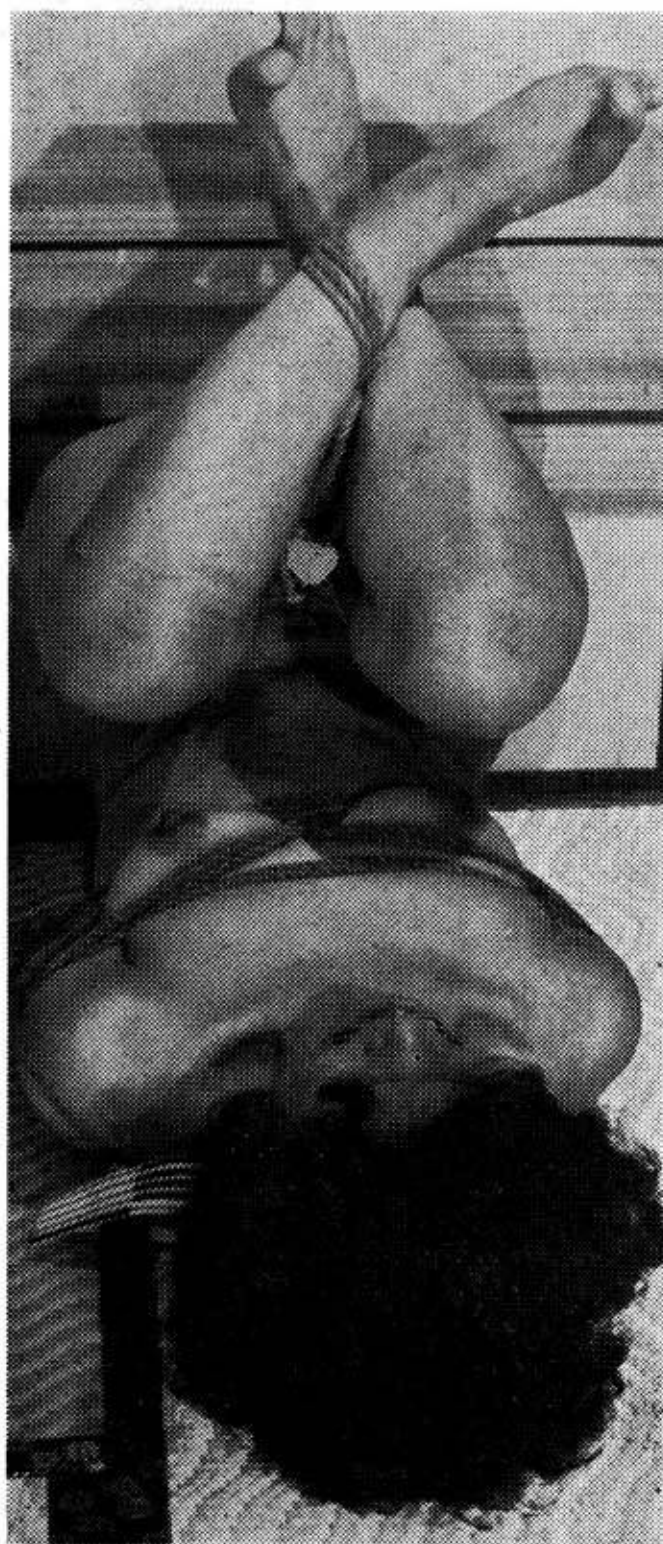
彼女の下半身に、一分のスキもなく密着している生ゴムパンティを引き剥いでやろうと思った。その下が、どうなっているのか、すぐにでも見てみたかった。

私は、そのゴムに手をかけた。

ああ、だが、なんとということだ。

彼女は、割方、肉づきのよい両足をバタつかせて、私を近寄せようとしないう。たしかに縛り上げて両手の自由はきかない。しかし、自由な二本の脚は器用に動いて、私の手から密着したゴムの下着を守っている。

私は二本の肉柱の乱舞に見惚れていた。



たった二人きりで行われている、この密室での奇妙な遊びを誰が想像するだろうか。

彼女はゴムパンを穿いていることで、安心して両脚を跳ねている。私は、それをいいことに豊かな足の表情を、たっぷりと楽しむ。

そして、いろんなポーズをとらして写真に撮ってから、彼女がホッとした一瞬のスキを狙って、さっとゴムパンに手を掛けた。彼女が逃れようとして身体を動かせば、その生ゴムの布は、薄皮を剥ぐように脱がせると思っただが、ぴったりと太目の腰部に密着しているものだから、そんな、た易いことでは剥がれない。

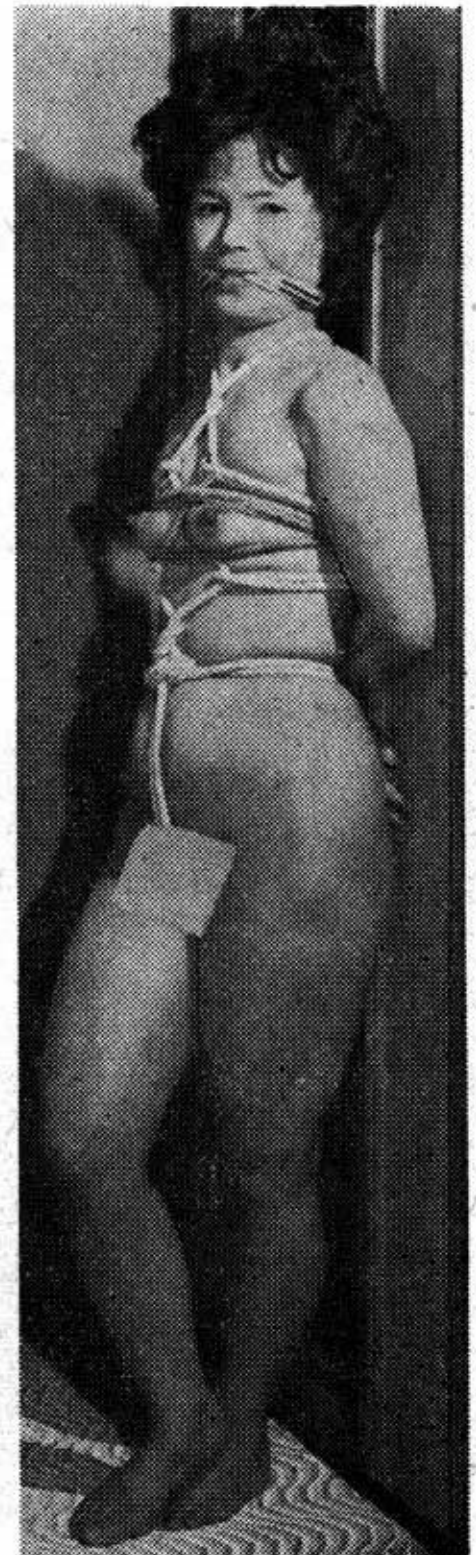
私は彼女を横に倒しておいて、顔の方へ尻を向けて馬乗りに跨がった。

両手を使って、お尻とお腹に手を回して、くるりと、めくっていった。

「いや、いや、いやっ」

お尻を振ったって、腰部の膨らみを一旦、ゴムパンが剥れてしまえば、あとは、もう、剥玉子のような双丘が汗まみれになって、私の目の前に現われてきてしまう。

私は剥ぎたてのゴムの、その部分に、先ず目をやる。無理に脱がしたから、裏が表に逆さになってしまっている。



その濡れたゴムパンを彼女の顔に投げつける。

「これを見てみろー」

この女、こんなゴムパンを穿いて私の前に現われたのは、ゴム好きか、ゴムマニアなのか。それとも、単なる好奇心なのか。

いずれにしても、S M的指向が旺盛なことだけは確かだ。これは、カメラ・ルポの取材対象としては、もってこいの女だ。

私は、今までの彼女との戯れで緩んだ早縄を解いて、別の白ロープを手にした。

ボディウェアのゴムパンを引き剥がされて素っ裸になった彼女は、さっきのあの暴れようは嘘のように、今は観念しきって大人しくなっている。

へよし、本格的に、ぎゅうの音も出ないくらい、厳しく縛ってやろう

そう決心して、私は彼女の裸身に近づくなり、さっと縄を掛けていった。

高手小手、首縄、菱縄の股間縛りだ。

それは、あっという間に、自分でも驚くくらいの早さで仕上った。

凄い緊縛感だ。

細身の彼女の裸身がくびれるように、縄で締めつけられている。股間縛りによって、上半身よりも下半身の方が一層ボリュームが感じられているのか、それとも、上半身が縄で締めつけられているから、そう見えるのか。

私は矢島靖子の見事な緊縛肢体を惚々と眺めていた。なんとという美しく、そして色気のある女体であろうか。

縄で縛られるということが、かくまで女の裸身を美しくするものなのか。

この美しい緊縛裸身を、なんとしても痛め

つけ、汚し、辱かしめたかった。

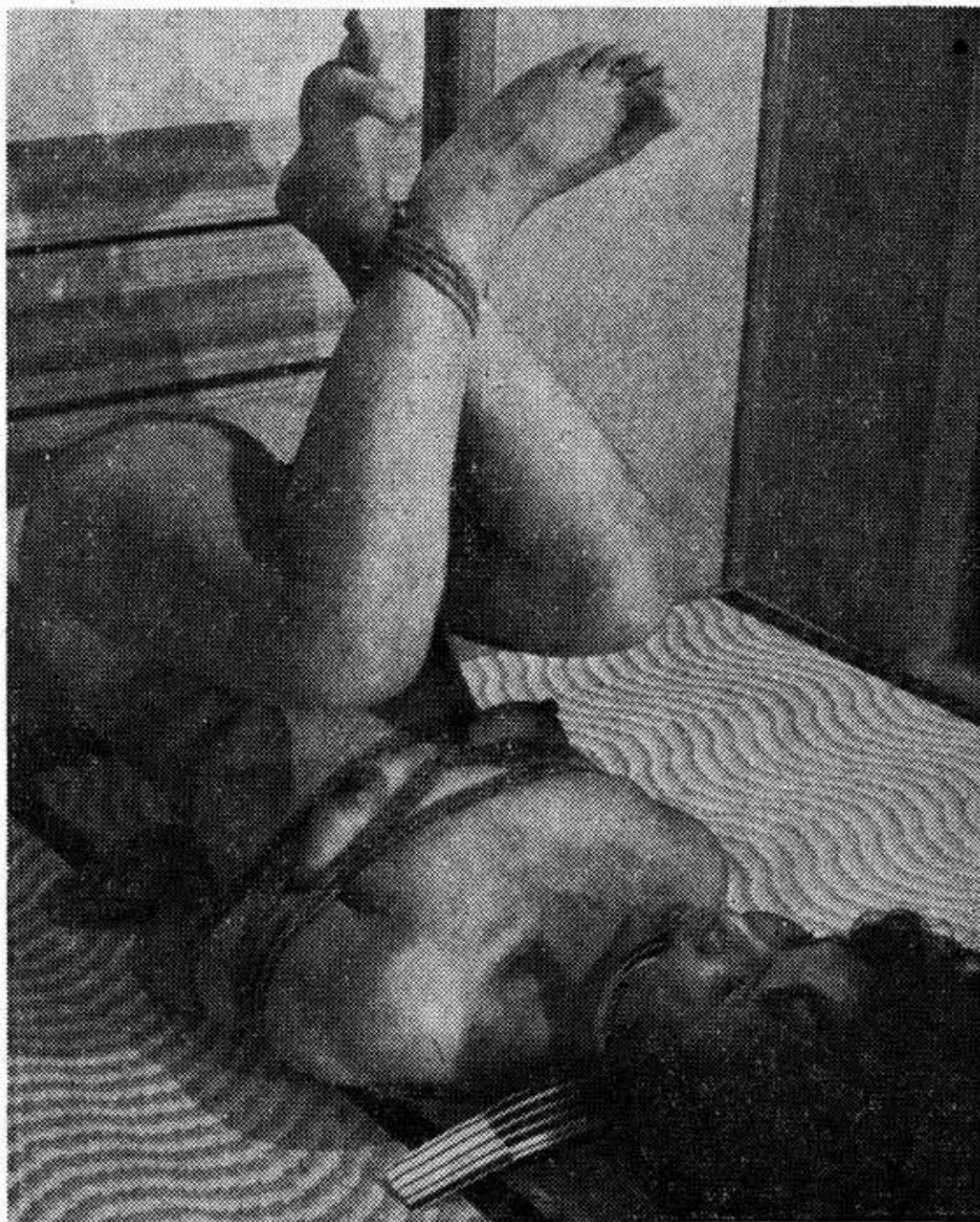
私が、それを望み、彼女もまた、そうされたいと望んでいるのだ。

△縛られて初めて燃える女△
ではなくて、彼女は△縛られると一層激しく燃え上る女△なのだ。責めても責めても、参らない代り、燃えに燃えても、燃えつきない女なのだ。

私は一先ず、彼女の姿態をフィルムに収めてから、やらカメラを置いて近づいた。といって、今日は、ムチもバ イブも持ってきていない。私は、自分の手を生ゴムの臭いのする彼女のお尻へ近づけていった。

ムチムチとした小麦色の肌が、掌にべったりと吸いつく。双丘に埋もれた白ロープの行方を探るように、私の手は二つの肉塊を押し開いていった。

「ねねね、縄がきついわ。とっても、痛くて、たまらないの……。ねねね」



「どこだ、どここの縄がきついんだ。ここか、それとも、ここなのか？ ええっ、どこだ」

「ああ、そこじゃないの。こんなに、きつく縛られてしまったら、私、とても……」

「とても、どうしたんだ？」

「とっても、とっても、縛られたら、気持がよくって、たまらないのよ。もっと、もっと」

縄をきつく締めつけて……」

「さっきは、痛いって、言ってたんじゃないのかい。緩めるんじゃないくて、締めつけるんだな。どうか、どうか？」

女忍者のような、しなやかな肢体が私の目の前で悶えぬく。そのたびに双丘に白いロープが、ぐっと喰い込む。

「この足がAさんに舐められたんだな」

私は、そり返った彼女の足の拇指を握って手荒く引きあげる。

「あああ、やめて、やめて……」

太腿も、膝小僧も、お尻もまるで油を塗ったように汗で

光っている。

「さあ、芋虫のように這ってきて、この足を舐めてみる」

私は畳の上に尻を下して足を投げだす。

煙草をくゆらしながら、左右にころがるようにして這い寄ってくる女体を眺める。

やっこのことで、足に口を差しのべようと

すると、私は、さっと足先を引っ込める。

芋虫コロコロ、芋虫コロコロ――。

私は以前に、山原京子に対して、後手高手小手に縛っておいて、足舐めプレイをやったことを思い出した。彼女もまた、SM全般について、非常に強い理解と関心を持っている女性だった。だから、いくらでも面白い趣向のプレイを考案して楽しむことが出来た。

舐めるべきでないものを舐めている。口にすべきものでないものを口にしている――といった倒錯が強烈な刺激になるらしかった。

心身共に、相手の男に屈伏しているという気持が、足舐めによって起るのだ。

私は、じらしにじらし抜いた末、靖子の頬を両方の足の裏で挟みつける。脂足が、ねっとりとした頬に、ねばりつく。

煙草一本喫い終ると、彼女を仰向けにころがしておいて、その咽喉首に跨がった。

「ううう、手が、手が痛いよう」

そりゃ痛い筈だ。

さっきからの尺取虫の動きで、存分に、後手首の縄が締まって、皮肉に喰い込んでいるのだから――。

そこへ、私の体重が掛かったのだから、たまったもんじゃない。痛いのは当然だ。だが

その痛さが彼女に陶醉を招く。

手首ばかりじゃない。胸にも、首にも、胴にも、恐ろしいほど、縄は喰い込んでいる。

私は、じりじりと、彼女の口元へ、自分の尻を、にじり寄せてゆく。

こんな責めを、私は何人の女性に施してきたことだろうか。殊に、そんな汚辱を喜ぶ女がいて、私の排便したあと、トイレットペーパー代りに、自分の舌を使う女もいた。

一度、そんな汚辱を味わった女は、次からは必ずといってよいほど、その行為を望んで秘かに、それを期待するのだった。

さて、この矢島靖子なる女性には、果して、コプロ的な嗜好を持っているだろうか。

縛られ、苛められ、責められ、かくまで昂揚してきたなら、汚辱的な強要でも、易々として受け入れることになるかも知れない。

私は、じりじりと、迫ってゆく。

彼女は思わず、顔をそむけた。

でも、私は構わず、尚も、迫ってゆく。

じり、じりと腰を浮かして、にじり寄り、ぱっと身をひるがえして、彼女の口を臀部で掩ってしまった。

あ――。

それは私の予期していなかった彼女の口の

動きだ。受け入れようだ。

彼女の濡れた舌、吸いつく唇。

優越感という精神的なもののばかりじゃなかった。直接、感覚に訴える快感が、私をしびれさせた。

それは、なんという快感だろうか。

いついつまでも、そういう状態でいたかった。私は投げだされた格好のよい彼女の脚や程よく曲げられた足の指を眺めていた。

長いような時間に思えたが、それは実際には、そう長くはなかった。

縄を解くと、彼女は羞らいのために、両手で顔を掩って、うつ伏せたままだった。

その手首には、くっきりと縄目のアトがついている。背中にも、縄で締めつけたアトばかりか、結び目のコブのアトまでが凄まじい窪みとなって皮膚の上に残っている。

「私に、私に、あんなことまで、させるんですもの。ひどいわ、ひどいわ……」

彼女は顔を掩って、よよ――と泣く。

その忍び泣きが、夜のしじまに響いた。

表の国道一号線を通る定期便トラックの音が始めて、私の耳に伝わってきた。

夜も更けたのだな。

遠くで汽笛の音もした。

女体への凌辱

アヌスを舐めさせるという行為が、相手の女性に対してどれほどの屈辱を与えるものであるかは、考えただけでも慄然とする。

例えば、木村洋子のようにそうした汚辱なしには、もう自己の体内に潜むマゾを満足させることの出来ない女もいるが、しかし、押しなべてM女といったって、そうした汚辱行為に易々として、まみれる者は多くはないであろう。矢島靖子が、そうした行為を甘受したことは、私にとって一つの驚異であったが、彼女が今日、私と二人っきりで逢いたいと言っていたのも、そうした行為への期待もあつたことだったのであろうか。

苗木陽子にしても、大山夫人にしたって、私は、「それは汚いゾ」と言っているのにも拘らず、むさぼるように、私の洗わない、そのままのモノを口に含んでしまった。



あとになって訊ねたら、そのときは、少しも汚いなんて思わない。それよりも、世の中に、こんな美味しいもの（その言葉のニュアンスは、普通の「美味」とは大分、違うのだが）はない——と言っていた。

とすると、アヌスなんかも、美味の最たるものなのか。そのところは、はっきりと、

わからないのだが、現実には、喜んで応じているのだから、多分、そうなのだろう。

さて、彼女の涕泣は依然として止まない。

肩を小刻みに、ふるわせている。

私は、ひどいことをする悪い男だ。

そして彼女は可憐な被害者なのだ。

泣くがいい。思いきり、泣くがいいのだ。その涙が涸れたとき、私は再び悪人に徹して縄を捌き、鞭を揮うだろう。

意を決して、私は麻縄を手にして、彼女に近寄った。この縄はトゲトゲがあつて痛い。

この前、藤田明子を縛ったとき、二の腕に縄のアトが残って困ったことがあったが、こうした痕跡は体質的なものなのだろう。この矢島靖子は、さっきの凄じいような縄目のアトが、もう殆ど、わからぬくらい薄れている。



S研の四人と一緒に矢島靖子を縛ったときも、相当きつく容赦なくやったのだが、それについては何の苦情も言わずに、こうして、今日も縛られにやってきたことを見ると、縄のアトは、何ら支障はなかったらしい。

「よし、思いきって、責めるゾ」

私は麻縄を彼女の裸身に絡ませてゆく。

掌のなかを通るだけでも、トゲトゲが痛い麻縄が彼女の柔肌の上を痛々しく通過していった。女忍者であるとしたら、敵の手に捕えられたら、一再ならず、こうした厳しい縄目を受けたことだろう。忍者といっても、年若

い女の身であってみれば、こうして、全裸にされて縛られるのも仕方のないことだ。

彼女の羞恥の泉が、ぽっかりと口をあいて天を臨むといった、あられもないポーズを、無理矢理にとらせる。

今までの度重なる責めで、練れに練れた彼女の肉体は、もう、このままでは、どうしようもないくらい熟しきっていた。だから、私のそんな浅ましい要求に対しても、易々として諦めきったように従っていた。

私は、そこに展開されたものを、冷ややかな目で、じっと見つめていた。

彼女の今の心のなかを如実に現わしているかのよう、そこは明らかに、激しい……が夥しく……して、……を呈していた。

ああ、それは、なんという素晴らしい……えもいえぬ……光景なんだろう。

彼女は、もう、私に見られているというところで、麻縄で厳しく縛られている裸身を、小刻みにふるわせていた。

どうしようも、隠すことの出来ないということが、彼女の心を一層、昂めていた。

見られている——ということが、彼女にとっては、耐えられない羞かしさでありながら限らない愉悅につながっていたのだろう。

それが、見ている私には、よくわかった。そうした落花微塵の有様を眺めているということは、見ている者にとっても、全身がガクガクするような激しい衝撃だった。

上になった彼女の足の指が、極端にひん曲って、ぐっと力が籠められている。

それは、ずっと、ずっと続いていた。

「靖子。次には、S研の人たちの集まっているなかで、責められてみるかい？」

「はい、沢山の人たちの見ている前で、私、思いつき責められてみたいです」

「見ている人が多ければ多いほど、いいんだ

な。羞かしいから、イヤだなんて、決して言わないネ」

「はい、決して申しません。沢山の人に、見られるのは、とっても羞かしいんですけど、私、羞かしいから嬉しいんです。みんなの前で、顔が真っ赤になるようなことを、縛られたままで、されてみたいんです」

「それだったら、今度は、私が呼んだら、大阪まで、やってくるネ」

「はい、何処へでも参ります」

「それだったら、次は、靖子を虐めたいって希望している人たちを集めて会合をやるからきつと、来るんだナ」

「はい、必ず……参ります」

私は彼女の足首を交叉させて縛り、その縄尻を胴から回して後手首を縛った縄へ連結した。所謂、海老縛りだ。

足首を縛った縄を引きつけて、女体を二つ折りにすると、足の指が忽ちにして、ぐっとそり返る。その奇麗な足指の豊かな表情。

なんと素晴らしい緊縛美であろうか。

私は海老縛りの彼女の身体を、横にし、縦に転がし、仰向けにして眺めてみる。一人で眺めてるにしては惜しい美景である。

口を割って噛ました猿ぐつわが、頬に痛々

しく喰い込み、何かを言おうとして、唇をパクパク動かすが声にはならない。眼だけが、物言いたげに私の方に視線を訴えるように向けている。

縄目が痛いと言っても言っているのか、或は、それとも……また、別のことを言うおうとしているのか、息づまる一瞬――。

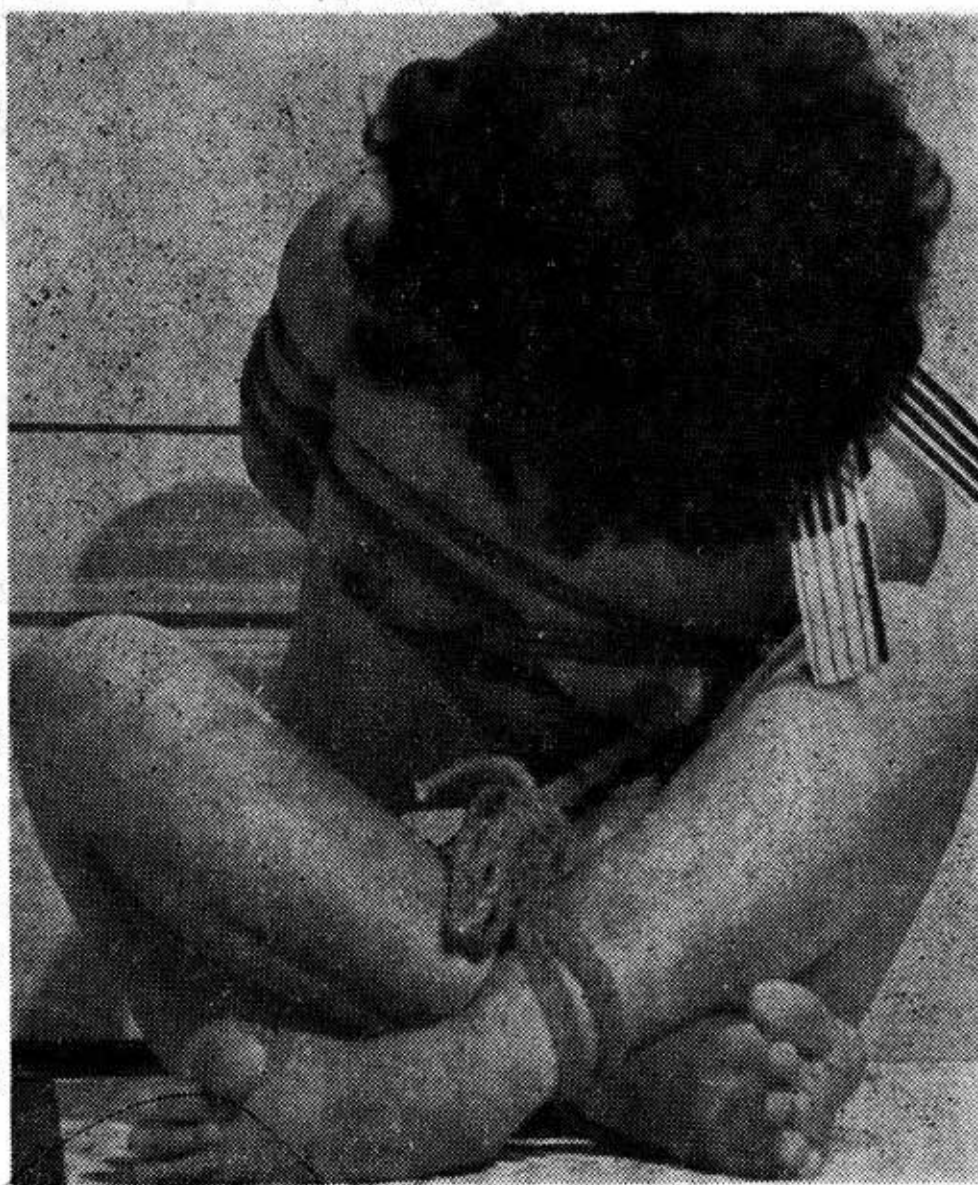
私は仰向けになった彼女の、その部分を真上から、じっと眺める。

彼女は足首をX字に縛られて曲げさせられたまま、身動きも出来ない。

縄が痛いには違いない。苦しいに違いない。

それにも増して、縛られることが大好きだという彼女の隠すべきところが、自分では隠すことが出来ない耐えがたい羞かしさ。

それが、私に見下されることによって、どのように変化してゆくのか。私は、その推移



を、じっと目を凝らして見守っていた。

彼女は、たしかに、縄に対しての反応は凄さまじい。そして、男性体験も豊富なことは何よりも、そこが示していた。

海老縛りにされたままで、陰微な個所が、華麗なばかりの変化と動きを見せている。

私に、すっかり、その秘めたる湿潤地帯の模様を見せてしまった彼女は、観念したように、いつまでも裸身を晒していた。

☆

縄を解くと、彼女の身体はもどけたゼンマイのように弛緩した。

今まで縄によって強制的に屈曲させられ、緊張させられていた四肢を伸ばして、畳の上に長々と横になってしまった。

その手首にも、足首にも、二の腕から背中にかけても、鮮やかな縄目のアトが、むごたらしいまでについている。殊に縄のコブを作った胸のあたりには、赤く色の変った窪みが、縄目そのままに残っている。

私は彼女を抱え起して、耳元でささやく。

「ええ、お約束ですもの。貴方のお気のすむようにして頂戴！」

そう言うってから、彼女は目をつむった。△私を犯すんだったら、縛ったままでして△というようなことは言わなかった。

私は彼女の裸身を抱え上げて、隣室の布団



の上に運んだ。

M女としては優等生の矢島靖子に、今更、お仕置をしなければならない理由はない。それよりも、むしろ、S研ダベリ会の会合のときの献身的な協力ぶりに、私は感謝しなければならぬのかも知れない。

そう考えると、彼女に対する、いとおしさ

が胸に、こみあげてきた。

もう一度、彼女の身体の間隔から隅までを、改めて念入りに視覚、触覚、聴覚、嗅覚を動員して「身体検査」してみたと思った。

そこに矢島靖子のM女としての謎が秘められているのかも知れない。

「ねねね、お願い。私声が大きいから、あのゴムのパンティで猿ぐつわをして……」

彼女は布団の上で仰向けになったままで、

哀願するような目なぞで言う。場合によっては、御主人様に対する口での奉仕をさせようと目論んでいた私は、予想を裏切られたような鼻白んだ気持ちになる。

裏返しになった汗まみれのゴムパンを拾ってきて、それを彼女の口へ入るだけ押し込み余ったのを口の周りにまわめて、浴衣の紐で

括りつける。彼女の口もとには、さっきから噛ましていた猿ぐつわの紐のアトが、絵具で描いたように、くっきりついている。

ゴムの猿ぐつわをすると、途端に、彼女の顔面が紅潮して、四肢が緊張してきた。

「猿ぐつわを噛ますと、下半身が充血してくる」という説を、この目で確かめてみた。私は彼女の脚にとりついていった。

真っ白い敷布の上で、小麦色の肌がピチピチと、いきのよい乱舞をみせた。猿ぐつわが、これほどまでに、彼女に活力を与えるものなのか。私は、ちらばっている縄のなかの一本を手にして、彼女に跨がるようにして後首を縛っていった。そのときの彼女の絶えい手りそうな顔。

やっぱり、矢島靖子は、縛られることが大好きな女なのだ。

私は、ゆっくりと彼女の無防備の肌に自分の手を滑らせていった。

☆

後手に縛った彼女を柱の前へつれていって坐らせ、縄尻を柱にしっかりと括りつけた。

これから彼女にやろうとする陰微な責めへの期待で、縄を持つ私の手にも自然と力がこもってきた。

私の狙っているのは、柱を使つての開股縛りだ。柱を背負つて縛っておくと、両方の脚を面白いように、挙げさせたり、ひろげさせたり出来るのだ。だから、部屋の中に柱があると、女体を責めるのに、きわめて都合なのだ。隣の部屋との襖をはずすと、二つの部屋の間に、格好の柱があらわれた。

彼女には、今日、私が鞆の底に忍ばせておいた前開き型のメンスバンドをはかせておいた。そんな奇妙な生理帯だが、それを穿かされていふことで、彼女は、両膝頭に縄を掛けて大開きにひろげさせられても、安心して、開股を甘受していたのだ。

歯と歯との間を割って猿ぐつわを噛ます。途端に、前に挙がつている彼女の足の指がきゅっと、そり返る。

私は両股を思いきり、ひろげさせておいてから、生理帯の前ボタンをはずした。

「うう、ううう……」

猿ぐつわの間から涎が溢れ、それが、唇の横から、ツツと、たれた。ねばっこい透明な液体が、あとから、あとから、糸を引いてたれてゆく。その透明な液体が胸から、お腹へかけて、皮膚の上を伝っていった。

私は布団の上に横になり、頬杖をついて、

矢島靖子の開股縛りの姿態を正面から眺めていた。彼女は、よく涎を流す女だ。

この前、S研の会合のときも、口から涎をとめどもなく流して、男性の一人から拭いてもらっていた。だが、私は拭いてやらない。

ただ、流れるのに、まかしていた。

流すのなら、いくらでも流せ。どこまで流すものか、見てやろう。

彼女は羞じらいながら、身もだえていた。

☆

翌、六月三日（月曜日）

この日も晴れていた。温暖で適度の風が快く吹いていた。

あくまでも明るくて、爽々しかった。

朝食をすまして荷物を玄関へ運んでも、まだ迎えのタクシーは来ない。

「ねえ、海岸へ行ってみない？」

彼女は私を誘う。

東京に住んでいたら、こんな綺麗な海は珍しいのだろう。そういえば、コンクリートの堤防のない海なんて、都会では、お目にかかることも出来ない。

小さいカニが湿った砂の上を走っている。

青い海の彼方で、魚が一匹、はねた。

（おわり）

「マニア通信」

浣腸の使徒・恭子の近況

村田 恭子



読んでいまして、私のことが書いてありましたので、何だか急に、お手紙を差し上げてみたくなりました。さて、筆記具を用意したのですが、いざ書く段になりました何と云おうとしたのか、日頃の思いが交錯しまして、うまく書けません。そこで最近の恭子のことや奇クのことなど書いてみることにしました。

♡

編集長さま
御機嫌いかがお過ごしでしょうか？
ほんとうに、お久しぶりに、お手紙さしあげます。つたない恭子の近況報告です。

ある事情によりまして、今月中に住居を変えることになりそうです。転居先が決まり次第、また、お手紙致しますので、それまで、お手紙等、暫くの間、お送り下さいませんよう、よろしく、お願い申し上げます。

一昨日、奇ク七月号を買いました。ゆうべ二三二ページの丸木戸侯さまの『張形考』を

恭子は相も変わらずの一人暮らしで、表面では平々凡々としていますが、内心、何となく、物足りない無意味な日々を過しているようです。時々、こんなままでいいのかな？と思ったりします。

一人プレイは、奇クをお手本に、いつも楽しんでいますが、近頃、自分自身で何だかマンネリみたいになって、以前は『浣腸』などと考えただけで身体中、ほてってしまったのに、今は、それほどのコウフンもおぼえず、色々の新手を考えて楽しんでいます。

♡

以前、小杉千恵様が書かれていました、自分のお小水を飲むということ。早速、私も自分で頂いてみましたの。

入浴中に、お風呂場で洗面器に注いで頂いたのも（お行儀悪いでしょ）想像してたのと実際とは大ちがいでした。胸をわくわくさせながら頂いたんだけど、しよっぱいのと、口の中にヘンな味がいつまでも残っていて、いやでしたわ。

こんなこと、するんじゃないかと後悔しました。お腹でもこわしたら大変だ。二度としてはならないと、つくづく思いました。

マゾの男性の方って、女性のお小水を飲みたがるようですが、あれ、どういう神経なのかしら。無理矢理飲まされるのでしたら、いざ知らず、自分から飲みたがるなんて、その心理状態、わかりません。

でも、もし、私のお小水を飲みたいって、男の方が言うのだったら、ちょっと、興味あるみたい。飲ましちゃうのかしら？
空想しているだけだったら、結構、楽しいわ。うふふふ。

♡

奇譚クラブ。最近、ますます面白くなってきました。私にとって、やはり、M女性のことや、アヌスに関することが最高です。

七月号、二三二ページの長谷田亀治様の記事『Aセックスへの勧め』すごく興味があり

ましたわ。実を云いますと、私、これと似たようなこと、してるんです。

ただ、私の場合は一日中、挿入してるのではなくて、夜、寝る時だけなのです。

写真にあるような器具、ほしいのだけど、恭子なんて、入手する方法も知らないし、いつも代用品で、すましてるんです。

私の使っているのは、アロンアルファという接着剤の外ケースなんです。長さが10センチぐらいあります。太さは2.5センチぐらいかしら。ロケット型になっていて、上のほうはつぶんでいるし、下のほうは広がっているの、すぐく調子がいいます。

でも、最近は、なれすぎてしまったせいか眠っている間に抜けてしまうんです。だから今度は、本に書いてあったように、すりこ木でも使ってみるつもりです。恭子のアヌスだったら、うんと細めのすりこ木でなくちゃ、だめでしょうね。細いのを使ってみます。

私って、なんで、こんなこと、するのかしら。いまでは、指二本ぐらいなら、ワセリンかシヤンプーの助けをかりたら、スムーズに入ってしまうんです。



ビー玉を入れたりするのも楽しいんです。ビー玉はアクセサリー店なんかでも売っています、比較的大きいのは、やはり子供がよく集まる駄菓子屋さんなんかに見受けま

す。一個十円も出すと、うずらの卵よりも大きなのが買えます。

浣腸したあとで、一個一個出すつもりで、八個ほど入れてみました。(小さなビー玉でしたら、何個入るか、わかりませんけれど、相当数、入ります) そうしたら、一回で大半が出てしまいました。

うまくゆかないものですのね。

それから、こんなこともしてみました。

ビールのあきビン二本と、ピンポン玉一個を用意します。

ピンを前後において、手前のビンの口にピンポン玉をおきます。そして、それを花びらに包んで奥のビンの口にのせるんです。

うまくのったら、今度は手前のピンを奥のビンの向うがわに、これも花びらかアヌスだけで持っていくのです。そして、そのようにして交互にピンとピンポン玉を運ぶんです。

これ、簡単なようで、実際にやってみるとすぐ難しいんです。いくら、空ビンだといっても結構重いし、逆にピンポン玉の方は、軽すぎて、一寸触れぐあいかわるくても、すぐビンからおちてしまうんです。

絶対に手を使わないときめて熱中しますとすぐ汗をかいてきますし、すこしでも燃えてきますと、ピンは、つかめなくなります。



恭子って、おかしい女でしょう。

浣腸でも、オナニーでも、何でもかでも、いつも鏡を前においてするんです。排便でも排尿でも、そうなんです。

「恥かしい」という気持ちを強めるために、いつも、こうするんです。特に排便のときなんか、恥かしさを通りこして、何だか、みじめな感じが、すぐするんです。

でも、身体の中のものが出かかって、バラや菊の花が開きはじめますと、もう、私は夢中になってしまいます。我を忘れて自分を慰めてしまいます。

恭子、一人暮らしだって、ちっとも淋しくなれません。なぜって、奇クが毎月、夢と楽しみを持ってきてくれるんですもの。

これだけの本で六〇〇円なんて、ちっとも高いとは思いません。でも、この七月号で、もう二十六冊にもなっていました。

狭い部屋での置き場所も何とか考えなければ……と思案したりします。七月号の表紙は私好みでした。

この手紙が、そちらに着く頃は、多分、この住所には居りませんので、封筒には住所は書かないでおきます。

薄い鉛筆の乱雑な書き方でごめんなさい。

かしこ

村田恭子

五月二十八日
奇譚クラブ編集長さま

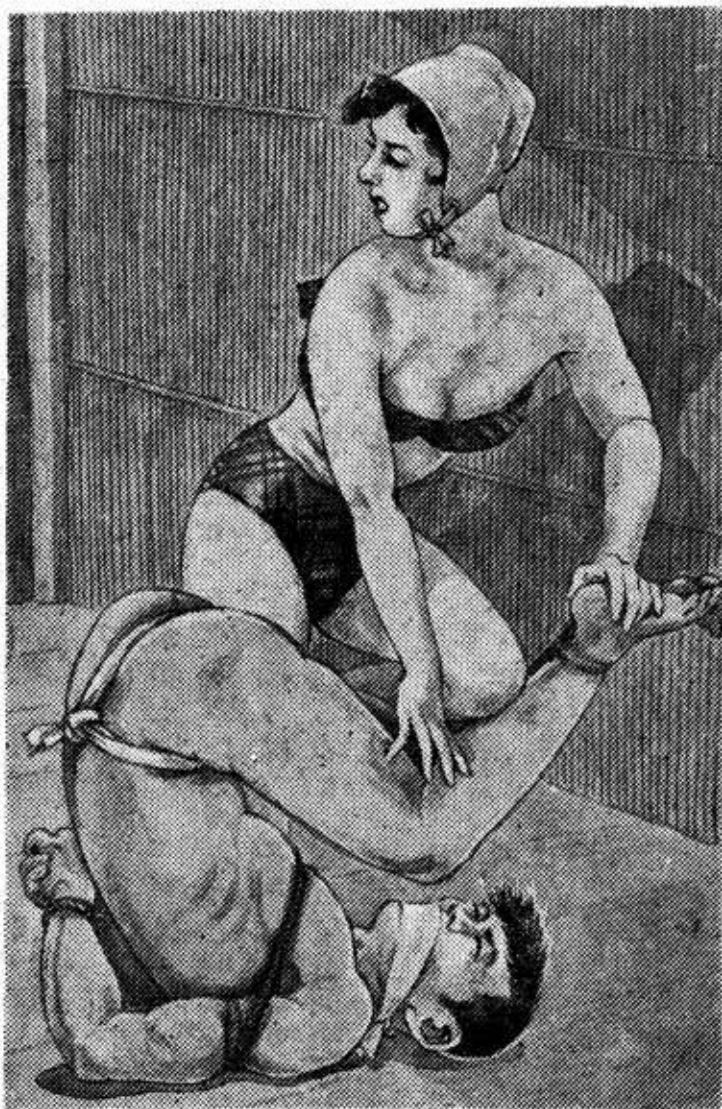
△連載▽ Mグループ △空想創作集団△ 作品

女の虜囚

(7)

△ある湯治客の話より▽

佐 治 麻 造



棒には堅牢な鉄の網が各々全面に、取り付けてある。

社会人は広い方に、囚人は狭い方に、それぞれ両側の入口から入るのだ。社会人用の方にはベンチや机等が

並べてあり、囚人用の部分は更に二米間隔程に鉄網で仕切られている。婦人看守に腰縄を取られて入って来た謙二を見て、ベンチに坐

数日後、願い出ていた早苗との面会を許された。室の三分の一程を仕切り、二尺程の間隔をあけて太い鉄棒が二列に床から天井、壁から壁までと、ずっと並べられ、更にその鉄

っていた二、三人がハッと腰を浮かせ、二重の金網越しに瞳を凝らせた。転ぶような足取りで駆け寄り、金網にしがみついた早苗の姿を認めて、謙二は思わず足を踏み出す。

「未だよ」

引き戻される腰縄が腰に喰い込んだ。腰縄が解かれ、前手錠の片手が外され、

「むこう向いて、手をうしろへ回して」

片方の手錠を握って婦人看守が命じた。

「こっちだよ」

婦人看守は後手錠の囚人の腕を掴み、五つ並んだ金網仕切りの一番端へ連れて行った。

早苗が喰い入るようなまなざしで彼を見ながら、金網にへばりつくようにして横歩きに移動する。

「言っとくけど、こっち側の金網には電気が流れてるからね。触わると痛いわよ。十分間よ、いいわね」

二重の鉄棒と二重の鉄網に隔てられて、謙

二と早苗は、お互いにヒタと見入った。鉄網を握った彼女の白い指が震えていた。隣の仕切りでは、子供を連れた男と涙声で話している女囚が声を詰まらせて切なげに身もだえしている。何か言った子供の方へにじり寄るようにした女囚が悲鳴を挙げて床に倒れ、後手錠の身をもがいて呻いた。金網に顔のあたりを触れて鋭い電撃を受けたのだ。謙二の眼前の早苗の白い咽喉が和服の襟元で波打ち、薄く口紅をつけた唇が開いて震え、そして白粉気もない頬に涙が流れては乾いて行く。

「言っとくことは、それだけだよ。子供を病氣や怪我させないようにね」

早苗の大きな黒い瞳が涙に濡れて、まばたきもしないで彼を見詰め、微かに、しかし、しっかりと、うなずいた。

隣の女囚が鳴咽の糸をひきながら連れ去られて行き、やがて謙二の背後に捕縄を持った婦人看守が靴音を床に鳴らせてやって来た。

「おしまいだよ」

囚人の腕を掴んで金網から一、二歩、引き離れた婦人看守は、後手錠の片方をガチャガチャと外した。片手に手錠をぶら下げたまま囚人は、婦人看守の方に向き直って両手を揃えた。何の表情も浮べないで、いとしい男に

手錠を嵌め、腰縄を打つ婦人看守の顔を、早苗は金網にしがみついたまま、物悲しく怨めしげに見ていた。

「無理して働かなくてもいいんだよ」

腰縄を曳かれながら謙二が振り向いて言った途端、激しいビンタが頬に鳴る。

「お黙り！ さっさと行くんだよ」

後ろ髪を引かれる思いで囚人が振り返るたびに縄尻が容赦なく腿に鳴り、息を詰めて見送る早苗の膝が、ずるずると床に落ちた。

判決言い渡しの日がやって来た。恐らく何年間かはお別れだな、と思いつつ私服に袖を通した謙二の胸は恐怖と、そして微かな期待とに高鳴った。七、八名の同囚の男女と鎖で手錠を繋ぎ合わされて裁判所に曳かれ、例によって仮監房に入れられて呼び出しを待つ。

囚人の半ば以上が曳き出されて行った仮監房の床に、じっと正座して待っていると、課される刑を、あれこれ考えて歯の根が合わない程の恐怖の念が繰り返し繰り返し謙二を襲った。額の脂汗を両掌で押し拭って吐息を洩らす彼に、隣の仮監房の男が鉄格子越しに小声で話し掛けて来た。

「お前、今日が言い渡しなんだな？」

型の崩れた粗末な背広を着たその男は、婦人看守の方を上目使いに見たまま、唇を殆ど動かさないで囁くように言う。

「俺は、今日が初公判なんだ。俺はもう口惜しくて、口惜しくて」

男の横顔を横目で見た謙二は思い出した。いつかシャワーの時に口を利き、鞭を喰って喚いていた男だった。

「残業してよ、工場からの帰りに一杯やっていい気持でアパートへ帰る途中、道ばたの草むらに女のハンドバッグが落ちてたんだ。何気なしに拾ってさ、どうしようかなと思いがら、体裁悪いもんだから上衣の下に隠すようにして持って歩いてると、後ろから二人の女が追い掛けて来たんだ。若い方の女がよ、俺を指さして、この人だと、言いやがったんだ。ちくしょう……」

男は、さも口惜しげに手を動かし、膝の上の両手の手錠をガチャガチャと鳴らせて歯ざしりした。婦人看守の鋭い視線が飛んで、男は口をつぐんだ。しばらくして男は又も話し出した。無念の思いを誰かに訴えずにはおられないのだ。

「もう一人の方の女が、俺の持ってるハンドバッグを見付けて、いきなり腕を掴んで署ま

で来いって言いやがった。買物かごみたいな大きな袋を手に掛けて、そこらの安サラーマンのおかみさんみたいな女だったけどさ、ヒョイと掴まれた腕がずんと痛んで痺れたようだったぜ。自分じゃそうも思わなかったけど、大分、酔ってたんだな。他愛なく膝をついてしまったものな。お前さんは何だ？と訊くと、婦人警官だと言うんだ。若い方の女が近くの間で乱暴されかけてさ、やっと言ったんだ。そして通り掛かった婦人刑事と一緒に、あたりを探しやがって、すぐに俺を見付けたという訳さ」

うら若い女囚が一人、肩を震わせながら連れ戻されて来て、端の方の仮監房へ、ほうり込まれ、一しきり激しく啜り泣いた。

「このハンドバッグは拾ったんだと言っても駄目なんだ。若い女は、この人に間違いないってヒステリーみたいに喚きやがるし、悪いことにはワイシャツに先刻の飲み屋の女の子の口紅がついてやがるし、俺じゃないんだから行くのは嫌だって言うし、そのおかみさんみたいな婦警の奴、袋から手錠取り出して右手に、いきなり嵌めてしまいがった。酔っ払った勢いで暴れようとしたら、手をねじ上

げられて後手錠さ。逮捕術っていうのかな。

アッという間にガチャンさ。人が集まって来やがるし、ちょっと動かしでも手首が物凄く痛いしな、どうも出来ずにおとなしくするしかなかったけど、もう情けなくて口惜しくて涙がポロポロ出たぜ。ふてくされて立ってると、いきなり横っ面を張り飛ばされてよ、肘の所を捕縄で縛って、引きずって行きやがった。町外れのあんな所を、婦人警官なんか丁度うろうろしてやがったとは何てまが悪いやなあ。その上にさ、飲み屋の女の子と、その若い女の口紅が同じ物さ。俺もまだ独り者だし、酒を喰らってたし、嫌だなしに婦女暴行並びに強奪現行犯にされちまって……ウウ、ウ……ほんとに身に覚えねえんだよ」

男は両手で顔を掩って呻くように泣いた。男の仮監房の鉄格子扉をガチャガチャと開いた。

「五十八号。どうやら泣き言は、済んだようね。ちょっと出ておいで」

ビクリと体を震わせた男は、恨めしげに婦人看守を見上げ、立ち上って、よろよろと房の外に出て哀願するように手錠の両手を腹の所で合わせた。

「何度、言ったら分るの？ お経みたいに同じ事ばかり言ってるさ。お前、本来なら第二種未決監へブチ込まれるんだよ。この国の法律は有難いことに酔っ払いに慈悲深く出来てるけどね。ホラ、口をおあけ。よだれしか垂らせないようにしてやるから」

固く固く嵌口臭を噛まされて嵌められた五十八号は、更に鉄砲手錠を背負わされて、獣のような唸り声を洩らし、苦痛の脂汗を額に見る見る浮べた。身に覚えのない濡れ衣を着せられた男が、やる方ない胸を僅かでも晴らすうとして、思わず犯した反則に対して、婦人看守の扱いは無慈悲なものだった。五十八号は更に手錠を両足首に掛けられ、足払いを喰って膝を床に落とし、痛ましい悲鳴を上げたが、婦人看守は眉一つ動かさないうで、囚人の背の手錠と足首の手錠とに捕縄を掛けて引き絞る。足首を立てて床に坐った五十八号は上体を反らせ気味に立てたまま、ビクリともしないで喘ぐだけだ。その五十八号を、婦人看守は二人がかりでズルズルと引きずって行き、外側の鉄格子の内側に背をつけさせ、仮監房の方に向けて坐らせて、捕縄を頭上の鉄棒に結んだ。くっわのような嵌口臭を噛まされた五十八号の唇の端から、よだれが垂れ、

絞るような呻き声が断続して、仮監房の中の囚人達を恐怖に、おののかせた。

「さあ、いくらでも唄うがいいよ、曳かれ者の小唄を。粗相すると舐めさせるからね」

よだれと共に訳の分らぬ声を挙げて赦しを乞う五十八号の額を、さも憎々しげに何度も小突いて鉄棒にゴツゴツ打ち当てながら、婦人看守は嘲笑するのだった。

「次は四十五号、お前だよ。話相手になってたわね」

謙二は震え上って額を床に押しつけた。

「わ、わたしは、何も。ただ聞いてただけなんです。ほんとです。お赦し下さいまし」

しかし、容赦なく引きずり出された彼は二人の婦人看守によって代る代る横面を撲られた。革スリッパのビンタは一撃毎に目の玉が飛び出る程だったが、唇に意地悪い冷笑を浮べた婦人看守は、革スリッパを両手に握って面白そうに撲り続けるのだ。

「腕が、だるくなったわ。回れ右おし」

ふらふらしながら後を向くと、もう一人の婦人看守が両手に革スリッパを持って待ち構えている。頬に火がついたように物凄く、はれ上ったのが自分でも分った。耳たぶや唇の端の皮膚が裂けて血が流れた。頬の内側も切

れて、口中に塩辛い血が溜る。その血を三度ばかり呑み込んだ頃、ようやく赦された。目もかすんでしまって、必死の思いで立っていた彼は、床に崩折れてヒューヒュー呻いた。

「分ったかい？ おかみさんには、ちょっと見せたくない顔になったわね。フッフ」

「ハ、ハイ。よく、わかりました。有難うございました」

ようやくの思いで、かすれた声を洩らした彼は、仮監房の中へ這って入った。ビンタだけで済んだのは嬉しかったが、再び椅子に掛けて、スカートの足を組む婦人看守達を見ると、どうしようとしてない怒りがこみ上げて来るのだった。

小柄な婦人看守が、背の高い男を曳いて帰って来て、謙二は入れ違いに引き出された。

「どうしたの？ これ」

小柄な婦人看守が五十八号を見て、眉をひそめた。

「何ね、いつものように泣き事を並べるもんだからね。裁判所で反則されたんじゃ……ちよっとばかり痛めつけなくちゃね」

謙二にビンタを喰わせた男顔の婦人看守が彼に腰縄を打ちながら言う。

「そうお。馬鹿ねえ、何故そんなことするの

かしら？ あら、お前もどうしたの、顔がはれ上ってるわ。ビンタされたのね」

腰縄を曳かれて行き掛ける謙二の体を、小柄な婦人看守は押えて引き留め、ハンカチで拭ってくれた。彼女の僅かばかりの憐れみが彼にとっては涙の出る程に嬉しかった。

いよいよ刑の言い渡しを受けるのだと思うと、法廷への一歩々々が、鉄丸を足に引きずるように重かった。

言い渡された判決は、求刑通り七年の懲役だった。被害者には三千日分の収入相当額の賠償金を支払うべし、との決定も、付け加えられた。

傍聴席の人々も、あらかた立ち去った法廷で、木柵に身を支えて茫然としていた謙二のそばへ、手錠をカチャカチャいわせながら婦人看守がやって来て、腕を掴んだ。

「ちよっと待って下さいよ」

ダブルの背広を着た法理士がやって来て「求刑通りとは、ちよっとひどいですな。賠償金の方は、まあ相場ですがね」

と、他人ごとみたいに謙二に言った。

「話があるのでしたら、手続してからにして頂戴」

婦人看守は法理士の襟のバッジを、いまい

ましそうに見て、そう言い、手錠を囚人の右手首に当てがった。

「ま、そう言わんでさ。お互いに手数が省けるじゃないか。ちょっと待って下さいよ」

囚人に手錠を嵌めようとする婦人看守を笑顔で制した法理士は、咳払いして続けた。

「再審を訴願して見ますかな？ 重くなることはないですよ。五年位になるかも知れませんな」

「お、お願いします。是非、頼みますよ」

謙二は飛び上るように叫んだ。

「そうですか。じゃ、これに拇印を。それから言っときますが、再審訴願中でも刑の執行は開始されることがありますよ。では」

法理士は鞆を抱えて出て行った。傍聴席で唯一人、残っていた早苗が、廷吏に促されて振り返り振り返り、しょんぼりと出て行く姿を、喰い入るように眺めながら謙二は、婦人看守に両手を差し出した。

「馬鹿だねえ、お前は」

手錠を嵌めながら婦人看守が微かな嘲りをこめて言った。

「再審を訴願したって何にもなりはしないわよ。費用がえらく、かかるだけだわ。さ、うしろを、お向き」

腰縄が固く喰い入った。

「どうなるか知らないけどね、若し未決で待たされたら損だよ。半分にしか計算して貰えないからねえ。ま、私の知ったことじゃないわ。さ、来るのよ」

その翌日、謙二は駅前の交叉点で朝から夕方迄、晒された。レンガ色の囚人褌一本の姿で、首環の前後に罪名と刑を記した大きな鉄板を吊るして、地上二米程の晒し台に、飲まず喰わずで丸一日、立たされるのだ。両手の手錠の鎖の中央には、極く短い鎖で約三貫目の鉄丸がつけられ、その鉄丸の下部には更に重い鎖がついていて、両足首を繋ぐ一尺程の鎖の中央を吊っている。手首が痛いので、直径十四、五センチはある鉄丸を、両掌で抱えていなければならないし、両足首への鎖がピンと張るので、体はどうしても前屈みになって街路を見下ろす恰好になるのだ。立っている以上、手で顔を掩うこと等は出来ない相談だった。指がだるくなり、肩がもげそうになって、鉄丸を離すと、途端に手錠の鉄環が、手首も千切れんばかりに喰い込むのだ。額に脂汗を滲ませ、喰い縛った歯の間から呻き声を洩らしながら、硬張った指で再び冷たく重

い鉄丸を抱え上げねばならない。曇った初冬の空を吹く風は、褌一本の身には少し寒かったし、街行く人々の視線は全身の肌に冷たく刺さった。彼と背中合せに立たされている若い女は、絶えず嚙り泣いては身もだえして、しょっ中、鎖の音を立てた。度重なる違反のため、遂に「晒し」のお灸をすえられる事になった彼女は、台上に登らされる時に泣き喚いたので、鞭をしたたか喰ったのだった。彼女の手錠には鉄丸がつけられていないし、足と結ぶ鎖も少し長いので、彼女は時々深く身を屈めて目や顔を指先でこすった。その時に突き出す尻が、彼の体に触れたりする。午後になると、疲れて苦しくなった。ちょっとでいいから、せめてしゃがみたいと思ったが、立っている事を命じられた囚われの身には、出来ることではなかった。そんな事をすればどこからか看守や警官が飛んで来て、衆人環視の中で鞭の雨を素肌を受けて、みじめな悲鳴を挙げることになるのだ。頭上の狭い屋根を支える鉄棒に首環を吊るすことも出来るし金具で鼻を吊るすことだって出来るのだ。晒し台の横手の低い台の上では、婦人警官が笛や手振りで、キビキビと交通整理をやっていた。制帽の下黒髪やスマートにつけたスカ

ートを、風になびかせて忙しそうな婦人警官は、晒し台上の囚人達には目もくれないようだった。大きなトラックがカーブを切って曲がり、高い運転席から男達の、みだらな嘲笑が、晒し台の女に浴びせられた。一声高く啜り上げた女囚が、堪え切れずにしゃがみ込んで、肩を震わせ顔を掩った。ジャラジャラと鳴った鎖の音を聞きつけた婦警が、やって来て、晒し台の横手に吊ってある、長い鞭を取り、振り上げながら女囚を睨み上げる。気付いた女囚は、恐怖の声を挙げて腰を浮かせたが、忽ちその肌に鞭がピシリと鳴り、悲鳴が交叉点に響き渡った。長い鞭の先端が、女囚の背後に立つ謙二の、ふくらはぎのあたりに当り、彼も身をよじって苦痛をこらえた。

夕方近くになると、立っているのが苦しくて、全身に脂汗が流れて来た。かすんで来た目を閉じると、体がふらついて、大きく開いた口からは舌を出して、ただ、喘ぐだけだった。晒し台から落ちないのが不思議な位だ。あちこちにある、晒し台から囚人達を集めて回わる緑黒色の護送車を、ボンヤリした目の隅で認めた謙二は、ヘタヘタと崩折れそうになった。

晒し台の急な階段を這うようにして降りた

囚人達は、護送車に追い込まれて這い上り、鉄扉を閉じられると共に、安堵の呻きを洩らして坐り込んだ。鉄板で囲った四角な護送車は、八名の囚人達に曳かれて走り初める。軛を装着され鞭を受けながら護送車を曳く囚人達は、何れも破廉恥罪の既決囚達で、嵌口具に歪んだ顔に、悲しみと怒りの色を浮べながら、街行く人々を怨めしそうな目で見やっていた。鞭痕がむごたらしい彼等の尻や背や腿に、長い鞭が蛇のようにのた打って鳴り、革紐をつけられた未だ新しい鼻環が左に右に引かれて鼻の形をひしゃげて変え、そして車上の婦人看守の鋭い声が飛ぶと、彼等は重い足枷の鉄環が嵌まった両足を鎖の長さ一杯に踏ん張り、赤いマークを刷り込まれた体のあちこちの筋肉を盛り上げて体を前に倒し、重い軛を曳き出すのだった。足の鎖につまずき、又は後手錠の身のバランスを失って、よろめいた囚人が、軛の痛さに呻く声が嵌口具を洩れ鉄の囲いを通して、微かに護送車の内に聞えて来る。護送車の中の男女は、あの連中に較べれば、と思いつながら、疲れ切った顔を見合わせて、薄暗い鉄の箱の中で身震いするのだった。

しかし護送車の中の男女の殆どは、打ちひ

しがれた顔に安堵の色を浮べていた。彼等は今日一日で解放されるのだ。首の札を見回しても、拘留三十日間の男が一人、いるだけだった。そして、その男だけが、手錠に鉄丸をつけられていた。謙二は、他の連中を本当に羨ましい思いで見るとのだった。彼には七年の刑が待っているのだ。腿の上に乗せて両掌で抱いた重い鉄丸の冷たい表面を指先で撫でながら、彼は鼻を啜り上げた。

翌日、彼は私服を着て曳き出され、事務室の床にひれ伏して、既決囚として扱われる旨を言い渡された。

「これから懲役囚のつもりでいなくちゃ駄目よ。労役も課するからね。監獄に較べれば楽なものよ。けど、ここにいる間は半分にしか、勘定しないからね。言っとくけど、今までのつもりでいると目から火が出るわよ。生意気だわ、再審訴願なんて……」

婦人職員は横を向いて爪の手入れをしながら、彼を見もしないで面倒臭そうにデスク越しに、そう言うのだったが、彼の腰縄を曳く小柄な婦人看守は、

「お前、よかったわねえ。ここに留められることは受理される見込みがあるということなのよ。少しでも軽くなるといいのにねえ」

と、いたわり励ましてくれるのだった。看守詰所の横手の室に連れ込まれ、その室には既に多勢の囚人達が横一列に並んで立っていた。和服とドレスの女性が一人宛、ワイシャツにズボン姿の男達が六名、計八名の男女が両手の手錠を光らせて、うなだれて立ちすくみ、室の中を恐ろしそうに盗み見している。壁際には鼻環装着用の器械が冷たく光っているし、眼前の台の上には鋼鉄や革製のおぞましい戒具が看守達によって並べられて行く。床の上には、彼等がそれに繋がれる太い鉄鎖が、鈍く光って真っ直に置かれてあった。逃れる術はないと分ってはいるものの、謙二は恐怖に喘いで立ち止まり、腰縄を持つ婦人看守に哀願のまなざしを向けるのだったが、彼女は彼の背を押し腕を扼して引き立て、列の端に立たせて腰縄を解いた。

「揃ったな」

がっしりした男の看守が鞭を手に立ち上って合図すると、囚人達の手錠が外され足許に錠前付きのズックの袋が投げ出されて行く。「着衣を除って、その袋に入れろ。はだしになるんだ」

啜り泣いてためらう女囚達も、鞭と呟声に脅かされ、最後の一枚も袋に入れて泣きじゃ

くりながら、おずおずと立ち上がり、看守達を恨めしげに見やった。袋の錠が掛けられ、囚人達は呟鳴り声のままに手を挙げ足をひろげ、そして四つ這ったり跳ねたりして身体検査を受ける。

「こ、こんなことさせなくても、何も持っている筈がないじゃありません！」

泣きながら哀訴する女囚の背に鞭が鳴り、「お黙り！ 規則よ。もっと腰を挙げて」

前後左右から体の隅々まで調べられて、謙二も全身が熱くなる思いだった。

「よし、元通りに並べ。両手を後ろで組まなか。馬鹿野郎！」

先ず女囚達から鼻環を装着されて行った。

未決生活のために少しは、やつれてはいるものの、脂の乗った豊満な体つきの三十五、六の女囚が、二人の婦人看守に両腕を掴まれて膝をかくがくさせながら、器械の所へ引きずって行かれた。

「ギューッ！ ヒューッ！」

体の要所々々を革バンドで固縛された女囚が、鼻の壁に孔をあけられて、凄まじい悲鳴を白い体全部で喚いた。ステンレスの環が通され、高周波発振器が低く唸ると、それでもう女囚の鼻には浅間しい鼻環が除る術もなく

装着され、キラリと光って、ぶら下った。収監時に短く切られていた髪が、今度は更に根元から無惨にも切られ、更に又、電気バリカンの無で回って青々と丸坊主にされる。女囚の両目から大粒の涙が止め度なく頬を流れ、絞り出すような泣き声が、咽喉と唇を震わせた。

「なかなか、いい男達じゃない？ 男性的な体つきしてるわね」

女囚の悲痛な声を平然と聞き、そしてそれを身近で見て、わななく囚人達をジロジロ眺めながら婦人看守達が話し合った。

「そりゃそうよ。あの三人の男は、船員なのよ。あれとあれは、ちょっとしたお兄さん」

「あ、密輸の連中だったわね」

「こらッ。お前、何故、動くの？ 何よ、その目付きは！」

一きわ背の高い筋骨隆々とした男の前へ、つかつかと歩み寄った若い婦人看守が、矢庭に手を挙げて激しい平手打ちを頬に喰らわせた。苦味走った彫りの深い男の顔が、さも無念そうに歪み、後ろ手に組んだ両腕が微かにビクリと動く。

書類や写真と照合された丸坊主の女囚は、額、胸、背、そして両尻にマークと番号を赤

く刷り込まれて突き飛ばされ、這うようにして列に戻った。次の女囚が生きた心地もない様子で穿孔機の方へ連れて行かれた。ほっそりとした体つきだが、胸は大きい二十五、六の女だった。

「これは七個でいいんでしょう？」と明るい弾んだ声で言いながら若い婦人看守が入って来た。クリクリした目の娘で制服の袖章は山型の筋が一条しかない。彼女が台の上にカラカラと並べた物を見て屈強な男達



イメージギャラリ―

『おみ足は唇で』

岡 かし

の顔に悲痛な色が走った。精巧な食い込み装置を内側に有する、その手錠の孫みtainな鋼鉄の環が何であるかは謙二も知っていた。

男達も次々に鼻環を装着され、体にマークングされてシュンとして行った。謙二の鼻にも遂にステンレスの環が、ぶら下がり、刷られた番号は四十五号だった。目の下、鼻の先にキラキラ光る鼻環がぶら下って揺れるのを感じると、腹の底から諦めの気持が湧いて来るのだった。

「お前は自分、ここにいるんだよ。これを嵌めてやるわね」

冷たく重い鋼鉄の首環が謙二の首に、がっしりと嵌められ、首の後ろでピンと錠の音がした。ピシッと鞭を床に鳴らして、白い手袋を嵌めた年配の婦人看守が囚人達の列を鋭く見回わして

「お前達、よくお聞き。四十五号を除く八名を私が護送して監獄へ送る。途中、反則したら特に懲罰は重いよ。嵌口臭は一応、嵌めなけれど、絶対に口を利いてはいけない。特に社会の方々に対する態度に気をお付け。口なんか利いたら体中の脂を全部、絞り上げてやるからね。鼻環がぶら下ってる身だという事を忘れなさいのよ」

年配の婦人看守が端の女囚の前に立って、威圧するように睨みつけた。女囚の膝が床にガクリと落ち、尻が踵について額が床に、すりつけられた。

「おとなしく致しますから、お慈悲を……」

「フン。それで？」

「ハイ、お手数かけて申し訳ございません。」

監、監獄へ……連れて行って下さいまし。お願いします。ヒー！」

身をよじる女囚の声は泣き声になった。

「姓名、年令、それと罪名と刑を、お云い」

「ハ、ハイ。池中淳子、三十七才。関税法違反、公務執行妨害罪……ヒ、ヒー 懲役三年六カ月でございます」

「職業は何してたの？」

「ハイ。あの、バーのマダムをやっておりますした」

「護送中の番号を言ってごらん」

「ハイ、三七の一号でございます」

女囚の背後に注射器を持って立っていた看護婦が、尻に三本の注射を立て続けに、射った。ノイロンとニヒロンと、そして生理中絶剤だ。台上の革製褌バンドを掴んだ婦人看守が看護婦と入れ替って背後に立ち、女囚の腰を蹴って立たせた。縦のバンドの中央の金具

には、既に護送用の頑丈な手錠が取り付けられてある。年配の婦人看守は隣の、ほっそりした女囚の前に立ち、女囚は崩折れるようにひれ伏した。女囚の名は穴淵波瑠子、二十四才。背任罪で懲役四年だ。

「ファッション・モデルをしていました。」

デザインを盗んだんです。自動車が欲しくて……つい出来心で。お、おとなしく致しますから鞭だけは当てないで下さいまし」

床にしがみついて哀願する彼女のくびれた腰のあたりには、二、三条の鞭痕が痛々しく残っていた。

「ヒーッ！ ウ、ウッ！」

豊かな腰に褌バンドをきつく締め上げられた元マダムの女囚が身もだえして呻いた。

「す、すこし、ゆるめて下さいまし」

「何言ってるのさ。お前が太り過ぎてるんだよ」

カチッと褌バンドの錠が鳴った。

「次に手よ。こっち、お向き。もっと手を下げて。もっと、もっと」

縦バンドの中央に取り付けられた手錠が女囚の両手首にガチッ、ガチッと嵌められて、女囚は両腕を揃えて下に伸ばし切ったまま、前に屈めた上体を伸ばすことが出来なくなっ

た。三七の二号女囚の細くくびれた腰にも、容赦なく革の褌バンドが緊め上げられ、手錠の痕が痛々しい、細いけれども、ふっくらとした両手首に鋼鉄の環が、両腿の間で喰い込む。両掌を夾み込んでしまつて合わせる事が出来ない両足を切なげに動かして、彼女は手錠の鉄環を取り付けた金具をガチャガチャと鳴らし、上体は屈めたまま、顔だけを仰向いて喘いだ。鼻環がキラリと光る。手錠を取り付けた錠金具は、縦バンドの裏側にも少し突起しているのだ。謙二を曳いて来た小柄な婦人看守と、目をクリクリさせた頬の赤い婦人看守とが、白手袋をはめた手に台上の小さな錠を分けて持ち、屈強な男囚達の両端に立った。

「可哀想だけど……」

小柄な婦人看守は謙二の前に立って憐れむように呟いて俯向き錠をカチリと鳴らせた。

後手に組んだ彼の両腕が思わず動いたが、既に装着された後だった。云いようなない戦慄が全身を貫き走った。

「ウ、ウッ！」

向うの端で、逞しい体格の男が悲痛にわなないて呻き、眼前の婦人看守の頭を見下ろしてポロポロと声もなく哭いた。

「辛いだろうけど仕方ないわね、懲役囚なんだから。考えないようにすることだわ」

小柄な婦人看守はそう言って次の囚人の前に立った。白手袋が素早く動くと、もうカチツと錠が鳴っていた。その男はブルツと、わなないて、オイオイ泣き出した。

「うるさいよ」

生白い彼の背にピシッと革鞭が鳴る。

「そ、それだけは……か、かんべんしておくんなさいよ。お、お慈悲だから」

後ろ手に組んでいた逞しい両腕を解いて、泣くように喚きながら婦人看守の手を払いのけようとした未装着の男が、続け様の鞭を受けて打ちのめされ、床にしがみついて悲鳴と共に手足を、ばたつかせた。如何に哀願したとて所詮、無駄なことだった。年配の婦人看守が点呼を続けながら、今、装着した錠を熟練した目で点検して行った。環の内側にある食い込み装置は、数ミリ動かしただけで皮膚を鋭く夾み込んでビクとも動かなくなる仕掛けだ。二人の男の看守はニヤニヤしながら眺めていた。二本の痛い注射を尻に射たれた謙二は痺バンドを思い切り締め上げられた。身を屈めて下へ伸ばした両手に、足の間にぶら下った手錠を掛けられた。両足首には、長さ

五十センチ程の鎖で繋ぎ合わせた足錠が嵌められ、縦バンドの中央の金具から垂れた鎖に足鎖の中央を吊られた。他の八名の男女の囚人は、床の鉄鎖を跨いで縦一列に立たされ、一米半程の間隔で縦バンドの金具に鎖を結合されて行った。看守が鎖を持ち上げる毎にジャジャラと音がする。

「こ、こんな……歩けやしないわ、重くて」

ほっそりした女囚が、股間を通る鉄鎖を両手で握り、体をふらつかせて泣声を挙げた。

「何だって！ 鞭が欲しいの？ 鼻環にロープをつけて引っ張ってやろうか？」

無慈悲な婦人看守の言葉に、女囚は息を呑んで肩を震わせた。

「ホラ、未だこういうものをつけて貰えるんだよ」

恰好よく伸びた女囚の両足首に足錠が嵌められ、縦バンドの金具に吊られた。鉄鎖の重量が掛かって腰骨が痛いのか、女囚は肘で腰バンドをしきりとこすって、身もだえした。

「こんなにしなくても……逃げられはしませんの。このままで街なかを歩かされるんですの？ 私が先頭だなんて……」

先頭に繋がれた豊満な体の女囚が悲しげに呟いて鞭を受け、連鎖を揺すってヒューヒュー喚

いた。すぐ後ろの女囚が、重い連鎖の動揺を腰に受けて、よろめく。揺れる鎖が女囚の腿の内側に当たって音を立てた。二名の女囚の後ろに六名の男囚達が繋がれた。

「その恰好を世間の人達に、よく見て頂くんだね。さあ、袋を持って」

連鎖が床に落ちてガラガラと鳴り、囚人達是不自由極まる両手で袋を持ち上げた。連鎖が邪魔になって袋を取り落した若い女囚の腿に鞭が鳴り、凄まじい悲鳴が低い天井と灰色の壁に響き渡った。

「お前が一番、楽だね。けど、そうは行かないわよ」

先頭の女囚の鼻環にカチリと金具が鳴ってロープがつけられ、それを頬の赤い婦人看守が握って二、三度、ぐいぐいと引っ張った。

「連鎖を地面にさわらせると鞭を覚悟おし」
「しっかり、お歩きよ。破廉恥罪の連中に較べりゃ天国のようなもんじゃないの。植野駅まで車に乗せてやるんだし」

股手錠、珠数つなぎで曳かれて行く八名の囚人の頬には多かれ少かれ涙が流れていた。

「四十五号。お前は、こっちへおいで」

小柄な婦人看守は、そう言いながら捕縄を取り出して、当然のように彼の鼻環に結んで

引っ張った。みじめさがこみ上げて来て、彼は思わず頭を振ったが、鼻環から婦人看守の手に伸びる捕縄を、どうする術もない。足の鎖に二度、三度、つまずいて倒れながら、彼は看守詰所に曳かれて行った。広い部屋の床はピカピカに磨かれ、テーブルやソファや椅子があり、仕切りの向うには男女別の更衣室や寝室があるし、更に炊事室や浴室までも設備してある。

「ここで坐ってなさい。再審願中の女囚が一人、いるのよ。ちょいちょい見て知ってるでしょ。そのうち、労役から帰って来るわ。当分、一緒に働くのね」

小柄な婦人看守はそう言って鼻縄を解き、入口を入った所の壁際に彼を坐らせ、壁の鉄環についた鎖の先の金具を鼻環にカチリと嵌めて、近くのソファに深々と腰を下ろしてスカートの足を高々と組んだ。

「おや、水戸君。護送じゃなかったの？」
彼女と同年配の男の看守が制帽をテーブルに放り出して彼女と向き合って坐った。

「ええ、私は今度の火曜よ。けど護送は嫌ねえ。囚人達の顔を見てたら時々可哀想になっちゃって」

「へえ！ しかし、こう定員が減らされちゃ

護送も重荷だよ。先週なんか七名、送るのに、たった二人さ。第二種の方じゃ定員は、たっぷりらしいぜ」

「そうお。あんたサボってちゃ駄目じゃないの。私は十時まで空いてるのよ。十時に裁判所へ手伝いに行きゃいいんだから」

「ちえっ、じゃ一回りして来るかな。お茶が飲みたいんだけど。未だ十四号は戻ってないか。彼奴も使役囚なんだろう？」

男の看守は謙二を顎でしゃくって言った。

「あれは駄目よ。今連れて来たばかりの新米だもの、無理ね。文句を言っただけで、勤務しなさいよ。昨夜、又、麻雀したんでしょ」

「ああ、何しろ給料が給料なんだからなあ」

彼は、あくびをしながら立ち上った。

「何をモゾモゾしてるんだい？ ちゃんと坐ってないと御婦人方は、きついぜ。ハハハ」
開いた両膝の間の奥深く両手を差し入れ、足錠の痛さに足首を立てて坐り難さに身動きしている謙二の頭を靴の先で蹴飛ばして、男の看守は出て行った。

「坐れないの？」
時計を見やって煙草に火をつけた婦人看守は、そんな謙二の恰好を眺めて、おかしように頬を綻ばせて白い歯を見せた。そして立ち

上ってやって来ると、鼻鎖を外し囚人を立たせて手錠を外してやるのだった。彼女のくわえた煙草の香りが流れて、囚人は気が遠くなる程、煙草が欲しくなった。

「この手錠はね、いつもここについているのよ。そして、嵌めるのは自分でやるの。足首を下ろして、ちゃんと、お座り。痛くても馴れなきゃ駄目よ」

彼女は鍵をポケットへ納いながら、きびしい声で言うのだった。謙二が足首の痛さに呻きながら、それでも言われた通りに座っていると、鎖の音がして、女囚十四号が背の高い婦人看守に追われて戻って来た。謙二と全く同じような鎖錠を施された娘で、年は二十才になったかならないかといった所の、ちょっとしたグラマーだった。外されている手錠が足の間でカチャカチャと揺れていた。労役の激しさに全身、汗に濡れた若い女囚は、謙二を見て黒い目をパチパチさせ、さも疲れ切った様子で彼の横に並んで座りかけたが、忽ち弾かれたように立ち上ると、再び足鎖を曳きずって、炊事室へ入って行った。熱い湯を持って出て来ると、片隅の台の上でお茶を淹れて、二人の婦人看守のテーブルへ捧げて差し出す。茶碗を取り上げながら背の高い婦人看

守が顎をしゃくるのを、悲しそうに見た女囚は、身を屈めて器用に自分の両手に手錠を嵌め、謙二の横に座って溜息を洩らした。

「十四号。お前も少し楽になるわよ。四十五号が来たからね」

お茶を啜りながら婦人看守が言った。

「手錠、嵌めさせたの。可哀想じゃないの」

水戸婦人看守が言ったが、

「なにね、よく働いたから少し休ませてやろうと思ってさ」

「そう。私、もう行かなくちゃ」

立ち上った水戸婦人看守は、腰の革サックから手錠を取り出してキリキリと環を回して調べると、再びサックに納め、鏡に向って髪と制帽を直し、スカートを翻して出て行ってしまった。残った婦人看守は、やおら立ち上って謙二の頭上に立った。身を固くして緊張する彼に、

「お立ち。手錠を嵌めて」

と冷たい声が浴びせられる。

観念して立ち上った謙二は、よろめく足を踏みしめながら、自分で手錠を嵌めようとして、もたついた。

「馬鹿だね。足を、もっと開くのよ。そうそう。不器用な男ねえ。どうやら、嵌まったわ

ね。ちょっと手を動かしてごらん。いいわ。嵌めたら、お座りよ。又もたまして……フフ」

口惜しさがこみ上げて来たが、もはやこの身は受刑者、相手の婦人は刑務官なのだ。所詮、絶対服従があるのみだった。意地悪そうな顔をした背の高い婦人看守は、労役に服する上の心得等を、嘲笑を混じえて彼に教えるのだった。

「分ったかい。細かい事は、その都度、体に教えてやるわ。あ、もう運動させてやる時間ね。ほんとに面倒臭いっただけやしな」
背の高い婦人看守は煙草の火を謙二の肩のあたりで揉み消し、彼は悲鳴を挙げて身をよじった。

「口惜しかったら反抗して見る？ フフ」
婦人看守は嘲り笑いながら壁の鎖を、それぞれ囚人の鼻環に繋いで出て行った。

「あーあ、ちょっと休ませてくれるのね」
女囚十四号が空の室内を見回して、正座を少し崩しながら呟いた。

「あなた、先刻は間違えないで、よかったわねえ」

体をくねらせて背を壁にすりつけながら、

女囚が謙二に話し掛けた。痒い所を、うまくすりつけられないのか、鎖をガチャつかせて一しきり身を、もだえ続ける。

「手錠のことよ。両手の拇指の方が内側に向き合うように嵌めなきゃ、いけないのよ。それからねえ、あ、ちょっと見せて御覧」

女囚は謙二の手錠を覗き込んだ。

「あら、やはり間違ってるわね。ホラ、鍵穴が下側になってるわ、両方共……」

謙二はビクツとして、腿の間で手錠をガチャガチャ鳴らした。

「もういくら、もがいたって駄目よ。鍵穴が下向いてると外し難いでしょ。だから……」

「けど、そんなことまで注意しなくちゃいけないのかい？ 自分で嵌めさせといて、そんなことまで……」

「だって仕方ないわよ。あなた、脂を絞られるわ。あの背の高い奴、西川と云う女だけどさ、とっても意地が悪いのよ。私なんか知らなかったのヒーヒーいわされたわ。どこがいけないのか教えてもくれないで懲罰にかけのよ。男の看守が、やっと教えてくれたけど、口惜しかったわ。あなたも、もう仕方ないから謝ってしまうことね。惜しいけど、教えといたげるわ。ああ、痒い！ 治りかけた

鞭痕って、ほんとに痒くて堪まらないわね」
女囚十四号の娘は、今度は尻から腿のあたりを壁にこすりつけながら目をつぶって、顔をしかめた。

「あなたも、先ず一カ月位は股ずれで泣くわね。所で何をしたの？ 刑は、どの位？」

膝のあたりに残る鞭痕の端を舌で舐めながら、女囚が訊ねた。

「そうお。やはり人間を殺すと、大変なのねえ。七年とは、お気の毒ね。私？ 私も人を殺したの。ウウン、奴隷男よ、私の家の。ちよっと虫の居所が悪かったもんだから、窄衣かけて吊るしてやったのよ。そしたら、彼氏から電話が掛かって来て、そのまま、忘れちゃったの。運悪く皆、出払ってて家も広いし誰も気がつかなかったのよ。思い出した時には、気味の悪い汁を出して、死んじゃったわ。二時間足らずの間に死んでしまうのねえあんなにしとくと」

女囚は舌をペロリと出して肩をすくめた。
「あり勝ちなことだと思うのよ。もっとひどい話、沢山、聞いてるわ。けど又、運が悪いことに、二、三日して奴隷管理所の定期検査があったの。それに近所の口うるさい連中が何だかだと告げ口するし……始末書か、せい

ぜい罰金で済むと思って、多寡をくくってたら、検事局へ呼び出されて収監状をつきつけられて手錠をガチャンよ。お父様が落選してなけりゃ訳なかったのにさ。けど奴隷だから殺人罪じゃないのよ。行刑妨害罪とかいってたわ。四年だって」

女囚は溜息をついて肩を落した。

「まあ、どうせ執行猶予だろうから、いい薬になるって言ってさ、お父様は保釈手続も取って下さらなかったわ。けど実刑はひどいというので再審訴願させて貰ったのよ。私も、ずい分と派手に遊んで御心配かけたけど、こんな目に遭ってると、すっかり反省したわ」
女囚は少し涙ぐんで、そう言うのだった。
「ほんとに辛いわ。こんなに辛い所も世の中にあるのねえ。まるで地獄だわ。判決を受けてから、もう半年近くになるのよ。出して欲しいわ」

上体を深く折り曲げて辛うじて目頭を肘の外側で押えた女囚十四号の娘は啜り泣いた。
むちりした乳房が腿に押しつけられて青い静脈を見せていた。

カツ、カツと響く靴音に女囚は飛び上って正座し、謙二も身を硬くした。
「さあ、働くんだよ」

再びやって来た背の高い西川看守は、そう言って囚人達の鼻の鎖を解いた。

「十四号は洗濯と靴磨だよ」

手錠を外して貰った女囚は、足鎖を鳴らして立ち去った。

「フン、煙草の火の痕を、舐めて貰ったんだね。ボヤボヤしないで立つんだよ。今度は鼻の穴へ突っ込んでやろうか？」

西川看守の指先の鍵を見た謙二は、立ちかけた腰を落して額を床にすりつけた。

「お、お赦し下さいまし」

「何をなのさ？ フッフ、十四号とキスでもしたっていうの？ その位、いいんだよ。お前が苦しくて痛いだけだものね」

「い、いいえ、その、手錠の嵌め方が、この通り反対に嵌めてしまったので……今度から気をつけますから、お赦し下さいまし」

彼は両膝を精一杯に開いて両手首の手錠を西川看守に示し、哀願した。

「フン、成程。分ってるのなら何故、ちゃんと嵌めないのさ。それとも私に這いつくばって外させようという気なの？」

西川看守の右手の革鞭がゆるやかに振られ意地悪い目で見下され囚人は震え上った。
「あとで絞ってやるからね。さ、お行き」

囚人は廊下に蹴り出された。

「そっぢゃないよ、馬鹿ね！」

ひかがみから内腿にかけて鞭を喰った囚人は、床にしがみついて身をよじる。

「再審を訴願するなんて、生意気だわ」

追い立てられる囚人の無抵抗の全身に、絶え間なく革鞭の雨が注ぎ、薄暗い通路に悲鳴が響いた。全身の鞭痕の痛さに彼は喘いだは歯を喰い縛り、身をよじっては呻いて、監視台の下で、うなだれて立ちすくんだ。

「自分で手錠を外すんだよ。顔をお挙げ」

西川看守は彼の鼻環を指先に引っ掛けて、やにわに引っ張り上げた。

「ウッーヒー」

千切れそうな痛みが鼻から頭の芯に抜けて彼は粒の涙をこぼしながら悲鳴を挙げた。

婦人看守の指先から脱れようと、思わず頭を振る彼の両頬に、目の玉が飛び出る程の往復ビンタが加えられ、そして何かが鼻環にピッチリと結びつけられた。手錠の鍵だ。

「そら、鍵は鼻の先にあるわよ。さっさと自分で、お外し。労役があるんだからね」

彼女は監視台の同僚と笑い合って、煙草に火をつけるのだった。

「未だ外せないの？」

と、同僚の婦人看守と監視台の上下で談笑していた西川看守が、もがいている彼に意地悪い冷笑を浴びせた。如何に上体を曲げて見た所で、鼻環につけられた鍵に指先が届かないのだ。額に脂汗を浮べた彼は、しゃがみ込んで両腿の間に顔を突っ込み、手錠をガチャガチャ鳴らしながら、もがいていた。きつく締め上げられている革褌の匂いが、汗の臭いと混じって彼の鼻先に立ちこもり、もがくたびに締まって来る手錠にすれて、両手首の皮膚が剥げ、骨がずきずき痛む。みじめな思いだった。必死の努力で顔を下げて見ても、股革の中央に手錠で繋がれた指先は、鼻先に届きはしなかった。

「早くしないと労役をさせて貰えないじゃないの。それとも何かい、労役をしたくないということなの？」

又しても背に長々と加えられた革鞭の一撃に、囚人は苦痛の絶叫を挙げて身をよじった途端に、ぶざまな恰好で仰向けに倒れる。紙紐で結びつけただけの小さな鍵が、囚人の努力を嘲るように鼻の先で揺れた。

「何よ、そのざまは！ 丸太棒みたいに寝そべったりして。命令に従わなきゃ懲罰が重くなるだけよ」

汗みずくの胸のあたりに鞭が鳴り、囚人は床の上を転げ回って、もがきにもがき、何度も起きかかっては倒れた末、ようやく上体を起こして胸で喘いだ。両尻を床につけていると、真下の金具が堪まらなく痛く、床に押しつけられた両手首が千切れるようだった。

「とても、とても自分では外せません。お赦し下さいまし」

フウフウ喘ぎながら囚人は哀願して婦人看守を、おそろおそろ見上げ、大きく開いた両膝で立って、痺れた両手を腿の間で精一杯に合せて憐れみを乞うた。

「何言ってるの！ 馬鹿な奴ね、ほんとに」

振り下ろされる鞭を思わず避けようと、身をくねらせた囚人は、疲れ果てた体のバランスを失い、更に無慈悲な足蹴を喰って再び倒れ、コンクリートの床の硬さに呻く。受刑者とは、こんなにも、みじめなものなのか、と彼は床をもがき回りながら、涙を流して泣いた。足錠の鎖が、そしてそれを吊る両足の間の鎖がジャラジャラと床に鳴り、足にまつわった。

鞭を振る西川看守の姿が腹の底から恨めしかった。

(つづく)

朧月夜の薔薇奴

城崎 狂介



(1)

夜釣りに行く漁船のエンジンの音が遠のくと、けだるい春の夜の静寂が残った。

奥の離れは、石油ストーブが、つけっ放しになっていたので、うだるような暑さだった。

大作は、猿又一丁の半裸になって、ビールを、ぐいぐいあおりながら土産に買ってきた鮎甚の佃煮を、いぎたなく口に、はこんだ。

「さすがに、このハマグリは、粒よりだな。くうかい？」

わり箸の先で、ちよいとつまんで、玲子の鼻先まで運んできたが「のどがかわくから、いい」

玲子は、気弱に拒んだ。

脇息に頭をあずけて、菱形に組んだ大作の膝の間に仰臥している玲子は、淡紅色の鹿の子絞りの長襦袢の胸をはだけて、腕形に盛りあがった双乳を露出したまま、華やかなマネキン人形のように身じろぎ一つしなかった。

ひと月ぶりに、煙草くさい大作の体臭をかき、いかつい膝の上でこうやってひき据えられて、凌辱と蹂躪を渴仰しつづけた玲子の念願が、ようやく果たされようとしているのに、玲子の心は、なぜか燃えあがらなかった。身体の芯に、妙に冷え冷えとしたものが、わだかまり、心地よく酔うのを許さないのだ。

——あの女のせいだわ……。

玲子の脳裏には、二見由紀の、いかにも健康そうな美貌が、ちらついて、妖しい疑惑をかきたてる。

今日も、大作は独りでは来なかった。なんでも明日の日曜日に、厚生省のえらい役人を招いてゴルフをやるとかで、秘書課長やら営業部長やら、ぞろぞろお供を、ひっぱって来た。これは毎度のことだから、それほど気にもならないが、大作にぴったり寄り添うようにしてベンツからおりてきた、若草色のスーツを身にまとった仔鹿のように愛くるしい女性を見た時、玲子の血は妖しく騒いだ。

新人秘書、二見由紀の登場である——。

「こら、なにを、ぼけーっとしとる？」

ぞくつと、冷感が胸を、えぐった。アイスボックスの氷塊を、大作が乳頭におしつけたのである。

「あっ、ううん……いじわる！」

玲子は、反射的に微笑を返した。しかし、その笑みも、すぐに凝固して、眉根に皺がよった。大作が、鋭い氷片で、感じやすい尖頭を、ついにばみだしたからだ。

「恋人のことでも、おもいだしたのか、ああん？　くそ、虫もころさぬ顔をして、浮気しやがったな」

「パパこそ、なによ。あたしを、ひと月も放りだして、さんざ浮気したくせに……」

「奴隷の分際で王様の浮気に口出しするな」

大作は、にやっと相好をくずして、氷片をつまみあげた。体温でとけだした水滴が、たらたらと、したたりおち、すべすべの円丘をつたって、虫のように這いおりて行った。

「あの子、だれなの？　今日、つれてきた子も、浮気の相手？」

玲子は脇息から頭を浮かして、大作の表情を読みとろうとした。

「はっはっは、そんなに気になるか」

「気になるわよ。なにさ、あたしにみせつけようとして、あんな小便可さい子をつれてきたりしてさ。パパの趣味も、おちたものね」

「ばか！　二見君は、ちゃんと薬大をとる。年だって、おまえより、二つ上だ」

「だったら、そうとうおくね。色気なんかありやしない」

玲子は、悪口がとまらなくなった。

たしかに薬大をでているとすると、玲子よりも年上である。しかし、玲子を脅かしたのは、由紀のぴちぴちした若さだ。営業部長の滝内の卑猥な冗談に頬を染め、やがて喉を反らせて笑いころげる天真爛漫さを、玲子はすでに、もちあわせていなかった。

「だけど、ヌードにしたら、そうとうなもんだぜ。尻なんか、ぷり

んと突き出てやがる」

「見たの？」

「……だろうと、想像したまでさ」

「やめてよね。あんな子と浮気するの、やめて……」

玲子は急に弱気になって、大作の膝の上で身をひるがえすと、脇息からはずした顔を、毛むくじゃらの男の臍のあたりまで、もぐりこませて、狂おしく唇をおしあてた。そのはずみに長襦袢の袖からはみだした白い腕が、手首に革手錠をからませたまま宙を掻いた。「本縄で縛ってもいいわ。きつく折檻してちょうだい。今晚、めちやくちゃんにしてくれなきゃ、いや！」

玲子は、別人のように悶えた。

「こら、くすぐったい！ やめろ！」

と、大作に黒髪をつかまれて、ひき据えられても、むずかるように鼻をならして男の腹面に接吻の雨をふらせ、ついには猿又のゴムに齒をかけて、ひきずりおろそうとあがいた。性奴の狂態である。

「ばか！ おとなしくせい！」

大作は襦袢の上から豊満な尻朶を打った。ぱちんと肉をはじく衝撃に、一瞬、玲子の意識は朧ろになった。あまりにも甘美な陶醉。ひねもす、あこがれつづけた拷苦の訪れ。

「ああ、もっと、もっと、ぶって！」

玲子は、無意識のうちに俯伏せになって、尻を高くかかげた。責めへの渴望は、臀丘を真っ紅に染めあげるまで、打って打って、打ちさえられなければ、とても鎮まりそうもなかった。

「ちよっ、すこし甘やかすと、すぐこれだ」

大作は、あきれ顔で、玲子の軀を脇息の上に這わせた。腹の下に脇息の背がかかると、ぐいと前のめりになって、玲子の顔は畳に届いた。後手錠の腕を宙に伸ばし、膝立ちになった脚部は、平衡を求めて左右に割れ、双臀を屹立させた姿勢で、玲子は静止した。

「ぶって……はやく！」

玲子は、呻いた。畳を掃いた黒髪の下で、無防備の臀丘を襲う刺激的な痛苦を待望しながら、玲子は息をため、息を吐いた。胸苦し瞬間である。

大作の指は、長襦袢の裾にかかって、羞恥の極点を露出させようとしていた。胫にからまり、太腿にまつわる滑らかな布片は、次第にたくしあげられて、生ぬるい微風を送りこんだ。

「……あ、な、たあ！」

くつきりと外気に晒された、しみ一つない雪肌を、ざらついた大作の掌が撫でまわすおどましさに、玲子の舌はもつれ、一語ずつ息をのんだ。尻朶にかかった指さきに、無遠慮な力がこもると、張りつめていた膝の力がぬけおちて、なすがままに身をゆだねた。

「こんなにかわいいヒップちゃんを、いじめる手はないさ」

大作は呟いた。その語調は初々しく、少年じみていた。

「あっ、あっ、ううん……！」

含羞をこめた指の腹が、やさしくたどりはじめると、脇息におしあてた腹面を、ねじこむようにおののかせながら玲子は哭き、そして笑った。

「うっ、るるう……！」

しかし、その熱しかった極点に、突然、大作の唇がへばりつき、生ぬるい舌尖のかわりに、鋭利な硬片がおしあてられると、異様な衝撃に、玲子は身をのけぞらせた。口に含んだ氷塊で、玩弄しはじめたのだ。

みるみるうちに、臀丘一面に、鳥肌がたった――。

(2)

四月の夜風は、冷たかった。

木立をかすめてあふれおちる月光は、どんよりと黄ばんで、菜種色だった。

大作は、どてらの衿をたてて、ずんずん前を行った。

白い裸身をむきだしにして裸足で後を追う玲子にとって、しきつめた落葉は痛かった。あいかわらず、後手錠は外ずされてなかった。ので、歩きたびにゆすりあげる重い乳房も、下腹部も、全く無防備

のままに晒けだされ、中天の月のほか、だれも見えていないと知りながらも、ついつい本能的にかばって、前のめりになったので、よい歩く速度が遅くなった。

「あなたあ……」

玲子は、あたりをはばかった低い声で、大作を呼びとめた。しかし、ふりむきもしないで行ってしまう男の背は、冷酷だった。

——ううん、いじわる！

玲子は、しかたなしに、あたりに生い茂る、やぶの小枝に、脾腹を突かれぬように用心しながら、大作の足跡をたどった。

こうして深夜の引き廻し刑にあったのも、玲子が剃毛をねがったからだ。鼠蹊部を彩った大輪の薔薇を一刻も早く大作の眼前に晒したかったのも二見由紀に対する対抗意識だったからかもしれない。

「おれの薔薇奴は、おまえ一人さ」

膝の上にあらためて抱きあげられ、渴いた喉につめたいビールを流しこまれながら、大作に耳元でささやかれると、神経が、びりびり赤裸にされたように疼き、不逞な遮蔽物が、がむしゃらに、うとましくなった。

「あなた……剃って！」

玲子は、夢中でささやかえした。

「うむ、明日な……」

「いやよ、今晚……」

「まあ、そうあわてるな。こいつは、おれの薔薇ちゃんだから、後でゆっくり、かわいがってやるさ」

大作は、おもわせぶりな手つきで、玲子の下腹部をまさぐり、尻に淫靡な笑いを、にじませた。

「彫辰の奴に磨きかたを習ってきたよ。こいつの肥料は、ホルモンだそう。へっ、へ……ホルモン次第で色艶もかわるんだそう」

「剃ってから磨いたって、いいんでしょ」

「そらまあ、かわるまいがね」

「そんなら、磨くまえに、一目見てほしいわ。あたしの薔薇ったらひと月も放りっぱなしで……きつと、しおれてるわ」

冗談めかして笑うつもりが、しまいには涙声になった。きれいさっぱり奴隷の刻印を晒けだし、まどうことなく大作のたった一匹の愛奴だということを確認させるまでは、愛撫の手をうけいれることができない……性奴の悲しい心意気だった。

玲子たちが目指す猿が湯という共同風呂は、まだまだ遠かった。剃毛のために、全裸のまま山道を引き廻わされ、もしかすると村人のだれかが入浴に来ないとも限らない、谷あい共同風呂まででかけて行くアイデアは、ぞくぞくするようなスリルがあって薔薇奴の玲子を興奮させた。

しかし、山荘の裏木戸をでた瞬間から、大作の態度が妙によそよそしくなると、玲子をおいてけぼりにしそうないきおいで、どんどん歩きだされると、玲子はあたらしい不安におびえた。快楽の時を奪われて、大作は子供っぽく、すねているのだろうか。剃毛して奴隷の刻印を確認する儀式など、どうでもよかったのかもしれない。つねに玲子に背を向けつつける大作に、よりすがり、許しを乞い、愛の証をみせてほしいと、ねがいつつづけたのに一顧だに与えぬ冷酷さで、男の影は、へだたって行くばかり……。

「あなたったら！」

玲子はもう一度、かぼそく叫んだ。

そして、後手錠に拘束された腕を、背後で背びれのように、はためかし、一匹の清浄な人魚になって、豊かにふりそぐ月光の海を泳いだ。おもうさま、胸を張って、銀色に輝く木立のすき間を、走りぬけた。

もうじき、大作に追いつこうとした時、アスファルト舗装の街道に、でてしまった。

大作は、ゆうゆうと街道を横ぎり、もっと奥の木立のなかにかくれたが、玲子も後につづこうとして、一瞬、たじろいだ。自動車のヘッドライトが、かっと玲子の全身を射たのである。

凄まじい尖光をくぐりぬけて、あられない肢体を、おしかくすように、街道の向う側のやぶかげに、しゃがみこんだ時、曲り角を廻りきった自動車は、けたたましい急ブレーキの音をたてて急停車し、どたんばたんと、ドアをあける気配がした。

「おい、見たかよ」

「なんだい、あらあ……」

「たしかに、女だったぞ」

数人の若い男が声がして、こちらのやぶかげに、近づいて来る。

玲子は、血の気が失せた。

軀を丸くして、やぶかげに身を伏せたが、見つかるのは、時間の問題かもしれない。この深夜に、全裸の若い女が、しかも後手錠の無防備な状態で、数人の若者にとりかこまれたら……玲子は、蒼白になった額に、油汗をにじませた。

そういえば、前にもこんな経験をしたことがある――。

やはり、この山で生き埋めの刑にあった時だ。

大作は、まるで墓穴のように、一メートル四方の穴を掘り、高手

小手に縛った上に、両脚を逆海老のように背中に向けて絞りあげた玲子を、無造作に活けこんだのである。

「虫が……ああ、虫が！」

ざあざあと、裸の胸にあびせかけられる埋め土を見て、玲子は失神しかけた。ミミズやケラ虫やゾウリ虫などが、放りこまれる土にまじって、穴におちこみ、ふくよかな玲子の肌めがけて這いあがってきた。クモ一匹みても、一日中、動悸がおさまらない玲子にとって、これらのおぞましい生物と一緒に埋められるということは死にも勝る拷苦であった。

玲子は、土まんじゅうのように盛土された地表に、生首をさらしたまま、三日三晩、放置された。

大作は、一日に三回、必ず見廻りに来てくれた。

サンドイッチを千切ってくわえさせ、水差しで温いスープやジュースを送りこみ、おどろいたことには、熱い湯を運んで来て、玲子の顔を拭い、クリームを塗り、頬紅を掃き、あでやかな口紅まで引いて、晒し首に妖艶な化粧を施したのである。

玲子は、手鏡に映った、あまりにも無残な顔をみて、はじめは哭いた。

しかし、二度、三度と、奇体に美しい生首を眺めると、異様な戦慄を覚えて、被虐の心が昂ぶった。それは、超現実的な妖美の世界だった。自らの生霊にであったような衝撃だった。

「玲子……辛いかな？」

大作は、地に伏して、玲子の生首を抱えこみ、唇を求めた。

「辛いわ」

玲子は、正直に答えて、瞳を濡らした。

「美しい！ プリティビの再来だ！」

重く閉じた玲子の臉に、やさしく唇をおしあて、大作は呟いた。

「プリティビって……なあに？」

「インドの地の女神さ」

こういう時の大作は、野卑な荒々しさがぬけて、インドの苦行僧のような瞑想的ムードを、みなぎらせた。

「もうすこし、がまんできるか？」

「いいわ……あなたのためなら……」

玲子は、自分の言葉に酔って、慟哭した。

大作は、表土が剥けて裸の肩が露出した部分に手厚く土を盛り、

「寒くないか……？」

と、落葉まで重ねて、やがて、名残り惜し気に立ち去った。

三日目の夕暮れ時のことだ。

かさこそと、やぶ草をかきわける音をききつけて、玲子はくたびれきった鎌首をもたげた。どういうわけか、その時に限って、至近距離まで足音は近づいたのに、大作は姿をみせない。

「あなた……？」

玲子は、まちきれなくなって声をかけた。

「だれか、いるのかい？」

返ってきたのが、全く別人の声だとわかった時の、玲子の驚きといったらなかった。土中深く活けられた全身が、羞恥の雷火に灼かれて凝縮し、痙攣的恐怖が、かけめぐったとおもったら、股間を熱く濡らして、失禁していた。

四囲を物色するらしい気配は、確実に近づき、ついに眼前の草むらを分けて、見も知らぬ老農夫の顔がのぞいた時、

「あ、ああーっ！」

玲子は、宙天高く、雄叫びをあげた。

「ぎえっ！」

老農夫も、ほとんど同時に尻餅をついた。地表に、によっきり生えた、異様に厚化粧した女の首をみて、おどろくまいことか、

「な、生首だあ！」

わけもわからぬ悲鳴をあげて、手負いの猪の如く、草むらのかなたへ走り去った。

もしも、大作の到着が少しでも遅れていたら、村の駐在に発見されて地方紙をにぎわす猟奇事件になったに相違ない。玲子は、素早く土塊をほじくりかえして三日分の汚物にまみれた泥人形の自分をしっかりと腕のなかに抱えこんでくれた大作の、一途な男の表情を、決して忘れることはなかったのだが……。

——今日に限って、パパはどうしたのよ！

玲子は、木立のかげに消えてしまった、どこかよそよそしい大作の態度に腹をたてた。どうして、自分独りが捨ておかれて、か弱い獣のように、やぶかげに身をかくさなければならぬのか……。

玲子は全身を耳にして、大作の足音をききとろうと、つとめた。

月光が寂として玲子の白い裸身にふりそそぎ、執拗に徘徊する若者の声のみが高かった。

「ほんとに、人間だったかよ？」

「おれ、ばっちり見ちゃった！」

「まさか、狐じゃねえだろうな……」

「馬鹿、人間だよ。それも、若い女の裸の姿だったよなあ」

「ふん、そんなことがあって、たまるか！」

(3)

山の湯は、ぬるかった。

玲子は、ほのぼのとした温もりのなかに肩口まで浸しながら、大作の二の腕に額をおしあてて、間欠的にこみあげてくる鳴咽の声をこらえた。

文字通り身一つで、若者たちの追究をのがれ、ようやくのことで山間の露天風呂までたどりついたというのに、玲子を迎えたのは、——どこで道草、くってやがった！

大作の罵言だった。

「いいのよ、あたしなんか、どうなっても」

先刻から、なんべん同じセリフを、くりかえしたことだろう。

いつも通り、大作の腕に抱きすくめられて、赤ちゃん人形のように湯に漬けられても、玲子の心は容易に和まず、

「どうせ、捨てられちゃうのよ、あたしなんか……」

自棄的な繰り言を吐きつづけた。

しかし、玲子の泣き言も繰り言も、全く意に介さない強引さで、大作の愛撫の手が、水面に浮びあがるほど豊満な乳房から、かすかに肋骨をのぞかせた脾腹へ、なだらかな腹部の壁面から、水底に蟠居する……へと、一定のリズムをもって移行してくると、意識を超えた甘い疼きが、神経の中枢を占拠し、半睡半醒の妖しい夢遊状態のなかで自らの涕泣を官能の昂まりの表現のように知覚するのだった。

「ううん、パパァ……」

大仰に水音をたてて、玲子の白い女体は、人魚のように、くねっ

た。玲子の臀丘を徘徊していた大作の指が、極めて当然のこのように、可憐な……に触れたのである。

「前は、ちゃんと洗えても、こっちは、そうも行かない」

「あーん、いたい！」

玲子は小鼻に皺をためて喉の奥で笑った。柔らかく盛りあがった肉の渦巻を丹念に揉みほぐし、ラセン状に回転しながら、かたい節のある指さきが玲子の内奥に浸入してくると、久方ぶりに味わう異様な感触の心地よさに、むしろ……を引き締めて、侵入者を包みこもうとした。

「こら、抵抗する気か！」

「ウジ虫、毛虫。はさんで捨てろ！」

リズムカルに極めてデリケートな筋肉を収斂させると、我ながら面白いように蠢動した。

「ううむ……ますます美音の奴に似てきやがったなあ……」

大作は、賞味するかのように、うっとり目を閉じた。

「お母さんに……？」

「ああ、あいつも、こっちを使うのが得意だな。前で煙草をふかす奴はいても、あいつみたいに後でスパスパやる奴は珍しかったよ。

へっへ……おかげで、こっちのおちよぽ口まで、毎朝、歯ブラシで磨いてやったものさ」

「うふ、ふ……まさか！」

玲子は、うわべだけ笑ってみたものの、芯は淋しかった。

十七才の少女時代に母を失った玲子は、今もなお母にまつわる永遠の思い出として、豊満というよりも高貴な印象を与えずにはおかなかった、量感のある母の臀部を記憶していた。乳房などは玲子よ

りも小さく、全体に小造りな感じを抱かせた母だったが、風呂に入った時に垣間見た母の臀丘は、しみ一つない美肌が滑らかに輝き、どっしりと重そうな肉の厚みが四囲を圧して、近よりがたい威厳をそなえていた。

しかし、大作にかかったら、あの双臀も白い玩具にすぎなかった

のだ。もしも、大作のいうような特技をもっていたとしたら、あのおすまし屋の母が、どのような姿態で、どのような表情で、あられない秘戯を演じたのだろうか。

——だけど、あたしだって、薔薇奴じゃない！

玲子は、謎の刻印のように母の鼠蹊部を占拠した大輪の薔薇の刺青と、今もなお、おのれの臍下に息づく全く同じ図案の刺青をおもって、自嘲の笑みを浮かべた。彫辰の手によって、ひと月前にあの刺青を施されてしまったからには、母子二代にわたって、大作の専有物となる宿命から脱れられないのだ。

まこと、あの鮮やかな薔薇の刻印は性奴の証白き肉体を魔神に捧げた性の玩具の証だったのである。

「おまえも、そろそろ花電車の稽古をはじめてもいいな。成人式もすんだことだし、発育の具合も、たいへん結構だ」

大作は、空いた指をひらひら泳がせて前の点検にとりかかった。

「いいわよ。花電車でも、赤電車でも、なんでもやるわ。どうせ、ほかのだれも相手にしてくれない、あたしですもの……」

そういうながら、玲子は再び小鼻に皺をためこんで、むずかるように瞼の裏を掻き寄せた。大作が二本の指を巧みに駆使して、給排水でも



イメージギャラリー

『シャム猫と女』

岡 かし

するように、臍下の温湯を流入させたのである。

「ああ、いやっ！」

玲子は、白眼になりながらも、朧ろな月を、たしかに仰いだ。

「こういう面つきも、美音と生き写しだ」

「む、むう……だめよう、あなた……」

「あいつも、湯のなかの二所責めには、弱かったもんだ」

「ううん……やめて！」

「前も後も絶品だったな。いっぺん、男二人で、いじめてみたいとおもってたんだが……」

「やめてちょうだい、お母さんの話なんか！ とっくの昔に死んだ人じゃない……」

玲子は気弱に、かぶりを振った。しかし、そうするだけで精一杯という風情で、大作の肩口に頭をあずけ、半睡半醒の桃源境に戻って行った。

「そうか、おまえが身代りだったな」

「そうよ。玲子がいるわ」

「男二人にいじめられたら、本望か」

「ううん、いじわる！」

「本望かどうか、きいてるんだ！」

「ああ、そんなにきつくしないで……は、本望ですから……」

秘奥の……を同時に、くじられると、人魚の裸身は、おどった。

内臓をまさぐるような淫靡な指尖の跳梁に身をまかせながら、玲子の体内に拡がる悦虐の快感は陰火のようにおどろおどろしく、玲子の脳裏を朱に染めた。

——ああ、あれは薔薇……。

その朱色は、一つの輪廓をつくり、薔薇奴のおぞましい刻印を映しだした。

「捨てちゃいや。なんでもしますから、捨てないで、あなた……」

玲子は、きれぎれの息の下で、ようやく呟いた——。

(4)

剃毛の儀式は、露天風呂の岩場のあたりで、とり行われることになった。

岩風呂の四囲は三方に開け、奥の一角に巨大な洞門があったが、おそらく、その上に、よじのぼるためだろう。プールにあるような鉄梯子が、末端を水中に没して上に伸びていた。

大作は、玲子の後手錠を外ずして、三、四段、梯子をのぼらせると、すぐに軀の向きを岩風呂の方へ転換し、上方の梯子をつかんだ手を、素早く革手錠で拘束した。

「こわいわ……」

垂直の梯子段に背を向けて立つのは、たいそう不安定で、心もとなかった。

「足場は、ここにある」

大作は、極めて事務的に玲子の足首をつかむと、梯子をはさんで左右から突き出ている岩場に据えた。足場は水面すれの高さだったのだ、たしかに軀全体はもちあがったが、岩場と岩場の距離はそうとうあったから、いやでも両足を拡げて、極端に開股した姿勢をとらねばならず、膝を折って軀を沈めると、がちゃんと梯子にからませた鎖が鳴って、びーんと革手錠の手首が吊りあげられた。

「すべる！ こわい！」

湯垢にまみれた岩場は、すべりやすかった。足をとられまいとして、指さきに力をこめればこめるほど、ずるずる岩風呂のなかへ引きずりこまれそうな気がして、玲子は真剣だった。

「そのうちに、なれるさ。おまえのおふくろも、はじめは、こわがったもんだ」

「お母さんも、ここで……？」

「ああ、今のおまえと、そっくりおなじ格好でな……」

大作は、こともなげに、いつてのけた。

「お母さんも、こんなところで……」

玲子は、あらためて、あたりを眺めやった。

すぐそばまで迫った奇岩、巨石が、いかつい輪廓だけを残して、邪教の祭典を見守る魔神のように闇に沈み、巖のかげに咲いた馬酔木の白い花まで、不気味な夜の色をしていた。

「いいわ、お母さんみたいに、やってちょうだい！」

玲子は、朧ろな春の月を、一気に仰いだ。

西の山にかかった満月は、不吉な血の色を下界にふりまきながらこれからはじまる薔薇奴の儀式を、はるかに見守っていた。

「ふっ、ふ……お母さんみたいか。あいつも、ずいぶん、泣き言をいったもんだよ。こんなエテ公みたいな格好、させてくれるな、ってな……」

大作は、ざぶざぶ水をかきわけて開股の極点の真向いに立った。

淡い月明りをうけて、生白い二本の太腿の合致したあたり、珠露をちりばめた神秘の部分が、淡い憂愁を秘めて蟠居していた。

「せっかく、ここまで伸ばしたのに、くりくり坊主とは、かわいそうだな」

「……」

内股に大作の熱い息がかかり、無遠慮に指先がなぞり、鼻をすりつけるようにして、たがめつすがめつ、ひと月の放置の跡を、観察されたが、玲子は寂として耐えた。

「そうやって、すましてしまふところも、母親そっくりだ」

大作は、あらためて、磔刑にあった猿のような玲子の肢体に目をやり、一瞬、残忍な笑みを浮べた。

「しかし、奴だって、いつまでもすましやいなかった……」

おもわせぶった手つきで、大作は、山荘から運んできた、医師用の黒袍をあけた。玲子の足元にプラスチックの盆をおき、その上に理容師の使う厚刃の剃刀、石鹼パウダーの缶、太い刷毛、アストリンゼンの瓶、スキんクリームにオリブ油……処刑の準備は、着々と進んだ。

——ああ、剃られるのね……！

玲子は、いつもの自分と、ずいぶんちがっているのに気づいた。あれほどいやだった剃毛も、今日ばかりは甘美な期待に疼くおもいがする。

それは、あの下にかくれている薔薇奴の刻印のおかげだ、とおもった。あの大輪の薔薇こそ、自分と大作を結ぶ唯一の絆……いや、奴隷として大作に専有されることをみとめた、玲子自身の愛の証なのだ……。

「ほら、もっと拡げろ！」

大作の掌が、ぱんと内股を叩くと、玲子はおもいきり膝を曲げて骨盤を開いた。ぎりぎりと腋窩に激痛が襲い、軀を低くした分だけ両手吊りの腕が引っ張りあげられたが、玲子にとって、この拷問は

むしろ、ころよかった。

大作は、石鹼パウダーを掌にうけて、無造作に、ふりまいた。そして、湯をすくってふりかけながら、ごしごし攪拌すると、みるみるうちに泡だって、股間に白い房花が咲いた。

「さあ、おとなしくしろよ。動くんじゃないぞ」

と、厚刃の剃刀を握って、大作が身構えると、むんと胸を張って玲子は、白い泡沫にまみれた下腹を、もう一段、せりだした。玲子自らが完成した、開股の極致である。

「ずいぶん、積極的になったもんだ」

大作は、あきれ顔で、玲子の羞恥をかなぐり捨てた姿態を、見守った。

「どうぞ、剃って……」

玲子は、革手錠の鎖を手繰って、反らし加減の上体を鉄梯子にそわせ、唇をうすく開いて、瞑目した。逞しく開伸した双腿にも、誇らしげに突出した円やかな腹壁にも、ほんの以前まで、剃毛といえ、稚いあらがいを示しつづけた少女の面影はなく、成熟きった女の体臭が、むんむんたちこめていて、大作は奴隷の刻印の重さを知った。

黒々とした腋窩のほとりから、乾ききらぬ湯滴が数粒、どっしりした乳丘をなめて、臍壁を下り、透明な泡粒を二つ三つ、はじけさせて、その奥に消えた。

それを合図に、剃刀の刃は、白桃の股をいとおしむかのように、下腹の丘を掃いた。

——ぞり、ぞり……

重い手応えとともに、泡沫は削りとられ、張りつめた玉膚に、小

波のような痙攣が走ったが、玲子は、足の指を岩面にくいこませて背筋を這いのぼる戦慄的快感の爆発に耐えた。

——ぞり、ぞり……

淡い月光のほかは、照し出してくれるものがなかったの、ほとんど手さぐりだったが、それがまた、玲子の被虐心を、そそった。

それでも、大作の熟練の剃刀さばきで、あっけなく刈りとられて行った。一通り荒剃りを終えたところで、大作は丸坊主になった部分に、ざぶざぶと湯をあびせ、親指の腹で、そのあたり一帯を、垢でももみだすみたいに、丹念になぞって、剃り加減を調べると、再び白いパウダーをなすって、仕上げにかかった。

——ぞり、ぞり……

腹肉をつまみあげ、二本の指でおもいきり引き伸ばし、すこしでもざらつく部分を、絶対に見逃さぬ厳格さで、根気よく剃刀の刃をあてられていると、さすがの玲子も、高々とかがげた腕の重さに耐えかねて、息がはずんだ。とくに、パウダーを指先でこねまわす、ぬるぬるした感覚は、刈りとられたばかりの皮膚には、すこぶる刺激的で、粉にまじった清涼香料の、毛根にしみこむ、さわやかさもむしろ、うとましかった。

「こらっ、じっとしてろ！」

大作は、臀筋のかすかな、そよぎも見逃さず、玲子の内股を容赦なく打ち据えた。

「あーん、だって、しみるのよう。それ……」

玲子は、ついに音を挙げた。

「しみるって、なにが……？」

「その石鹼、ばかにピリピリするみたいよ」

「そうだろ、ハッカ入りだもんな」

「えっ、ハッカ！」

そうおもったら、パウダーを塗られた部分が、一斉にかっかと燃えあがり、毛穴という毛穴が、ひりつくように疼いた。

「ひどいわ、パパ！」

「はっ、は、は……彫辰の奴に習ったのさ。おまえの薔薇ちゃんをみごとに咲かすのは、こうしてやるのが一番だってな……」

大作は、パウダーの缶を、玲子に見せびらかすようにかざして、掌にたっぷり白い粉をすくうと、やにわに開伸しきった麗奴の極点に、まんべんなく塗りたくった。

「ああ、いやよう！」

先刻の巧妙なフィンガーテクニックによって、煽られるだけ煽られた部分に男の手が伸び、ぴたぴたと軽打されただけでも、背筋がすくむほど刺激的なのに、ハッカ入りの粉をまぶされたのでは、たまらない！ 玲子は、白く彩った悪魔の妖粉をふりおとすべく、激しく腰を振って、あがいた。

「はっはっは。エテ公のダンスだな……」

大作は、高笑した。

「しみる……ああ、しみるのよう！」

一旦そのような姿勢をとらされたら、もとにもどす手だてもない滑りやすい足場の上で、地団駄を踏んでは、軀の平衡を失いかけて腋窩に走る激痛に悲鳴をあげ、とどまることをしらぬ狂躁のダンスを見せる玲子の姿は、まさに鬨り殺しの猿だった。

「やりたいだけ、そうやってるがいい。動けなくなったら、こいつで泡だててやるから……後のほうは、まだ剃ってないからな」

大作は、太い刷毛をもちだした――。

(5)

……玲子は、石のように凝固したまま、同じポーズをつづけた。

革手錠に括りあげられた両腕も、大きく左右に割った両膝も、もはや感覚もないくらい、しびれ、腰をととのえなおそうにも、その余力はなかった。

残忍な刷毛責めを加味した剃毛によって、汗も、尿も、泪も、体液という体液をしばらくつくされた後も、玲子は入浴を許されず、足下にたちのぼる岩風呂の湯気に煽られながら、白磁の肌を晒しつづけた。

つい先刻まで、その辺を泳ぎまわりながら、猥雑な冗談を投げかけていた大作も、どこかの岩場のかげに姿をかくして、玲子はたまたもや独りだった。

鉄梯子にからみついた革手錠の鎖を、孤独にきしませながら、玲子は、梢を渡る山風の音を、しみじみと、きいた。

――あたしの薔薇は、水に映っているかしら……。

剃毛をすませて、遮蔽物のなくなった股間を、みごとに薔薇奴の刻印を晒けだしたはずの下腹のあたりを、早春の微風が、幾度となく吹き抜けて行った。そのやさしい風の触手に身をまかせながら、惨鼻な極刑の後で味わう甘美な余韻を、玲子は朧ろな心境で味わいつづけた。

青々と剃りあげた後、アストリンゼンで肌を引きしめ、栄養クリームを、たっぷりすりこんで美膚をととのえ、更にオリーブ油とラシャ地の布で丹念に磨きあげられた部分に息づく、朱と緑も鮮やか

な大輪の薔薇を、大作のさしだす手鏡の中に認めた時、

——ああ、あたしの薔薇！……

玲子は、愛の疼きに、胸を高鳴らせた。

懐中電灯の光をうけて、円い鏡面に濃艶な芳香を放ちながら咲き薫る神秘の薔薇は、玲子とは別の生命を宿すが如く、あくまでも、みずみずしかった。こよなく優雅で、驕慢ですらあった。

——あたしとお母さんの生命の花……

玲子は、母子二代にわたる不思議な運命をおもって、哀切きわまりない感慨にひたった。母もまた、この岩場の上に優婉な裸刑を晒し、どのようなおもいで自らの刻印をのぞき見たことであろう。

「あなた……あたしの薔薇、きれい？」

玲子は、万感をこめて訊ねた。

「すてきだよ、玲子……」

この時ばかりは、大作の答も、少年のように初々しかった。

「そんなら、キスして……！」

玲子は、ハスキーな声をおしこらした。

いかつい指が、ぐいと尻朶にかかり、逞しい骨盤ごと男の胸に抱きよせられると、ぎりっと腕のつけ根に激痛が走って、男の肩よりも高くあがった、ほの白い双腿は、空しく宙を蹴った。

「玲子……ばくの薔薇奴……」

大作は、玲子を虚空に抱きあげたまま、接吻の雨をふらせた。

革手錠に両手をとられて、弓なりになりながらも、愛の刻印に、ぬめぬめと唇と舌尖のはいまわる、そのとめどもない歓喜の激情のなかで、玲子は半ば失神した。

「ああ！ もっと……もっと、いじめて！」

接吻は、やがて愛咬にかわり、玲子は、息もたえだえになりながらも、だれはばかりことなく、七色の叫喚を深夜の連山に轟かせたのだが……その齒形のあとが、今も生々しく疼く。

「あなた……」と、玲子は声をしのばせて、大作を呼んだ。しかし水音もしなくなった岩風呂のあたりは、かすかに湯気をなびかせて朧ろな月を映すばかり。気まぐれな大作は、朝までもこのまま放置しておくつもりなのだろうか。

「ねえ、あなたったら……もう、おろしてよ……」

もう一度、呼びかけてみたが、玲子の切なる叫びを運び去るかのうちに、ごうと山風が鳴った。

再び、くぐり抜ける風の触手……

玲子は、その冷たさに、臀立をよじりあわせながらも、おそらく極限まで晒けだしているであろう愛の……を、もっと風に颯らせようと、腰をかがめた。大作の執拗な愛咬と舌技によって、ぎりぎりまで燃えあがりながらも、空しくうち捨てられた愛のベルは、今もなお愛虐の執行者を求めて、切なく火照りつづけたからだ。

「ああ、おろしてよう、パパ……」

閉じ合わせた臉をこがす、黄ばんだ光をふり払うように、玲子は瞠目して、天を仰いだ。

一瞬、月のありかは定かでなかったが、天空にみなぎる朧ろな光が、薔薇奴の刻印を刻んだ羞恥の一点めがけて、かけおりてくるような気がして、玲子は、ぴくりと腰をすくめた。

もはや、天も、日も、山も、風も、かそけき谷川のせせらぎの音すらも、孤独な麗奴の責め手となり、いかつい岩場に晒けだした清婉な裸形を責め苛むのだった。

(おわり)

☆ S M プ レ ー ・ レ ポ ー ト ☆

妻貸し出しの記

後 藤 執 生

読者の皆様。特に御夫婦で S M プレーに没頭されている方々。皆様の中には、今が一番楽しい時期の方と、現在の私共夫婦の如く、かなり長期間に亘ってマンネリ気味で、頭の中で考えたり想像したりする事のみ高度？になって、実際の面では足踏み状態の御夫婦との、二種に大別されると思いますが、大半の方々は、どのように解決されているのでしょうか。

それにしても、毎月の奇ク誌上での夫婦プレーの記事は賑やかな事で、なんとも、うらやましい限りです。

さて、お定まりのマンネリ状態を、なんとか打破せんものと、私共夫婦は本年三月の或日に、思いきって第三者を入れての S M プラ

ス S E X プレーを行ってみました。

私共夫婦は四十七年五月号、四十八年五月号等に告白記事を發表させていただき、特に四十八年五月号での体験、「無料花電車ショー」の通り、一度だけ他人を入れたライブ・ショーの経験はありましたが、結婚歴九年以上、やがて十年になろうとする私共夫婦にとって、第三者を交えた S M プラス S E X プレーは、いざとなると考え迷い、その段取りも一度ならず行ったり中止したりした結果、やはり自分では S 傾向のつもりでも、S と M は隣り合わせの説の通りで、その状態にあことがれて最終的に計画をたてたのが二月初旬で、実行したのは三月の二十八日でした。

先ず、現在の心境から述べますと、後悔は

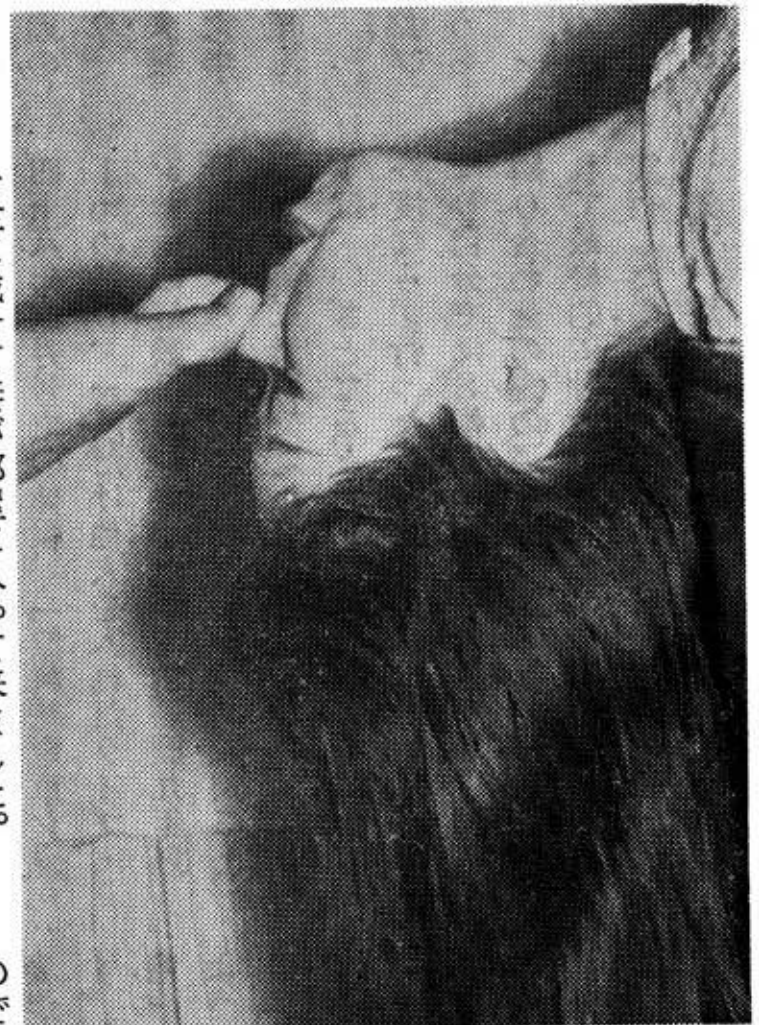
なく、かえって慎重にはありますが、もう一度やってみたいと思っています。何故なら種々の要素がミックスして、かえって自分の妻が新鮮に感じられるように、なったからです。あの倒錯した一連の行為の中に含まれる嗜虐的な遊び、嫉妬、訳のわからぬ焦燥感のようなもの。とにかく一寸、表現できないものがあるのです。とにかく思い切って、やってみてよかったですと思っています。

当夜は子供達を夕方から弟の家に預けておき、友人 Y の来る時間は午後八時きっかりと打合わせていたので、プレーの用意は夫婦で行いました。友人 Y は S M 気のない人ですの（無料花電車ショーに招待した一人）気分を高めていくために、やはり最初はライブ・

ショーを行う必要があり、そのためにゆで卵、コーラ及びコップ、拡大鏡、バナナ、なす、少量の生花等の小道具それに軽く両手両足を縛る縄、等身大の鏡等、かれこれ三十分以上かかって道具をそろえ、八時を待ったのですがその八時の来るまでの待ち時間が緊張と不安感で、えらく永く感じられ、妻もこの息づまるような雰囲気のためかどうか知りませんが、夕方、六時頃に一度、入浴したのに、もう一度ザッと浴びて来ると言い出して風呂場に行く始末でした。

八時を五分程、過ぎた頃でしょうか、Yは手土産を提げて、やって来ました。やはり、てれくさいのか心持ち上気した感じで、私もそれを見ると一層の緊張と、それから、わずかですが後悔の念が、もたげて来たのは事実です。しかし自分の心に矢は放たれたのだと言いかせたものです。

どの御夫婦も最初の時は、あのような心理状態なのでしょう。部屋の中央に置いた和室用テーブルで軽く、いっぱいビールを飲み適当な頃をみはからって「オイッ」と声をかけると、打合わせ通りに全裸で追加のビール



を盆に載せて妻が部屋に入って来ました。

素早く走るYの視線は妻の下腹の辺り、次にやはり胸の辺りのようでした。今、自分の妻が全裸で他人にジロジロ隠すべき布一片もなく、その視線に晒されているのです。その時の夫たる私の異常な興奮は、やはりMなのでしょうか。今までの二人きりの如何なるSMプレーより一層、満足し興奮するのが自分でも、はっきり判りました。

妻は、にじり寄って二人にビールを注ぐとするので、私は中腰、開股の姿勢で注ぐように言いつけると、一寸とまどったようですが、思い切ったのか諦めたのか、命令通りの

姿勢で注ぐのでした。その下腹に注がれるYの熱っぽい視線……。

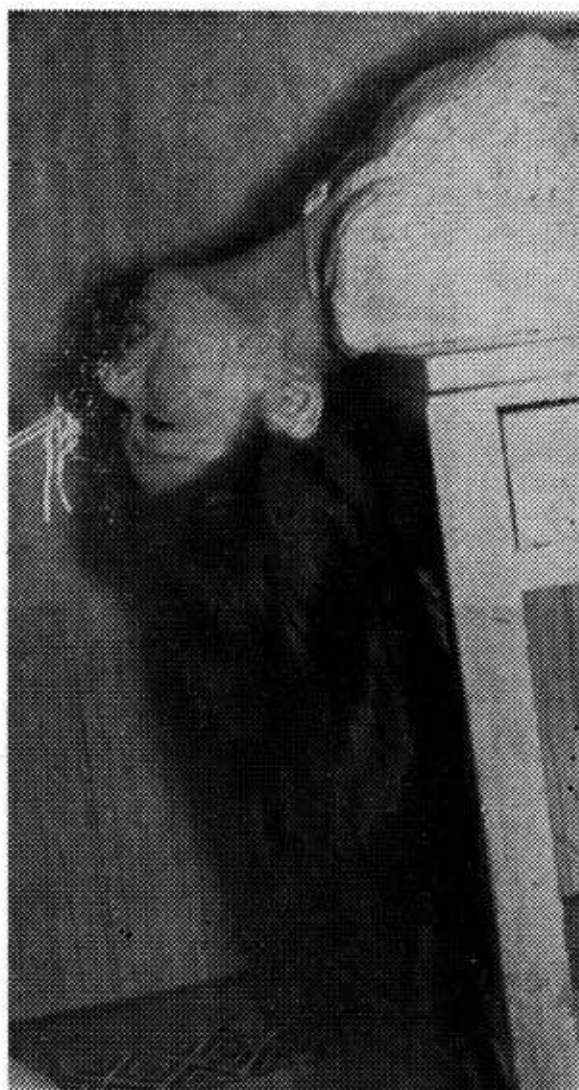
頃をみはからって私は妻をテーブルの上に大の字に寝かせ、テーブルの向うとこちらで私とYは妻の右半身と左半身を弄ぶ事に熱中しましたのです。

二人で妻の唇を引っ張ったり拡げたり、左右の乳房を同時にくわえたりしました。

その時の妻は同時に二人の男に攻められて喘いでいるのです。私はこの嗜虐的な性の宴に次第に耽溺していったのです。妻は容赦ない攻撃に、もう息も絶えだえといった状態で、時々悲鳴のような声すら、挙げ始めた有様でした。

しばらくして私は妻の体から少し離れて、プレーを尚、続けているYと妻を離れた位置から眺めてみたのです。そうすると人間はおかしなもので、Yと二人で妻の体にとりついて盛んに翫っていた時より何倍もエロティックに、そして悲愴感というか嫉妬というか、そのようなものが、みなぎってくるものですね。

読者の皆様、考えてもごらん下さい。このような異常な状態は普通では考えられません



からね。なにしろ夫が自分の妻を全裸にして友人と二人で道具を使ったり指や体で勵っているのですから、どのような論法で、これを少しでも正当化しようとしても、結論は異常としかいえないと私自身そう思うのです。そのような事を想像し熱望するのですから、我ながら、やっかいな病氣？にとりつかれたものです。

さて、一度ならず……に到達して長々とのびてしまっている妻の両手と両足を、Yと二人でぶら下げて浴室に運び込みました。大人三人が入れば、一般の家庭の浴室では、そう広々と動き廻ってプレーをする訳には、いきませんが、なんとかあります。その頃の妻は翌日になって聞いたのですが、陶醉状態で、

はつきり覚えていなかったそうです。浴室の中でYと私は、先ず浴槽の中に妻を頭が没するまで沈めてみました。腰まで届く妻の黒髪は湯の中で、ゆるやかに広がり、あたかも海藻のように、ゆらゆらとゆれ広がり、見事な眺めでした。その後、

首だけ水面から出した妻の髪を頭頂部で二つに別けて、しっかりと握り、両膝に手を回して浴槽の外の洗い場に、ひっぱり上げた訳です。タイルの上に開股で膝を立て、ストンと尻もちをついた姿勢の妻を前に私は、ややしばらく、どう料理したものかと考えた挙句、Yを浴室の外に出してプレーの大略を説明しました。

要領と共に、再び浴室に入った二人は、先刻の姿勢のまま放心状態になっている妻の髪にシャンプーをタップリとふりかけて全くもみくちゃといった調子で洗い出したのです。開股でタイルにベッタリと座っている女の黒髪を、二人の男が全裸で両側に立って面白半分

人は自分達の体にもタップリと石鹼を塗りつけて、しゃがんだり立ったりしながら、妻の体の両脇に位置して妻の黒髪をタオル代りに使い、各自の体をこすり始めたのです。私がしゃがんで首の辺りを髪でこすると、Yも腹部の辺りから足先に到るまで同様に行っていました。妻の黒髪をタオル代りに使って二人が体を洗う時は完全な女奴隷の図で、最高に興奮したものです。

次は妻を直立させ、二人で半身宛、ていねいに石鹼をつけて洗いました。私達男二人は石鹼を洗い流すには当然な事としてお湯を使いましたが、妻のみは違ったのです。妻を再びタイルの上に跪かせ、男二人は妻を挟んで向い合って立った位置になり、先刻からビールやコーラを飲んでたまった液体を初め左右から、後で前後から、体めがけて放出したものです。将に人間シャワーでした。最後に、ていねいにお湯をかけて洗い流してやって、浴室でのプレーは終了しましたが、出てから妻の腰まである髪を乾かすのに約二十分程度の時間を費やしてしまいました。

長いソファの真ん中に座った妻。勿論、裸ですが、それを挟んで二人の裸の男達が腰掛け、二台のヘアー・ドライヤーを使って、真

ん中の女の髪を乾かしている図は相当に、いや、見ようによっては強烈なM的シーンといえますまいか。

やっと髪が乾いた妻をベッド・ルームに連れて行く段になって、私は当夜で一番期待し待ちうけていたアイデアを実行したのです。勿論、Yにはドライヤーを使用している時に耳打ちし説明したのです。

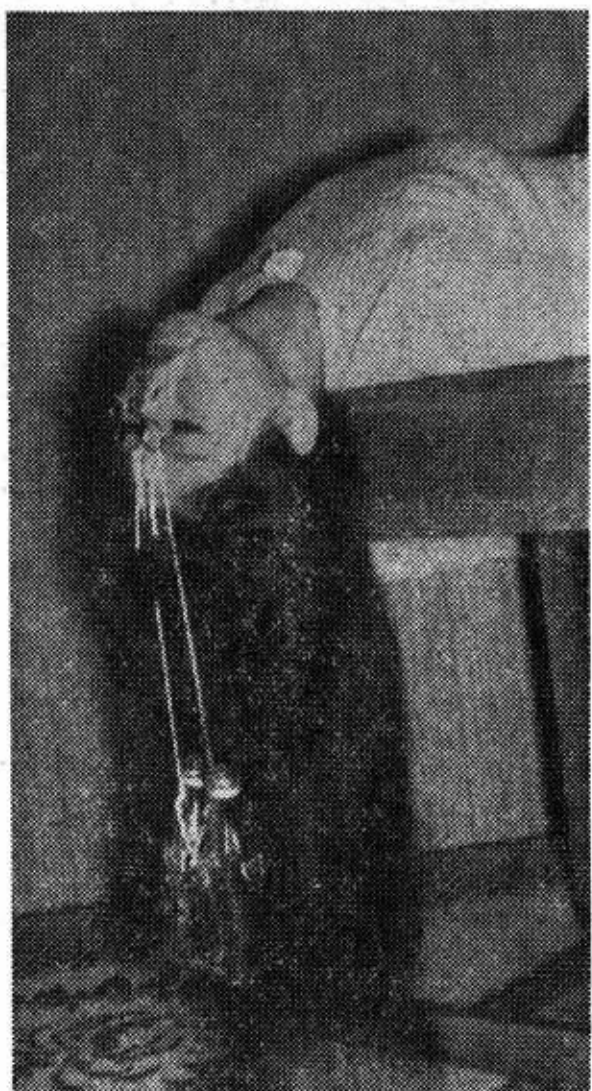
先ず応接セットのテーブルの端に腰部が来るようにして寝かせた小柄な妻は結婚以来、初めて夫以外の男性を……しました。私は、その状態を充分に目と指先で確かめました。

次にYは妻の下半身を持ち上げました。私は妻の髪を一束に、まとめて巻きつけ、ヨイショと上半身を持ち上げたのです。そうして

その状態で寝室に移動しました。妻は移動する間じゅう、うめき声を挙げていました。あれは肉体的な欲びのせいでしょうか？ 又は二人の男に凌辱されているというマゾヒスティックな精神的、充足感のせいだったのでしょうか。妻の両手は移動する間、しっかりと自分の乳房を握り締めていましたが……。私はその頃には、もう日頃、想像していたプレ

ーは、思いつく限り全部、実行してやれといったブレーキの利かない心境になっていました。

隣室でプレー写真の撮影準備を私一人がしている間、半開きにしたふすまごしにYは妻の体を大の字に足を高く挙げさせたり、跪かせて、果ては腰を高く挙げて背後から襲いかかってみたり、嗜虐的なスタイルにさせて盛んに弄んでいたようで、妻は執拗に攻撃されている時は、その屈辱的な姿に加えて、夫の目の前で弄ばれているというM的な被虐感、そうして肉体的な快感等がミックスして尚一層、高い呻き声を洩らしていたようでした。準備が終り隣室より入っていった妻を抱き起した時には、もうグラグラと体の位置が定ま



らず酒に酔ったような状態でした。Yの……は部屋の蛍光灯に映えてヌメヌメと光っていました。私はそれを見て、何度目かの屈辱と倒錯的な快感に襲われたものです。

結局、その夜は、プレーの状態を三ポーズ（失敗を恐れて一ポーズ二枚宛）計六枚の写真を撮りましたが、ポーズが少ないだけに夫婦二人のプレー時では絶対に写せないシヨッキングなポーズのみを選んで撮りました。

その中の一ポーズを御紹介しますと、部屋の中央で膝立ち後手縛りの妻の両側に立った男性二人は、妻に日本古来の楽器を吹奏させるスタイルを採らせたのです。出来上って引き伸ばした写真は、絶句する程に奇抜でエロティックなものでした。

撮影が終ってから私は、激情のおもむくままに妻の髪をグイッと握って上向け、目を閉じたまま荒い息をはいて喘いでいるその鼻孔に、私自身の……なっている武器の先端をグイと押しつけ、そうして押し上げたのです。Yはそれを見て、自分もか？ と目で間いかけるので、そうだとおぼえずくと、彼も下半身を向い側から、すり寄せ……の先端を、反対側の鼻孔に当てがい、

押し上げたために、妻の鼻は無惨に変形してしまい、奇妙な顔になってしまいました。全く二人の男に飼ひ馴らされたM的セックス用奴隷になり切った妻は喘ぐのみで、その光景は、これ以上の辱しめはないといった状態でした。もう女の誇り、自尊心は雲散霧消してしまい、私は体に鳥肌が立つ程、興奮したのを覚えています。

その後は、この夜の宴の仕上げともいふべき、そのものずばりの、プレーが始まりました。その真横で座り込んで拡大鏡を使って観察し続ける私。その時に感じた事は、結婚歴九年、二児の母親である女性の愛の泉は、昼間の慎み深さ、適度の上品さ等とは裏腹に凄まじい感じで、それは特に近接して拡大鏡で眺めたせいも多分にあったのですが、極端に言えば今にも飲み込まれて消化されかねないといった感じでした。女性も少女時代、新婚時代、三十才台、そして四十才台。この四十才台には、どのように変わっているものでしょうかね。

じつくりと眺めた私は、今夜の祭典の終了をYに告げ、後始末を兼ねて隣室に移動しました。Yの最後？ いや最高時に到達するのを妨げぬために、ふすまを閉め切って隣りで

待っている間の長い事。それは、実際には五分もなかったのですが、私には三十分位に感ぜられました。何で自分から、このような馬鹿げた行為をするのでしょうか。全く異常としか思えませんでした。

Yは冷えたお茶を飲み干すと、事後の感想もうわの空で、男性の生理的、肉体的構造の常か、十時頃までの予定が午前零時に近い時刻になったためか、感想や次回の約束等は次に会った時にと、そそくさといった状態で帰って行きました。

Yを送り出してから私は深呼吸を二、三度して、寝室にとって返しました。妻は夕方、このプレーが始まる前に命令しておいた通りの姿勢で、がまんぶよく待っていました。そのスタイルを部屋の入口で立ったまま眺める複雑な心境の私。つい先刻、妻は初めて自分の夫以外の男性を……たのです。そう思うと改めて激しいM的満足感、嫉妬心、訳のわからぬ絶望感ETC、以上がミックスして私の中に襲ってくるのでした。

私は部屋に入ると妻に足を少し開いて直立を命じました。等身大の鏡の前です。

妻は先刻の快感が余韻のように残っているのか、それとも私の凝視に耐えられないのか

少しグラグラの状態でした。私は、そのような妻の体にしゃがみ込んで、再び点検を始めたのです。やがて私は妻にも手鏡を渡して眺めるように命令したのです。しっかりと直視するようにと……。

全部の後始末が終り、入浴も済ませて私達が床についたのは、もう午前一時を、かなり廻っていました。その後の妻の狂乱ぶりは凄まじいもので、驚きの中に私の気持は新鮮さと、いたわりの心が、いっぱい状態でした。

日頃マンネリ、マンネリと口にしていてもあの夜の新鮮さ、妻に対する、いたわりの心を経験すると、いまさらながら、ほんとうに夫婦の間が、精神的に当人達が気づいてなくマンネリ化していたんだなあ、と痛感しました。あの夜を境に、私達夫婦は新婚時代に逆もどриした感があります。このような心境は似たような経験をされた御夫婦でないと、ほんとうには判らないと思います。が如何なものでしょうか。この拙文が読者諸兄姉方のマンネリ化打破のために少しでも参考になればと思つて筆を採りました。

同封の写真は私共夫婦の最近のプレー時のものです。余り上手に撮れていませんが、御笑覧下さい。

—(おしまい)—

連載・M派交友録 (54)

マリファナ・パーティ

△加納吟子の巻▽

(2)

カット・日本武士



吟子が相手をしている客は、北尾とかいうテレビのディレクターだった。吟子の目が情熱的に北尾を見つめている。

——あの目は、いつかマドンナで飲んだ時、俺に向けて来た目と同じ目だ！——

嫉妬がムラムラと、わいてきた。

「いよいよ、奥さんはテレビに出るらしいですね」

バーテンが、そっと話しかけてきた。

「ハハハ、どうせ端役でしょう」

少なくとも、この店にいる限り、岩見は吟子の「亭主」である。アパートに帰れば奴隷

に早変わりするのだが——。

それにしても先日吟子は凄まじかった。殴ったり蹴ったり、あぐくの果てに小便まで飲まされた。言葉遣いも、あの日は急に変わった。

——あれが吟子の本性なのか？——

そのこと自体は好ましいことではあったが何か佐戸崎の顔が、その後に浮んで見えた。

——ことによると佐戸崎が後で吟子を、けしかけているのではないか？——

吟子から手を引くと約束したが、狡猾な佐戸崎が、あっさり手を引くはずがない。

そんな不安が浮ぶのだが、百万もの手切金を払ってるのだから、いくら佐戸崎がわるで

テレビに出る

吟子の出ているクラブ「メルシー」のスタンドの隅で、岩見崇は今夜も一人で、おとなしくウイスキーを舐めながら、それとなく吟子を観察していた。

も、そんなあくどい、まねはすまい——とも思えるのだった。

岩見が、そうした疑心をもつのも単なる妄想ではなく、根拠のあることだった。以前、佐戸崎が酔っぱらうと、いつも岩見をからかい「吟子の小便、飲ましてもらえ」と言っている前、人前で恥をかかせて喜んでいたからだった。

あの夜、突然、吟子が猛々しくなり、佐戸崎の言っていた通りのことをやってのけたので、そうした疑心暗鬼もおきるのだった。

あの夜、吟子は怒ったが、もちろん、あれ

登場人物紹介

佐戸崎昂。36才。画家。画才はあるが生来の怠け者。加納吟子をけしかけて岩見から金を絞り取ることばかり考えている。S的性格で、特に岩見に対しては強い。

加納吟子。28才。金井克子に似た美人女優。ホステスのバイトをしている。女らしい性格が佐戸崎の感化を受けてS的に変貌してきた。テレビ出演に野心をもっている。

岩見崇。37才。挿絵画家。まじめなM派の人間。一途に吟子を恋し、秘かに結婚を夢みているが、及ばぬ恋と奴隷に満足している。

はプレーだと思っていた、しかし、どこまでがプレーで、どこまでが真実か、それも岩見には、よく分からなかった。

吟子に、ひと言、話しかかったが、客の居る前では他人のような顔をして、吟子に関心を示さないのがホステスの紐の常識だから、今夜も、知らぬ顔をしてコッソリ店を出て行くよりなかった。

歌舞伎町の安い飲み屋に入ってチビリチビリやりながら時間をつぶし、十一時になるのを待ちかねて、いつものようにメルシーに電話した。だがバーテンが出て「ああ、奥さんもう帰りましたよ」と返事してきた。まだカバン前である。「早びけしたんですか」と訊ねると「ええ——」とバーテンは言葉を濁した。

あまり、しつこく聞くのも変に思われると思って、電話を切った。

すぐ、その足でアパートに行ってみたが、やはり吟子は帰っていなかった。

あのディレクターと一緒に出たんだな——とピンときた。

佐戸崎の代りに、また「強敵」が現れたと思うと気が滅入った。

ムシャクシャして新宿三丁目のマドンナに

行き、あけみと会って責めてもらった。

吟子は佐戸崎から、「そのディレクターと一度、つき合ってみろよ」と言われている。

言われなくても吟子は、その気でいたが、佐戸崎がそう言ったのは、つき合ってもいいということだと解釈した。

ディレクターの北尾は「夜の赤坂ロマン」という番組を担当していた。イレブンPMや銀座ナイトナイトと、かち合う時間帯で、同じような内容だけに競争が激しかった。

吟子はCMの前に出るカヴァーガールの役をもらった。

北尾とホテルに泊って朝食を一緒にとり、昼頃アパートに帰ると佐戸崎が来ていた。

佐戸崎には鍵を、もひとつ作らせて渡してあるので、勝手に入ってくるのだ。岩見には渡してない。

「ディレクターと、つき合ったのよ」

吟子は佐戸崎の顔を見るなり言った。

「どんな具合だった」

「案外アツサリしてたわね。気に入られなかったのかな」

「奴等、女には食傷してるんだ。よほど楽器のいい女か、特別のテクニックでも持っている女でなきゃ燃えないだろう。役はもらったか

い

「うん、ちょい役だけどね」

カヴァーガールだと言うと、

「それは、いい役だ。うまくすると、当るかもしれないねえ。カヴァーガールからスターになった奴は相当、居るからな」

と佐戸崎は喜んだ。

他の男と、つき合ったことに対して、全然嫉妬めいた感情も示さない佐戸崎を冷たい男だと思った。吟子の出世を願って、自らすめたのだから、今更、嫉妬するのは理屈に合わないことかもしれないが、それでは、あまりに非人情である。それに吟子の出世を願うのは、吟子を愛しているからではなくて、それによって自分も、うまい汁を吸おうという野心があるからだ。吟子にも、それは見え透いているだけに、佐戸崎が憎かった。

それでも佐戸崎の言うなりになっている自分が情けなかったが、

——いまに、もっとマシな男をつかまえて、見返してやるから。その時は岩見と同様に奴隷にしてやる！——

と内心、憎悪にもえていたが、いまは従っているより仕様がなと思った。

乗っ取り

吟子のテレビ出演は好評だった。

店の若い客も、

「吟子さんのヌードすばらしかったですね」

と、ほめた。吟子は別に羞らいも見せず、

テレビスタジオの内輪話などを聞かせた。

ヌードといっても大きなタオルを腰に巻いて腕で乳房をかくし、チラリと乳房を見せた程度のものであった。

カヴァーガールは他に三人、いて、競争が激烈だったが、その中に吟子が割って入ったのだった。

吟子は表情の動きもプロポーションもよくスタジオ内でも高く買われた。

テレビの力というものは恐ろしいもので、

吟子は店の中では抜群のスターになった。

まだスターになったわけでもないのに、男達は皆、吟子をスター扱いにする。

吟子もまた、スターの座が、それほど遠くないような気持ちになってきたのだった。

そんなムードを一番、哀し気に、脇で眺めていたのが岩見崇だった。

この頃、カンバン前に電話しても、なかなか

か会ってもらえない。

クラブメルシーの店内では、まだ皆、岩見を亭主だと思っている。岩見も、そのつもりで振舞っているから、ろくに吟子と口もきけない。

「しつこいわねえ、毎日々々。あんまり電話をかけないでよ、うるさいから。チョッ」

電話の向うで舌打ちする音が聞えた。恐らく店の者のいる前でしゃべっているのだろうと思うと翌日、店へ行くのが羞かしかった。

——電話も、かけられないのか——

それでも夜になると、一度はメルシーに行き、遠くから吟子の顔を見ずには、いられなかった。

全く吟子の人気はうなぎ上りで、若者から中年層まで、いつも吟子を取り巻いていた。

とても近づけたものではない。

そんな或夜、吟子が人目を避けるようにスーッと寄って来て、

「今夜、一緒に帰るから、待ってて」

と言葉少なに言った。

待ちに待った「お声」が、かかったのだ。

岩見は心臓がドキドキするほど興奮と期待に落ちつきを失ったくらいだった。

いつもの寿司屋で簡単に腹を満たすと、吟

子はサッサと先に店を出た。勘定を払って店を出た時は、吟子を見失っていた。

仕方なく一人で代々木八幡のアパートへ行った。吟子は先に帰っていて、ブラジャーとパンティだけになって化粧を落していた。

「何ぐずぐずしてるんだよ」

「すみません、探してたものですから」

「此処へ来るのが分かってんだから、さっさと来りゃいいじゃないか」

また御機嫌が悪いのかと思うと、

「ラーンララ、ララ、ラー」

と急に唄い出して、踊りながら居間へ戻って行く。ニコニコ笑って部屋中をはね回り、岩見の顔を逆撫でしたりして、とび回った。

「ああ、早く、馬になって！」

「ハ、ハイ」

岩見が四つん這いになると、吟子はドシンと勢いをつけて跨がってきた。

「勝ったのよ。あたしが勝ったんだ。ざまあ見やがれ」

「誰に勝ったんですか」

「決まってるじゃないか。雪岡アキによ。この次も、あたしは出るの。カヴァーガールの中で遂にあたしがナンバーワンに、なったのよ。雪岡アキを蹴落としてやった。ああ嬉し

い！」

ブラジャーを放り投げ、パンティも、ぶん投げて全裸になると、

「こっちを、お向き」

馬からおりて、サッと岩見の肩へ逆に肩車した。

「ホラ、お祝いに餌をくれてやる」

猛烈にこすりつけてきた。額の上までこすりあげ、またずり下げる、息もつかせぬ激して動きだった。

「アッハハハ。こん畜生！ ホラ、どうだ、こん畜生ッ！」

激情が突風のようにおこり、かつてない乱暴さで岩見を責めると、吟子は裸のままベッドに腰かけてグッタリとなった岩見を気持よさそうに見下した。

「フッフ、参ったか。意久地なし。このくらいで参っちゃ奴隷の役目は勤まらないよ」

「ハイ、ハイ」

岩見は起き上り、目をショボショボさせて吟子を見上げた。

「吟子さま」

「何だよ。文句があんのか」

「いえ、とんでもない」

岩見は緊張に頬を硬ばらせて、

「あなたは、これから、えらくなる人です。いまに必ず大スターになります」

「当り前だよ。いままで伊達に苦勞してきたんじゃないんだからね。芝居や踊り、歌の勉強に、どれだけ、つらい修業をしたか、いまそれが芽を出してきたのさ。必ず一流のスターになって見せるさ」

「必ず、おなりになります。そのときは……」

岩見は、かすれた声で、

「僕のような者、もう相手にされなくなってしまうのではないかと思って……」

「フッフ、そりゃ、なって見なけりゃ分らないわよ」

「どうか僕を捨てないで下さい。奴隷のままで結構ですから、おそばに置いて下さい」

「タカシ、こっちへおいで」

「ハイ……」

岩見は恐る恐る吟子の前ににじり寄った。

吟子は、大きく両足をひろげた。

「サア、この中にお入り」

近寄る岩見の頭に手をかけて、顔をグイと押しつけた。

「よく、お聞き。あたしは、いまこうして、あんたにつらく当っているかもしれないけど義理人情を、わきまえない女じゃないのよ」

「それは、よく分ってます」

「いいから。お前は、しゃべらなくてもいいの。黙って舐めながら、あたしの言うことを聞くんだよ」

吟子は、いつものように自分の方から尻を動かさなかった。岩見の舌を自由に動かせるように仕向けた。

この前、佐戸崎に、何とかして岩見から金をもっと絞り取ってやる手段を相談した。金を取ると言っても、まるで強盗か商売女のように「金を出せ」とか「お金、頂戴」とか、露骨な方法に出るのは吟子のプライドが許さない。そこには何らかの名目がなければならぬのだ。佐戸崎も、その点は心得ていた。金を出させる方便として故郷の母親が病氣だとか、着物や指輪が欲しいぐらいの月並みな手は面白くないし、第一、金額も小さい。

「そうだ！ うまい手がある！」

佐戸崎は、その方法を吟子に教えたのだ。前に三十万、出させたが、今度のは、もっと大きい額だった。

吟子は今夜、その方法を実行しようと思つて岩見を呼んだのだった。

「これは、いくら何でも岩見の奴は渋るかもしれねえ。それをウンと言わせるには、おめ

えが一番、有効な武器を使い、テキを抗弁不能の状態に陥れておいて要求するのが有利な方法だ。奴の一番喜ぶ方法で奴を昂奮させておいて話すんだ。いいな、その手を使えよ」

こういう風にしてやったらいいか、それにはこうこうと、二人でいろいろ作戦を練ったのだが、イザこうして面と向って見ると、なかなか切り出しにくく、どこできっかけを掴むかに苦勞していたところに、お誂え向きに岩見の方から、まるで罠にでも嵌まるようなことを言い出してきた。

だから吟子は、うまく、そのきっかけを捉えることができた。

「あたしはね、人から恩を受けたことは一生忘れない女よ。あんたが、これまで、まごころ一途に、あたしにしてくれたこと、忘れやしないわよ」

——ああ、吟子さん。やっぱり、あなたは僕の心の中に描いていた通りの女性です。感謝します。そんなに言っただけでは、もったいない。僕は、これから、もっともっと、あなたに尽すことを誓います——

口には出さぬが、岩見は感激していた。その愛を舌にこめて、懸命に奉仕した。

——フン、いつもは、あたしの方から仕掛け

てやったが、たまには此奴の好きなように舐めさせてやるのもいいだろう——

吟子は手が届くところに煙草とライターがあったので、一本つけて、煙をふかしながら岩見のモジャモジャ頭を上から見下して、

「だから、あたしは、あんたを捨てたりしないから安心なさい」

「ああ、ありがとうございます、吟子さん。僕は、どんなことをしても、あなたのお傍に仕えたい」

「うるさいねえ。お前は黙って聞いてろと言つたろ！ 黙って舐めてろ、この馬鹿ッ」

吟子は煙草の火を岩見の頬に押しつけた。

「熱い、お許し下さい」

「少し、やさしい言葉をかけてやると、すぐつけあがりやがって！」

吟子は片足をあげて太股で岩見の首を巻いた。

「だけどねえ、あたしは、これから忙しくなるのよ。いろんな人と会い、いろんな勉強もしなければならぬし、仕事も、ふえるだろう。あんな店に勤めても居られなくなる。毎日、あたしに会いにマスコミや芸能関係の人が押し寄せてくるわ」

岩見は吟子の言葉に、吟子の華やかなスタ

ーの生活を想像した。

「だからそうなれば、お前とつき合ってもいられなくなるかもしれないよ。まあ、お茶汲みぐらいには、使ってやるかもしれないけどね。フフフ」

吟子は、いまが話を持ち出すチャンスだと思った。

「ああ、だけどそうになると、こんな汚い狭いアパートじゃ、足もとを見られちゃうわ」

キュッと腰に力を入れて舌を締める。

「もっとマシな、マンションにでも引っ越さなきゃならないわ。ね、そうだろう。いくら何でも、こんな貧弱な部屋じゃ、スターの住む部屋じゃないもん」

吟子は岩見の顔色を見ようとしたが、うつ向いて懸命に奉仕している岩見には、聞えていないのか、分からなかった。

「よし、口をきいていいよ。ねえ、お前だっで、そう思うだろ」

「ハイ、そう思います」

「じゃ、どうしたらいい？ お前は、あたしのために、できるだけ尽すと言ったね。それじゃ何とか考えてごらんよ」

答は勿論、簡単だ。マンションを買ってやればいいのである。だが岩見には、そんな大

金はない。

「ねえ、何とかならない？」

吟子は岩見がどれだけ金を持っているか、どれだけ出せるか「値踏み」しているのだった。

岩見の顔に苦渋の色が浮んだ。

——さすがに、マンションを買うだけの金はないな——

と吟子は思った。それなら第二段の作戦がある。それも佐戸崎から教えられたことだ。

「ああ、そうだ。いいことがある。お前のマンションに住んでやろう」

「えっ、僕のマンションに？」

岩見の顔に晴々とした表情が浮んだ。

一も二もなくOKの顔色である。そうなれば毎日、吟子と一緒に暮せるからである。

旧知の集まり

吟子は、岩見のマンションの中の改装を命じた。

岩見は吟子の言う通りに古びた壁に新建材を張り、窓の形を変えてサッシュを入れ、新しい家具を入れると見違えるように綺麗になった。浴室も改装し、ベッドも特に上等なの

を奮発した。

何やかやで百八十万もかかった。

改装中は岩見の家具を吟子のアパートへ移した。狭い部屋一ぱいになったので、その間吟子は近くのホテルに泊まり、岩見が吟子のアパートに寝泊まりした。

改装については毎日、吟子と岩見が行って吟子が、あれこれ注文を出すと、岩見がその通りに職人に頼んだ。

改装が九分通り出来上がった時、佐戸崎が例によってフラリとやって来た。

「オッ、ばかに綺麗になったじゃないか」

佐戸崎は、あちこちを褒めた。けなすことしか知らない佐戸崎としては、珍しいことだった。

岩見も満更、悪い気はしなかった。

「バカに景気がいいんだな。ずい分、掛かったろう」

「ええ、あと家具も取り替えたんで、百八十万かかりました」

「フーン、大したもんだな」

「実は、ここへ吟子さんが引っ越してくることにしたんです」

得意のあまり、うっかり口をすべらしたが佐戸崎を刺戟するようなことを言ってしまった

たかと後悔した。

「ホウ、君も女にかけては、いい腕になったな。吟子と同棲するまでに、こぎつけたのかい。見直したぜ」

吟子の話をしたら、何かと聞いて来るかと思つたが、佐戸崎は案外アツサリしていて、それきりだった。

「そんなに景気がいいなら、俺の方の残金もあとわずかだから、まとめて払えよ」

残金の二十万を払って、これでサッパリしたいと岩見は思った。

改装が、すっかり出来上ると、岩見の家具を入れる余地がなくなった。せめて仕事机だけでも置かせてもらおうと思つたが、

「あんたが、ここで仕事されたんじゃ、まずいわよ。いろんな人が来た時、変な目で見られるわ」

結局、吟子のアパートに岩見が落ちつくことになり、何のことはない、岩見のマンションと吟子のアパートとを、そっくり取り替えた形になってしまった。このアパートも岩見が見つけた、権利金や礼金まで払って吟子を住まわせたものなのだ。

要するに、岩見は吟子にマンションを乗っ取られたかたちとなつてしまつたのである。

もちろん名義は岩見のものである。これは岩見が一生懸命、働いて貯めた金で四年前に買ったもので、当時は六百五十万だったが、いまは一千万以上に値上りしている。

吟子は「当分の間、借りる」というような形になった。もちろん正式の貸借形式をとつたものではないから、期限もないし、月々の雑費は岩見が、いままで通り払わなければならなかった。

部屋が、すっかり出来上がると、吟子は友達を呼んで、お祝いのパーティをひらいた。

集まつたのは北尾ディレクター、プロデュサーの湯浅、テレビ局企画部の鈴木、アングラ劇団の主宰者星山、女優の太田ハルミ、クラブメルシーのママ洋子、それに佐戸崎昂の七人だった。

岩見はパーティの支度のために朝からテンテコ舞いだった。部屋のあちこちに飾りをつけ、料理を作ったり、酒や肴を買い集めたりで、休む暇もなかった。

岩見は吟子が佐戸崎を招んだことが気に入らなかつた。あれほど嫌っていた佐戸崎を、何故、招んだのか。佐戸崎から逃げて廻つていた吟子が、わざわざ新居に招くというのはまた自分に隠れて情交が再燃したのでは……

という疑いが強く、わいてきた。

夜の七時に集まるということで支度をして待つていたのに、実際に皆が来たのは十時を過ぎていた。どうやらメルシーで飲んで来たらしく、皆、酔っぱらっていた。

入って来るなりラジオのボリュームを上げてゴーゴーの音楽を流した。

今夜の正賓は北尾ディレクターだったが、一番ハッスルしているのは佐戸崎だった。

「サ、踊ろう！」

と忽ち皆でゴーゴーを踊り出した。

「暑いねえ。女の人には裸になれよ。俺も脱ぐぜ」

佐戸崎は上半身、裸になった。

「よし、なるわよ」

吟子は勢いよくパツパツと服を投げ捨ててブラジャーとパンティだけになった。女優の太田ハルミも裸になった。

岩見はコソコソと人影に隠れるようにして皆の脱いだものを整頓して廻った。

吟子は北尾に抱きついてチークダンスをやる。佐戸崎もハルミを抱いてキスしながら踊る。ママは湯浅と踊っていた。

吟子は鈴木と踊り、星山とも踊った。踊り疲れたところで、

「ああ、腹が減った。サア食おう。おい、岩見。テーブル出せ」

佐戸崎が下僕でも扱うように命じた。

「たん、隅へ寄せたテーブルを又、中央へ運び出す。岩見一人では、どうにもならなかったが、鈴木が立って来て手伝った。」

「おい、酒だ酒だ。日本酒、持って来い」

日本酒は、まだお燗がしてない。岩見は慌てて、お燗をした。

誰も岩見を眼中におかなかった。エプロンをした岩見を、男のお手伝いさんぐらいにしか、思っていなかった。

「何をぐずぐずしてるの。早く持ってきて」
吟子も召使いのように言う。これは仕方がない。

「ああ、暑い。おい、お絞りを持ってこい」
上半身、裸の佐戸崎は、ソファにふんぞり返って、忙しい岩見に次々と用を命じた。

そこへ岩見がタオルを盆にのせて運んで来た。佐戸崎は

「おい、岩見。俺の身体を拭けよ」

さすがに岩見も腹が立った。

「自分で拭いて下さい」

「なに、この野郎、生意気な口きくなッ！」

佐戸崎は足で岩見の脛を払った。岩見はズ

シンと尻餅をついた。

「何よう、人様の前で」

吟子が、たしなめた。岩見は佐戸崎に対して怒りを、ぶちまけようと思った矢先に、吟子から、ひと言、言われただけで萎えてしまった。

乱交パーティ

「おい、星山君。ヒリッピンの煙草、持ってきたか」

「ウム、持っては来たが、いいのかな」

「出せよ。これだけ、すばらしいメンバーが集まったんだ。やろうよ」

ヒリッピンの煙草というのは隠語で、マリファナ煙草のことである。

星山が出した煙草のケースを佐戸崎が受け取って一人一人に吸わせた。プロデュサーの湯浅は五十近い男だったが、用があるといって帰った。彼だけが中年で何となく煙たい存在なのを自分でも意識してか座を外したのだった。皆にとっては、その方が、むしろ気安くなれた。

「ふかしたんじゃダメだぜ。胸一ぱい腹の底まで吸うんだ。ホラ、こういう風に」

佐戸崎はマリファナ煙草の吸い方をママや鈴木に教えてやった。

お燗がついたので岩見は酒を運んだ。

「畜生！ 酔っぱらい共、うんと飲め——
徳利五本の酒は、すぐなくなった。面倒くさいからヤカンで沸かした奴を皆のコップにどんどん注いで回った。」

ラジオのボリュームを再び上げて、部屋中ガンガン鳴り出した。

吟子は北尾に、のしかかるようにしてキスしたが、そのまま二人は隣の寝室へ消えた。

「ああ、暑いわ」

メルシーのママの洋子が和服の帯を解き、着物を脱いで赤い花柄の長襦袢姿になり、しごきも、ほどいて長襦袢の前をはだけた。下には、とき色の腰巻をしていたが、グイと立て膝して、大胆に内股を覗かせた。

ハルミはブラジャーをとり、パンティも脱いで素っ裸になった。

佐戸崎はブリーフをとってハルの上に重なり、皆の前でファックした。

星山がママに躍りかかって挑む。若い鈴木は「ウォーッ」と吐えた。

皆、けものになっていた。岩見はキッチンから冷ややかに眺めていた。マリファナの威

イメージギャラリー 『女王様の怒り』 岡 たかし



力に、今更ながら驚異を感じていた。

男と女は牡と牝となり、次々に接触し、完全に乱交パーティと化した。

岩見は狂った男女の狂態よりも、気になるのは寝室の吟子と北尾の様子だった。

吟子が北尾の背を押すようにして寝室に入

れたあと、チラと振り返って見たのは、佐戸崎ではなく岩見の方だった。岩見を見てニヤリと笑った。その笑顔が印象に残った。

「許してね」と言っているのか「どう？ う

らやましい？」と笑いかけてるのか。どうも後者の方だろうと思った。

佐戸崎は今度はママの洋子に挑みかかる。いつも慎しみ深く、上品に構えている洋子が、佐戸崎に挑まれると、我から床に寝た。

——みんな勝手にやれ——

他の人々が、どんな狂態を演じようとも、大して気にもとめなかった。岩見はキッチンにもどって、皿を洗っていた。

散々女体を飽食して仮睡していた佐戸崎が急にムクリと起き上ると、

「サア、これからヤプーショーをやろう。おい、岩見君。君も此方へ来いよ」

「いいです。僕は疲れてますから」

朝から料理の支度や接待の準備で動き廻ってクタクタだった。

「まあそう言うな。皆、楽しくやってるのに君だけ除け者にしてたのは可哀想だった。君も我々の楽しいグループの仲間に入れてやるよ。来いよ」

——誰が行くものか。こんな気狂い共の相手に、おもちやにされるのは、かなわない——

「フフフ。奴ひがんでやがる。おい、来い」そこへ全裸の吟子が寝室から現れた。

「お、ヤプーの女王さまがお出ましになった

女王さま。もうお仕事は終わりましたか」

佐戸崎は皮肉たっぷりに言い、吟子の前に最敬礼した。

「サア、女王さまが御来臨になったんだからヤプー、コラ、出て来い！」

岩見は聞えぬ振りをして皿小鉢を洗っていた。佐戸崎は吟子の耳もとで小声に、

「北尾どうした？」

「フフ、ノビちゃったわ。案外、弱いだよ」

「ヤプーショーやろうってんだよ。女王さま頼むぜ。奴、臍を曲げちゃってるんだ」

「岩見君、おいで！」

吟子が命令した。これには従わざるを得なかった。

「おい、どうした。元気、出せよ。お前も裸になれよ。服、着てるのは、お前だけだぞ」

佐戸崎の言うことは無視し、岩見は間近に吟子のスラリとした裸身を見た。吟子は前をかくそうともせず、開けっぴろげで立っている。微笑をたたえた顔は美しいが、目がトロンとして視線が定まらない。

「此奴にもマリファナ、吸わしてやれ」

佐戸崎が、マリファナ煙草を、放ってよこした。

「吸って見な。いい気持になるぜ」

——誰が吸うものか、こんな麻薬を——

「吸えよ。高い煙草なんだぜ。おい、吟子。吸わしてやれよ」

吟子は煙草を拾うと……口に咥えた。岩見の顔の前に煙草を突きつけてピクピクと上下に煙草を動かした。

「あんたも朝から大変だったわね。御苦労さん。いい子ね」

と頭を撫でる。ヒョイと煙草を抜いて、岩見に咥えさせた。吸口がベトベトに湿っていた。吟子が火をつける。

「胸一ぱい、一気に吸うのよ」

——どうせ俺は皆のなぶり者にされるのだ。そんなら、いっそ麻薬の力を借りて、何もかも分らない状態になった方が、楽かもしれない。一度ぐらい吸ったって中毒にはならないだろう。麻薬の味がどんなものか、知っておくのも経験だ——

非常に臭く、苦く、からくて、うまい味ではなかったが思い切って胸一ぱいに吸った。

頭がクラクラとして、まるで初めて煙草を吸った時のような気持だった。

「此奴ア、吟子の言うことなら、何でもきくんだ」

佐戸崎が皆に説明していた。

メルシーのママの洋子は、吟子から岩見のひととなりや、表向き夫婦だが実は奴隷であることは聞かされていたが、まさか、こんなにまで差をつけて、こき使っているとは思わなかった。この家が吟子のものではなく、岩見の家であることを知っているのも佐戸崎と洋子だけである。

なぶりもの

ラジオから流れる音楽がビンビン鼓膜を刺すようにツンツン聞え、それが苛立たしく欲望を刺戟し、岩見はマゾヒスティックになってきた。

「此奴は便利な犬なのよ。ねえ、そうだろう。」

吠えてごらん、タカシ」

「ワン、ワン、ワウーオッ」

犬になれと言え、両手を前について犬のような恰好で吠えた。

「それに便利な掃除器なんだ、此奴は。電気も何も要らない完全自動掃除器だよ」

吟子は誇らし気に身体を反らせ、岩見の顔に跨がった。

「へエ、それがヤプーっての。面白い動物やね」

太田ハルミは神戸から来た女なので、時々関西弁が出る。

「こういうの一匹、飼っとくと、便利だよ。あんたも使ってみる？」

岩子は大きく足をあげて岩見から退いた。

「へエ、面白いわあ。ほな、あたしも一ちょう使わせてもらうわ」

ハルミの裸身は白く、背はあまり高くなかったが、肉づきがよく、60キロぐらいはあるかと思われるグラマーだった。

岩見の顔の上で膝に手を当てて四股を踏むような恰好で両股を大きくひろげて、しゃがんできた。

岩見は下から見上げた時、マドンナのあけみがやって来たのと錯覚するほど、その肉づきや形が似ていた。

だがズッシリと乗っかってきた感じは、あけみより、はるかに重量感があった。

ハルミが両股で頬を締めあげると、岩見の顔は狐のように珍妙な顔になった。

「アハハ、おもしろい顔、しとるわ」

だがハルミは、方法を知らなかった。口と鼻を一ぺんにふさいでしまったのだった。

「ウッ、ウッ。ム、ム、ムウ」

岩見は巨大なハルミの尻を抱えるようにし

て持ち上げようとした。

「ああ、ダメよ。そいじゃ息ができないで窒息しちゃうよ。鼻をふさいじゃダメよ。死んじやうよ」

「あ、そうか。ほんまや。息しとるんやもんな。あたし道具と間違えてしもうたわ。アッハハハハ」

心持ち、尻を下へ、ずり下げる。ハルミは笑っているが、岩見にとっては死ぬ苦しみだった。

「ああ、なるほど、こりゃ具合、いいわ」

プリプリと尻を、よじる。

「こりゃ、気持よろしな」

関西弁で呑気に、しゃべっているが、何しろ尻が重く、太腿はダンスで鍛えているのか意外に堅く、その両股でギュウギュウ締められるので、吟子よりも残酷度が強かった。

ハルミには全然、羞恥感がない。それは麻薬の故もあるかもしれないが、岩見を全然、人間と思っていけない扱いだった。

ハルミは上から岩見の顔を覗きこみ、自分の太腿の加減や、上からの圧迫度で、いろいろに変化する岩見の顔を、珍しい動物でも見るように眺めて楽しんでいた。

「ハルミ、なかなか、やるじゃないか」

「重いからねえ、コワされやしないかと心配なのよ」

「アハハ、大丈夫だよ。ちよっとや、そっとで、参るような野郎じゃねえ」

「ママも、やってやんなさいよ」

佐戸崎の首を抱いた吟子が洋子に笑って言った。洋子は口もとに慎しみ深い笑いを、ちよっと浮かべて立ち上った。

男も女も皆、全裸だったが、洋子だけは赤い長襦袢に腰巻をしていた。もっとも、その長襦袢も肩から半分、ずり落ちて前は、だらしなく開き、腰巻も思いきり捲くられて臍の上まで剥き出しになっていたのだった。

洋子は、ふだん店では和服をキチンと着こなして、どんな客にも丁寧な言葉使いで、慎重深く、上品に振舞っていた。旦那がいるという噂で、ママに言い寄る男は少なかった。

二十七、八に見えたが、実際は三十半ばをすぎているのであろう。江波杏子のようなエキゾチックな顔立ちで、着物よりも洋服の方が似合うだろうと思われるのに、いつも和服を着ていた。それは上半身は普通だったが脚が太いからだった。

いつも慎しみ深く、上品なママが、今夜は全く乱れてしまっていた。佐戸崎と鈴木に抱

かれて三十女の熾烈な官能が呼びさまされたのだった。

吟子やハルミのやっているのを見て、自分もやりたくてウズウズしていたのだった。

吟子から声をかけられるのを待ち受けていた様子だった。

洋子は岩見の横に立て膝ついて座ると、タオルで岩見の顔を丁寧に、何度も何度も拭いた。

岩見は視線が定まらなかったが瞳をこらして、いま自分の傍らに居るのがメルシーのママであることを認めた。

岩見がメルシーに行くと「いらっしゃいませ」と丁寧に頭を下げるママだった。「吟子さん、とても、いい方ですわ。よくやって下さいますので助かりますわ」などと、客のいないところでは、お世辞も言ってくれたママだった。

そのママが、いつも店にいる時の微笑を絶やさずに無言で見つめている。

ああ、ママが介抱しに来てくれたのか？と思った瞬間、洋子はソッと腰を上げるとサッと足を上げて、岩見の顔を跨いだ。

目の上一ぱいに爛熟した女の下半身が、おおいかがぶさって来た。

その肉体は太田ハルミに負けないくらい、ボリウムがあった。

岩見はチラと洋子の顔を見上げた。洋子の表情は少しも変わらず、例の微笑を浮かべている。

暖かい太股が頬にピッタリと、くっついてきた。慎ましかな女^{ひと}にしては荒々しい部分だった。

——これが、この女の正体か——

そう思った時、両の太股でガッチリと顔をはさまれた。とき色の腰巻が、何か卑猥に感じた。そう思う間もなく、あたりは真っ暗になってしまった。

洋子は目をつぶって静かに体を動かしていた。その腰は腰巻でスッポリかぶせて掩われて見えなかった。

吟子と佐戸崎は頬をつけ合って、洋子の方を眺めていた。

「ママ、何よう、その恰好。見せてよ。裸になんないよ」

洋子は吟子の方を見てニコリ笑った。

佐戸崎と吟子、ハルミと鈴木、洋子と岩見この三つのカップルは気が合ったと見えて長い間、続いた。

それは、長い時間だった。

二匹のヤブー

洋子は、いつまでも岩見を離さなかった。もう三十分以上も、おさえつけていた。

最初は腰巻をかぶせていたが、いまは、その腰巻もはだけて、下の状態が剥き出しになっていた。

岩見も、くたくたに疲れていた。

吟子は比較的、軽いし、要領を知っているので楽だったが、ハルミの60キロに近いグラマーなお尻でモロに潰されたあげく、いままた洋子の意外に重い体を、ともに受けて、しかも執拗に、いつまでも同じ責めを繰り返されて、いい加減、参っていた。

要領の悪い女は鼻まで、ふさいでくる。

これは命取りになるから岩見も慌ててバタバタと暴れ出すと、洋子も気づいて呼吸をさせてくれるが、夢中になると又、乗り出して来て、ふさがれてしまうのである。

疲れて舌の動きをとめていると、両股で締め上げて責めてくる。

洋子も胸を大きくはずませて、かなり疲れしているようだが、何度も「峠」に達しては、また登り詰めることを楽しんでいる。

三十女というのは、平素、抑えていただけに、一度、爆発すると、食欲で残酷だった。

——もう勘弁してくれ——

と心のうちで何度も叫んだが、洋子は許さなかった。既にトレードマークの微笑も消えて、あの慎ましくて上品な洋子の顔が、岩見には鬼女のように見えた。

佐戸崎と吟子は抱き合って眠っていた。

ハルミと鈴木の方は、鈴木の方が参ってしまった。

怒ったハルミは、鈴木の前へ跨がった。

「おい、よせよ。俺はヤプーじゃないよ」

「何言ってるんのさ。だって、あんた、男じゃなくなってるじゃないか。男の勤めが果せないならヤプーにおなり」

イヤイヤをするように首を振る。それを両の太股でギュツとはさんで上向きにさせた。

「コラ、ヤプー。しっかりせいな」

ググツと上から、のしかかると、鈴木はハルミの太股を抱えて持ち上げようとしたが、ビクともしない。

「ハハハ、自分のものは自分で始末しいな」

女二人が互いに背中を向け合って、男を責めて楽しんでいた。

こうなると男は全く、だらしがなかった。

それに引き替えて女は底知れぬ強靱さと、欲の深さを剥き出しにしていた。

ハルミにしても佐戸崎、星山と……、岩見を責め、更に鈴木と……のあとも、まだ求め続けて、狂暴になっていた。

抵抗しても無駄と知った鈴木は、おとなしくなって、ハルミの言うことをきいた。

「そやそや、それでいいのや。もっと上や、ホレホレ」

無抵抗となった男に、完全に征服した充実感が、ハルミを一層、サジスチックにした。

顔はあどけなく笑い、関西弁の柔らか味のある言葉がヒョイヒョイ出てくるのに反してその下半身は巨大な苛酷さを加えて行った。

ハルミの巨きな太股の間にはさまれた鈴木は、強力な締め木にかけられたみたいに貧弱に瘠せ細って見えた。

しかも、その上から（かな）でも掛けるように荒々しいものが、顔面の皮膚を削り取るように摩擦され、それが一点に留まった時は、ローラーに押し潰されるような重圧を加えている時だった。

ハルミは鈴木を完全にヤプー化してしまった。

一方、洋子の方も、かなり疲れが見えて来

ていたが、それでも岩見を執拗にジワジワと責めを、くり返していた。

岩見の方は、もう頭がボーとしてしまったただ無意識に舌を動かしていた。

この分では岩見が意識を失うまで、洋子は責めて責めて責め抜くつもりかもしれない。

洋子も遂に疲労が増してきたが、四つん這いの形からゴロリと横に寝てしまった。

それでも太腿の中にはさんだ岩見の顔は、ガッチリと包みこんだまま離さなかった。

そこへ行くと若いハルミは、まだ元気はつらつである。

「ホレホレ。アッ、アー、ホレホレッ」

と一人で大声で、はしゃぎながら、ギャロップを楽しんでいる。

「ウム、ムウ、ムッ」

鈴木の苦悶する声がハルミにとっては、こよなく楽しいもののように、一層キャッキヤツと、はしゃぎ回るのだった。

岩見はゴムのように弾力のある洋子の内股を枕に、しばし静止の状態だった。いまは重い尻の重圧もなく、頬の上にあるのは洋子の太腿一本だけである。

岩見は、とかげのように舌をチロツと出したり引っ込めたりしていた。

と、また洋子が大儀そうに身をおこして、跨がってきた。

——又、あの重苦しい責め苦にあうのか——
 と思ったが、そうでもなく、洋子は片膝を曲げて、重心をその上に乗せているので、それほど重圧は感じなかった。

僅かに尻を動かしたのは「口を開けろ」という命令だった。口は、もともと開いていたのだが、更に大きく開いた。

そのとき、口の中に異質の液体がササッと流れ込んできた。

アッ！

一瞬、岩見はメンスかと思った。かつて吟子にやられた時のことが想い出された。

その味は、塩からく苦味があったが、そうではなかった。

岩見が飲み込むのを待って、またササッと注がれた。

岩見は下から洋子を見上げた。例の微笑が浮かんでいた。「いらっしやいませ」と深々と頭を下げる。あの慎しみ深い上品な笑顔だった。洋子は微笑を浮かべて岩見と視線を合わせたまま、実に巧みにコントロールして、少しずつ飲ませているのだった。

「いかがでございます、お味は？」

岩見は夢中で飲んだ。何回も何回も二、三秒おきの間隔で続いた。みるみる胃袋が一ぱいになって満腹感を覚えたが、

「まだでございますよ。もう少し……」

というように洋子は続けた。

口から少しこぼしたが、殆ど飲んだ。

そのあとで、またあの重苦しい圧力がグーッと加わってきた。

岩見は頭がクラクラとして意識を失った。

冷や冷やとした朝の冷氣に、岩見は目を覚ました。

首は依然として洋子の太股に、はさまれていたが、そこは動きをとめていた。

岩見は、そっと起き上った。首と肩が岩のように凝っていた。

あたりを見まわすと、てんでに毛布や夏布団を持ち出して、ひっかぶって寝ていた。

佐戸崎と洋子、星山とハルミ。そのハルミの下半身にまつわりつくようにして、鈴木が眠っていた。

岩見は顔中が突っ張って、筋肉が動かなくなっていた。

洗面所へ行ってガス湯沸かし器から湯を汲んで顔から首、胸のあたりまで丁寧に洗い何度か、うがいした。時計を見ると六時半だ。

服を着て、音を立てぬように部屋を出た。

明治神宮に散歩に行き、帰りに喫茶店でトーストとコーヒーで朝食をとり、新聞を読んだが、まだ皆、眠っていた。

「サア、起きて下さい！」

岩見は大声で言い、窓のカーテンをサッと明けて外の陽ざしを入れた。

河岸のまぐろのように男女の裸がゴロゴロしているのを陽光の下で見ると醜いものだ。

「ア、アー、もう何時だ」

「今朝は建築会社から内装変更の検査に来るんですよ。もう間もなく来ますよ」

「エッ、そりゃ大変だ」

皆は大あわてに起き出して、服や着物を着た。そして、そそくさと出て行った。

「あたしは、いた方がいいかしら」

吟子は、おどおどして聞いた。

「僕一人で大丈夫です」

「じゃ、あたし朝御飯、食べてくるわ」

吟子も逃げるように出て行った。

——ざま見ろ。何といっても、この部屋あるじの主は俺だ！——
 獣たちを追っばらって岩見は、せいせいしたというように深呼吸した。

——(つづく)——

先輩 後輩

中世は戦国の時代であった。これは日本でもヨーロッパでも同様である。国興り国亡びその興廢にまつわる悲劇は枚挙にいとまがない。そのたび毎に家を焼かれ、肉親を虐殺される無事の民衆が悲惨であることは言うまでもないが、古来、王侯貴族の夫人や姫君にしたところが例外ではなかった。ごく稀なケースであったとはいえ、それは語り継がれ、書き残されて人々の涙をさそったものである。

織田信長に滅ぼされた荒木村重の姫達。又、ジンギスカンに略奪暴行されたサラセンの貴女たち等、数えあげればきりのないことであろう。

ここに、由緒正しい大英帝国のプリンセスメリーに襲いかかった数奇な運命は、これら如何なる女王も王女も未だかつて経験した例を見ない程、残酷なものであった。

はじめは王女の誇りから、健気にも抵抗をやめなかったのだけれども、実の姉のように慕っているジャネット・イングリス夫人を拷問されては遂に泣く泣く有明の軍門に降るほ

かはなかった。

今はもう「ハア・ハインス（王女殿下）」などと、丁重な言葉をかけられる身分ではない。それどころか、赤ハダカに引き剥がされた裸身を鞠のように有明の足下に、転ばさなければならぬ一匹の家畜でしかないのである。

ともあれ、メリー王女は死ぬよりも酷い凌辱に、くたくたになって、もとのセル（第六回参照）に戻ってきた。ゆでた、とうもろこしを突き刺したままである。後手に縛られて



いては、どうしてそれを抜きとることが出来るのだろう。意地の悪い日本女たちは、口々にソノ部分の筋肉を使って押し出したらいいと嘶し立てていた。それさえ王女には何のことかわからなかったのである。ちょっと、いきんでも飛び上がるほど痛んだ。

ジャネット・イングリス夫人も、どこかセルの一つでメリー王女と同じ姿で呻吟しているにちがいない。捕えられた女囚たちは刺青や材質測定が終ったあとは夫々のセルに押し込められている。そして、もっぱら聴覚を通じて、様々な方法で洗脳、乃至、予備的調教を行うのである。

前号まで秘密裸女王国の独裁主、有明は世界中から誘拐蒐集してきた数千の美女に君臨し、それに畜従隷従を強制している。彼女等はその材質に応じて、五段七階級に分類され巧妙に統制管理されている。有明の日本人至上主義によって白人女性の苦難は特に甚しい。アムステルダムでつかまった元子爵令嬢朝小路久子の場合、全くのハプニングで、後輩の百合子に気付いて、その秘密を探ろうとしたのが運の尽きだった。ロンドンではメリー王女さえ巧みな替え玉作戦で有明のコレクションに加えられた。

身動きも出来ないセルの中で、後手縛りのまま、丁度、養鶏ケージの中の、めんどりさながらの単調な暮しに、彼女たちは直ぐに飽きはじめる。そこへ、囁かれる言葉は、これから行く先にある天国みたいな生活のことであつた。半ば疑いながらも、繰返しシツコク耳に入ってくる甘い誘いに、つい段々と心を動かして行く。そして、どんなことになつたとしても、今の状態より悪くなりはいない——などと、開き直つたような、捨鉢の気持が芽生えて行くのであつた。

G号作戦発起以来、つぎつぎと、このセルに収容されていった女囚たちの多くは数日も経ないうちに従順になり、早くこの潜水艦が目的地へ着いてセルから解放されることを唯一の願ひとするように馴らされはじめた。

だが、タッター一人、どうしても、おとなしくならない悍馬がいた。元子爵、朝小路家のお姫さま、久子である。彼女の肉体番号はG—一七二号と醵されている。

まだそのあたりにチクチクした痛みが残っていた。しかし、その痛みなどは、彼女の自尊心が受けた傷手に比べたら物の数ではなかったといつていい。

猿轡が一旦、外された直後、彼女は舌を噛んだ。自殺を企てたのである。しかし、現代人である久子にとって、それはそう容易いことではなかった。舌の一部を切ったのが、やっとである。それでも、たちまち鮮血が噴き出して、アマゾン女兵をあわてさせた。彼女は、ただけしく満足して、これで死ぬだろうと目を、つぶつた。だが、それは少しの間、彼女に気を喪わせたにすぎなかったのである。

息を吹きかえした久子は、先ず第一に死ねなかつたことを深く悔んだ。彼女の状態は少しも変わっていない。いや、もっと悪くなつてしまつていた。腫れあがつた舌は火のように熱く、切れたところがキリキリと、うずいていた。そして、その舌が口の中に闖入している、何か鉄のような金属でガッチリ挟み込まれているのに気付く。その金属は鉄特有の酸っぱいような味がしていたからである。あとからあとから溢れてくる唾液を飲み込もうとしても出来ない。半開きになつた唇は顎からガッチリとおさえつけられて、あけることもつばめることも出来ない。しまりのない唇から唾液が流れ出して、頬をビショビショに濡

らしているのに、後手に縛られていては、それを手で拭うことも不可能であった。

「ウー、ウー」

何か言おうとしても言葉にならぬ。獣のよな呻き声しか出せなくなってしまうた。

「どうだね。もう舌を噛むわけには行かなくなっただろう」

嘲笑するような声音だった。男の声だと気付くと、久子は本能的に裸身を折り曲げて、その視線から、少しでも恥かしいところをかくそうと、もがいた。

今日は何日かということさえもう久子には、わからなくなってしまうていた。時間の観念すら、わずかに食事のリズムによって昼夜を想像するしかない。だから、ちょっとした間、意識をなくして、蘇生した瞬間、何か朝が来たような錯覚を持った。アムステルダムで誘拐されて以来、彼女に加えられた数々の暴力を、苦しい悪夢として現実から押しやっってしまうとす

る空しい努力も、潜在意識の中にあつたものであろう。

たしかに今、気付いた直前、彼女が見ていた夢は、家柄と美貌と才能と三拍子、揃った彼女が、それにふさわしく行動するヨーロッパ生活の一コマであつたから、夢にしても醒めないで欲しいとシガミついていたともいえよう。だがそれも、ほんの数秒程の、あがきでしかない。肉体に加えられた理不尽な拘束

それに加えて身近に降ってきた男の声などが忽ち、彼女を地獄のような現実に押し返すのであった。

「ア、アウー……」

ギャグの下では悲鳴すら間の抜けた、くぐもり声に変わってしまう。

誰かが久子の足首をつかんでネジった。丸まっていた彼女は、いとも簡単に仰向けに、ひっくりかえされて身体を開いてしまった。

そこはもう、殺風景なセルの中ではなかった。フカフカの絨緞は、背中に押しつぶされそうになった彼女の後手を、やさしく包んでくれる。何やら甘美な香水の匂いが漂っている。思い切って目を開いてみた久子が目前にしたのは、蒼白な顔を硬直したように固くしている山本百合子だったのである。

一切の記憶が、堰を切ったように呼びもどされてきた。久子の目が憎悪に燃えて百合子をニラみつける。その凝視に耐え切



れずに顔をそむける百合子は、じつとうつむいて唇を噛むしか出来ない。奇妙なコントラストであった。身動きもままにならず、口まですりつかれている久子が、逆に一切が自由である筈の百合子を苦しめ、さいなんでいる。「百合子を憎んだり、恨んだりするんじゃないぞ。すべては、私の命令で行われたのだから……」

再び男の声が耳に入った。

昨夜、メリー王女を責め抜いた有明の居室が、今夜は朝小路久子を生贄にしようと待ちかまえていた。

濡れぬさきこそ露をも厭え——という譬があるが、汗と垢にまみれ、電気鞭に追い廻されていた、あの海底カプセルの凄烈な一週間で、久子は裸体でいることの羞恥を忘れかけてしまっていた。事実、次から次へと、ふりかかってくる苦難は、そんな羞恥心など吹き飛ばしてしまう程、残酷なものだったからでもある。だからこそ、普通なら正気にかえった一瞬、先ず自分が素っ裸にされていることに全神経が集中して、オロオロするところを、今はむしろ、そんなことより、自分をこんな目に合わせた百合子を憎むことに頭がい

ってしまったのである。

だが、それとても僅かの間、線香花火のようなものでしかなかった。百合子の後から、その肩を抱くようにして起きあがった有明を見て、久子の瞳は忽ち恐怖のため、引きつってしまふ。彼女とて、このおそるべき美女誘拐組織のボスが有明であることを知りはじめていたし、女囚たちに加えられる艱苦の一切が有明の命令であることも察していた。

無意識に、いざって離れようと、もがく白い裸身。その曲線のうねりを好もし気に眺めながら有明は、その俛、放置していた。餌物はもう、どれもこれも、逃げる気遣いはないのである。何もあわててゐることはなかった。

「こんなことになったのも……」

聞くまいとしても有明の声は嫌でも耳に入ってくる。壁につかえてしまった久子は、さすがに諦めたのか有明に背中を向けて動けなくなつた。

「大体、オマエが悪いんだよ……」

オマエなどと呼ばれたことは始めてであった。みじめさがグサツとばかり久子の心を突き刺す。

「もともと、お前は私のリストに載っていた

ものではなかった。偶然、アムステルダムのホテルで、この百合子を見つけたことが、お前の運の尽きだったと思うがいい」

——そうだったわ。百合ちゃんを見つけて、追っていったのが悪かったんだわ。

と、久子も想い起していた。それにしてもつい十日程しか経っていないと思われるのに一切が何と違ふ離れ去ってしまったことか。

「オイ、いつまで寝そべっているんだ。朝小路子爵の令嬢ともあろうものが、何というお行儀の悪さだ」

嘲るような有明の声が聞えると久子は、それでも必死に恐怖をおさえ、抵抗をこめて、その声を無視しようと努めた。

「聞えないのか。よし、百合子。こいつの髪の毛を、ひっ掴んで起してやれ」

「ああ……」

とうとう、来るべきところへ来てしまった——と百合子は思う。有明に仕えるためにはこの友への友情まで裏切ってしまったわけにはならないのだ。

シーニエス・キャンドル 白鳥燭台

百合子は、このところ、ずっと満たされな

い思いに苦しみつづけていた。焦れに焦れていた。だからといって、彼女の心が変わったわけではない。一切を有明に捧げようとする決心は固い。このG号作戦も、いつてみれば、

彼女のために発起されたのだと受けとめている。そして、それは彼女に対する有明の特別の配慮だとして、その背後に有明の愛情を感じて有難く思ってもいた。事実、父母に会ってみて、ハッキリと踏ん切りがついたことでもあった。又、派生的ながら、先輩の朝小路

久子や、お茶友達の辻本真知子まで巻き添えにせざるを得なくなってしまうが、これとても有明が彼女の忠誠度を試験するために与えたチャンスだということを熟知していて、言いかえれば、二人には気の毒だけれども有明の命とあれば、二人とも自らの手で殺すことすら厭わないと、秘かに思い定めていた。全く有明の口から、どんなことが出るのか、百合子には想像もつかなかったからである。

だが、それでもポツカリ穴の明いたような物足りなさが残って、百合子を苦しめる。なる程、有明は彼女の手をとったり、肩を抱いたりするようになった。だが、それ以上のことは何もしないのである。何もかも差しあげると誓ったことには、有明が彼女を奪って

くれないという焦りをこらえ通すことまで含まれるのかと、つくづく情けなくなる今日此頃であった。

何をするの、百合さん。あなたは鬼になってしまったんだわ。あんなに可愛いがってあげたわたくしを、こんなにいじめて……。

言葉を奪われた朝小路久子は、口惜し涙を滝のように流しながら、後輩百合子の暴行を甘受していた。

それ程、百合子は易々として有明の言う通り、無抵抗な久子を辱しめていたのである。

髪の毛を握って引き起したことは、まだ序の口で、次には額を床にすりつけて有明に平伏しろと言いつける。当然のこと、久子が拒否すると、髪の毛をひっぱって無理矢理に頭を床にこすりつけてしまうのであった。後手に縛られている久子は、この暴力に屈するしかなかった。むやみにもがけば、もがくだけ自分の裸体を有明の観賞のために、さらけ出すことになることぐらいは、如何に逆上している久子でも、解らないことではなかった。裸である以上、乳や腰を見られるのは止むを得ないとしても最後の一線だけは開きたくなかったのである。

久子の気持は場数を踏んだ有明には手に取るように見え透いていた。相手が誇り高ければ誇り高い程、又、恥かしがれば恥かしがる程、それを征服する歓喜は大きい。

「百合子。君は、この者の肉体番号を知らなかったね。さあ、自分で調べてご覧」

有明は、まるで定期券でも調べさせるような声音でサラリと言ったのけた。

しかし、百合子にとっては、これは大仕事であった。たとえ、手の自由はなかったとしても、久子の下半身には何の拘束もない。そして番号のあるところは、久子が執拗に隠そうとしているズバリその場所であった。

たちまちレスリングのような組み打ちがはじまった。これがアマゾン女兵の誰かであるなら、日頃、鍛え抜かれたワザで、すぐに久子をおさえつけ、太腿をかかえ込んで、つい鼻先のところに突きつけられた数字を読みとることが出来たであろう。

しかし、百合子には喧嘩などした経験もない。いや、たった一回、有明のアレを……という光栄を、ジャンヌと争ったことがあった。(第63回参照)だが、それとてもジャンヌに叩きつけられて負け犬となった体験でし

かない。

それに、かかって行く百合子には、まだ多少の憐憫と遠慮があったのに比べて、守る方の久子は、それこそ死に物狂いである。手を縛られているハンディがあつてさえ、勝負は五分五分であつた。レスリングは延々として続いた。

美女二人の肉弾相打つ抗争は有明を、こよなく楽しませた。時間がかかる程よいので、有明は手出しをせず、黙って眺めているだけであつた。

次第に疲労を覚え、呼吸も切なくなつてきた百合子は、反面、野性的な斗争心を次第にむき出しに始めてきた。人間だって動物の一種だ。百合子のような深窓の令嬢にだって原始の時代に祖先が持っていた生存力、斗争力を本能的に秘めている筈である。

問題はテクニックだった。胸乳の上にまたがることは出来ても、二本の足をひきつけてその太腿をかかえこむことは出来ない。それではというので、足から、かかろうとすると蹴とばされてしまう。

百合子にとっては久子の口にギャグが嵌められていたことが大いに幸いしたといつてい

い。久子の口が自由だったら、それこそ、どこかを、噛み千切られていたかも知れなかつた。そのくらい無用心に百合子の身体は久子の顔におしつけられていたのである。

又、投げとばされても、ウォーター・マツトの上では負傷はしない。

残るのは百合子と久子のファイトだけであつた。二人ともハアハア言いながら、それでも斗いをやめなかつた。もちろん、防ぎ方の久子は、百合子さえ攻撃を止めればと願っていたのである。

——不思議だわ。あのおしとやかな百合さんが、どうしてこんなに、人が変わったようになつてしまったんだろう。こんなにしてまで彼女を駆り立てるマスターと呼ばれる男の魅力は、何なんだろう。

組んずほぐれつの最中に、久子はフトこんなことを考えていた。書くとき長くなるが、瞬間的にそんな思い方が、よぎつたのである。何かSF小説にあるような、不可解な力で百合子は洗脳されてしまったのかとも思う。おそらくは、はじめ囚えられたときは、久子と同じように身の不運を悲しみ歎いたのではなかつたらうか。

——それがどうして……
どうしても久子には、わからなかつた。わからないということは恐怖に通じた。

——助けてえ！ 彼女は、ただ、きれぎれにこう叫んでいた。ただし、口をふさがれていては相手に通じはしない。

時々、目にうつる百合子の顔が段々と変わってくるようであつた。それが紅潮したからというのではない。汗まみれになったからというでもない。そんな体験を持ったこともない久子だったけれども、百合子の顔に殺意というものが泛かんでいると感じた。

次の瞬間、躍り上がった百合子は、いきなり久子の上に馬乗りになり、両手を久子の首にかけてギュッと力を入れた。
「グウーッ」

と、のけぞる久子。そのとき早く有明がとびついて百合子を、ひき離れた。

有明と百合子は、抱き合つたまま、ハズミでマットの上を二、三回、転がった。

——嬉しい

百合子にとって願つてもないチャンスだつた。彼女は始めて有明の胸に、とび込むことが出来たのである。喜びのあまり、彼女はヒ

シとばかりシガみついていた。
「バカ。殺せとは言っていない。番号をみろ
といっただけなのに……」

といいながら、そんなに怒った調子でなく
有明は百合子のなめらかな臀部をピシヤピシ
ヤと叩いた。

有明だって、百合子を抱くのが嫌ではない
のだ。だが楽しみは、とっておいた方が余計
楽しくなるものである。第一、貴妃に任じら
れるべき彼女は、それにふさわしい手続きを
経た上で、はじめて彼の「女」とならなけれ
ばならない。

「さあ、もういっぺん、やってごらん」

すすり泣く百合子を、やさしく引き離れた
有明は、その淋漓と濡れた美しい裸身をタオ
ルで拭きとってから力づけた。一旦、やれと
いったことは、必ず、やらせるのが有明の主
義であった。百合子も、そのことは身にしみ
てわかっていた。

「こんどは縄を使えばいい。別々に足をくく
って部屋の両側にある環にひっかけて引くの
だ」

そつと有明が知恵を、さずけてくれた。
なんで、そのことに気がつかなかったのだ

ろうと百合子は思った。あまりにも馬鹿正直
に、とつくみ合いをしたことを悔んでいた。
彼女は有明がそれを、とつくり楽しんだこと
を想像もしていなかったのである。



今度は比較的、簡単だった。足首に一本ず
つ縄をからませることは、別々にやれば、少
し蹴とばされたくらいで何とか出来る。
あとは時間の問題だった。

久子の最後の時が来た。彼女はキリキリと
股を開いて固定されてしまった。

今は最早、かくしようもなく露呈させられ
てしまった股間に、覗き込むように顔を近づ
けた百合子が、勝ち誇ったような声音で、こ
う言うのが聞えた。

「Gの一七二番でございます」

久子の肉体に加えられる有明の拷問は、ま
だ終ったのではなかった。

コニャックをすすって一休みした百合子に
次の命令が出された。ギャグの間から久子の
舌を引っ張り出せ、というのである。

仰向けになって両股を一字に開ききって
いる久子の抵抗力は、もう殆ど、なくなっ
てしまっていた。百合子が膝で、その頭部をは
さみつけるようにすると、久子はもう顔を動
かすわけには行かない。顎のあたりのネジを
廻すと、久子の口は一層、大きく開いた。百
合子の指が久子の口にさし込まれる。さから
ったら、どんなことになるか知れない。さす

がに、もう諦め切った久子は、百合子の指がつまみ出した通り、舌をいっぱい突き出した。噛んだところが赤黒く腫れて、痛々しい舌であった。

不意に有明の手が、隠し持っていたヘアピンで、その舌の根を縫いとめるように突き刺してきた。

「ゲエー」

というのは久子の悲鳴であった。百合子も真っ青になって顔を、そむける。

そんなことに頓着なく有明はタコ糸のような太糸を、舌に突きさされたピンの両側にからげ結び合わせた。

☆読者告白原稿募集☆

◆左記テーマにて募ります◆

一、夫婦SMプレイの体験談

夫婦又は恋人間に於けるSM関係の体験談を、お寄せ下さい。写真があれば尚結構ですが、なければ文章だけで構いません。住所氏名その他、発表に支障のある事柄は、秘匿されていいのですが、体験の内容については出来るだけ詳細に御報告頂ければ幸いです。

「舌を噛み切ろうとしたお前だ。おそらく惜しくはないんだろうよ。くたびれたら、遠慮はいらないから、いつでも引きちぎってしまったらいい。その代り、蛇の舌のように先が二又に割れてしまおうだろうがね」

「アーアー」

冷たい汗をビッシヨリとかいた久子の顔は苦痛にゆがんでいる。さっきまでは強い斗争心を示してキラキラ輝いていたその瞳は、もはや弱々しい哀願の色しか示していない。

足を一文字に開いたまま無理矢理に上体を起された久子は、舌を天井から吊られてしま

二、特別異色体験談と告白

普通の雑誌では取扱わない異色ある性癖の告白、例えばマゾ体験、窃視、下着愛好、どのようなことでも長短に拘らず、詳しく、お書き下さい。尚、体験までに至らずとも、空想や妄想についても、それが異色のあるものでしたら歓迎します。奇ク既刊号の読後感について、それが執筆者の特異な性癖に関連したものでしたら、是非、お寄せ願います。

三、女性読者の告白と体験談

読者通信に折角投稿されたり、或は又、編

っていた。ギャグは外してもらっていたから噛み切ろうと思えば噛み切れるのだが、久子には、もうそんな意思は消えさってしまった。それどころか、蛇の舌のように——といわれたことで、たまらない恐怖におそわれていた。怖ろしさに思わず失禁してしまった程だった。あらかじめ、久子の尻の下にパットをあてがっておかなかったら、高価な敷物が汚されてしまったに違いない。

「シーニエス・キャンドル（白鳥燭台）」

満足そうに有明が命名した。上に突き出した舌を灯火に、たとえたのである。

—(未完)—

集部へ私信を寄せられた女性の読者の方の多くは、お友達を得て満足されると、殆ど沈黙を守ってしまわれるのです。それは相手の男性の方の希望も多分にあると思うのですが、やはり読者の方は、その後の経過も知りたいと思うわけですから、便りだけでも、お寄せ願いたいのです。それから、文章の巧拙は問いませんから、女性読者の方々からの読者通信Vを初め、A奇クサロンVそれに、告白的な短文を勇気を出して、ドシドシお寄せ願いたいものと、心から、お待ち申し上げております。身辺雑記、読後感など、内容は、どんなものでも結構です。

連載 — 時代 S 小説

紫

蘭

の

門

(37)

人間の生き死には縄一筋

—— 生き縄は小富士にかかり

—— 死に縄もまた小富士にかかる

小富士より生れし我等、所詮は、嗚呼
女より、離れることはできまいよう

風 流 極 道 軒



さきほどの雨があがって
広い庭の木々の緑が洩れ陽をう
けて、ひととき鮮やかに輝き、
池では緋鯉が、しきりに跳ねて
いた。

離れに入ると、

「御主人さまのいいつけです

四寸角の支柱の上に身をよこたえた。

「手を伸ばして下さい、御内儀さま」

「こ、こうかえ……」

横木にそって伸ばされた両腕が、小刻みに
ふるえている。

「では、縛らせていただきます」

ていねいに挨拶をした昭吉が、右手首、肘
肩の付根と荒縄をかけていく。

「昭、昭吉さん。隣の部屋には沢山のお客さ
まが、おいでなのかえ」

人の気配を察して貴子が尋ねた。

「さて何人のござりましょう。それよりも御

穴 沢 流 黒 花 火

紫綸子の湯文字ひとつを許された貴子は、
湯殿をでると昭吉に先導されて離れへと廊下
を渡っていった。

から」

昭吉が貴子に横たえられた礎柱を示した。

チラッと眉をひそめたものの貴子にはそれ
を拒む権利はない。ひっそりとうずくまると
言われるまま胸から手をはなし腰をうかせて

内儀さま。膝をひらいて、おみ足を台にのせて下さいまし」

「ハ、ハイ」

左腕も右と同じように三カ所に止め縄をした昭吉は、ついで下半身にかかった。

紫綸子の湯文字が波立って膝が見え、ふくらはぎが、あらわれた。

「いつ見ても、お、お美しい」

ふだんでも、ふるいつきたくなるほどの美肌なのに、ましてや湯上りの裸身であつてみれば、昭吉の嘆賞も、うなずけた。

足首から、ほっそりとした足、指にかけて頬ずりしたくなる気持を抑えながら次々と柱にハの字に開かれた双脚を固定すると、右肩から左脇、左肩から右脇へと襷をかけるように幾重にも縄掛けを、つづけるのだった。

と、となりの部屋から、

「和吉。準備はできたかな」

元禄屋の野太い声が聞えてきた。湯浴みを

前号まで——春雷を聞いたの前触れと聞いて快盗・徳夜叉が行動を起す。それを知ってか知らずでか日本橋の本邸で元禄屋は、悠然と貴子、雅子、それに愛妾のお国を責め罵っていた。

すませてやってきたらしい。

「万端とこのつております。ほれ、雅子さまも、このようにお出で願いました」

「フッフッフ、雅子や。今日は、ひとつ、

お前を、かわいがってやろうと思つての。そうイヤな顔をせずと、もそつと近う。さあ」

姿は見えなかったが、どうやら雅子が隣の部屋にいるらしい。貴子は、礫柱を立てようとして滑車を動かしている昭吉に、

「雅子さまを、どうなさろうというの。教えてちょうだい、昭吉。まさか雅子さまを、みなさまがたのまえで……」

あとは口を噤んだが、もののしく自分が礫柱に縛りつけられたことといい、不気味なほどの隣の部屋の静けさといい、急に不安になつてくる貴子であつた。

「御安心なされませ。お客など居りはしませぬ。ごくうちうちで楽しみたいとの御主人さまの仰せでございます」

「なら、いいのだけど……雅子さまは、たいせつにしてさしあげないと」

同じ屋根の下にすみながら、自分には御内儀としての自由があるのに雅子は、まだ反抗するからと牢格子つきの部屋で起居させられていた。何度、元禄屋に訴えても許してはく

れなかった。そのうえに、為永種彦たちに連れ

れ出されて責められることもたびたびであり、ついでこの間も何日もにわたつて鳥居芳年が描いている「女責め二十八佳選」を完成させるために、いろいろの拷問にかけられていた。

「雅子さまをお責めになるのでしたら、ねえ昭吉。妾を責めて下さい、いいですね。しっかりと申しつけておきますよ」

いつもこうして裸身を見られていたとは云え、貴子は女主人、昭吉が使用人であることに交りはない。

「御内儀さま、大丈夫でございますよ。今日は、ほんとにうちうちのお遊びでございますから」

ギシーギシッ——と滑車が鳴った。

それにつれて礫柱が斜めに、もちあがり、やがて、すつくと床に垂直に立つ。

三尺高い台の上——と一般にいうが、いま「大」の字なりにされた貴子を、はりつけた柱は、それほど高くはなく、昭吉の視線と、貴子の紅真珠のような乳首が、ほぼ一直線上にあつた。

滑車の音で気づいたのであろう。不気味なほどの沈黙を守っていた隣の部屋から、
「あけますよ、昭吉さん」

という和吉の声がきこえてきて、襖がスルツと開いた。

「アッ！」

こちらの部屋では貴子が、向うでは雅子が同時に、互いを認め合って喘いだ。

「姫……さま！」

「雅子……さま！」

そこ一枚だけ裏返しにされた畳の上で白綾子の湯文字ひとつに剝きあげられて高手小手に縛りあげられているのは雅子であった。しかも、その縄尻をとっているのは、かつて押小路家に用人としてつかえていた青江散位。そばには清兵衛・善兵衛の下僕もいるし、穴沢流緊縛術の達者・黒縄の黒馬が長いあごをいっそう三日月のように突き出していた。

「昭、昭吉！ う、うちうちの、お遊びだと……い、いったでは……」

「うちうちではございませぬか、奥方さま」

雅子の縄尻をこれみよがしに吊り上げた青江は、ひさしぶりに面会する旧女主人の襟刑にされた姿を見上げ、揶揄するように、

「お招きにあずかりまして参上しましたが、まえにもまさる御豊麗なるお姿を拝しまして散位、光栄の至りに存じまする」

「ひ、姫さま！」

よこあいから、深川崩しの鬘も重そうに雅子が顔をあげたが、あとは絶句してしまふ。

そんな二人を見較べながら元禄屋は、

「雅子や。これから、お前のまえで貴子を責めてやろうと思つてな」

「姫さまをですって。姫さまを責める……」

「そうじゃ、穴沢流黒花火の拷問にかけるといって、きかないのじゃよ、散位たちがの」

「や、や、やめて下さりませ！」

黒花火とは、どのような拷問なのかは、わからなかったが、とにかく淫らな残酷なものであることにきまっている。京都から御身を案じて、はるばる、つき従ってきた姫さまをどうして眼前で罵りものにされて黙っていることができよう。

「お、お止し下さいまし！」

琥珀のように美しい肌を掛燭の灯りに、てり輝かせながら雅子は訴えたが、そんなことにはおかまいなしというように元禄屋は、散位と黒馬にむかつて合図をおくった。

縄尻を善兵衛にわたした散位がニヤツと笑つて、すすみでると、

「姫、よいお姿でござりまするわ。ハッハッハッハッ……」

「散位……お前という人は……ひどい！ 何

という恥知らずな！」

「なんと申されましよう、みどもは女を責めるのが楽しみ。ましてや、旧女主人の貴子姫ともなりますと格別でござりまする」

青い顔で磔柱の上の貴子を、ふり仰ぎ、

「お許しを頂いておりまするゆえ、失礼つまつりまする」

早くも手を湯文字の紐にかけられて、貴子が悲鳴をあげた。

「お、おやめ！ 散位、おやめなさい！」

「フッフッフ。これが始めてというじゃない、お騒ぎめさるな」

解きおわった紐を、ゆっくりと手離すと、紫綸子の布は、かすかな音をのこして滑りおち、キューツと太股を貴子は締めたが、八の字にひらかれている身では、あらわれでた股間を隠すことは、とうてい、できない相談であった。

「いつにかわらぬ悩ましさ。それに、この匂いは、いっそう豊かになれましたのう」

かつての用人風情に罵られる口惜しさが貴子の顔を蒼ざめさせ、何度か咽喉をのけぞらせたが、そんなことには頓着せず、

「さて、黒花火——おうけになるがよろしかろう。黒馬殿、さあ、これへ」

いくつも引き出しのついている木箱から黒馬が、とり出したのは、箸くらいの太さの尖端に黒いものが附着している奇妙なものであった。

「穴沢流黒花火、まずは腋毛から、お見舞い申しましょうぞ、姫」

とり出した棒を、黒々と生えそろった右の腋毛にちかづけた黒馬は、檜材であろうか五寸四方の板に黒い尖端をあてがって強く擦りつけた。

パチ、パチッ……パチッ！

火の粉が、はぜた。

「これを、ほれ、こうして！」

腋毛のすぐそばで、はぜる火の粉が、腋窩から脇腹を、あかるく、てらし出し、

「ア、アッ、……アッ！」

貴子の顔が恐怖にゆがむ。

「フッフッフ……それ、ぼつぼつと炎があらりましたぞ。それそれ！」

パーッと小さな焰があがって、腋毛のさきが、ジリジリッと焦げていくのが、元禄屋たちに、ありありと見えた。

「ヒ、ヒアッ……」

白蘭の花びらのようになめらかで繊細な肌である。火の粉が、はぜとぶだけでも痛みを

感じるのに、炎で焙られては、たまったものではなく、貴子の唇から、ひきつづいて悲鳴があがりつづける。

「や、やめて下さいまし。姫さまを、なぜ、そのように……お、おやめ下さいまし！」

立ちあがろうとする雅子の縄尻を善兵衛が強くひいたものだから、ずるっと腰がくだけて、その場に坐りこむ。白綸子の湯文字のあいだからチラッとぞいた内股と、そのおくを、かいまみた善兵衛と清兵衛がゴクッと息をのんだ。

「お、お願いです、妾を！ 姫をお責めになるのなら、代りに、こ、この妾を！ お賜り下さい。お願いです！」

「い、いけません、雅子さま！ い、いけません、妾が、妾が、どんな責めでも！」

「姫さま！ この雅子が、お身代りに」

「ア、アッ！」

ジリジリッと焦げる腋毛の匂いが、ただようなかで、

「雅子さまア！ 雅子さまは、な、なにも仰言らないで！ ア、アッ……」

この間に、一本の黒花火をつかいおえた黒馬が、二本目を発火させると、今度は右の腋毛へと、ちかづけていった。

穴沢流黒花火――

簡単にいえばマッチと花火を、ひとつにしたものと思えばよからうか。

煙火、起火とも書かれる花火の歴史は古く古代ギリシャにさかのぼるといわれるが日本に伝えられたのは天文十二年、ポルトガル人の種ヶ島漂着が、はじめである。慶長十八年に徳川家康が、唐人の作った花火を見物したと云われるが、以後、民間で研究がすすみ、四代將軍家綱のころには燃花火・線香花火・ねずみ花火に流星花火と、各種のものが開発されて全国的に流行した。従って「黒花火」が花火である点においては何の変哲もないがそれにマッチを併せ用いたところに特色があった。なぜならマッチが日本で製造され始めたのは明治七年に旧金沢藩士の清水誠なる男がフランス留学で技術を学んできて本所の柳原町で「早付木」の生産を始めたのが最初とされているからである。

「早付木」よりも、じつに四十年も早くこの天保年間に、黒馬たちがすでに、それを女責めの道具として創案していることは、けだし偉大と云わねばなるまい。

二本目の黒花火の攻撃をうけて貴子が苦悶の叫びをあげてのたうち、雅子が身代りにな

りたいと訴えつづけるのをみた元禄屋の顔に
会心の笑みが、うかんだ。

「雅子や。姫をこの責苦から救うためなら何でもする覚悟があるのかえ」

「ハ、ハイ。な、なんでも、この身が八つ裂きにされましようとも」

「なにをいう。お前を誰が八つ裂きになどいたしましうや。フッフッフッ」

酒盃をのみほすと、突然、

「貴子を縛ることが出来ますかの」

「何と、何とおおせられましたか」

「貴子を、縛ることが出来るかと訊ねた」

「姫を、姫をこの妾が……縛る」

「さよう。酒の肴にしてみたいのよ。美しい女が、美しい女を縛るのをみるのは、さぞかし楽しいことじゃろうて」

「……で、できませんぬ。そのようなことが、どうして、できませんよう」

「フッフッフッ。では、ゆっくりと眺めるがよい。黒火花が貴子のどこを責めるかをな」

「ご、ご無体なことを！」

片膝たてて、にじりよる雅子の耳に、散位の颯り声が、きこえてきた。

「奥方さま。つぎは、いよいよ、ここでございますが、お覚悟は、ようできられてか。ほれ、

ここを池頭春草と申してな、火花をあててよし、火をつけてよし、フッフッフッ」

「散位さん。春草を焼きはらったら、あとはスッ裸の本丸を……にしてやりましよう」

と喋っているのは、黒馬であった。

穴沢流穴焙り——この拷問がどんなに凄惨なものであるかを雅子は間接的に聞かされたことがある。どんなに強情な女でも音をあげてしまおうというではないか。

「元禄屋さま。どうか、どうかお許しを！」

妾が身代りに立ちますゆえに姫さまだけは、お願いでござりまする！」

裏返しにされた畳の上で善兵衛に縄尻をとられて必死で訴える雅子は、無視されて、散位の手にした黒火花が、貴子の内股に容赦なく迫っていく、

——シュッ！

擦り板に黒い棒尖が、こすりつけられるとパチ、パチ、パチと火花が、はぜて、貴子の黒い花園へと、とび散った。

「ア、アッ……ア、アレッ、アッ……」

よくとおった鼻筋を右へ、左へふりたてて微少ではあるが灼熱した火花の攻撃に耐えている貴子を、雅子はもうこれ以上、見るに忍びなかった。

息をとめて、好機を狙い、縄尻をもつ善兵衛の手に緩みがきているのを察すると、牝鹿のように跳躍して、散位の躰に必死の思いでぶつかった。

「な、なにをする！」

背後から体当りをうけて散位が、まえに、つんのめる。そのはずみをうけて黒馬までがよろよろとなり、二人、ほとんど同時に、四寸角はある礎柱の角に、いやというほど頭を、ぶつつけたのは笑止であったが、くるりと半回転した二人、さすがに百戦練磨、体勢を立て直すと、ただちに雅子を押えこみ、

「これだから、この女は牢格子つきの部屋にたたきこんでおかなくちゃあならねえのさ」

「まったくだ。油断もスキも、ありゃあしない。善兵衛！　なんだ、このざまは！」

恐縮している善兵衛を怒鳴りつけた散位は額のこぶをオー痛エ！　とさすりながら、荒い呼吸をくり返している雅子を睨みつけ、

「黒火花が一本、無駄になってしまった。黒馬さんに、どうお詫びをすればよいのか」

「なあにね、散位さん。雅子姫は、黒火花なんかよりも、どうやら「穴焙り」のほうが、お好きらしい。きつと貴子姫を穴焙りにしてほしいと、黒火花の火を消したんだろうぜ」

「フッフッフ」

元結をのこして根掛けから崩れてしまった黒髪を肩に這わせている雅子のあごに手をかけた散位は、

「ご主人思いですねえ、いつまでたっても。それではご希望どおりに、黒馬さんや。穴焙りにさせて頂きましょう」

火の消えた黒花火の棒を木箱にしまった黒馬が、径二寸はあろう大蠟燭を、とり出すと掛燭の火を移したから、雅子が絶叫した。

「許して！ そ、そのようなこと、お頼みしたはずがございません。やめて下さいまし」

姫の苦痛をみるに忍びず思わずとった行動が裏目にでてしまった雅子は、気が転倒するくらいの、あわてようであった。

「お願いです、散位！ 許して。ね、許して下さいまし！」

「フッフッフ、許しを請うのに呼び捨てとは、いかななものですか、雅子様。散位殿とか青江さまとか、ほかに、よびようがあるでしょうに」

「ご、ごめんなさい。妾が悪かった……青、青江さま。許して、許して下さいまし！」

貴子にとって用人である青江散位は、雅子にとっても使用人のはず。その男をさまとよ

び、憐れみを請わねばならない屈辱に、心の中は煮えたっていたが、今は何としても貴子姫に加えられる苛烈な拷問だけは止めてもらわねばならない。

大蠟燭の青白い焰にうつし出される雅子の顔に、必死の願いがこめられているのを見てとった散位は、ニヤツと笑った。

「許してさしあげぬでもないが、せっかくこうして点火した大蠟燭、このまま、もとの鞘におさめるのは惜しい。フッフッフ、おわかりかな雅子様。姫の代りに、そなたが『穴焙り』をおうけになるのなら」

「な、なります。妾が、妾が、この身で、なんなりと、お受けいたします！」

と、雅子の頭上で「いけません、雅子様。絶対に、いけません！」

貴子の声でしたが、雅子は、それを無視して、自分を責めてほしいと叫びつづけるのであった。

「面白いことよのう」

盃を唇から離れた元禄屋は、「主従が互いに、かばい合うのは、いつみても楽しいものじゃ。ところで、ここは雅子のいうとおりにしてやってはどうじゃ。そのあいだ、貴子には猿ぐつわなど、かましてな」

異存を唱えるものなど一人もこの場にいないはずもなく、さっそく昭吉が、たち上ってフンドシを外すと、磔柱の上の貴子の唇のなかに押しこんでしまう。

「元禄屋殿のお許しがでた。さあ、雅子様。喜んで穴焙りの拷問を、おうけめされい」「ハ、ハイッ」

急に静かになった部屋の中、雅子がゴクツと唾をのみこむのが悩ましく聞えた。自分の訴えは、とりあげられた。が、これから、わが身に加えられる責苦は言語を絶するものとなるう。

青 江 の 魔 手

「ひとりで湯文字を取りさるのですよ、雅子様。穴焙りにされるものはスッ裸にならねばなりませんまい」

「ハ、イ……」

縄をとかれて裏返しにされた畳の上で乳房をおおっている雅子は、散位の声に、ふかぶかと頷いた。元禄屋、黒馬、それに二人の番頭のまえでなら、まだ屈辱感は、やわらいだであろうが、この場には散位がいた。それに雑色として下使いで働いていた清兵衛・善兵衛の二人が目を見走らせて見つめている。

「ア、アッ……」

さすがに恥かしさが、こみあげてきて身をふるわせたが、正面の礎柱に「大」の字に縛りつけられている貴子姫のことを思うと、ためらっているときではない。

湯文字の紐に手をかけると、そつと解く。

血筋正しい気品をたたえた首頸が掛燭に映えて一瞬、ピクッと珊瑚樹の実のような乳首が震えたが、そのまま、白綸子の布が、すべりおちていった。

沈丁花の花の香りを思わせる肌の匂いのなかで、うずくまろうとする雅子の肩に、

「起ったままじゃて！ 穴焙りは立ったまま受けるものじゃ。それに「大」の字に縛りつけてやるのが普通じゃというが、今日は、すすんで責められたいということなので縄はつかわぬ。昭吉、和吉。その代りに手足を押えておくがよからう」

無慈悲な元禄屋の声がして、昭吉が右手をとった。と、左手も和吉につかまれ、思わず腰をひいた裸身を「く」の字に曲げたが、善兵衛の手で右足首を掴まれると、「アレッ」と悲鳴をあげた。

「雅子さま。市村座で下足番をしている善兵衛でござります。今日は下駄や草履ではなう

て、なまみのおみ足を……」といいながら右へと足を引き裂いていく。

「善、善兵衛！ な、なにをする。な、なにをするの！ お、お離したら！」

「そんなに、お身悶えになると、かえって、ほれ、下腹が……」

両手を二人の番頭にとられて思わず腰をふると、善兵衛のいうとおり下腹が前へ突き出す恰好になってしまふ。あわてて腰をかがめようとしたが、好機を窺っていた清兵衛が、すつと腕をのばすと、左足首をつかまえて強い力で左へと引いた。

「キ、キャアアッ——」

四人の男に「大」の字なりにされてしまった雅子が、つい大きな叫び声をあげたが、それも散位や黒馬の笑い声に、かき消されて、しばらくの間、淫らな喧騒が、つづくのだった。

が、やがて——

四人の男たちの位置もきまり、雅子は大の字の形に、その麗しい裸身を、しっかりと固定されてしまい、

「フッフッフ、雅子さま。お恥かしくはありませぬかの。みどもや清兵衛たちのまえでほれ、このようなところまで、あからさまに

曝け出されて。ほれ、ここを」

散位に生え際を、まさぐられた雅子の膝ががくがくと震えた。

「ひどいッ！ アッ、散位！ や、やめて」

「またそれ呼び捨てになさる。悪い癖じゃ。フッフッフ、その悪い癖を直してしんじょうために、ほれ、ここを！」

大蠟燭の焰が目のまえでグワツと揺れる。

「さあ、お望みどおりの穴焙り、フッフッフッ」

蒼白い顔を、いっそう青くした散位が、青鬼のように迫ってきて、

「どうですか、この焰を、あてがうのですぞ。痛いですが、苦しいですよ。どんな地獄の苦しみよりも残酷な、女には、とうてい耐えることのできない拷問ですぞ、雅子さま」
元禄屋たちとちがって、心から女を憎み、その女体を、とことん責めぬくことに生甲斐を感じる青江散位のこと、徹底した穴焙りを優雅な雅子に加えるに違いない。

惜しい。ここで雅子姫を傷つけるのは何とも、うらめしい。御主人は、いったい、どんなお考えで、こんな男をお招きになったのだらうと昭吉は思った。どうやら和吉も同じ気持ちらしく、チラッと眉をひそめてみせると、

いざというときには散位の動作を止めようというかのように目で合図をおくってきた。
と、雅子の唇から、ものすごい悲鳴が湧きおこった。

が、それは、散位のせいではなかった。

背後から、もう一本の大蠟燭を手にした黒

馬が、凝脂ののった双臀へと、その焰を近づけた、せいであった。

思わずそれを避けようとして腰を突き出すと、散位の大蠟燭が、前から迫る。

「ア、アツ、ア、熱い！ あ、あっ！」

腰をひくと双臀が灼け、前へ出すと秘苑が



イメージギャラリー

『雲助日記より』

岡 たかし

焦げつくように熱い。

「ハッハッハッ、あられない、雅子さま。

みどもの前で、またそのようにお腰をふられて、なんともはや、それが、さきの大蔵大輔柳原宗忠卿の御内室のなさることですか」

黒馬と呼吸を合わせて大蠟燭の焰を、とおざけたり近づけたりしながら、辱めつけける散位であった。

ジリ、ジリッ、ジリッと……焦げる匂いが沈丁花の香りにまじって鼻をつきだす。次第に興奮してきた散位が、ひと思いに八の字に開かれた内股を下からつきあげようとした。昭吉が、思わず手をのばして大蠟燭を、はたきおとそうと……。

と、その刹那――

「貴子や」

鋭い元禄屋の声が飛んだ。

「雅子が可哀そうだと思つたら縛られてやつては、どうじゃな」

猿ぐつわをされた貴子の顔が、狂ったように、たてに振られた。それをみて、

「散位さんや。ちょっと待ちなされ」と、いまでも……に燃えうつろうとする大蠟燭の動きをとめた元禄屋は、

「雅子や。貴子は縛られても、かまわぬと言

っておる。だから縛ってみなされ。お前が穴焙りにされると、それ、この昭吉を始め、何十人も男たちが失望しましょうものを、のう。なんなら、お前が縛られてもよいのじやよ。貴子がお前を縛るのじや。これならどうじや」

ほう——と安堵の胸をなでおろしたのは二人の番頭だけではなかった。

あたし絶世の美女を、ましてや沈丁花の香りを、ただよわせる世にも稀な体を、ほんの少しであるにせよ、傷つけるのは惜しいと思っていた黒馬も、ニヤツと得心の笑いを、うかべた。

元禄屋の言葉は、一方、雅子の心にも大きな変化をもたらした。

「貴子に縛られるのなら、よかろうがの。これ雅子や」

と追いうちをかけられると、ますますホツとした風情が色濃く、ただよってくる。

貴子姫にお縄をかけることは、とうてい、できない相談であったが、姫に縛られるのであれば、はるばる江戸までおともをしてきながら、このようなめに、お逢わせする罪からいっても否もおうもない。たとえ、それが何人も男たちの弄びものとして縛られるので

あっても耐え忍ぶことができよう。

「縛られるのでありますれば……」

やっと、涙に濡れた瞳があがった。

「よかった。これで話は、きまった。穴焙りは、とり止めじや。散位さんや、不満じやろうが、お許し願いますよ」

なにやら訛かされたように感じはしたが散位もこうなつては、ひっこまざるをえない。

大蟬燭の火を吹き消すと、指示されるまま黒馬と二人で磔柱から貴子をおろしていく。

「貴子や。さあ、この縄で、雅子を。わかっているね。厳しく縛っていくのじやよ。穴沢流緊縛術の達人の黒馬さんが手を取り、足をとって教えてくれようほどに」

そういうながら元禄屋は紅白だんだんに組み合わされた絹の縄をさしだすのであった。

跪いて受ける貴子の肌を、何と形容したらよいであろう。炎と燃ゆる春の淡雪——ただその淡雪のところどころに、荒々しい縄痕が無残な名残りをとどめていた。

死に縄・生き縄

雅子の四肢も貴子と同じであった。小半刻にわたって四人の男たちに強く掴まれていた手首足首が、赤く染まって痛々しい。

「雅子さま！」

「姫さま！」

荒々しい畳の裏に、ひっそりと片膝を立てて蹲っている雅子が、貴子を振り仰いだ。

「許して、雅子さま」

絶え入るような声で、よびかける。

「姫さま！」

縋りつこうとして、貴子もまた、自分と同じスッ裸であることを悟る雅子であった。

「姫さま。お、お縄を、お受けいたします」

「雅子さま！ ゆ、ゆるしてたもれ」

臉をとざした貴子が、紅白の縄を輪にする、と、崩れた深川鬚ごしに乳房にかけて、そのまま止め縄しようとするのを眺めて、まず黒馬が笑った。

「それが縄掛けですかい。ここは投扇や双六を使つてのお遊びの場じやあないのですぞ。縄ってものは、ほれ、こうして」と縄をひったくるのをみた元禄屋が「やはり、このようなことになるのかの」と、予想していたように苦笑し「昭吉さんや、襖を開きなされ」

う・ち・う・ちの遊びだと昭吉は貴子に言った。

その言葉に、いつわりはなかった。

貴子が、いままで磔刑にされていた部屋と反対側の部屋を区切る襖が開かれると、そこ

には、全裸の女が、雅子と同じような姿で蹲っていたが、それは、

「あなたは、お国……さま！」

貴子が声をかけると、並み外れて大きな乳房が揺れて、女が顔を、こちらに向けた。

五指にあまる元禄屋の妾たちの中で、最も寵愛の深いお国に、まぎれもない。たしかにうちうちの遊びなのだ。だが、そのお国、どうやら話すことは禁じられているらしく、ものも云わずにツーンと、あごをそらした。

「貴子や。これから、お国を黒馬が縛るによつて、それと同じように縄を使うのじゃ。わかったね」

「ハ、ハイ……旦那さま」

答えたものの貴子は、お国をここへ、このような姿で、ひき出した元禄屋の意図を、どう解釈してよいのか、わからなかった。

どうやら今日の宴は、すべてが、あらかじめ計画されていたものと思うほかはない。

「さあ、あのように縄を廻すのじゃ」

貴子の思惑を吹きとばすような元禄屋の声とともに、黒馬の縄が、ほれ、このとおりにしなさい——とばかり、ゆっくりと、お国の左手首に喰いこんでいく。

「雅子さま……」

「姫さま。縛って、縛って下さいまし」

「ゆ、ゆるして。雅子さま」

五尺ちかい黒髪を背中に流した貴子が、片膝をたてて蹲っている雅子の左手首をとって紅白の縄で縛った。

「次は、ほれ、こういう具合に右手首にも」

二本目の縄で黒馬が、お国のもう一方の手足を括ると、両の手足を高々と交斜させたうえで、その接点をギュッと竹矢来でも結ぶように縛っていった。

みようみまねで貴子は縄をあやつっていたが、縛られることには慣らされていても人を縛るのは生れて始めて。うまくいくはずもなく、雅子よりも貴子のほうが、ぶるぶると震えあがる始末であった。

「貴子。それは『死に縄』と申してな、何の役にも立ってはおらぬ縄じゃ。もっと強く、無駄なく、女体の要所を。ほれ、黒馬を見てごらんよ。お国にかかっている縄は、すべてが『生き縄』——どこにもたるみがないであろうが」

女相撲取りといったら、お国がおこるかも知れないが、女関取番付で大関とまでは、いなくても、小結か前頭は立派につとまろうというほど、よく肥えた、お国の裸身に、お

おいかぶさった黒馬が、愛用の黒縄を前に廻して乳房の上下をギュッと締めあげ、あまった縄尻を二の腕に二重にからませて手首に戻す。

「さあ、やってみなされ。雅子の肘なら、もっと高くあがるはずじゃ。そして、そう」

貴子に協力するためであろうか。雅子が上体を曲げると、せいっぱい後手にされた腕を上へと、あげた。

と、「見、見えるよ、清兵衛！」

思いがけない声があがった。

「ほ、ほんとだ！」

上体をまげようとして立てた左膝を左にひねったとたん、よこにいた二人の下足番に雅子の白く匂う内股の奥処が、はっきりと見えたのであろう。

羞恥におののく雅子の腕に縄がまつわりつき、つづいて、それが乳房にまわった。貴子の乳房が雅子の肩に触れ、優美な手が、目のまえで紅白の縄を持って、うごめいている。

「ア、アウー」

雅子の喘ぎに、貴子が、「い、いたいのですか、雅子さま」

「いえ、痛くはございません。ただ、もうしわけがなくて。姫さま、許して下さい」

「なにを申されます。妾こそ、すみませぬ。何ひとつしてあげられないだけか、このようなめに、おあわせして」

「姫さま！」

振り向いた雅子の瞳にあふれる涙に、貴子も思わずジーンと胸のあたりが熱くなった。

「お通夜じゃありませんよ。奥方さま、しめっぽくなっちゃあ、せっかくの美女拷問の場が台なしになるじゃありませんか」

盃の酒を、ちびりちびりと舐めながら散位が口を出した。

「申しわけ……ありませぬ、散位さま」

黒髪を波打たせた貴子は、あとはもう夢見心地のうちに、雅子の裸身に縄をかけていくのであった。

「どれ、どれ、ひとつ、検分させてもらいましょうかの」

黒馬に命じてお国を、裏返しにされた畳の上へ連行させた元禄屋は、雅子と二人並べてニタ、ニタッと相好を崩しながら、

「死に縄”じゃ」

と雅子の乳房の上で、たるんでいる縄目に指を、とおし、

「ほれ、これも”死に縄”、これも」

二の腕にかかった縄も、ゆるみきっていた

し、手首に搦めた結び目などは早くも解けおちそうになっているのを、ひとつひとつ指摘すると、「このような縄掛けなら、女囚は、いつでも自由になれましょう。雅子や、かまわぬ、縄を抜けてみなされ」

ためらいの色をみせたものの、命じられるまま、雅子が双腕を動かし上体をくねらせる、紅白の縄は、たちまち畳へと、ずりおちてしまった。

「次は、お国じゃ。縄抜けをしてみい！」

云われたものの、到底それが不可能なことを、お国は知っていた。それでも力いっぱい双腕を振り、肩を動かしてみたが黒縄は、すべて”生き”ていた。ゆるむどころか身悶えするたびに、より強く肌に喰いこんでくる。

「みたかえ、貴子。黒馬さんの縄は、すべてが”生き縄”じゃ。ほれ、黒い縄が、こんなところにまで生きている」

元禄屋の指がお国の両手首を縛って、なおあまった縄尻を握んだ。そして、ほんの少し動かしただけで、お国の唇から艶めいた喘ぎが、あがったではないか。

「猿廻し縄は、ときとして、このようなイケズをするものでな」

イケズをするとは関西地方の方言で、悪戯

をする、戯れる——という意味であり、祇園の舞子あたりに「だ・ん・は・ん、イケズどすえ」と言われるとゾクゾクとする殿方も多からうが、イケズは即ち”池水”なのである。

する——は行為するであり、池は池頭春草の池、つまり”池の水に行為する”という、そのものズバリの語源をもち、意味をもつ。だから「イケズどすなあ」と女が言うことはイケズをされて喜びにふるえる、或はイケズを、してほしいと願う、せつない女心なのである。

が、ここで雅子にイケズしているのは殿方の指でも躰でもなく、口でも歯でも足でもなく、毛羽の多い黒縄の縄尻なのである。

いつ黒馬がつくったのか、縄尻を辿っていくと、いくつもの結び目があり、その先が、お国の、ぶよぶよに、よく肥えた太腿のあわいへと通じ、そこに一段と大きい結び目が、なかば姿を見せていたのであった。

「さすがじゃの、黒馬」

「ヘッヘッヘッ」と頭をかく黒馬に、

「手をとって教えてやって下さらんかの、穴沢流の一手なりと」

「承知いたしました。それ、お内儀さま」

いなやのあろうはずのない黒馬が、雅子よ

りも恥かしいのか胸もとを押えて、まるくなっている貴子の肩をつつくと、

「もう、かんにんして、黒馬さん」

絶えいりそうな声をあげたが、黒花火の拷問をうけて、さがが縮れている腋毛をつまみあげられると、「ア、アッ。お、おいしいけどおりに、いただきますから！」

「さあ、縄を、こう持って」

「ハ、ハイ」

「雅子……」と、ここで貴子につぐ高貴な姫を何とよぼうかと黒馬は迷ったふうだったが「雅子の右手首に、ほれ、こうして！」

女囚として取り扱うことに決意したのであらう、呼び捨てにすると、沈丁花の花の香りに包まれた脇腹を、ぶったたいて、

「お縄をうける女は、神妙に腕を廻しておくもんでえ！ そうすりゃあ、少しはお役人さまも手心を加えて頂かねえとも限らねえぜ」

羅卒の鞭兵衛一家らしい言葉になった。

雅子の両手が、たかだかと、その煌くような背中であ斜される。貴子が中腰になって紅白だんだらの縄をしごく、その後から、黒馬が、ぴったりと貴子の背中に、のしかかるようにして、

「それじゃあ、いけねえ。もっと強く」

「そう、そう。だが、それじゃあ『死に縄』だ。左に廻して。フッフッ、やっと生きてきた。だが、腋毛にひっかかっているのは、いけねえな。もっと肩の付根から離して……」

「まあ、そのくれえのところだろ。これで、この乳房に、見ろよ、ぐっ——と、ハリがでてきたじゃあねえか。やっと『生き縄』になったぜ」

人形浄瑠璃の操り傀儡くぐつのように、貴子のしなやかな手を動かしながら黒馬が、雅子を間接的に縛りあげていくのを眺めて、元禄屋は悠然と酒盃をあげていた。

だが、悠然としておれないのは市村座の下足番をつとめる二人の男であった。

なにさま眼前で美女二人の緊縛模様が、くりひろげられている一方、すぐよこ、手をのばせば届くところには、爛熟その極みに達したお国という女が、スッ裸で、しかも縄尻を股間にはさまれて、もだえているのである。

あちらをみ、こちらの匂いを嗅ぎ、こちらの肌の手を伸ばそうとして止め、あちらの貴子姫の双臀の凹みがかかるといふふうでまったく、躰が二つも三つも欲しいという風情であった。

どうやら、それは散位とて同じらしい。

せめて、一人ずつ、ゆっくりと責めてくれればよいものを、そのときには大蠟燭の五本や六本を束にして、心ゆくまで責めたてやれるのに、いや、まてよ——この場の雰囲気では一人か二人、多分、お国さんか雅子姫くらいは、思うがままに責め罵る機会がくるかも知れぬと、冷酷な計算を胸のなかで、はじき出していた。と、その耳に、

「黒馬さんや。『虫』の字に縛って下され」

と元禄屋の指示がとんだ。

元禄屋、最近、漢字責めに熱中していた。ひまがあると、節用集やら庭訓往来、千字文に四書五経、さらには、古今の仏典、神道の書までひもと繙いて、女体を形どらせるにふさ応わしい「字」を求めていた。

いま「虫」の字といったが、これは、「片あぐら」のことであろう。飛鳥時代や白鳳、天平美術の仏像のなかにある「半迦思惟像」というのがそれで、右足あるいは左足の首を反対側の足の膝にかける——というポーズで男ならなんでもないが、女がこの姿をとるとむしろ「あぐら」をかくよりも艶かしくなるものであることを元禄屋は承知していた。

言われるまま、猿廻縄をかけおわった雅子の右足を、貴子の手を操って動かそうとした

が、どうもうまいかない。

「直接、黒馬さんがやりなされ。その間に」
元禄屋は短い言葉で二つの命令を発したの
であった。

まず黒馬が雅子の右足にとりつくと、一方
では、その間に——と言われながら目配せを
うけた昭吉と和吉が呼吸を合わせて、たち上
った。

「お内儀さま。縛った女もまた縛られる！」
「お内儀さま。結局はこうなりますのじゃ」
なにが、こうなるのか——は、二人の番頭
が、貴子を、雅子と同じように縛りあげ始め
たことでわかった。

縛った女もまた結局は縛りあげられる——
と。現代風にいえば、「Sの女も所詮はM」
ということになるのだろうか。

奇クの誌上でよく拝見する女二人のSMプ
レイであるが、Mの女が縛られたあと、Sの
女は、いったいどうなるのか。縛られたMの
女を責めるだけで満足するであろうか。否！

Sの女も所詮は女。より強烈なS——即ち
男性のために結局は縛りあげられMの女と同
じように、「甘美な拷問」をうけるほかはな
い。ということは、Sの女に愛されるMの女
よりも強烈な男性（この場合、もちろん一人

の男性ではあるまい。三人、あるいは五人）
たちに愛撫されるSの女のほうが快樂は、よ
り深く高く大きいものがあるはずである。

世にはSだと称してMの男性を縛りあげ鞭
打つSの女もいる。が、そのSの女も、プレ
イの最後には、必ずや数人の男性に、よって
たかつて縛りあげられ、責め苛まれることを
願望としているという。

つまり、Sの女こそ、より以上のMの醍醐
味を求めつづけているということであり、け
だし「未知への探求者」としての果てのない
性の道——性道の探求者として、Mの女よりも
はるか「高み」にいるのかも知れない。

とまれ——

いま貴子は残念ながらSではない。いやい
やながら雅子を縛られ、そして自分も同じ
ように「虫」の字の形に縛りあげられてしま
ったのであった。

もう一人、いた。お国である。彼女もまた
清兵衛、善兵衛たちによって、裏返しにされ
た畳一枚の上に、三人揃って「虫」の字の姿
にされ、陳列させられてしまっていた。

「どうじゃな、散位さん。入れてみなさん
か」

とは、元禄屋、これまたひどい事をいう。

三人の、すべてをあらわにした女をまえに
して、いったい、誰の、どこに、なにを入れ
てみようというのだろうか。

虚をつかれた散位の狼狽ぶりを楽しむよう
に元禄屋は、

「おいやかな」

「な、なんで、いやなことが……」

「フッフッフッ。では、きまった。散位さん

が雅子の名器「紅搾木（べにしめぎ）」

これで、散位の狼狽もおさまった。どうや
ら元禄屋は、今日は最後まで楽しませてくれ
るらしい。

散位の視線が掛燭のあかりをうけて耀く雅
子の「虫」の字にされた裸身に注がれる。

右足首を左の膝にあげて、半ば「半開き」
にされているだけに、その下半身は「全開」
にされた——即ち「大あぐら」に組まされて
いるよりも幽かに艶めいて男心をそそった。

それにしても、その女体からにじみでる悩
ましさは、たとえようのないものであった。

極上の美酒をおもわせる琥珀の肌を、紅白
だんだらの縄で縛られて、崩れた深川鼈から
乱れた黒髪を波立たせ、沈丁花の花の香りに
つつまれている——

この女を、いまから自由にできるのかと散

位が盃を持つ手を口に運ぶのも忘れていた時
「あ、あつしたちにも」

と清兵衛と善兵衛が同時に口をきいた。

「さて、それは、わからぬのう。雅子に訊ねてみなされや」

元禄屋に軽ういなされた二人が、雅子に向つて直接、意志表示をしようとしたが、そのまゝに、「イヤ、イヤッ！」雅子が叫んだ。

散位も含めて、かつての使用人たちの自由

毎月確実に入手されるために

本誌予約購読者を募る

毎月二十三日確実発売！

一月分	1冊	六〇〇円 (送共)
三月分	3冊	一八〇〇円 (送共)
半年分	6冊	三六〇〇円 (送共)
一年分	12冊	七二〇〇円 (送共)
		郵便番号 558

○本誌の入手がなかなか困難であるとか、或は地方のため、入手することが出来ないとかいう声を聞きます。又、毎月確実に、早い目に、手に入れたらという御要望をよく承ります。そういった方々は、どうぞ是非月極御予約下さるようお願い致します。毎月製本完成と同時にお手元までお届け致します。

○直接予約購読のお申込みを下されるのには大阪市住吉区大領町四丁目六八号出版株式会社宛（郵便番号五五八）表記予約購読料をお

にされることへの激しい拒否であった。

しよげかえった二人に、「まあ一度や二度ことわられたくらいで気をおとさぬことですじゃ」と声をかけた元禄屋は、

「散位さん。さあ、お前さんは、かまいませんぞ。僕からの命令じゃ。おやりなされ」

「ときに……」

散位が、ニヤツと片頬を歪めると、

「さきほど『紅搾木』と申されましたが、そ

私込みの上、何年何月号より何力年分と御指定下さい。

○購読お申込みの節は、送料、包装代などは、総べて当社にて負担致します。

○御送金下さる場合は、『現金書留、小為替、定額小為替、（切手代用は一割増）振替（大阪四二七八三番）』のいずれかをご利用願います。現金の場合、普通郵便封入は違法です。必ず『現金書留』にして下さい。

○予約お申込みの方には、毎月二十日、印刷完成と同時に、外部から見えないように厳重包装の上、一斉に発送申し上げます。

○毎月一冊お申込み下さる方は、誌代六〇〇円をなるべく毎月十五日頃までに御送金頂ければ、印刷完成と同時に、予約購読者の方の分と一緒に発送致します。

○予約購読のお申込みの際は、必ず何月号から何力月分送れとお書き願います。第一回分発送の際、明細を雑誌に添付致します。何月号からとお書きにならないときは、重複や欠号をきたしますので御留意願います。

これは、雅子姫の……」

「いかにも。雅子は、まるで男を『搾木』にかけるように締めつけますのじゃ。よって名づけて『紅搾木』。お気に召しましたかの」

「気に入るも、いらぬも、そのような名器を賞味させていただけますのは、このうえない光栄。有難う存じまする」

頭を下げた散位が「虫」の字なりになっている雅子の裸身を横だきにして隣の部屋へ連れこもうとすると、

「散位さん。ここで、ここで」

「ここで。この皆の見ているまゝでござるか」

「いかにも」

「承知しました」

「それにな、その『虫』の字の形をくずさぬように。せつかく美しく縛りあげたのじゃからう」

うなずいた散位は、蒼白い顔を、いっそう青くひきつらせて、小倉地の袴を脱いだ。

はたして『虫』の字のままで、イケズをすることができるかどうか。

三人それぞれの女の肌から匂いでる馥郁とした香りが、部屋のすみずみにまで、しみとおる春の宵であった。

（つづく）

随想

肛門飲酒のすすめ

三 木 令 子

私は昨年七月号の本誌に「アヌスから酒を飲まされて」、同じく十月号に「アヌスは完全にお酒を吸収する」を投稿しました。ところが、残念なことに、その後、ほとんど反響がありませんでした。本誌の読者の中には流腸マニアと言われる人たちは随分、多いようですし、その中には日本酒とかビールを注腸されて、酔っぱらった気分になった経験をお持ちの方も少なくないと思うのですが、どういうわけでしょうか。

二〇〇CC位の日本酒を、何回も洗腸して空になった直腸の中に、最後の水滴が排出されてから二、三時間、経った後で、初めは五〇CC位、ゆっくり間をおいて同じ位ずつ数回に分けて追加注腸して、途中で程よい酔い心地を味わいながら、一―二時間も経てば、すっかり吸収されることを、実際に行なって

確かめて見ることは、簡単です。本当に全部腸内で吸収されてしまうなんて、最初は意外ですが、そうなるのです。やって見ていただいたら分ります。

ビールの場合は、イルリガートルで、やはりゆっくり注腸します。姿勢は、本誌にもよく出て来る流腸ポーズ、うつ伏せに寝て、お尻を高く上に突き出したポーズ――私たちは△尻立て伏せ△と言っていますが――がよいと思います。この△尻立て伏せ△のポーズで注意して泡を抜きながら、ビールを腸内に流入させます。六三三CCの大ビン一本なら、事前に――日本酒のときと同じように――大腸がよく洗ってあれば――完全に腸内で吸収して一滴も残しません。

ビールの場合は、吸収されたあと、二酸化炭素の気体が腸内に充満して腸部が膨満し、

適度の蛙腹になります。この蛙腹の膨満感もこたえられないものの一つです。そのまま排出してしまうのもいい気持ですが、更に欲ばって大量の空気を追加送腸し、本当にイソツプの蛙のように膨らまされるのも――とても苦しいのですが――たのしいことです。

ところで、私は完全に吸収されてしまう肛門飲酒――日本酒なら二〇〇CC位、ビールなら大ビン一本六三三CC――だけでは満足できないで、一部戻してもいいから、もっと多量のアルコールを注腸されて、うんと酔っぱらって見たいと思いました。土曜日の午後三時ごろから、水道流腸により、お腹の中のものを、すっかり出しておくのです。水道は水圧があるので水流を早くし過ぎないようにして三回も、しかも――おそらく二リットル以上、毎回――腹部が限度まで膨らんでコチコチに固くなるまで入るだけ水を注腸して、繰り返し腸内を洗って空にしておきました。

夕方近くになると主人が帰って来ました。夕食の用意は、もう出来ていますから、主人を風呂に入れて、私は夕食抜きで、主人の晩酌のサカナになるのです。もちろん私は一糸まとわぬ丸裸です。

「さあ／＼尻立て伏せ＼をするんだ」

私は裸のまま、畳の上にうつ伏せに寝て、お尻を高く上に突き出しました。

「駆け付け三本というからな」

夫は、すでにお酒が入っているので、ほろ酔い加減で、いきなり二〇〇CC浣腸器で三本、たて続けに私のお尻から日本酒を注腸しました。グリーンとお腹に抵抗感があります。

「ああっ、熱いくらい。とてもハラワタに浸みるわ。早く酔ってしまえようよ」

「酔え、酔え。ケツの穴から酒を飲まされて気持は、どうだ。うーんと酔っぱらえるぞ」

五分—十分—十五分と、私はアルコールが吸収されて、体の筋肉がグニャグニャと柔らかくなり、頭がポロツとして来るのが分りました。本当に、驚くほど急速に酔いがまわって来るのでした。ハラワタがジーンとして、酒浸しになっているのです。排泄感はまだありません。いい気持です。

しかし十五分を過ぎると、お腹の中が少しおかしくなってきました。いつもと違って六〇〇CCですから、しかも、たて続けに一度に注腸されたのですから、いつまでも我慢できなわけがありません。

「ウーン、駄目だわ。出してしまいたくなかったの。苦しいわ。許して」

「よし、それじゃ、もう少し追加だ。我慢している。もう四〇〇CC、入れてやる」

夫は、まだ許してくれません。急いで二本無理やりに追加して注腸しました。それから肛門を脱脂綿で抑えて、我慢しろ、我慢しろと強要するのです。私は、張り裂けそうになる腹を抑えて、死にもの狂いで我慢するのですが、一〇〇〇CC—リットルもの燐をした日本酒を注腸されていては、その何分の一かの分量が腸内で吸収されているにしても、とても我慢し切れるものではありません。

「よし、どうしても我慢出来ないなら、オレが口をつけて飲んでやる」

「あなた、汚いわ。体に毒だわよ」

「腹の中は完全に洗ったんだらう。汚くなんかあるものか。薬になる位だ」

と夫は聞かないで、私の肛門に、じかに口をあてるのでした。ベツタリと唇の感触が肛門にあって、やがて強く吸い出される感じとともに、夫がノドを動かして飲みこむのが分ります。私はこのエスカレートしたプレイに夢中になって、何をされているのか分らない

位でした。便意は少しずつ遠のいて私は心地を取り戻し、酔った気分だけが快く残ります。酔いは、まだ進行しつつあるのです。「すぐく酔ったみたい。でも、まだこれから酔いがひどくなるのかしら」

夫はまだ夢中になって吸い出しています。「あなた。そんなに飲んだら、あなたが酔い過ぎちゃうわ。それに奥の方に入ったのは、汚いんじゃない。もうそれ位でやめたら」

夫もやっと、肛門から唇を離しました。

「よし、次は空気浣腸だぞ。我慢しろ」

夫は、まだ私を許そうとしませんでした。小さなビニールのパイプを咥えて、その端を私の肛門に差しこんで、また唇をぴたりと肛門につけ、今度は逆に私の腸内に息を吹きこむのです。まるで風船を膨らますように、一生懸命になって息を吹きこんで来るのでした。私の腹は蛙腹にふくらみ、息をするのも苦しい位になります。しかも注腸されたお酒は、腸内をぐるぐると逆流して、少しずつ吸収され続けるでしょう。私はもう、腸が破れてもどうなっても構わない気持でした。大量の空気とともに、残ったお酒が排出されたのは、それから暫く経ってからでした。

《M女通信》——高村浩子の告白——

禁断の木の实を 食べてしまった私

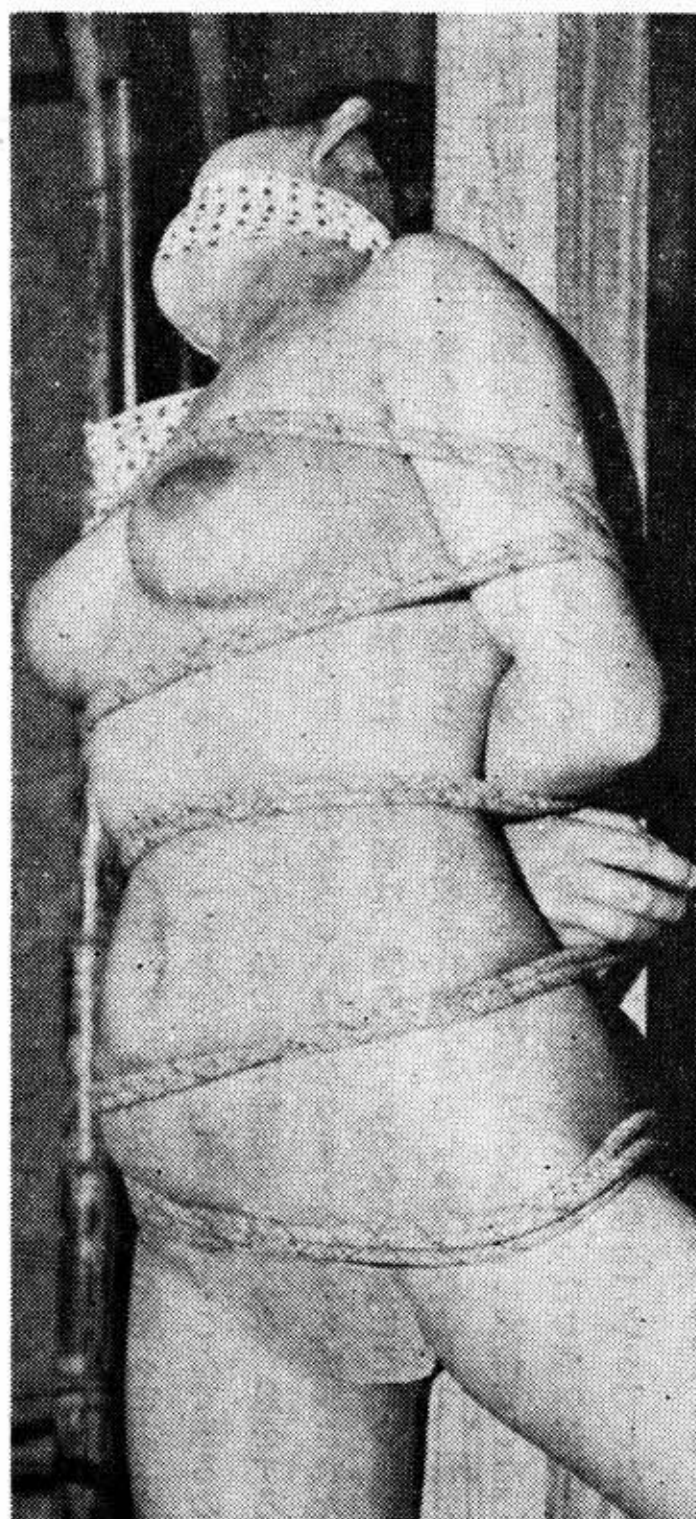
☆責められに行きたいのを、じっと耐える悲しさ。なぜ、私だけが、このように、苦しまなければならないのだろうか☆

高 村 浩 子

七月号の奇譚クラブに、「M女通信」として私の拙い文章（密室の中での妄想）（題名は編集部でつけて下さいました）を載せていただきましたところ、さっそく八通のお手紙を転送下さったのを、受け取りました。

読者の皆さまから、直接、お便りをいただくなんて、もう、何カ月ぶりかしら。お手紙を手にしたときは、やはり胸がふるえ、手がわななきました。

もう、こうした世界から、逃げだしたいと幾度となく思った私ですのに、読者の方からのお便りに、このように心を動かされるなんて、これでは、どうしてもマゾの世界から抜



けだすなんて、出来ようありません。

ボールペンを持って、さて、お返事を書くうとしまして、もういちど、いただいたお手紙を読みかえしてみますと、私の胸のなかにいろいろな熱い思いが蘇ってきて、なかなか文字を書くどころではありません。

「貴男の手とペンで、無茶苦茶に責めて下さい。責め甲斐のある浩子に、なってみせたいと思っています」と最後に書きましたので、どの方のお便りも、浩子を責めるために、みんな便箋に何枚もの長文で、お書き下さっています。

浩子のようなマゾの性癖の女にとって、こ



んなお便りをいただくのは、何よりも嬉しゅうございますが、また、いちめん、とても、辛うございます。

たった一人で、部屋にこもっている夜のひとときが、とても辛くてたまらないのです。責められに行きたい、責められに行って、思いつき、身体がこなごなになるまで、責

め抜かれないという気持を、今年の春から夏にかけて、どれくらい、切ない気持で耐えしのんできたことでしょうか。

せめて、読者の皆さまと、文通でもして、この切ないまでに迫ってくるマゾの気持を、まぎらわすことができたらと、思ったのですが、どのお手紙も、浩子の気持を、ますます

あふりたててしまうものばかりでした。

たった一人、夜のしじまを過す淋しさに耐えきれなくなってしまった浩子でしたが、この八通のお手紙は、私の胸をさわがすだけ、さわがしてしまいました。便箋にペンを走らせようとしても、身体ばかり、熱くほてってしまつて、指先はふるえるばかりです。

上に走らせました。

ああ、なんということでしょう。お腹からお尻へかけて、かつかとしているのに、頭のなかは、空虚で、なにも考える気がしないのです。やはり浩子は、男の方に責められ、いじめられ、おもちゃにされなければ、満足できない哀れな女なのでしょう。

ある方のお手紙には、「真実の心情の吐露であるSM心が恥ずべき必要のあるものである筈がない。寧ろ、自分をゴマ化したりしないで、自分自身に正直であつて素晴らしいことだと思ふのです」と書いてありました。

浩子もまた、そのお手紙の方と同じようにマゾ女の性癖を、いまわしいものでないと思いたいのです。いえ、いちじは、そう考えて責められ、いじめられることに、この身体を溺れきってしまったこともあったのです。男の方のおもちゃにされることに、生き甲斐のようなものを感じたこともありました。

しかし、それによって、私の身も心も、すっかり満足しきってしまったとは限らなかったのです。たしかに、マゾの性癖は女にとつて恥ずべきことではないかもしれませんが。

でも、でも、欲張りな私は、とても、それだけでは満足できませんでした。ハ一体、お



前は何を望んでいるのだVと言われたこともありましたが、ああ、私は、自分自身でも、何だか、わからなくなっていました。

お手紙の方は、更に、こう続けて書いて下さっています。

「しかしながら、社会的ハンディは、現実にあるのですから、世間に対しての秘密は一応

必要なのですが。そして——きっと誤解を生

む言葉かも知れませんが——SMプレイの世界であって実際の社会的な生活とは別の世界だ
と思うのです。私は例
えば、貴女を奴隷と化
して没社会化させる様
なことを望みません。

寧ろ社会人の一人であ
る貴女を責めて楽しむ
のです。又一方では社
会人として交際する。

これが私の考えている
SMの世界です」

私は、このお便りの
主の二十二才の学生の
方に、強くひかれてしましました。

一字の誤字もなく、流れるような力づよい
文字。このような方にだったら、どのように
してでも、いじめられたいという思いが、身
体ぜんたいで、してしまうのです。すぐに、
こんなことを考えてしまう浩子って、やはり
はしたないM女でございますね。

そんな自分が、いつも、いとわしく、そし
て、嫌になってしまふのです。

また、ある方は、こんなに書かれました。
「私はSMの性癖の中へ簡単に溺れていく女
性の多い中で、めずらしく、その性癖と戦い
悩んでいる貴女に、激しく引かれてなりませ
ん。その中に、貴女の人間性を見る思いがい
たします。欲望は理性など、いとも簡単に押
しのけ、嵐の様に人間の体の上を通り過ぎて
いきます。過ぎ去った後、自分の浅ましさに
慄然とせざるをえません」

ほんとうに、この方のおっしゃるように、
浩子も、そう思います。いちじはマゾの性癖
におし流されて、本能のおもむくままに、走
ってしまった私です。幾人の方とも文通し、
そしてお逢いもしました。なかには、プレイ
らしいことをした方もございました。

過ぎ去ったあと、あの一コマ一コマを思い
浮かべてみて、それが、いったい、私に何を
もたらしたかと考えますと、後悔の念ばかり
が起ってしまうのです。それなのに、今、こ
うして、読者の方々からのお便りを読んで、
これほどまでに心を動かされるなんて、浩子
は、ほんとうに、どうかしています。

そんなに思いながらも、私は、お手紙を読

みたくて仕方がないのです。ペンで浩子を責めてやろうと、おっしゃる方の長文のお便りの一字一句が私の胸に、つきささってくるのです。浩子は、この方の書かれたようにしてほしいままに、なぐさみものにしてほしいという気持を、おさえきれないのです。

「理性など一片の紙きれにすぎません。抑えようとすればする程、より淫らに、よりあくどく妄想は限りなくつづくものであります。私も貴女を思う存分、罵りたい。あくどく、あくどく、露出させ、いじりまわし、ケダモノの如く、責めつけてやりたい。狂った様な一時をえられれば良いのです。貴女の、この一文にはマゾの女性の絶叫がきこえます。どつぷりと、このマゾの中に首まで浸した方がよいのかもしれない。両手足の自由をうばい身もだえる事すら出来ない状態で、ユビと小道具と唇と舌と……セクスを、アナルを、乳房を、口を、いたる所を、なぶりつづけることの凄まじさの中で、**“妄想”**といわれる物が、すっきりするなら、それも又よしとする所かもしれない」

そんなお手紙を、胸を躍らせて読んでいますと、自分の身体が、その方の手で直接、責められているように妄想して、燃えてしまう

のです。そのときの浩子は、妄想のなかでは、いたがりつくされているのです。

そのお手紙は更につづいております。

「愛情とサディズムの中で、貴女をそして私を同時に満足させることが出来るのでしたら、こんなすばらしい事はないだろうと思います。マゾがアブノーマルなのではなく、性欲と別口のものと考え、極め付ける事がアブノーマルなわけです。私はマゾ・サドというプレイが、性的交渉なくして単なるプレイならば、むしろ、それをアブと申します。ですから**“助けて下さい”**と申される程、悩む必要はない様な、気もいたします。私も単なる性的交渉のみでは決して満足いたしません。SMプレイも性交渉のないものは、私には嘘のように映るのです」

それから何枚もの便箋の裏表に、ながながとつづく文章を、浩子は、身につまされる思いで読みました。そのお手紙の文章は、まるで私が現

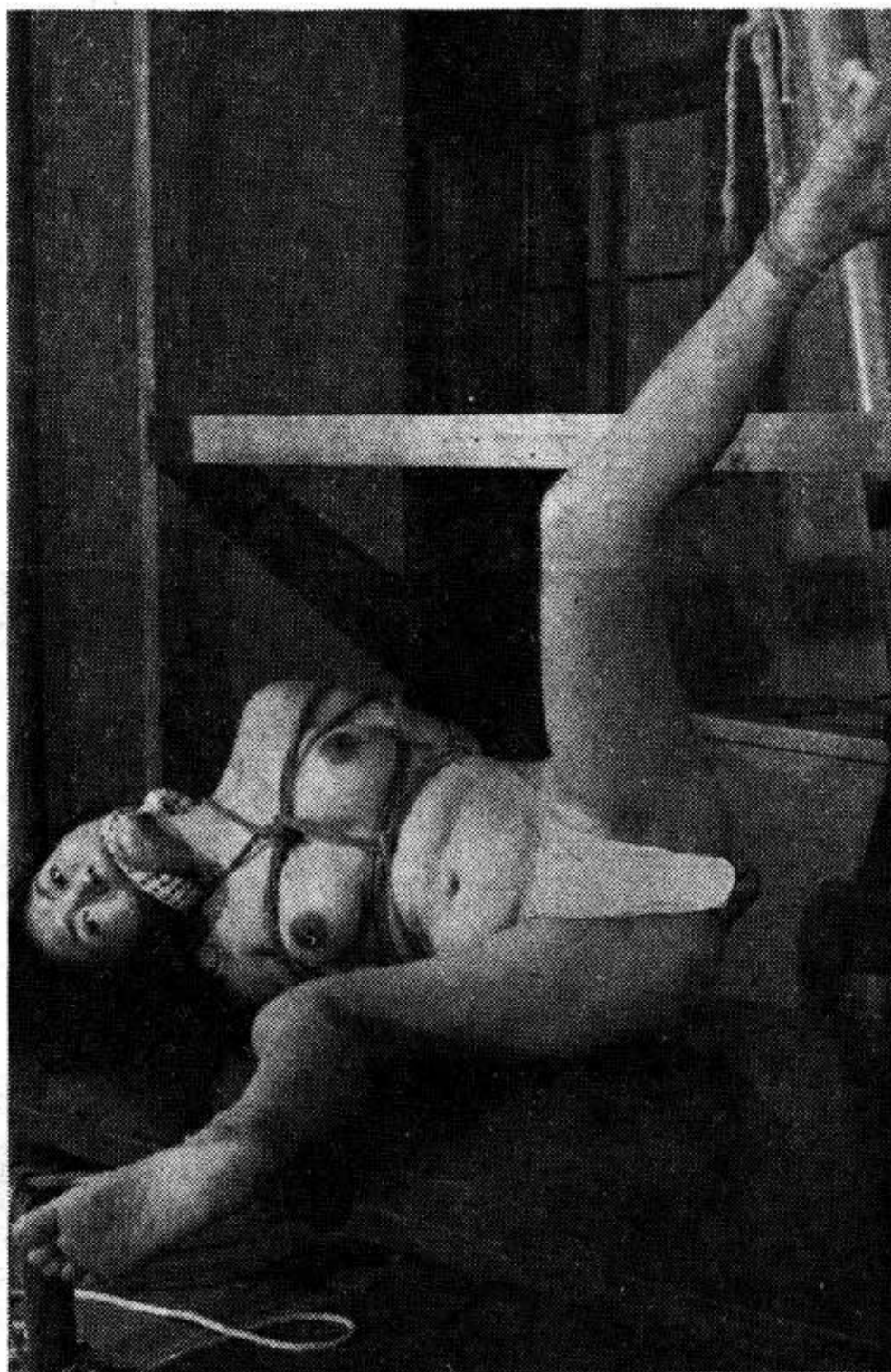


実に、その方に弄ばれているような気持ちにさせてくれました。

奇譚クラブを読んだり、こうして、読者の方からのお便りを拝見したりしていますと、このように、まるで自分が素っ裸にされて縛られ、弄ばれているような気持ちになって、身体中が、かっかと燃えてしまいますのに、実際に、いざ、その方とお逢いしたとき、なぜ私のマゾの心が、期待したように燃え上らずに、冷えきってしまうのでしょうか。

最初のころのことでした。私は、その方と何回か文通をし、手紙を交換した上、ある喫茶店で、お逢いしました。「どんなことをされるのが好きなのですか？」と、その方は、やさしく訊ねて下さいました。それなのに、その方と一緒に向いあっていた何時間の間、私の心は、一度も少しも燃えあがりませんでした。逆に冷たく冷たく、沈みきってしまうのです。なぜって、M女は、自分の方からどうして下さい、こうして下さいって、その場でお願ひして、していただくのでは、興味がわかないものなのです。

それから、その方が電柱のかげで帰ってくる私を持ち伏せたり、熱心な求愛のお便りを寄せられたり、執拗に求められれば求めら



れるほど、私の心は、その方から遠ざかってしまうのでした。これは、私の我ままなのかもしれませんが、いちど、嫌だと思ってしまいますと、顔を見るのも嫌になってしまうのです。これは、理くつではなくて、もう自分でも、どうすることもできません。

もう一人の、おつき合いをした方は、好感は持てたのですが、いつも私の気持ちをおきき

になるばかりで、少しも私を積極的に求めようとはなさらないのです。二人の方とも、私というM女とのつきあいでは、御自分がお楽しみなさろうとされるばかりで、浩子の望んでいるような、身も心もとろけてしまいそうになる凌辱は、なさって下さいませんでした。

私は、塚本さまに責められているとき、ふと思うのです。塚本さまは、私をむちゃくち



やに責めておられながら、ほんとうに御自分では楽しんでおられるのだろうか、と考えるときがあります。あの冷静な目で、じっとみつめられるとき、私はますます、みじめで、たまらない、こうふんのルツボのなかで、もだえ狂ってしまいます。でも塚本さまは、決して自分からは乱れてしまわれないのです。

もう私が、どのように許しを乞うても彼は決して、許して下さいません。私は彼の思いのままに、弄ばれて、挙句のはて、みせてはならない、みだらな痴態をさらけだしてしまうのです。私は、どちらかといえば、そんなとき、声を出すほうではありません。でも、猿ぐつわをしていただくほうが好きです。

そして浩子の、とてもみじめな縛られた姿が、読者の皆さまの目にさらされてしまうのです。お手紙のなかにも、「浩子の目が美しい」と言ってお下された方もありましたし、また、「うつろな目は、マゾの喜びにしたっている証拠だ」と言われた方もありました。

浩子は、こんなにして多くの方々の前に、自分の素っ裸で縛られた姿をさらし

ていることに、とても、たまらない喜びを感じてしまうのです。沢山のマニアの方の目にとまって、見られているのだと思うことで、私はたまりません。お便りを下さった方々も私のカラーフォトを見ながら、この手紙を書いていると言っておられました。

そうです。私は、皆の方に、すっかり見られているのです。穴のあくほど、見つめられているのです。もし、実際に、そんなにして責められている姿を見られたとしたら、これほどまでに、こうふんするでしょうか。

何カ月かの間、私は自分で、縛られたい、責められたい、いじめられたいという気持を必死でおさえつけようと努力しました。奇譚クラブも読まないでおこうと決意しました。

そうした努力が如何に、はかないものであったかは七月号の告白でも私は書きました。

昨年の十二月になって、お正月に故郷へ帰るのを目の前にして、もう、これが最後だ。最後の思い出し、思いっきり責められて、それを機会に、都会の雑踏から、おさらばしようと思いました。そして、このいまわしいマゾの性癖とも、さようならできたら、どんなにいいかと考えました。でも、実際は、そうはなりません。私は再び、都会の雑踏

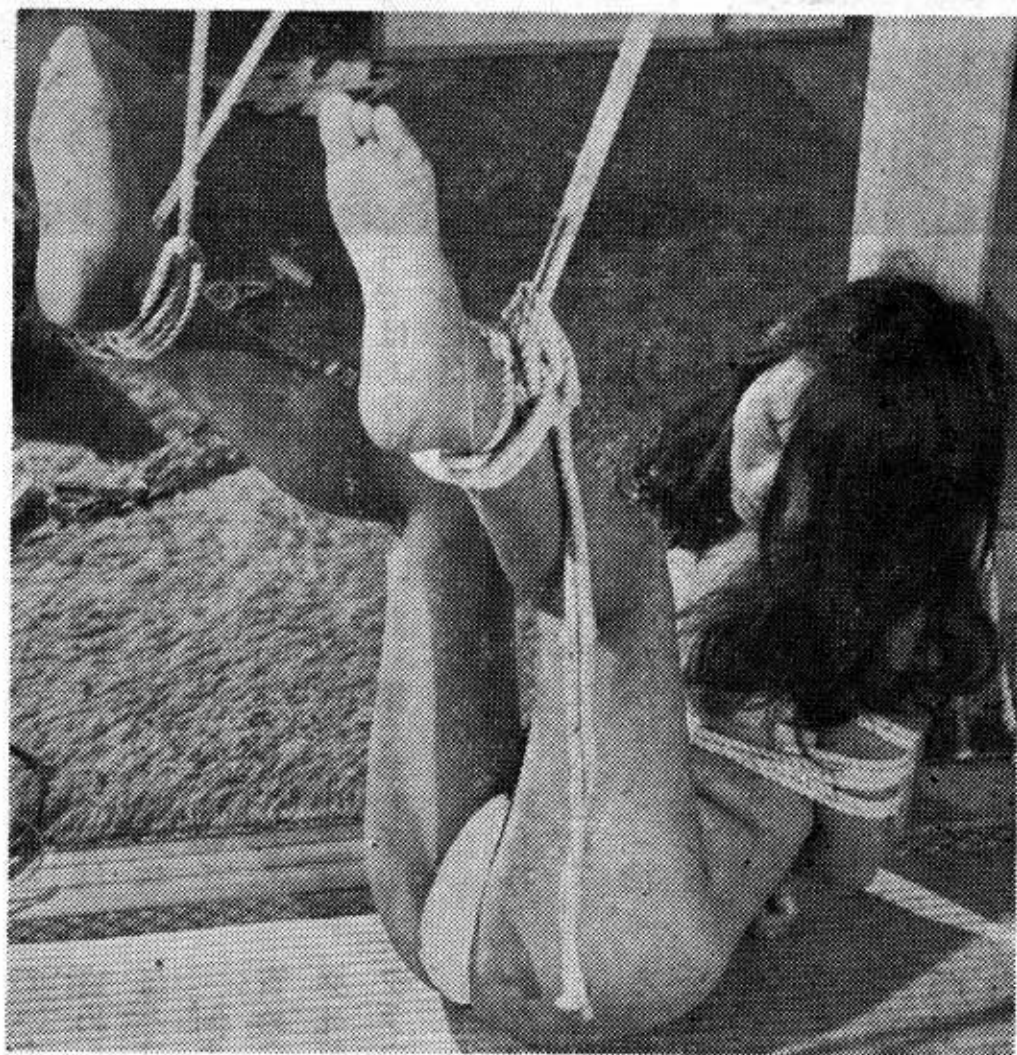
のなかに戻ってきました。

やむにやまれぬ衝動から、今年に入ってから二度、私は塚本さまに責めていただきました。それは、なんという甘美な、ひとときだったでしょうか。△自分はやっぱマゾの女なのだ△という気持ちが抜けきませんでした。

徹底的に、いじめ抜かれ、弄ばれ、まるで、おもちゃのように犯されて、はじめて、自分の妄想していた欲求がこんなものであったのかと、はつきり知らされたのです。

それから、また、私の苦悩がはじまりました。夜のひととき。それは私にとって、自分とのたたかいでした。もう二度と、こんなことは、お願いしないでおこうと、固く決心したかと思うと、そのあとから、すぐ、また別の心があらわれて、私をそそのかすのです。

あの、全身がしびれ、とろけてしまいそうになる甘美な被虐のよろこびが、私をそそのかすのです。△電話をかけさえすれば、お前は、あの素晴らしい境地に、すぐにでも導いて貰えるのだ。なにをためらうことがある。今から電話して、日をきめてもらえ△という声



が、私の耳の奥底で聞えてきます。

私は、その誘惑を、涙をにじませながら、ぐっと歯をかみしめて、こらえました。そうした夜が、幾度つづいたことでしょう。

春がすぎ、新緑若葉の頃となつてまいりますと、ますます私のマゾの心は、たけり狂って、ひとり暮しの私を苦しめました。奇譚クラブを読むことで、この自分の心が慰めるこ

とが出来たものならと、ひとりで雑誌をめくってみるのでした。七月号に、自分の文章と写真をのせていただいたことで、幾分か、私の心もなごみました。

けれども、カラーフォトなんか、自分のを、もっともっと沢山、大きくのせてほしいという気持ちが、すぐに起ってきたりします。

幸いにして読者の方からいただいた何通かのお手紙は、私に新しい刺激と生きる意欲とを与えて下さいました。そのお手紙を何度、くりかえし読んだことでしょうか。

さっそく、お返事を書いて、そしてもしかしたら、お逢いできて、それから……と考えると、期待に胸がわくわくするのです。

そんなことを空想するのが、浩子にとってとても楽しいのです。どんな方だろうか、などと、文字や文章から想像するのは。そんなことを考えているときは私の心は、うきうき、顔もほころんでまいります。

どんなお返事を書こうかしら？ 思案した上、私は封筒のあて名だけを書いてしまいま



した。そして、その名あての書いた封筒を机の前に立てかけて、この方はこんな方、と心にきめて、ボールペンを持ちました。でも、封筒のあて先は書いているのに、便箋には、ペンは一向に走りません。

お一人、お一人違う文面。さて、どのように、お返事を書いたものかと、私はペンを握ったまま、とまどいました。

朝から降りだした雨は、時々やみながらも夜になっても、まだ降っています。もう、梅雨に入ったのですね。むしむしとしていて、それでいて、ふと、足もとのほうが、うすら寒く覚えることもあるのです。

こんな日は、浩子の心にも身体にもマゾの誘いが一しお、きびしく迫ってまいります。

私は何人もの男性の方に、心ゆくまで羞かしめを受け、思う存分Mの世界に陶酔したいという念が、もうどうしようもなく、みぞおちのあたりから湧いてきて、足ぶみしたいような気持ちに、あふりたてられます。

全裸で柱にくくりつけられ、開股縛りにされて、男の人のなぐさみものにされる……と想像しただけでも、この身がトロける思いです。ああ、なんという、おぞましいことを考える浩子でしょうか。

SM研究会の記事を毎月の雑誌で拝見しておりまして、熱く胸がさわぎます。ああ、あの方たちの前で、さんざん、なぐさみものにされたい……そう思いました。

塚本さまに、そのことを、お手紙でお願いしましたら、「お前のように前もって予定がたたず、それに四時になったら帰してほしいなんて言うようじゃダメだ」と、言われました。でも、私は、お休みはないし、夕食の仕度はお仕事ですから、ほっておくことは出来ないのです。彼は、「泊りがけで出てこい」と言われますが、今の私には、それは出来ません。御主人のお家のことを考えますと、とても、そんなこと、言いだせないのです。

浩子は、皆さまからのお手紙によって、ペンで責められ、今、このように身もだえしております。実際に責められるよりも、ペンでいじられるほうが、気持の上では、心がたかぶるかもしれません。でも、浩子は、実際にこの身をいじめられたいのです。

懸賞「告白」手記、体験」入選作品発表

S氏とM氏の告白

アヲ
蛇

ノ
野

ジョー
譲

ジ
治

カット・黄泉鳥



S Mに魅せられてまだ日も浅い私が、告白文を書いてみようと思立ったのは、どなたでもいい、とにかく私の過去を打ち明けたかったからです。

私は学校を卒業すると、すぐ絵画の個展をひらきました。美術を専攻していたわけではありませんが、幼い頃から、そういうことが好きだったのです。

しかし、どこでどう間違えたのか、あるテレビ局と出版社から声をかけられたのです。

そして、ある番組制作を通じて知りあった二人の女性。一人は今をときめく超一流のデザイナーですが、この私をミナミのサパークラブへ連れていってくれたのです。私は誘われるまま心もそぞろにノコノコついていきました。

その夜、私は二人の女性に、愛されたのです。人間の愚かさともいうのか、有名なデザイナー、美しく洗練された物腰、有名人にありがちな自信たっぷりな態度。それらに私は、すっかり魅せられてしまいました。

しかし、私が描いていた三人の春画は、男が縛られ、ころがされている絵にかわっていたのです。別に手首に巻きついた腰ひもが痛いとか、脇腹が絨毯の毛先で痒いといった事

はありませんでした。ビールを飲みながら足を組んだ女性二人が、タバコが煙るテーブルを前にして裸の私を見つめているのです。

恥かしくならない方が、おかしいというものです。二人は、あくまでも洗練された言動をくずさず、節度ある態度で接してくれたことが一層、私を恥かしめました。

二人の女性が裸の私を見ていると思うと私は恥かしさで震えてきました。

私は、いまだもって、自身がSであるかMであるかわかりません。いくらイヤダイヤダ快感など得られるわけがない、とこの場面に就いて力説しても、縛られることに殆ど抵抗しなかったのは事実であり、心の奥深く秘めたアブノーマルな一面があったことも否定できそうにありません。

私は縛られ、フロアーにころがされ、ありとあらゆるところを触られ、撫でられ、そして浴室でシャンプーと水道栓で浣腸されたのです。二分ともたず、便器をまたがった私の後ろで、二人の女性が、かがみ込んで、ある一点を見つめているのを感じながら、なんともいえぬ破裂音と共に、私は排泄してしまいました。

当時、私はこの二人の女性の行為は、女性

だれもが抱いている男性への欲望、陰湿な性への好奇心だともっていました。

奇ク3月号に「二つの丘のうた」と題し、告白なさった曾根崎清子さん。男性である私が、女性である、あなたを評する事はできませんが、ちょっと理解できないのです。女性が女性の排泄場面を見た、もちろん、ありうる事だとも思いますし、同性愛好者であればなおさら、お尻を見たい願望も、強いでしょう。また、見られている事を知っている私に承知の上で浣腸し、排便するところを見た女性と、相手が知らないのを覗いた、あなたを同じ立場におくことはできません。しかし、便器にまたがったのが男と女で違ってはいても、汚物を排泄するのを見たのは、女性なのです。

私は、難しい理屈などわからないし、曾根崎清子さんを矢面に立たせ、アブを論じているわけでもありません。経験は浅い私ですがそれらの知識を得れば得るほど、女性がそういう場面を見たいという欲望は湧かないような気がするからです。

その二人の女性は、SM小説にあるように私をムチでたたいたり、馬のりになったり、お尻で私の顔を圧迫するようなことはしなか

ったし、ずっと格好のよいパンタロン姿でした。女性の部分に奉仕しろ、といわれれば、きつとガツガツやったでしょうが（あくまでも能動的に）例の、顔に放尿されそうだと飛び上がって逃げ出さないまでも、きっぱりと拒否したでしょう。今からおもえば、二人の女性は猟奇的要素は、いくぶんかはあったにせよ真性のSとかM、またレズでもなかったようです。

このことがあってから一層、女性との、いやらしい行為を夢想するようになりました。あの時、全然欲情しなかった私は、何度も何度も繰返し、あの夜のことを想い出しては、自慰にふけるようになったのです。もう一度してほしい……あこがれは日増に募るばかりで、満たされぬ毎日でした。

番組が打ち切りとなり、パンを得るため、トラック運転手、クラブのボーイ、スナックのバーテン、深夜労働と職をかえました。私の性癖を満たしてくれる女性は、みつからず、また私自身、自分の性癖に大いに悩みました。しかし、特異な性へのあこがれには勝てず、欲望を押えることこそ悪徳だ、自分に忠実に生きていこうと考えなおしました。

その頃の私は、持ち前の演技力とでもいう

のか、自由奔放にふるまいました。入り浸っていたジャズ喫茶、ダンススナックでは女子学生と、しゃべりまくり、クラブへ飲みに行けば、若い紳士をきどる、つまり、その場の雰囲気にあった男を演じたわけです。もちろん、仕事には真剣な態度で、のぞみました。

何人かの女性と知り合いはしましたが、私の隠された部分を打ち明ける勇気がなかったのか、交態よばわりされ、さげすまれたくなかったのか、ごく普通の、つき合いでおわりました。当時、結婚など意識してなく、全くの遊びでしたし、また、相手の女性も私に真剣な愛を抱いてはいませんでした。

スナックで働いていた時、そのママさんには、たいへん、よくしてもらいました。なにやかやと気をつかってくれ、とても大事にしてもらったものです。30歳を越えてはいましたが、ものすごい美人で、スポンサーか、あるいは逆のヒモか、それらしき人物はいましたが、彼女自身、別に意識してなかったようです。

私は、どちらかというと厚化粧より薄化粧アップにした髪より垂れた髪、和服よりミニスカートの方が好きですが（もちろん、年齢に関係しますが）、彼女と体の関係はありま

した。体の関係といっても、ごくノーマルなもので、彼女を縛り上げて、恥かしめてみたい、責めにもだえる姿を見てみたい、という感情は不思議と、おこりませんでした。

仮に彼女が、薄暗い古びた映画館に座っている。その隣の席に見知らずの私が偶然、座ることになり、彼女の膝に私が痴漢行為を始めても彼女は、とがめない。

あいかわらず創作活動を続けていた私は、ある人の紹介で、業界では、かなり名の通った会社へ企画部員として就職しました。会社では時間に縛られる事はなく、自由に活動できる私は、あるビルのトイレへ通うようになったのです。小さなビルですが、男女兼用でしかも間の仕切り壁の下が空いているトイレなのです。私は事務ロッカーに付いている小さな鏡をもちだし、二つならんだ個室の後ろ側に潜み、その鏡を使って女性の排出シーンを、のぞくようになりました。

静かなビルだと、長時間トイレにこもっているわけにはいきませんが、さいわい、そのビルは人の出入りが激しく、廊下を行き来する足音も絶えなかったので、時間を意識する必要はありませんでした。

ヒールの音が前の個室にはいりきると、す

かさず手にしたグレーのプラスチックに縁どられた鏡を、仕切り木壁のやや手前で構え、上から覗き込みました。むきだしになったお尻の間から便器を流れる騒々しい水音と共に太い水柱が鏡を登っていくのが見えました。照明が弱いのか、あるいは上からの明かりを大きなお尻が遮っているからか個室の中は暗く、さらに一枚の鏡なので潜望鏡のように正立した影像ではなく、逆様になった被写体を見るわけですが、それでも、かなりはっきり放尿場面を見ることができました。

何度ものトイレで女性のその行為を覗きました。なかには用心深いのか、それとも一人だけで用をたしたいのか、前の個室が空いているにもかかわらず、私が潜んでいる後ろの個室をノックし、先客ありとみると、ひき返す女性が、かなりありました。また、やはり男女共用で、しかも仕切り板の下が空いているということを意識してか、お尻を充分下までおろさず、やや中腰のままで放尿する女性もいました。紺地に白のストライプが、はいった事務用スーツの女性が多く、同じ女性を何度も観察したものです。しかし、私ももっとも熱望していたこと、固形物を排出する女性には、残念ながら出くわしませんでし

た。

このトイレへはいつてくる男性の多くは小用の為で、個室を利用する事は稀でしたけれど、それでも前にはいつてくると、私はおお急ぎで逃げ出しました。覗いているのが恐かったからではなく、私のすぐ前で男性が排便する音など聞きたくなかったし、なんとなく不潔で嫌だったからです。

地下鉄や公園などの公衆トイレは、ドアといわず壁といわず、一面に落書きされていて、ホモの人達が、伝言板がわりに使用しているわけです。私はホモではありませんが、こういう公衆トイレは好きです。目的を持ってやって来る人達ばかりだからです。

ある地下鉄の男性用トイレなどは個室のドアに数カ所、穴があいており、個室内からは小用をたしている姿が外部からは、しゃがみ込んでいる姿が、その穴を通してみえるわけです。もっとも、用たしにくる男性は殆どいず、多くはホモの相手を捜しにやってくるわけですから、長い間、鏡の前で髪をとかしたり、何度も何度も手や顔を洗ったりしているのです。つまり適当な相手から声をかけられるのを待っているわけです。その適当な相手も同じように鏡に向い、相手を横目で見なが

ら同じ事を繰り返しているのですから、なんとかなりそうなのものに口をきこうともしないのです。お互いに内心、話しかけて欲しいと思っではいても、自分から、そうしようとはしないのです。その気持が手に取るようにわかるだけに、ホモの人には悪いが、見ていて、おかしくさえなってきました。

そのトイレは、昼間は殆ど利用者はなく、ある日、私が行った時は、二つある個室の後側だけドアがしまっていました。私と、その中にいる人物と二人きりです。そして、その人物は大きな穴に目を当てて、外にいる私をのぞいているのです。それは、穴から目が見えているし、個室にはいる男は、外で用を足している男性のそれが見たいのだ、と勝手に私が想い込んでいたからです。

中の男は私のその部分を見たがっているのだ——私は、とっさに穴からの視線の死角にはいり……穴から一番のぞき易い位置で、しかも見易く体を向けて放尿したのです。きつと若い私を、歓喜して覗いているに違いない……私は見られているというスリルよりも、見せてやったという喜びが沸いてきました。もっとも相手は私のぞかれていることを知っているのはわかっているでしょうし、私も

のぞかれている事を承知しての行為でした。

その時、男子用トイレとは細い通路だけで区別された女子用トイレに、女性が、はいつていったのです。通路越しにボタンと木のドアがしまる音が聞こえると、何をおもったか私もすぐあとから女子用トイレへ、はいつていきました。この女子用は、皆無といっていいほど女性はず、女子用トイレとは名ばかりで、ホモの男性達の愛の場として存在しているに過ぎません。そんなトイレに女性がはいつたのです。

私は女子トイレの鉄扉をしめ、鏡を後にして立ち、その閉ざされた個室に向かってオナニーを始めたのです。こんなトイレに来る女性も、もともと変質的な欲望を持っているのか？ なにかに期待してやって来たのに違いない。個室から出てきた時、彼女はどんな顔をするだろう？ 私は胸の高揚を押え切れませんでした。

しかし、個室から女性が現われた時、私が信じ切っていた事柄は、無惨にも砕け散りました。顔を真っ青に、ひきつらせ、恐怖でふさぐことができない口に腕を這わせ、個室から半分、出かかったままで立ちすくんだ彼女は、次の瞬間、言い現わしようのない悲鳴を

あげると、重い鉄扉をおし開け、ものすごい勢いで、かけだしたのです。

私は必死でした。逃げなければいけない。無我夢中で走りました。私は地上にあがるべく階段を登り、やっと改札口にたどりついたその時、背後から腕をつかまれたのです。

私の顔は真っ青だったろうと思います。唇から頬のあたりが小刻みにケイレンし、後悔が頭の中を駆け巡りました。恐怖でなんとも視点が定まらず、腕をつかんだ男を観察できるだけの心の準備も、できてはいませんでした。『外にでえへんか』——しかし、腕をつかまれ、突っ立ったままにいる私に、信じられないような優しい口調で男は言ったのです。

改札口を外に出た私は、色とりどりの服装をした高校生らしき男女があふれ、ボリュームを一杯に上げたロックのリズムが流れる円型の地下広場で、教養のなさそうな男の低い声を聞くはめになりました。その男こそ、トイレの穴から私を、のぞいていた男なのです。50歳くらいで、労働者風のその男は、それでもやはり、おとなしい口調でした。一体どちらが痴漢をつかまえ

たのかわからないほど、遠慮がちな態度でした。

卑屈なその男のひそひそ話は、私の行為を公にしない交換条件として、私を抱かせてくれというものでした。なるほど……私は心の中で、せせら笑いました。

私は、この場を離れることは容易でした。しかし、生来の好奇心がムクムクと頭をもたげてきたのです。ホモを経験してみよう。おとなしくて弱々しいこの男なら、私のおもいどおりになるだろうし、ましてや私が嫌がることなど、できるはずがないとおもったので

す。

私達は、地下鉄と連絡しているビルの、人の出入りが少ないトイレへ、はいりました。その男は、すぐに私に上着とズボンを脱ぐように促すと、自分も脱ぎ始めましたが、私は手でそれを制しました。こういう状態での男の裸など、醜悪で見える気はしません。男は、けげんそうな顔付きで、ベルトをしめなおすと、私の上着とストラックスをドアに掛け、私を後ろ向きにするのです。そして、私の前部分の感触を楽しむように背後から抱きすくめ、ブリーフをおろし、さらに片方の手で私の



の背中を強引に上から押したのです。私は、いわゆる受身の立場なのでしょうが、精神的には相手を圧倒してしました。だからこそ、大きく開いた両足首をつかみ、お尻を相手に突き出したような姿勢も全然、恥かしくなかったし、お尻の間から私のすべてを露呈している事に、喜びさえ感じました。

私のお尻を目の前にして、しゃがみ込んだ男は、両手で私の腰をつかみ、重心を支えると、私の……を舐め始めました。くすぐったいような甘い刺激が伝わってきました。しつこい位に舐

めまわし、唾液でベトベトになった時、急にその男の指が……てきたのです。私は、おもわず、のけぞりました。ものすごい痛さでした。男は私がホモだとおもっていたのか、不思議そうに「ここはダメなのか」と手ぶりで示すと、それ以上、続けようとはしませんでした。痛さが残るお尻に手をやり、促されるまま男に向き直った私に、こんどは、むき出された部分が、再び唾液に濡れる快楽が待っていたのです。

男はそれこそ、私にむしゃぶりついていました。男のテクニックは抜群で、歯と舌と唇を、たくみに使い分け、右手で揉みほぐし、左手で私のお尻を抱え込んでいるのです。私は重心が支えられず、立っているのがつらくなり、前の壁に両手をつこうとした瞬間、耐えきれなくなった私は、その男の口中に果ててしまいました。

陶酔が過ぎ、やがて虚無感が襲ってきても男は私を口からはなそうとはせず、なごり惜しそうに私のお尻を撫でまわしていました。受身の立場でありながら、相手をおもいどおりに操縦する……私のホモ初体験は、新しい喜びで私を満たしてくれたのです。

さすがに結婚した頃は、トイレでの覗きも

トイレへあてもなく行くことも、SM雑誌を買うこともしなかったし、不思議とそういった感情は沸きませんでした。妻とは仕事を通して知り合いましたが、私自身、当時はノーマルなセックスで満足していましたし、強いて私の性癖を理解させようとはしませんでした。また私は精力が弱いのか、あるいは独身の頃の寂しさから一転して、家庭のあたたかさによって精神的に満たされたからなのか、新婚当時でも週に一度で充分で、あまり妻を求める事はありませんでした。

それでも、やはり根っから享楽好きなのでしょう。果てた後の虚しさを、いやという程わかってはいるはずなのに、妻と戯れるたびにそれとなくSMを口にするようになったのです。しかし妻は、そういう種類の性の存在を悟っただけで、全く興味を示そうとはしませんでした。私は妻を、徐々にならしていきと、みだらなポーズを強制したり、私の下半身への口での愛撫を教えたりしましたが、縛られる事には抵抗し、私がガウンの腰ひもを手にしただけで逃げまくり、私を変態呼ばわりして全く手がつけられません。

上品で優しい、愛する妻が、私を変態と、ののしった——私は瞬間、萎えてしまいました

た。なんとも情なく、私は軽蔑した妻を打ちのめすだけの気力も残っていませんでした。

一年ほど過ぎたある夜、少なからず妻への憎しみも捨て切れないうちに私は、意を決して、嫌がる妻を丸裸にし、抵抗できないように押えつけ、用意したイチジク浣腸を、大きなお尻の真ん中で喘いでいる部分めがけて押し入れたのです。妻は、大部分の女性がそうであるように、時おり便秘を訴えてはいましたが、その都度、浣腸を勧める私に耳をかさず、頬を赤らめるばかりで、実行しようとはしませんでした。

なんにしても、生まれてこのかた、浣腸などしたこともないという妻は、一度に二個ものイチジク浣腸の責めを受けたのですから、その苦しみようは可哀想な位で、またそれがひどく私を刺激しました。鳥肌は青く震えだし、悲鳴にも似た、あがきが早くトイレへとせき立てるのです。しかし私は、できるだけ我慢させてから一気に排泄させるため、なまめかしく揺れ動く白いお尻を抱え込み、妻の進路に立ちふさがったのです。今にも泣き出さんばかりに生理の要求を訴える妻が、たまらなく愛おしく、これから起こるであろう、妻が羞恥に沈む姿が一層、私を燃え上がらせ

ました。

しかし、便器にまたがった妻は、ドアを開け放ち、そのそばにかがみ込んだ私を嫌がりなかなか苦しみから逃れようとはしませんでした。しんぼう強く待ち続けた私が、どんなに優しく説得しても拒み続け、そして、とうとう妻は排泄する事を諦め、トイレをあとに自分で寝床へ、もどっていったのです。

私は、びっくりしました。あれだけ苦しみのうち、油汗を流して排泄を懇願していた妻は、自分の恥を隠すため、排泄の欲望を我慢したのです。私は妻が、かわいそうになり一人だけでトイレへ行かせました。もし私が妻の後を追えば、トイレへ忍んで行っても、妻がそれを悟れば、決して私の前では排泄しなかったでしょう。それにしても妻の忍耐強さには、あきれてしまいました。いままで培ってきた自分の城を、女性としての尊厳を守り通したかったからなのでしょう。それとただ、私に見られるのが恥かしかったからなのでしょう。それ以来、私は一度も妻にS M行為を要求していません。妻をそういう風に育てあげるのは無理だと悟ったからです。

私は結婚する以前、K美という女性とダンスホールで知りあいました。もちろん、ダン

スホールはボーイハント、ガールハントのメッカですが、多くの女性が恋人探しであるのに対し、K美の場合はセックスの相手探しだったようです。K美は当時20歳で、和裁を勉強中とのことでした。とても好奇心の強い娘で、意気統合した私と、よくアブの世界を探険したものです。個室喫茶の壁の上から隣のアベックをのぞいたり、マンモス喫茶のトイレで抱き合っているところを、トイレにはいつてきた女性に、わざと見せつけたり、ホテルで女中さんに行方を見てもらったりしました。

K美は、S Mについては興味は持っていたようですが、いざ私がプレイしようと要求しても頑強に拒み続け、とうとうそのチャンスはありませんでした。結局、自身がS Mの主役になりきれなかったようです。

K美は、私が結婚してから時々電話してきましたが、仕事が忙しくなったのと、早く家へ帰って、くつろぎたい気持から、なかなか逢う気になれず、彼女もその辺は察してくれたのか、一時、別れたような格好になりました。

私は妻を愛していますし、家庭も大事にしているつもりです。ですが、妻には言えない

私の秘密も、K美には大胆な言葉を使って話せるのです。妻には理解できないであろう、いろいろな事柄も、K美は理解してくれるわけです。

私はK美と何カ月ぶりかで逢いました。そういう事が理解できるK美と話してみたい衝動にかられたからです。その日は、喫茶店で小一時間、話し込んだだけでしたが、充分に私を満足させてくれました。

ところで私はレズにも興味がありました。一度、若い女性のそのシーンを見たいものだと思った私は、K美に聞いてみると、興味はあるが相手がいないという返事でした。

相手を捜せばいいわけかと、私はK美を、いろんな公衆トイレへ連れて行き、女子トイレの落書きは、どんな内容なのか、見てこさせたのです。さすがに落書きされている女子トイレは少なく、駅構内や、あまり目立たない地下鉄のそれに限られてはいましたが、オフィス街に位置する、とてつもなく長いビルの子子用トイレにも、落書きはあったそうです。

その存在が、あまり目立たず、しかし利用者は多い地下鉄の公衆トイレは、男性が忍び込むらしく、彼らが女性に呼びかける落書き

が殆どで、女性が性を対象として書いたものは少ないようです。

そういうわけで、目的のレズを呼びかける落書きは全くみあたらず、私達を失望させました。しかたなく、私はK美を連れて、大阪では、かなり知られたレスビアン・バーへ行ったのです。ホステス（この店は全員、男装なのでホストと呼ぶべきかもしれない）を誘うか、あわよくば、飲みに来てくれるレズ女性をハントしようというわけです。しかし、その夜に限ってか、あるいは通常そうなのか、男客の方が多く、しかもホステスにしてもレズの女性は少ないように感じました。

とにかく、K美と同じ年頃の、小柄なホステスを口説き落とし、私も加わった三人でのプレイを約束させたのです。三人が都合のよい土曜日の午後にミナミで待ち合わせたのですが、直前になってK美から電話があり「どうにも恐くなった。やはり、そんな趣味はないから行けない」というものでした。私の必死の説得にも耳をかさないもので、しかたなく私一人で約束の場所へ行き、そのホステスに、いきさつを説明し、少ない御礼で帰ってもらったのです。

その事でK美と少し、もめました。彼女

の言いわけを要約すると、あらゆる事に興味はあるが、雑誌を読んだり空想を楽しんだりする程度で、実践度ではないということでした。それならば、私のホモ・シーンを見てもらおうとおもいましたが、なんだか気分がのらず、結局、言いだせませんでした。

アブになりきれぬ女性は、滅多やたらないわけがなく、探す方法も少ないようにおもいますが、そういう男性は多く、ホモに至っては、いとも簡単に捜し出せるようです。女性とSMの世界に浸りたい。しかし、なかなかそういう女性が見つからない。勢い男同士のプレイを行なうようになります。本意ではないが、女性パートナーが得られず、しかたなくそういう男性同士が結びつくわけです。

私も例外ではありません。どうしてもパートナーが得られない私は、男同士のSMを意識し始めたのです。しかし、男性の裸を嫌悪する私が、痛めつけられ、奉仕する奴隷になれるわけがなく、そうかといって、ムチをふるい、A・Pを責める事もできそうにありません。身動きできないように縛り上げられ、相手を見るのが嫌だから目隠しされ、そして浣腸される、そういうパターンが、理想でした。つまり愛撫されたいけど、相手には何も

しない、こういう私は、きっと自分本位なのでしょう。

ある電車站に直結しているオフィスビルの地下トイレは、二つ並んだ個室の仕切り壁にバカデカイ四角い穴があいているのです。いうまでもなく、この男子用トイレもホモの、たまり場なわけです。ものすごく大きな穴です。お互いの容姿を確認できるのです。なにげなくそのトイレへはいった私の目の前に、急にグロテスクな物が穴からニョキとでてきて、さすがの私も仰天したものです。ムードといい、舞台装置といい、ここほどホモ族を興奮させるトイレは、ちょっとないような気がします。

私が潜んだ時は、穴越しにトイレトペーパーに書いた伝言を手渡してくれました。ここでは人の出入りが激しいから、別の場所へ行こうというわけです。私も同様にトイレトペーパーを使い、ホモには、あまり興味がないが、浣腸してくれるのだったら……と返事をしたところ、それに対して、また小さく丸めたトイレトペーパーをはさんだ指が、四角い穴から、でてきました。しわくちゃんになった紙片には「君は変態だ。私には、そんな趣味はない。すぐに出てくれ」といった内

容が書かれていました。おもわず私は苦笑してしまいました。このお方は、ホモ以外の行為は変態だと、おもってらっしゃる。

一度もプレイの経験のない私は、女性パートナーの出現を切望しました。いやがる女性に強烈な浣腸液を注入し、悶え狂う、その裸体を見たいのです。満たされぬ私は、妻の目を盗んでは、自身で浣腸したものです。しかし私の場合、浣腸による苦しみから悦楽を得るわけではなく、排泄するところを他人に見られる恥かしさにあがれているわけですから、自分の手でそれをして意味がないわけです。事実、私のアヌスに快感はなく、恐る恐る固型物を入れてみても痛いばかりです。その点、『浣腸という名のシークレット』の白木幸江さんとは少し違うようです。私は浣腸することも、浣腸されることも好きですがこれは多くの浣腸マニアのみなさんと同じ意見だと思っています。

さて、同性との話ばかりで恐縮ですが、ホモ族のたまり場として、あまりにも有名な旅館での出来事を述べることにします。それまで私のホモ体験は一回きりで、この旅館を利用したのも一回だけですが、その一回が、どうにも、ものすごい体験なのです。もっとも

私の体験など、この旅館では日常茶飯事のごとく行なわれている、ちっぽけな出来事に過ぎないかもしれません。

場所が場所だけに、私はジーンズにセーターという軽装で、こわごわノレンをくぐりました。この旅館のシステムは、一階のロッカ―で浴衣に着替え、それから二階の大部屋で相手を物色するわけです。浴衣を着ただけの私は、恐る恐る二階へ上り、沢山の男がゴロ寝している薄暗い大部屋のなかで、場所を選ぶ暇もなく、あいているフトンに俯伏せったのです。

目が暗闇になれば、顔を下に向けたままで辺りを見回すと、部屋の中は男ばかりのパーティーといったありさまで、なんとも異様な光景が繰り広げられているのです。ここではお互い干渉せず、干渉されずで、周囲を気にかける必要がないからでしょう。

だんだんとこの異様な雰囲気慣れた私は七つほどある大部屋を一つ一つ、のぞいて歩きました。どの部屋も負けず劣らずの痴態が展開され、得てしまったその道の深さ、性の哀れさを知らされましたが、これが男女入り交じったの状態なら——と、ちょっぴり残念な気がしないでもありませんでした。

裸の男同士のカップルをあとに、元いた部屋へ引き返そうとした時、廊下で頭を丸めた大男と、すれ違いました。私は顔を見られたくない一心で、とっさに顔をそむけましたが大男は足を止め、私をじっと見つめているのです。背を屈めるようにして大男の肩下を、くぐり抜け、やっと元いたフトンに横になっても、大男が私のあとをついて、この部屋へ入って来るような気がして、なりません。視線こそ合わせなかったけれど、大男が私に興味を持った事が、手に取るように、わかったからです。

その不安は現実になりました。部屋へはいってきた大男は、強引に私の上へ覆い被さってきたのです。ものすごい巨体で、坊主頭と細かい人相は、私をガタガタ震え上がらせるに充分でした。大男は一言も喋らず、背後から私の浴衣をはぎとると、私を仰向けようと腹の下に手を入れてくるのですが、私は必死に浴衣をつかみ、体をそれで隠しながら立ち上がりました。それでも大男は余裕たっぷりに浴衣の腰ひもを手にとると、私の腕をねじり上げ、背後で両手首を縛ってしまったのです。

狭い部屋をノシノシ動き回る巨人は、いや

でも目に付き、しかも嫌がる男が縛られもがいているのです。たちまち数人が輪をなし、そのなかの興奮し始めた男達が、面白半分で私を縛る為に、自分の腰ひもを提供して仲間に、はいつてきたのです。大男は自信満々にこの旅館のヌシのごとく振舞い、他の男たちに、あれこれ命令しているのです。実際、この大男には有無をいわさぬ威圧感があり、小心な人間だと射すくめられると逃げだしかねない鋭い眼光は、まるで仁王のようでした。

そういうわけで、私は数人の男の手によって、両手を背後で縛られ、両足首を結わえつけた腰ひもは、体の前側から首に巻きつけられてしまったのです。つまり、エビのように二つ折りにされたわけで、しかも私の体を、男が下から、もち上げていますのです。

私の腰を抱いた男は、私の尻を舐めまわし横側から顔をだした男は、私のものを口のなかでもて遊び、そして大男は私の唇目指して頭越しに顔を近づけてきたのです。ぞっとするような醜い唇から逃れるのに、何度、顔をそむけたかわかりません。そして周囲は、他の部屋からもやってきた大勢の男たちで囲まれているのです。

こんな喜悦があるでしょうか。必死の抵抗

にもかかわらず、醜悪な男達の手によって無理矢理、恥かしめられているのです。計算された出来事ではなく、絶対に抵抗を許されない状態が、私を一層、燃え上がらせてくれました。

しかし、私の悦楽も、ほんの僅かで、次には私が最もイヤな苦痛が待っていたのです。私の……に指が、はいつて来たのです。初めは一本でしたが、やがて二本、三本と、ふえさらに……たびに爪先が私の臓物を壊わしてしまうのではないかとおもわれるくらいの、耐えられない痛みが続きました。

相手にしてみれば、こういう行為は私を喜ばせる一つの手段とされているわけですから一定のリズムでうめく悲鳴は、私のよがり声と聞えたことでしょう。激痛と不安で、半ば気を失いかけていた私は、まだ解放されず、こんどは、うつぶせにされ、犬のような格好でお尻を突き出した姿勢にされたのです。しかも、私の体勢が崩れないよう、背中に男がまたがり、私の胴を両足で締め付けているのです。

私が予期していた事が始まって、どうにも逃げられませんでした。大男は私の腰をつかみ、……動いているのです。圧迫されるた

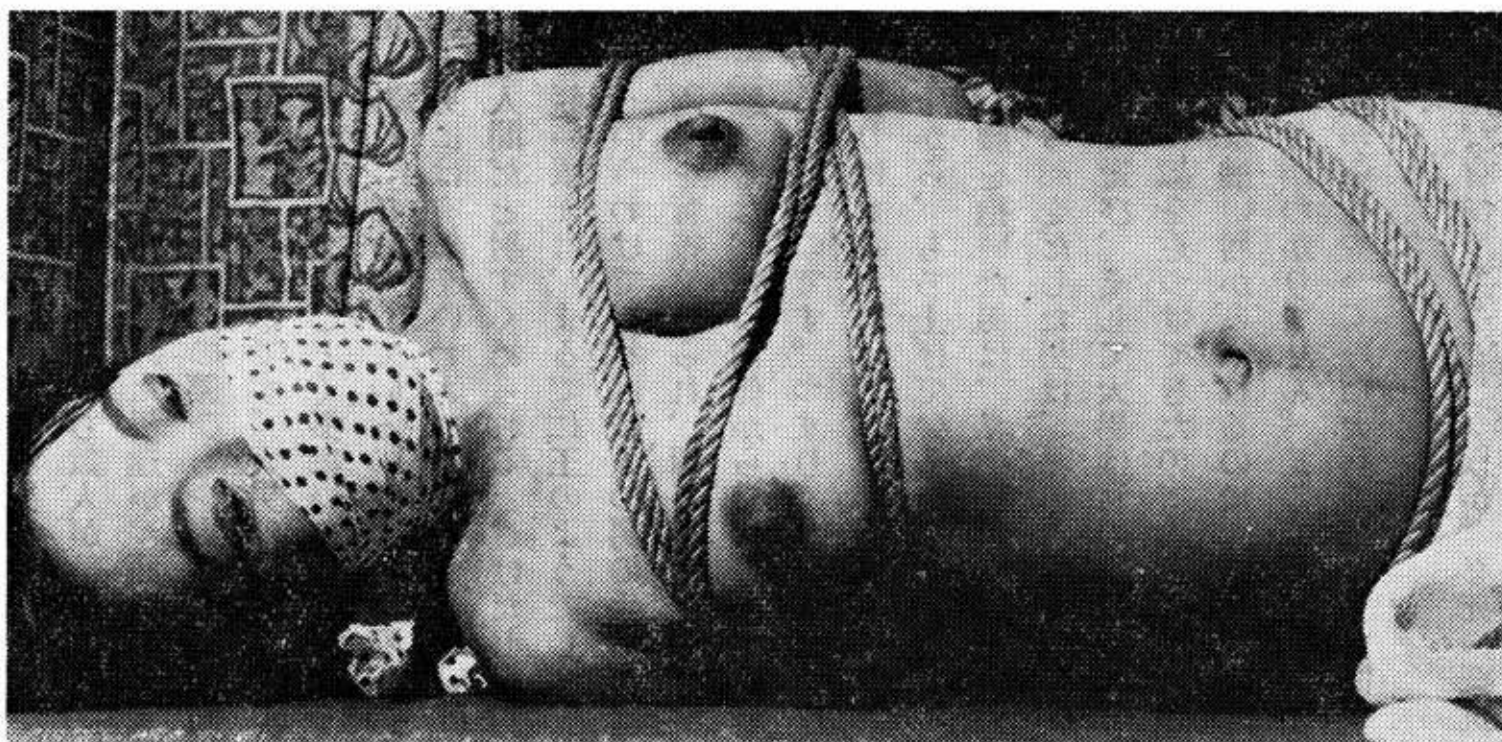
びに、私は同じように悲鳴を上げ続けていました。ぼんやりと背中に回わされた手が男の重みで、しびれていくのがわかりました。早く終わって欲しい、そんな願いも、大男の攻撃に消されていくようでした。

私が、いつのまにか果て、大男が部屋から消え去ってから、しばらくは部屋のなかでころがっていました。周りには、あいかわらず男達が信じられないといった表情で立ちすくんでいました。あまりのショックで、その気をなくしたのか、それとも大男に気がねしているのか、縛られ何もできない私に、だれ一人として手を出そうとはしませんでした。激痛が、いつまでも続いています。

以上が現在までの私の体験です。真実の告白であるが故に、小説や物語のような面白さはなかったと思いますが、何らかの参考にでもなれば幸いです。

世の中には、人には言えない欲望をお持ちの方が数多くいるとおもいます。私もそのなかの一人として、多くの同好の方と友だちになり、心ゆくまで、SMについて話合っていたい気がします。

(曾根崎清子さん、白木幸江さん、無断でお名前を拝借した事をお詫び致します。)



— 妊婦マニアの告白 —

妊婦ヌードの魅力

高野原美

第一号妊婦田中美佐子さんの豊満な妊婦裸像を掲載して以来、奇ク誌は妊婦の魅力美を紹介して来た。最近では、巻頭グラビアにも妊婦ヌードが扱われ、妊婦マニアの一人として嬉しい限りです。

うら若い妊婦が、丸々と膨れたメロン腹を羞恥に耐えて、むしろ誇らし気に露出し、妊婦マニアの前に妊娠した女体の変化を心ゆくまで鑑賞させてくれた。その裸身は、緊縛の縄目をうけて普通では見られない魅力的な羞恥のポーズで、また縄により妊娠変化を殊更に強調するようにして我々の目を愉しませてくれた。

この妊婦の便々たる妊娠腹を目にしたものは、すべてが巨大な圧倒するような妊娠膨隆

腹のもつ、女性の神秘的な生理と肉体構造に感動し、母となる前の女体の前に跪く。

七月号の南加津子さんの足を投げ出して坐った臨月腹は、坐っているために益々前方にせりだして、充実した堅さと息苦しい位の重さを感じさせ、従来にない迫力を感じた。

私と同じように読者のマニアが「読者通信欄」で意見を述べておられるが、若干分析を加えて今後の妊婦緊縛ヌードの発展を期待したいと思う。

○

妊婦ヌードを誌上で見て感激し、妊婦の妖艶な美のとりこになった例をみよう。

福井桃子さんの記事を見て、東京都の今田壮太氏は「全くすばらしい。これは奇クなら

ではの大壮挙である。正面からこのように大きな妊婦のお腹を誌上に飾るとは、感激のきわみである。待望久しくして、しかも、その望みを全面的に、かなえてもらった気持である」と感激。同じく東京都の荒井朔郎氏は

「福井桃子さんの妊娠フォート記事には、本当に感激させられました。奇クの歴史始まって以来二十数年、これほど、素晴らしい妊娠記事特集がされたことはなかったでしょう。月を追って臨月まで、その全裸の姿態を誌上に見せ、しかも、その前に平常の緊縛ポーズも見せているのですから、奇クの文献的価値はいやが上にも上った事でしょう」と最上限の賛辞を呈している。

確かに福井桃子さんの告白記事は愉しかった。目の前の妊婦ヌードを見ながら浣腸とか切腹とかいっているのを読むと、空想力が遅くなり、勝手に夢の中で妊婦の裸身を虐めている。塚本鉄三氏の南加津子の緊縛記事は名文で好きだった。しかも、緊縛ヌードの女の口からマゾ的な言葉を吐かせるというのは印象が強烈で、感動的なものである。

最近の誌面では、ルポされた女性の告白が多いが、マゾに徹し、愛着をもつ受身の女性の真情を吐露した手記は迫力がある。

川路むら子さんは「たとえ写真であっても裸身を多くの男性にさらしているかと思うと私の心の底のM性が燃えてきます。そして、もっともっと、はずかしめられたいという欲望が、わき出てきます。写真でなく実際に大勢の男性の前に裸身をさらし、私の肉体のすみずみまであますところなく、さらけ出す。そして、男性の注文に応じて、あらゆる姿態をとる。それはもう一人の人間性を捨てた一匹の牝犬でしかない。そして、多くの男性を可能な限りの方法で満足させる私は、息をはずませ肉体のあらゆるところを使って奉仕する」と言っている。

この女性本来のマゾ心理は、普通の美しく身体を失って便々たる太鼓腹となったとき、余りにも生臭い牝の生理を赤裸々に異性の前に晒すことの喜びとなって、異常に昂ぶってくるのではなからうか。

同じく妊婦裸像を誌上で晒した中河恵子は「好奇心に満ちた見たくて見たくて、たまらない羨望の目が私の体中、至るところに突きささってくるのです。そのときの気持って、なんとも言えないものでした」と極端な露出による展示を好む彼女は、「自分の恥かしい姿を、あからさまに、さらけだされることに

たえようもない楽しさを感じる私は、多分に露出癖をもっているのだと思います」と自分の性格分析を行っている。

女にとって羞恥の部分の異性の前にあからさまに晒して、穴のあくほど見られるというのは死ぬほどの屈辱と羞恥に襲われるものである。ところが、屈辱や羞恥は、自らそれを見んだ場合は自己被虐でありマゾ心理の顕現である。だから露出というのはMである。しかし、奇ク誌上のM女性たちは、羞恥が受身でなく能動的であり積極的である。これは中河恵子が言っている「異性の羨望の目」という男性に対する優越感というか「誇り」が潜在的にある。

羞恥の部分を観るために、男性は何千円という大金を支払ってストリップ劇場に行き、股を大きく開股した女性の股間に熱い視線を走らせる。それほど価値のある肉体だということを知っている。

妊婦だって同じことである。女だけの神秘的な生理の妊娠による丸々とした裂けんばかりに膨れた妊娠腹が、男にはどう逆立しても不可能な肉体変化であることを。それは神々しくもあり、動物の牝を思わせる生臭いものでもある。全裸になるだけでも初産の身とし

ては羞かしいのに、むしろ「誇らし気」に太鼓腹を突きだしてカメラの前に立っているのである。それは、強く男性の羨望を意識しての心理だと思う。

○

妊婦の魅力を知らなかった者が、奇ク誌によってどれ程、その魅力のとりこになったことだろう。

妊婦マニアでなかった大原女氏は好奇心から分譲フォートを注文し「その結果、妊婦という変形裸女の妖しい魅力にとりつかれてしまった。悦子さんのイビツにゆがんだ妊娠中の裸体には、神秘的な妖しい雰囲気がある。何とも妖しい美しさに魅せられてしまった。不気味だけれども奇妙に心をとりにしてしまふ」と述べている。

東京都の浅野鶴一氏は「福井桃子の妊婦の縛り写真は見事の一語につきる。私は、まだ独身なので女性の妊娠ということに神秘的な憧れを、いだいていただけだったが、妊娠という異常美には心をうたれた」と。



こうして奇ク誌の開拓した妊婦ヌードの鑑賞への道は、ある時にはマゾ・サドの変形とし、またある時は生命創造の神秘的な女のもつ官能美を求めて拡大され、大量流腸による蛙腹の発展として流腸による膨満腹と重複し男性も女性も、ともに妊娠した丸々と盛りあがって充実感のある妊娠腹の魅力を正当に評

価してゆく。

静岡県の伊豆原二郎氏のように、誌上で公開はなかったが自己の愉しみとして「私も妻が妊娠したら四カ月あたりから臨月まで十日おきぐらいに写してみたいと思っています」と言わせる。まだ氏の場合は奥さんの妊婦の機会がないのかも知れないが、このように妻

の月々の妊娠的变化を夫婦という気安さから、全裸の妊娠腹にカメラを向け、克明に記録に残しておられる方が多いのではないかと思われる。これらの貴重な記録を誌上で、どしどし発表される日が来ることを望むものである。

○

妊婦ヌードは、最近では月刊カメラ雑誌や月刊小説雑誌等でしばしばお目にかかれるようになり、その芸術美が再認識されだしたようである。再認識という言葉をつかったのは、西欧のルネッサンス期に長い暗黒中世期を脱して人間解放の時代を迎えた時に、妊婦の裸身が生命創

造の具体的対象として人間解放の目的と、ぴったりに合ったことと、その裸身のもつ魅力的な官能美に惹き付けられて、妊婦裸像が讃美された。その結果、宮廷の貴婦人たちは、妊娠した身体を画家の前に晒して、妊娠の特徴を鮮明に描かせて、自分の寝室に飾ったという。また、公衆広場での祭りの時に、妊婦が全裸の姿を観衆の前で見せて、お祭を盛りあげたともいう。

以前に松本一彦氏が外国雑誌に掲載された妊婦ヌードフォートの紹介をされた。私も毎月、店頭で雑誌類は月刊、週刊のカメラ、婦人雑誌を含め目を通すようにしている。案外に妊婦ヌードが掲載されているものである。

東京マニア氏は、金原奈加子のフォートを見て「ぼくには妊婦ほど美しく素晴らしいものはないのです。小さな生命を育てているという誇らし気な顔、出産に対する怖れの瞳、膨らみきった大きな腹、妊婦の体全体から感じられる複雑無限の美。この世にこれほど尊いものが他にあるのでしょうか」と、その美しさを讃美している。

愛知県の久坂ミツル氏は「私は、ねっからの妊婦マニアで、今まで、ありとあらゆる雑誌や本から妊婦に関する資料を集めておりま

したが、中々思うように集まりません。いつも貴誌の妊婦物に対する開拓精神には、只々頭が下がる思いです」と述べ、奇ク誌が妊婦裸像について、妊婦マニアの最も期待する資料提供誌であることを明らかにしている。それにもかかわらず、氏が「最近、この欄にも妊婦ファンの便りが少ないですが、どうかお呼びかけ下さい」というほど少ないのは意外に思われる。妊婦ファンの数は多いと思うので意見の交換を、どしどしやりたいものである。

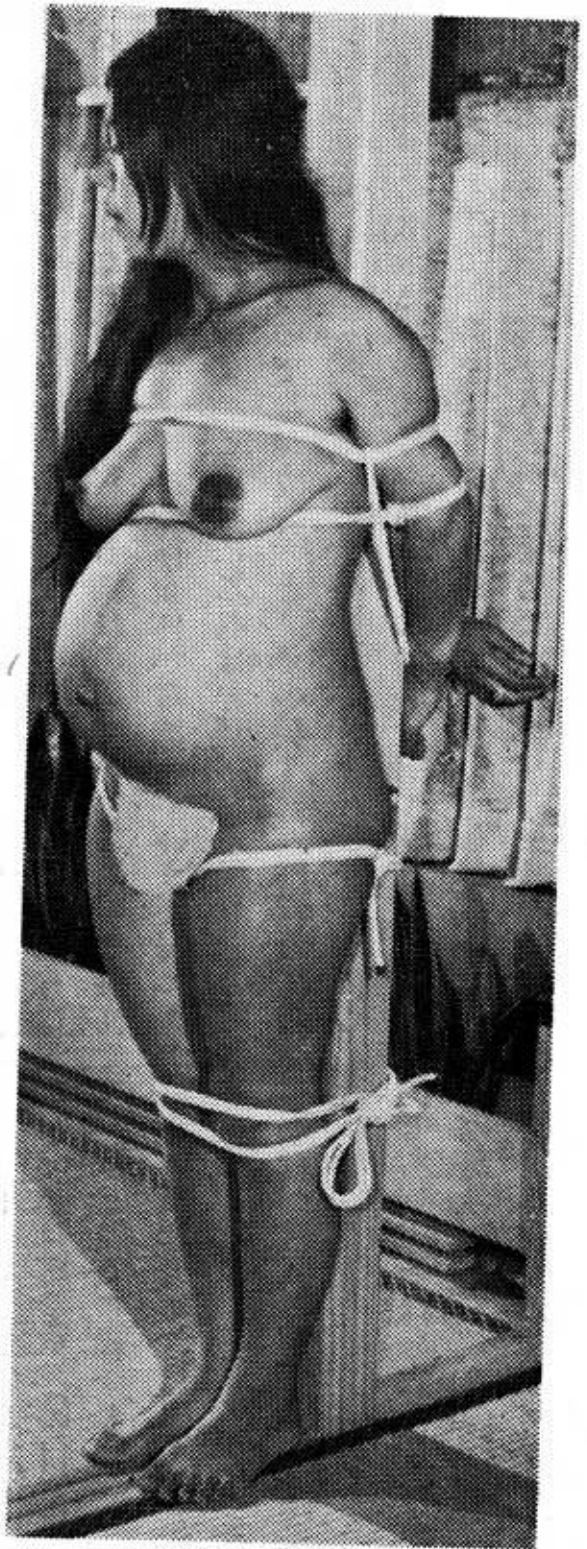
それにつけても、私自身も臨月妊婦の裸身を心ゆくまでカメラに納めたいという念願が強く、奇ク誌でその機会を与えてくれるか、妊婦の方の理解ある行為を期待しているのであるが、氏も「私も一度でいいから福井桃子さんのような素晴らしい臨月腹を、この目で見この手で触れてみたいと願っております」という妊婦マニアの願いが実現することを心から願うものである。

妊婦の場合は、緊縛、浣腸等のように誰でもという訳には行かない。胎内に子を孕んでいることが大前提であり、それも六カ月間位しかないところに困難性がある。そのため、生身の妊婦の裸身を見る機会のないマニアは

写真求めて満足する。

先日、大阪のT百貨店で「愛とエロス」と題する世界のトップカメラマン七人展が開かれて見に行った。週刊誌で臨月の丸々と小山のように盛り上った妊娠腹の女性の正面座像が紹介されていたので、大阪での開催を期待していたからである。マニアの方は、その他に写真集もでていたのでご存知と思う。一流のカメラマンも、臨月腹のもつ妊娠裸身の妖しい魅力に惹き付けられ、被写体としたのであろう。会場の妊婦裸像は三枚であったが、その全てが素晴らしく、偉大なメロン腹を文字通り誇らし気に突き出してモデルとなっており、その丸々と膨れた堅く張り切って充実した臨月腹のもつ妖しい官能美に惹きつけられたのである。その前に何時までも立ちつくしながら、奇ク誌上の臨月腹の妊婦たちの裸像をダブラせていた。私は、公開の写真展に臨月妊婦の裸像が堂々と最高の芸術として展示されていたことに歓びを感じた。

大分前になるが、映画『奴隷大陸』の中の妊婦は見事で印象に残っている。これは奴隷を大量に生産するため、奴隷商人が種付男と妊娠用女を選択して飼い、馬や牛のように種付けさせては子を産ませるといふ非人道的な



シーンであったが、妊娠した女ばかり大部屋で飼育している黒人妊婦の群衆、若い妊婦の腹を正面から画面一杯にクローズアップした妊娠腹の美など、妊婦マニアには忘れられないものであった。

○

上越市の古井新也氏は「最近妊婦の緊縛写真が載るようになって、よろこんでいるひとりで、私は出産場面の写真などものせていただきたいと願っております。私の興味をもってあります出産、その他、診察シーンなどルポを書いていただけたらと思っております」と、氏は妊婦ヌードから分娩にも興味を抱いている。

女性の生理の神秘的な秘密を知りたいと欲望は誰れでも強いものである。それが出産と

いう生理現象にまで拡大されていく。

女性むきの妊娠の解説書には、ベッドに横臥した妊婦の小山の膨みに、産科用聴診器をあてがっている写真のっているが、私自身も好きである。しかし、それには官能的なもののより、生命を宿している女性の肉体の秘密を羨望するような怖れを感じさせるものがある。

分娩は、余りにも神聖すぎて興味はあってもSMの対象とは、なりにくい性格がある。母親となる前の陣痛に苦しみつつ胎児を産みおとす女性は崇高なものでありすぎる。

妊婦の分娩シーンを描いた名作としては、モーパッサンの『女の一生』があるが、妊婦マニアとしてはツヴァイクの「マリー・アントアネット」を、すすめたい。

マリー・アントアネットという若い頃は肉体美では宮廷第一とされ、その豊かな魅力溢れる乳房は石膏で直接、型どられて置物となっていたほどである。この美女は、最後は不幸な運命にあい、フランス革命により哀れにも大観衆の眼前でギロチン台に登り、首を斬られ、その亡骸は手押車に積まれて、どことも知れぬ場所に放り棄てられ、埋葬場所も判らないほどであった。その女王が分娩の時に、フランス宮廷の規則に従って宮廷の男性たちが好奇の目で見守る中で出産しなければならなかったのである。大きな小山の腹から開股した姿で、羞かしい秘密の部分まで、あからさまに晒して、多数の好色な男性の熱い視線を、はっきりと股間の一部分に感じつつ陣痛の苦しみに耐え、出産の儀式の主役を演じなければならなかったのである。

わが国では、ストリップ劇場でヌード嬢が開股して魅力的な部分を見せたといっっては罰になり、性教育映画ですらも、その部分はモヤモヤと、かすませて隠してしまっている。国が違うといえば、それまでであるが、これらの西欧のおおらかさから較べると窮屈なことであり、女体の美が、真実が意識的にワイセツとして歪められ隠されているのは残念で

ある。

フランスの女王が、分娩シーンを公開していた事実は、妊婦マニアであるなら確認しておく必要があるだろう。

○

福井桃子さんは、妊娠した豊満な裸身を緊縛されて恍惚となりながらも、浣腸と妊婦切腹の憧れを告白していた。多くの読者は、便々と膨れた臨月腹で四つ這いになり、豊かな双丘を割って浣腸器や嘴管が突きささっているシーンや小山の腹に短刀を当てがって、下腹部を切り裂く苦痛に身悶える臨月妊婦の切腹擬態シーンが鑑賞できるものと期待していたようであるが、遂に実現しなかった。

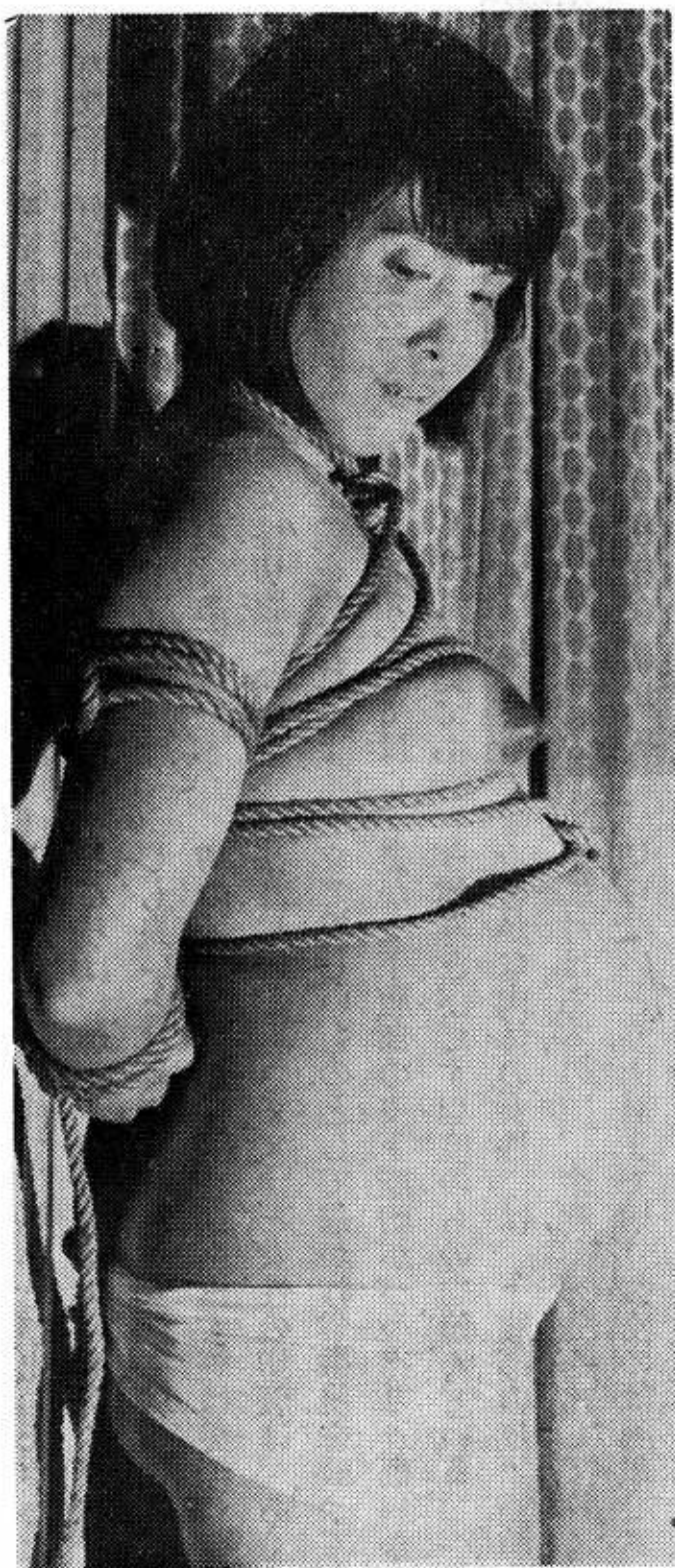
神戸の中村生氏は「女性切腹を好むものだが、妊婦のあの素晴らしい腹部には特に魅せられる。今回は珍しく女性による切腹への憧れが記事になって、うれしく読ませていただいた」と述べ、同じく神戸のN・Y生氏は「女性の腹部に強いあこがれとそこに加えられる責めを最も好む私には、今月号のフォートは最大のプレゼントでした。……でも残念な事は折角、彼女から妊娠腹を切りたい、つまり切腹願望を口に出しているのに、なぜ切腹プレイのフォートを撮らなかったのでしょうか。

誠に千載一遇の好機を惜しいと思いましたがいかがですか」と残念がっている。

女性の腹部愛好者。これは豊かな皮下脂肪に包まれた、ふくよかな腹でなければならぬ。また、腹部ナルシズムの女性は、豊かな腹に憧れるために蛙腹愛好に進む。大量空気が浣腸や微温湯の大量注入等がなされるが、それ位の腹の膨らみ方では満足できず、強烈な膨隆腹願望は、妊婦の臨月腹嗜好に移行する。その一方、非常に女の腹に魅力をもつとその腹の秘密を探ってみたいという意識にかりたてられ。妊腹切腹や妊婦の腹裂き願望にとすすむ。

妊娠して肩で喘ぐように息をついている時期に、福井桃子さんが切腹してみたいという意識をもったのは、本来的な女性のM性と腹部ナルシズムの混合したものであろう。

女性の妊娠切腹について泉一郎氏の『M子受難』は、妊婦切腹の作法をのべている。それによると「腹横一文字に切りたる上、右脇腹より抜き去りたる刃を持ちかえ、その峯にたなごころを当て、刃を下に向けて臍下一寸に突き立つるべし。下に向いて切り下げるこ」と二寸にして子宮に達するなれば、一段と力をこめてこれを切り裂くべし。更に進みて骨に当たりたれば、つかを下に向け、刃先を腹の



中深くえぐるべし。これにて胎の命絶ゆるなり。これよりあとは他のものに同じく心の臓を突くべし」と。

妊婦切腹の場合は、母となる女体の生命だけでなく、腹の中に宿っている胎児の生命までも同時に自らの手で絶つことになり、それだけに妊婦にとっては哀しみが大きく哀切感が伴うものである。しかし、妊婦マニアにと

っては、神秘的な官能美を感じさせる魅力的な腹を、妊婦が自らの手で切り裂き、妊娠の秘密をあばいて見せる行為は、ゾクゾクとするほどの魅力が感じられるものである。

松江市の渡辺定春氏は、女性切腹について「いつも女性の切腹の記事に魂を奪われたように読みふけるのです。小生の希望としては肉体美人であること。切腹にしても凄艶であ



ることが第一条件で、腸がとび出したりしたところは、かえってこれはグロテクスで、少しも良いとは思いません。女性には女性の腹切の仕方があり、腸を掴み出す等は艶消しも甚だしいと思います」と女性の切腹は、あくまで美しいものとして描かれ、柔肌を破って豊かな下腹部の皮下脂肪がパツクリと傷口から弾みとびだす程度のものを望んでいる。

豊かな肉体の女性では、下腹部の皮下脂肪が二寸はあるので、余程、刃先を出して深く切らないと筋肉層まで切り裂くのは困難であろう。このような皮下脂肪の厚い女性では、刃先に脂が付いて切れ味がにぶり、最後まで切り裂くのは大変であろう。

千葉徳爾氏は「切腹の話。日本人は、なぜハラを切るか」の中で、

「腹壁を切り裂くことは、確かに痛く苦しいにちがいないが、単にそれだけにとどまるものなのであろうか。この場合にも『奇譚クラブ』に掲げられた、田谷敬生氏の見解は示唆に富むものがある。切腹、とくに下腹部の痛覚については、これを幾分は性的感覚に転化して感ずる場合があるのではないか。いま一つは、おそらくこれに関連するエロティシズムとして、中康弘通氏が指摘するような、み

ずからの、もっとも柔軟で豊満な部分である腹部を切り割り、そこに紅い血が流れ、ぬらぬらと光る赤や黄のはらわたがあふれ出る有様を想像し、また現実眺めるところに、一種えもいわれぬ興奮と恍惚の境地があるので、はなからうかということである。

と女性切腹の心理についてのべ「切腹そのものを想像しあるいは行為することに、肉体的もしくは精神的快感を味う人の数は意外に多いようである」と分析している。

歴史的事実としては、文献上、女性または妊婦の切腹が記録としては残されている例が極めて少ないが、現実的には多くあったことが想像される。

太平記に、塩屋判官の妻の悲劇がのっている。高師直が判官の妻に横恋慕し、そのため判官が謀反を企てていると、ざん訴して、彼を討ち、妻を横取りしようとした。それを知った判官は、本国に帰って旗をあげようと一足先に落ちて行き、奥方は後れたために途中で追手につかまり、一族の山城守宗村の手によって、雪よりも清く花よりも美しい胸の下を太刀で突き刺され、紅の血をほとばしらせて俯伏した。追手が奥方の死骸を改めると、懐妊中であつたらしく、太刀先につけられた

胎児が半ば腹から、はみ出して血にまみれていた。

奥方の胸の下を刺した刀が、上腹部を縦に切り裂いてしまったのであろう。この場合は切腹とは異なり下腹部を横一文字に大きく切り裂くというのではないので、創口も小さく内臓や胎児が完全に露出する状態とはならなかったようである。

妊婦切腹の事例は知らないが、妊娠の身体で最後をとげた悲劇の例は他にもある。

織田信長の部将荒木村重が、摂津有岡城で叛旗をひるがえし、城が落城した後、村重の一族郎党は全て処刑された。そのうち、村重の正室をはじめ、娘、重臣の家族たちが六条河原で首を斬られたが、村重の娘で荒木隼人の妻となっていた当時十五才の女性は、妊娠中の身重の身で斬首されている。

妊娠して大きなお腹の身を多勢の観衆の前に晒し、荒ムシロの上に坐して無惨にも首をうたれる気持は察して余りある。

同じ頃、播州三木城の別所長治一族が、自分たちの生命と引換えに城中の侍たちの生命をたすけて貰うよう乞い、華々しく自害しているが、この時、自害した長治の弟友元の妻は十七才の若さであつたが、腹の中に誕生を

前にした子供を孕んでいた。友元の妻は、お腹の子供をこのまま道連れにするのは可哀そうだと、守り刀を手にしたまま慄えて泣き崩れる。長治の奥方になぐさめられて、やっと心を落ちつけ、丸く膨れた腹を愛し気に撫でさすりながら辞世の句をよみ、覚悟を決めて自ら胸を刺し通して伏せられた。

このように戦国時代には、武士の妻は夫とともに自害する例が多かったので、自害して果てた女性の中には妊婦が数多く含まれており、その中に腹を切った女性もあったことは想像される。

○

大阪市の東田君子氏は「自分が手術台の上で生きながらにして解剖されたいという奇妙な願望を持っています」と告白しているが、女性切腹と他人の手による腹裂き願望は類似性がある。腹裂きは、より露出性が強く屈辱と羞恥がプラスされ、M感は強烈となる。

誌上でも「生体解剖」希望を告白し、男性の手で身体の間々から内部までも暴かれたいと述べている女性が少なからずあった。

先に例をあげた川路むら子さんや中河恵子さんの「露出展示欲」の進化したものといえるだろう。

これが妊婦自身の希望によるものでなく、暴虐な武將の手によって無理矢理に行われたのが「妊婦腹裂き」である。

彼らは、ふくよかで豊かな女の腹の中に隠されて見えない胎児の神秘をあばきたいという好奇心と、男性には不可能な女性だけの生理である妊娠ということに對する潜在的コンプレックス等が混じり合って、美しく魅力的な異常美を傷つけ汚すことによって満足する心理がなされたものであろう。特に、豊臣秀次を始め、腹裂きの暴君は、共通して人氣が落ち、この先どうなるか判らないという精神の不安定期に行っており、自分は何でもできるのだという權威をしめしたいとの心理状態が働いていたように思われることである。

清水正二郎氏の「血塗られた武士道」の中に豊臣秀次の愛妾お由良の腹裂きが描かれている。側室が家中の者と通じ妊娠してしまった。秀次は怒って、父や恋人の前で全裸にしばってりとふくらんでいる腹を見て、腹の中の子が余の子かどうか、じきじき改めると言い、佩刀を抜いて妊婦の腹を割つ。

「刃が白く光った。息を呑み、怖ろし気に凝視している人々の前で、真白く、やや高くふくらんでいる腹に一筋スーッと赤い血筋が走

った。怖ろしい悲鳴が女の口から洩れた。ギーッと魂消えるような声であった。とたんに胸から鋭く、その筋に沿って、刀が突き入れられた。女は呻き、もがいた。しかし、秀次は許さなかった。全身に真赤な血を浴びて悪鬼のような表情になったが、決して手をやめなかった。そして、すっかり腹をひき割くと、そこから胎児をひきずり出した」と。

越前北の庄の城主松平忠直は、愛妾の一国御前が妊婦の腹裂きを好んだため、愛妾を飲ばすために城下の妊婦をとらえては腹を裂いたという。現在もお、福井市内にこの時に使った石俎が残っているという。

妊婦が、出産を前にして大きな腹をかかえて肩で喘ぐように息をついているのは、いじらしいものである。愛する男性の子供を産む喜びに耽っている時に、捕えられ俎上に仰向けに横臥えられて腹を裂かれるということは想像を絶する悲哀であらう。

しかし、わがM嬢たちは、このような状態に相遇したことを欲び、小山の膨満腹を、ゆり動かし、裸身の隅々まで男性の眼前に晒して腹の中まで暴かれる苦痛に耐え、えもいわれぬ恍惚と興奮の境地に酔うことであらう。男性の前に誇らし気に小山の腹を晒し、その

女体の美と魅力、生理と神秘的な構造を見せつけながら、腹の中まで、つぶさに好奇の対象として見せることは、屈辱でなく男性に対する優越感と勝利感を味わうこととなる。最後の死の前の最高の肉体による演技を行うこととなる。

女性の切腹も腹裂きも、マゾの領域では腹を切る者が自分か他人か、能動か他動かの違いはあるが、同じ性質のものであり、憧れを夢みる希望の対象となるが、これだけは簡単に実行できず、軽く一寸程、切るとか、針で腹壁を刺して下腹部の疼痛感を味わうプレイにとどまる。しかし空想は果しなく拡がる。

○

倉敷市の乃利武一郎氏は「南加津子さんの妊婦姿は素晴しかった。便々と膨らんだお腹お臍までむき出しになった太鼓腹は、私のいくら眺めても見あきない宝物です。貴女の美しくも見事に孕んだお腹に私は、すっかり心を奪われてしまいました。私は南加津子さんの魅力的な大きなお腹に顔を埋めてみたい。そして緊縛したり浣腸してみたいと心から願います」と賞讃と浣腸プレイ願望を、のべている。

奇ク誌上では、浣腸を愛する女性が多くな

り、掲載される写真も迫力がまして、浣腸マニアには愉しみが増えてきたことだろう。

福井桃子さんは、浣腸をされたいと告白をしていたが、結局は写真にはならず、未だに妊婦の浣腸フォートはマニアの前に現われていない。

私も、妊婦の豊かな双臀を割って浣腸器や嘴管が、緊縮したアヌスに深々と挿入され、丸々とした臨月腹を垂れさせて四つ這いにされた裸身が悶える状態を空想すると、胸がキユッと締め付けられる興奮を覚える。幸いにも増田みゆきさんの臨月双胎腹の分譲フォートに全裸四つ這いの魅力的な姿があり、また七月号の「愛妻教育」の中で早坂氏の奥さんの豊かな臀部に浣腸器が挿し込まれてポンプが押されている迫力のある写真等を合製して臨月妊婦の浣腸を演出して愉しんでいる。

浣腸は、女の肉体的特徴である逞しくて豊かな臀部とその谷間に秘められたアヌスを責める愉しみと、薬液の強烈な刺激と便意に耐える苦痛の悶えにある。女にとっては、腹中での灼けつくような強烈な疼痛は、前述の女性切腹に通じるものであり、便意を必死に耐えるアヌスを見つめられるのは、腹裂きによる女体の探究に通ずるものがある。「愛妻



教育」の中で「美しい丸裸のアヌスが懸命になって、最後の努力をしているのが私達二人にも、はっきりとわかりました。二人の男性に、凝視されている事に対して妻は、一体、どのような気持で便意を耐えているのでしょうか」と早坂氏は言っているが、内臓まで晒し、その上、腸内容が奔出する様まで男性の目で確認されるのに耐える心は、妊婦が俎上に縛りつけられて腹の上で短刀が光っているのを見ているのと似た心境であろう。

高村浩子さんが「ひしひしと海老責めに縛り上げられた自分のお尻が、高々と上を向い

て、恥かしい部分が男の人達の目に触れて嘲笑を浴びているといった夢を描いています。羞恥責めでしたら、どんなことをされるのも好きな浩子です。浣腸も、アヌス責めも大好きです」と悶々の情を、のべている。彼女は浣腸後の排泄まで見せて徹底的な屈辱と羞恥の中で恍惚となる。

藤田明子さんは、陶器のような白く輝く尻をくねらせ、最後の排泄まで凝視され、克明な記事にされた。更に激しい一直線の銀線となった奔流まで始めから終りまで見せた。浣腸は排泄の屈辱を伴う。

浣腸後の屈辱的排泄は余りにも動物的であり、それだけに羞恥責めとしては最高のものである。これは排尿についても同じことである。奇ク誌上では、この余りにも動物的な生臭さを感じさせる排泄、排尿を徹底的に追求しているが、妊婦の場合は、その大きく膨れた妊娠腹そのものが、すでに動物官能美を有しているものだけに、これが二重にダブルで強烈である。

辻村隆氏の「排泄戯考」では、多くの女性たちに混じって富田由美子の排尿直前のフォトがあった。妊婦は、膨大した子宮に圧迫されて膀胱が小さくなり何度もトイレに通うことになる。当然プレイ中に排尿を訴えること

は辻村氏も書いておられる。妊婦の排尿シーンは何度でも機会があるのだが、奇ク誌上では未だ出現しないのは残念である。以前に氏が安原さゆりを緊縛の時、開股姿勢にされたさゆりがオシッコを洩らしたことが記されていたが、それ程、機会が多いものである。その妊婦が、丸々とした臨月腹を堂々と、せりだし、シャガンだ太腿の間から満月のような臍のむき出した腹を覗かせて排尿するポーズは考えるだけでもワクワクするものがある。

排尿というと、妊婦尿には女性ホルモンが多量に含まれており、男性の若返り、精力剤によいという。それにもかかわらず、妊婦の尿を浴びたり飲んだりという告白も体験も出

てこないのは淋しい。丸々と、せり出した妊娠腹を開股姿勢で、なお一層、つき出すようにした妊婦の小山の腹の下に、ホルモン入りのお神酒をいただくして貰おうとして口を開けた男の顔が近づく。若い新産の妊婦が、腰を前につき出し恥かしそうに目を閉じる。その時、沛然と生温かいホルモンを多量に含んだお神酒が口中に注ぎ込まれる。神酒愛好家も多いことだし、貴重な女性ホルモンを無駄にせぬことである。

○

大原女氏は「妊娠中の裸体を撮らせた。そして、その写真を不特定多数の人の目に晒してもよいと決意した事情が、いろいろ想像されてくる。とにかく本物の妊婦が、こうしてちゃんと写っているのである。ショックといってよい。こんな写真をとらせるなんて、随分、思い切ったことだ。ご主人は何とも言わないんだらうか。常識にない妊婦全裸写真などというものを堂々と扱っているのは、奇ク以外にはないだらうから、とても勇気があると思う」と。

また東京都の中村正逸氏は「妊婦の大きな腹をさらして縛られた南加津子さん。貴女もその歴史の中の一頁を輝かしく飾っているの



です。SM界にあっては大御所たる貴誌において、いついつまでも、その立派な記録マニアの人々の胸の中で生きつづけるでしょう」と言い、奇ク誌と妊婦の全裸フォトを提供した態度に讃辞を、のべている。

確かに妊婦はフワッとしたマタニティを着用して腹の膨れた輪廓を隠しており、ハラボテと蔑視し、醜い姿との考えが社会を支配している。それだけに妊婦が堂々と小山のメロン腹を晒して見せるというのは勇気を要するものと思われる。

夫には知られぬようにしてカメラの前に立った妊婦もある。SMの緊縛モデルの延長として偶然の妊娠を撮らせた妊婦もある。いろいろのケースもあろう。しかし、事情はどうあれ、奇ク誌上に裸身を見せ、妊婦の緊縛美をあらゆる角度で見せ、鑑賞させてくれた彼女らに感謝するものである。

しかし、妊婦裸婦第一号の田中美佐子さんの場合は、夫からの手紙で「妻も自分の初産の腹部の大きいところを是非、撮影してほしいと申していますので」と申し入れがあり、実現している。いざ撮影ということになると美佐子さんは嫌がり、夫は毎夜のごとく言い含めて納得させる努力をして何とか九カ月の

太鼓腹の撮影を承知させた。

それから妊婦が幾多、誌上にあらわれ、増田みゆきの双胎臨月腹や金原奈加子の臨月妊婦、全裸逆吊りまで実現した。妊婦は毎日、見かけるのであるが、その全裸ヌードを妊婦マニアの前に提供される女性が、まだ僅かである。北九州市の福岡A氏が「今、青山ミチが妊娠しているようですが、彼女を一つ、くどいて後世に残る作品を作っていただけなら幸いと思います」と希望しているが、谷ナオミが緊縛モデルになっていることでもあり、ポルノ女優の妊婦裸像が本誌のグラビアを飾る日のくるのを祈るのみである。

最後に塚本鉄三氏の名文のうちから、南加津子さんの妊婦像を少し抜粋しておこう。

「南加津子の青白い静脈を浮かべて、ぽつりと可愛い膨んでいた腹部が妙に生々しく私の目に蘇ってきた。「女性が妊娠すると、より動物的になる」と、よく言われるが、妊婦を素っ裸にしておいて、つくづく、よく眺めて見給え。美しいことは美しいに違いないのだが、そこに動物的な臭いが、ぷんぷん匂ってくる。メロンのように、まんまるく膨らんだ妊婦のお腹を見ていると、これは平常あんなにスタイルを気にしていた若い女性な

のかと、びっくりするぐらい不格好なのだ。

養豚場の檻の中で、のそりのそりと歩きまわっている白豚のようだと言え、きつと、妊婦マニアに叱られるだろう。だが、よくよく眺めてみると、これがまた、流石に女性の肉体の一部だけあって、膨隆した太鼓腹の頂上にある、お臍のまわりにも生毛が、ぼしゃぼしゃと密生しているのなんかでも、まことに優しく美しいのだ」

「人間の、しかも若い女性の身体の一部だという感じじゃなくて、動物の身体の一部のようになっている。それでいて、また、とてもエロチックなのだ。アニマル的エネルギーを内に秘めながら、それでいて、若い女性特有の優しさと美しさを持っているともいえる」

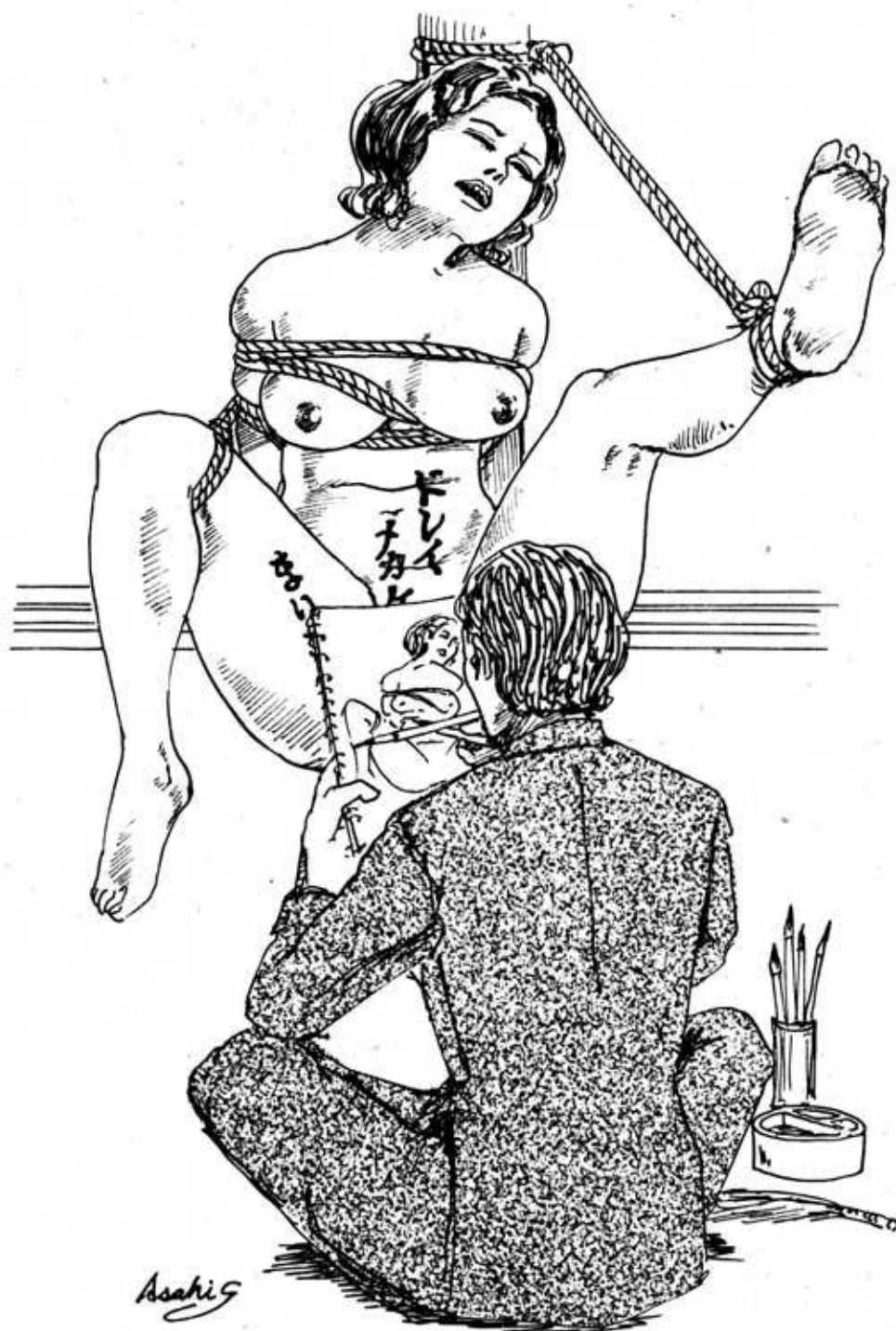
「胎児を宿して、腹部だけが、あのように膨隆することは、まさに異常であるが、そこには、妊娠という生理現象を持った女性にだけ得られる不思議な美しさがある」

「美しい生命を、これから生み出そうとする若々しいエネルギーを全身に漲らせた妊婦の全裸は、まことに素晴らしい芸術品だ。ましてや、そのポイントになる太鼓腹は、まさに鑑賞に足る躍動美をもっている」

奴隷妾まりこの妄想

須坂旭様のプレゼントにお応えして

北川 まりこ



須坂旭様

七月号で、貴男様の真心の籠った、素晴らしいプレゼントを拝見しまして、奴隷妾のまりこは、涙の出る程、嬉しうございました。本当に、本当に、有難うございます。あたしのような女のために、あのように立派なイメージ画をお描き下さり、おまけに、流麗な文章で手記を御発表頂き、まりこはどのように御礼申し上げてよいかわかりません。昼も夜も、暇があれば、貴方様のイメージ画に、喰い入るように見とれ、貴男様の手記を、一言一句暗記するまで、何度も、繰返し拝読させて頂き、マゾ女の幸福感に浸りきっております。

旭様

まりこは幸せでございます。貴男様に拙い手記『思い出のメモ まりこの結婚式』と、

あたしの名前を記憶に留めて頂き、まりこは最高に幸せでございます。二十五日の夜、久しぶりにお越しになられた主人は、七月号を手渡して下さりながら、「おい、お前の浅ましい格好が載っているぞ」と申します。

「とうとう、まりこの、緊縛ヌード写真を、誌上に御発表になったのかしら」と、恐る恐る、ページを繰りますと、『まりこの為のイメージ画』と題して、貴男様の堂々たる手記が掲載されているではありませんか。その上、まりこが、三人の教え子に剃毛されているイメージ画も。両手を上げて柱に縛りつけられ、左足を持ち上げられている女性は、まぎれもなく、まりこ自身です。だって、乳房からお腹にかけて、はっきりと、「ドレイメカケまりこ」と、いたずら書きされているのですもの。羞かしいやら嬉しいやら、何とも言えぬ複雑な気持で、じっと見つめておりました。ぼおっと、顔を紅らめて……。

いつも、あたしの大好きな、イメージ画を発表されておられる貴男様に、大変、無様とは存じながら、差し上げましたお便りが、五月号に発表され、その中で、ただ一度だけでも、貴男様のイメージ画の女性の躰に、「ドレイメカケまりこ」と、楽書きして頂けたら

と、マゾ女の切なる希望を申し上げましたところ、こんなにも早く、望みを叶えて頂き、まるで、夢を見ているような気持でございます。本当に、御親切な旭様。

その上、手記の中では、まりこの胸深く秘めている被虐願望を、適確に探り当て、あたし自身、気付いていないマゾ女の心理を抉出され、また、たとえ気づいていても、女の身で、羞かしくて、とても書き切れないこと、羞かしさ、恐ろしさが先に立って、とにかく、筆の鈍りがちな描写を、はっきり、あからさまに、そのものずばり、お書きになられて、しかも、嫌らしさのない、貴男様の筆力に、心から敬服しております。いつも肝心な所を淡々と書いてしまう、まりこの文章を、物足りなく思っておられる主人も、

「須坂さんは、仲々、筆の立つ方だ。お前も少し見習ったらどうだ。女子大出だ、元女教師だといっても、全然、文章は、ダメだ」と、さんざん、あたしの文章に悪態をつかれます。

「あたしには、自分のことを、とても、あのようには書きませんわ。女には女らしい書き方があっても、よろしうございせん」と、幾分、反抗めいたことを申し上げますと、

「何だ。奴隷のくせに、生意気なことを言うな。俺がいつも言っているように、肝心なところは、もっと具体的に、詳しく書けばいいんだ。いいか、分ったか」と、お怒りになつて、

「つべこべ、生意気なことを言った罰に、お仕置だ。すぐ丸裸になれ」と、

夕食もそこそこに、折檻されました。貴男様のイメージ画と全く同じ恰好に、柱に縛りつけられ、躰に『ドレイメカケまりこ』と楽書され、

「お前は、須坂旭さんの言う通り、誰とでも寝る、最低の女だ。売春婦だ。パン助だ。淫売だ」とか、

「お前は、体中が性感帯の、実に、汚らわしい女だ」と、貴男様の御言葉そのままの台詞で、一晩中、虐め抜かれました。

旭様。

それにしましても、貴男様の「誰とでも寝る女」のお言葉に、まりこは、とっても、悲しい思いをしております。主人の命令で、取引先の殿方と、SMプレイの挙句、何度か貞操まで捧げて御奉仕して、結果的には、貴男様のおっしゃる通り、「誰とでも寝る女」かも知れませんが、あくまでも、主人の命令で

止む得ず、見知らぬ殿方にも、抱いて頂くの
でして、毛頭、まりこの自身の意志ではござい
ませんし、相手の殿方を選ぶ自由も、全く、
ございません。丁度、昔の女郎がお客をとる
場合と同様、主人の命令に従っているだけで
ございます。主人も最初の頃は、
「仕事のためだ、是非、協力してくれ」とか
「今夜のお客は、大事な方だ。粗忽のないよ
うに接待を頼む。お客の言いなりになっ
てくれ」

と、いった口調でしたが、最近では、

「今晚も、お客をとれ」

と、まるで娼家の主人が、娼婦に言う口調
で命令なさります。時には、

「罰りものになって、犯されて来い」とか、

「存分に、辱かしめられて来い」などと、随
分、ひどいことも申します。

プレイ中、お客様のどんなにむごい責めに
も、どんなに羞かしい恰好を強いられても、
どんなに屈辱的な取扱いを受けても、主人の
お仕事のためだと思って、じっと我慢します
が、貞操を奪われそうになりますと、これだ
けは何とか守り通そうと懸命に抵抗します。

でも、所詮、全裸で縛られた女の、かよわ
い抵抗に過ぎず、力尽きて、落花狼藉、仕方

なく、お客様を迎え入れてしまいます。一旦
お迎えしますと、そこはマゾ女の悲しさ、縛
られたまま、お客様の獣欲の犠牲になって、
犯されるといふ、被虐の悦びで、前後の見さ
かひもなく夢中になってしまつて、恍惚の境
をさまよいます。時々、淫らな言葉を口走っ
て、始めての殿方に、裸身を委ねている、自
分自身の浅ましい姿に気がついて、女の業の
罪深さに、自分ながら、情なくも、恐ろしい
気持になります。このようなことを書きまし
ても、貴男様は、まりこの胸の中の一番深い
ところ^{あは}に潜んでいる、マゾ女の淫らな気性を
発き出されて、

「強制されて、主人の取引先の男達に、メカ
ケとして仕えているなどと言いながら、まり
こは体中を性感帯として……」

と、実に心憎い描写で、まりこの本性を、
露わになさります。まりこの何気なく綴る文
章の背後に、被虐の心理をお汲みとりになり
一切を曝露される貴男様は、本当のサドかも
知れませんか。まりこは、身に纏う着物を一
枚ずつ引き剥かれて、生れたままの丸裸にさ
れるよりも、貴男様の筆の力で、心の底に秘
めているマゾの本性^{あは}を発かれ、かき乱して頂
く方が、何倍も羞かしく、また嬉しい気持で

ございます。旭様。貴男様は本当に、御親切
で、心憎く、恐ろしく、その上、何とも言え
ない程、懐かしいお方ですわ。

旭様。

『思い出のメモ、まりこの結婚式』の拙い手
記につきましても、まりこの、筆の到らない
点を、巧みな描写で補って頂き、あの夜の情
景を、今一度、如実に思い出させて下さり、
有難うございます。当時は、あのような惨め
な結婚式を計画された主人を、恨めしく思
いましたが、今では、雪の中で丸裸にされて、
美しい星空の下を、ウェディングマーチと共
に歩いた、あのような素晴らしい、マゾ女に、
もっともふさわしい式を挙げられましたこと
を、この上もなく幸せに存じております。

「本当に、まりこは幸せな女だ」と、

貴男様から、心を籠めて祝福され、もう随
分と昔のことながら、今更のごとく、嬉しく
存じております。貴男様は雪国のお生れとか
しかも雪責めが大好きで、御自身も昂奮の余
り、裸で雪の中をお歩きになられ、冷たい川
の流れに坐りこまれたと承り、寒中責め、雪
責めの大好きなまりこには、とっても、お懐
かしい想いでございます。一度、貴男様のお
里にお連れ頂いて、雪の降りしきる中で、生

れたままの丸裸に引き剥かれ、同じ裸の貴男様から徹底的に虐めて頂き、身も心も貴男様に委ねて雪に埋まってゆきたいという衝動に駆られております。

『思い出のメモ』の他には、その後、一度だけ、主人に連れて行かれましたが、十二月始



めの昼間でして、雪もなく星空もなく、枯れた淋しい何の変哲もない山中の小さなお社でして、あの晩のイメージと余りにもかけ離れているのに、がっかりしました。最初は人目を憚って、着衣のまま縛って頂いて儼しい参道を登りましたが、途中で、全く人気のない

ことが分り、丸裸にされ、縄尻を握られ、裸足で歩かされました。『思い出のメモ』通り、礼拝を行いました。あの晩のような感激は起らず、むしろ、誰かに見られはしないかと、絶えず、おびえ、笹原から山鳥のとび立つ音にも、心をときめかしました。雪の夜の身を切られるような、寒気はなくても、人目におびえる羞恥も、また格別でして、貴男様の、いつかのイメージ画「誰か来る！」のように、人道のすぐ傍らの茂みの中に、長い間、素っ裸で縛られたまま、放置され、被虐の悦びを噛みしめました。

さて貴男様の、このたびのイメージ画、並びに、このイメージ画をお描きになられてから、空想を発展させて、まりこのために、お作りになられた、お話は、まりこにとって、最高のプレゼントでございます。

奴隷部屋の中央で、白い布を被って、教え子たちの入場を、じっと待っている間の切ない気持。全員揃ったところで、布を払いのけられて、浅ましい素っ裸のあぐら縛りの恰好を晒すときの羞かしさ。教え子達の視線に、一切の羞恥の部分をさらすときの痺れ。その中の一人に乳房を驚攔みされるときの高ぶり。教え子の中に奇ク愛読者がいると知ったとき

の驚き。剃毛のため片足を持ち上げられるときの屈辱。剃刀の冷たい感触。嘲笑と軽蔑の声。いたずら書きのマジックインキの肌ざわり等々、まるで自分が、現在、教え子の同級会に招かれ、辱かしめられているような気持ちになり、うっとりマゾの悦びに浸ることができました。

主人は、卒業写真や、同窓会名簿などを、持ち出して、イメージ画の三人の教え子の名前を言えと申しませう。全裸開股縛りの、あられもない姿で、暖かい写真を眺め、教え子の一人一人の成人された御姿を想像しながら「どの子に虐めて頂こうかしら」

さんざん迷った挙句、職員会議の席上で、しばしば問題になり、クラス担任のあたしを随分、手こずらせた三人の非行グループに、賜りものにして頂くことに決めました。貴男様のイメージ画で、中央のまりこの前に坐りこんで、剃刀をお持ちの貴男様が、「A君」と名づけられた、奇く愛読者の方は、この非行グループのリーダー株、大きな酒造会社を経営されている、町一番の素封家の御長男として、まりこも何度か家庭訪問しましたが、それはそれは、大きなお邸に住んでおられます。当時から、お父さんが病気がちでしたか

ら、今では多分、このA君が後を取られて、会社を御経営になっておられるのではないでしょう。

お父さんは、女性関係で、とかく噂の多い方でしたから、家庭的にも、かなり複雑でして、異母姉妹が何人かおられました。男の兄弟はなく、一人息子のため甘やかされて、お育ちになったためか、早くから非行に走り、また、かなり早熟な方でした、学校を出たばかりの、世間知らずのまりこは、馬鹿にされて、随分、口惜しい想いをしました。

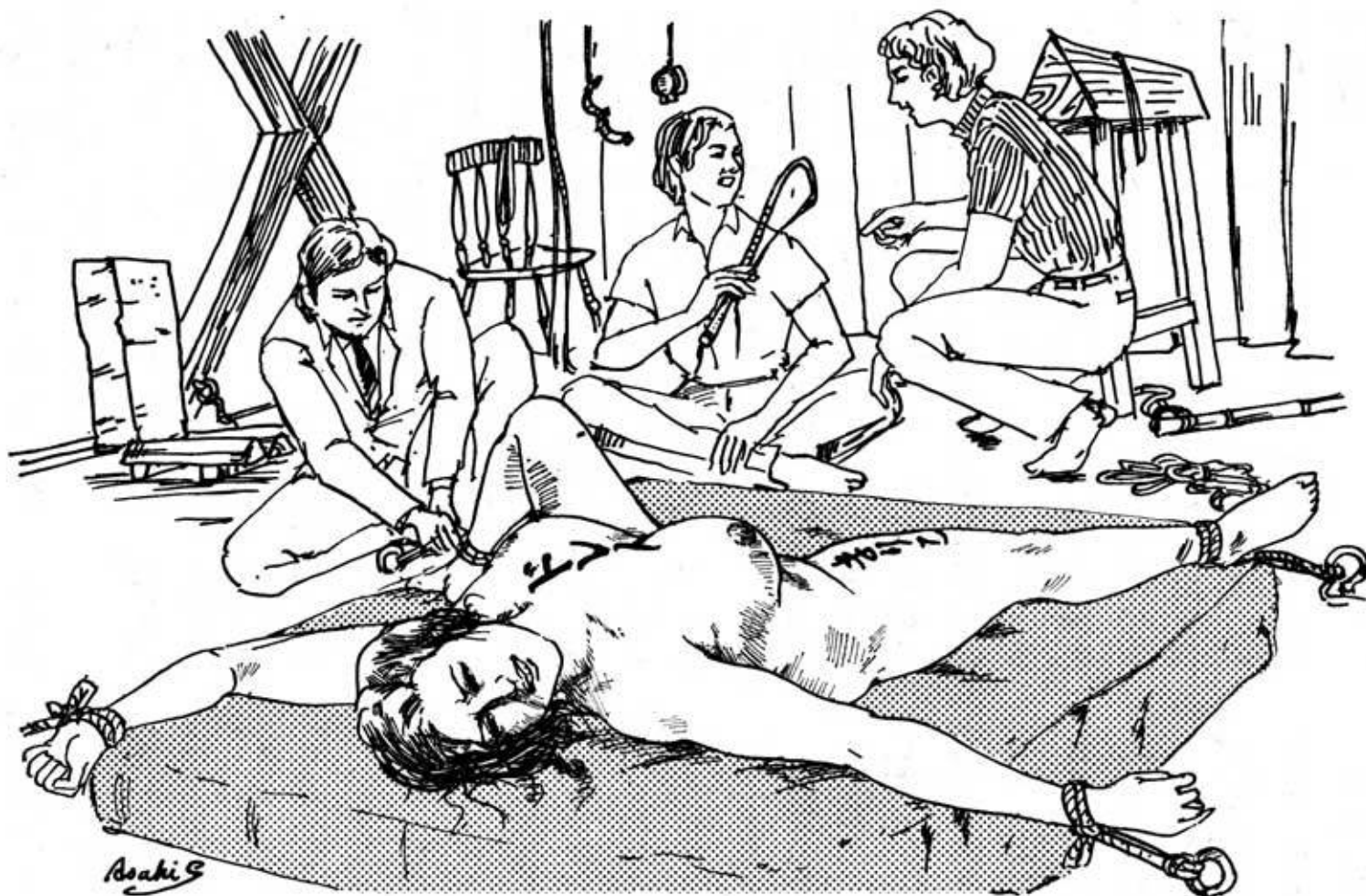
まりこの、右側に立って、乳房を驚嘆みにしている男性は、乱暴者のB君。腕力が強く角力の選手。勉強の方は余り得意でなく、いつも女生徒を虐めては喜んでいて、サド傾向の強烈な方。農家の長男でしたから、今は農業に従事しておられる筈。

左側で、まりこの足を持ち上げているのがC君。料亭の息子さんで、成績は上の方。三人の中、この方だけが、大学まで進学され、現在はT大学の学生さん。無口で陰気な性格で、友達の少ない方でしたが、A君とB君には、どんな訳か、よく気が合っていました。頭は良いのですが、残酷なことを、平気でやる、蛇のように冷たい感じの方で、女生徒か

らは特に恐れ嫌われておりました。

以上、貴男様のイメージ画に登場している三人の男性を御紹介しましたが、主人は、折角、貴男様が面白いお話を作って下さったのだから、是非、その役を続けろ、と厳しい御注文をなさいます。貴男様の上手なお話に下手くそな、まりこの話を追加するなど、おそれ多く、大変、申し訳ないことですし、あたし自身、教え子の賜りものにされる場面を書くことは、たとえ仮空の作り話にしても、とっても惨めな気持ちになります。アイディアマンの主人は、御自分でも、いろいろと新しい趣向をお考えになって、どうしても書けと強要なさいますし、貴男様のイメージ画の、多少の御参考になればと思ひまして、貴男様のお話の続きを、三人の会話風にして、まとめを見ましたので、御笑覧下さいませ。

(いろいろな責道具が、乱雑に散らばっている奴隷部屋の中央の、小さなテーブルを囲んで、話し合っているのがA君、B君、C君。部屋の隅の床の上に、大の字にされて声を出す力もなく、くたくたに疲れてボロ切れのようにな長々と裸身を横たえているまりこ。四時間余りの、教え子たちの辱かしめを受けて、体中にドレイ妾でよかったという幸福感を漲



らせている、まりこの耳に、時には耳を蔽いたくなるような三人の淫らな会話が、否応なしに入って参ります。お部屋の中はもう大分、暗くなっておりますが、まりこの裸身だけが、白く暮れ残っております。まりこの主人の姿は、かなり以前から見当りません)

A君「今日は結構、面白かったな」

B君「俺は、全く驚いたよ。まりこ先生が、お妾になっているなんて」

C君「普通の二号さんならまだしも、ドレイメカケだからな」

A君「われ等の恩師は、ドレイメカケか」

C君「あんな奴を先生、先生と呼んでいたと思うと、全く腹が立つよ」

B君「あんな奴とは、少し、ひどすぎはしないかい、少なく共俺たちの恩師だからな」

A君「いや、あいつは、お妾に

なっていて喜んでるんだ。先生と呼ぶより、まりこと呼び捨てにした方が、喜ぶ女なんだ。いや、もっと侮辱して、メス犬まりことか、裸パン助のまりこと呼んだ方が、嬉しい女なんだ。なあ、そうだろ、まりこ」

(まりこは、心の中で「そうよ」「そうよ」と呟きます) 以下()の中は、まりこのひとり言です。

B君「しかし、俺は矢張り先生と呼ぶことにするよ。みんな、まりこ、まりこ、と呼び捨てにしている、時々、先生と呼ばれると、一層、屈辱を感じると思うな」

(B君は憎い方。そうなの、あなた方に先生と呼ばれるのが一番、辛いよ)

C君「しかし、まりこの主人は、大したもんだな。俺たちの恩師を、あそこまで飼育したんだからな。全く、感心するよ」

A君「しかし、まあ、よく見てみるよ。あんなに、何もかも、さらけだして、よく羞かしくないもんだな」

(いいえ、まりこは、羞かしいのよ。死ぬ程羞かしいのよ。あなた方に、何もかも見られて……)

B君「ああ、俺は、もうたっけないな。あんなに、見せつけられると」

C君「俺も、たまらないよ。しかし、主人の許可を得ないと、まずいだろ」

A君「いや、それは、いいんだ。主人には、さっき、話をつけたんだ。実は、俺の会社の改造工事をやらすことと、もう一つ、俺の情婦を今夜、彼に提供することを条件に、一晩俺たちは、まりこを借りることにしたんだ。いわば、一種のおメカケ交換だな。勿論、貞操も自由にしていんだ」

B君「そいつは有難い。さすがに大した腕前だ。早速、先生に、とどめを刺してやるか」
A君「待て、待て。そんなに、あせりなさんな。明朝まで、ゆっくり、楽しもうよ。時間は、たっぷりあるからな」

C君「そうだ。じっくり計画を立てて、徹底的に、まりこを辱かして、やろうじゃないか。それに、今晚、一晩だけでなしに時々、まりこを、俺達のグループで、借り出せないのかい」

A君「それは、まりこの主人が、俺の情婦をお気に召すかどうかで、決まるよ。お気に召せば、交換に何度でも、まりこを借り出せるよ」

C君「A君にばかり、負担をかけては申し訳ないな」

A君「いや、いいんだ。俺だって結構、面白からな。それに、今の女には少し飽きが来ているから、丁度いいんだ。まりこのようなマゾ女を、おもちゃにする方が、ずっと楽しいんだ」

C君「じゃ、ついでに君の別荘も一晩、お借りできないかな」

A君「別荘で何をやるんだい」

C君「もう一度、クラス会をやるのさ。今度は女生徒も呼ぼうじゃないか。まりこの奴を同性の教え子の前に、素っ裸にして立たしてやるんだ。きっと、今日以上に、屈辱を感じると思うよ。それで、あいつも結構、嬉しがると思うよ」

(同性の教え子に、羞かしい恰好を晒すなんて、本当に惨めよ。でも、素敵！)

A君「それは、いいアイディアだ。早速、来週でも開催しようじゃないか。パーティ式でやろうよ」

B君「中央の席に、丸裸の先生を坐らせるんだな。生れたままの丸裸の先生を」

C君「食べ物と飲み物は、A君にまかすよ。でも、ドレイには食べ物、いらさないよ」

B君「先生には、何を食べさせるのだい」

C君「まりこには、メン鶏になってもらって

皆の前でコケッコと啼きながら、いくつも卵を生んでもらうのだ。自分の生んだ卵と、自分で刻んだ果物を食べさせればいいよ」

A君「それは傑作だ。ついでに飲み物は、俺達男性の教え子が交代で、各自の特製のジュースを提供しようじゃないか」

B君「先生、きつと涙を流して喜ぶよ」

A君「あいつ、きつと、(まりこ、幸せよ。最高に幸せよ)」と言って、一人一人に、おしやぶりをするよ」

(女言葉のお上手なA君。そうよ、そうなのまりこは、きつと最高に幸せよ)

C君「余興に、まりこの裸踊りなんか、どうだい。俺達の合唱に合わせて、なるべく淫らな踊りをやってもらうのだ」

B君「ダンス・パーティもいいな。大勢のカップルに混じって、丸裸の先生が足枷の鎖を引き摺りながら、パートナーを、つぎつぎ変えて、踊らせるのだ」

A君「昔の教室を再現するのも面白いと思うな。丸裸の先生に、自分の軀を教材にして、性教育をやってもらうのだ」

C君「なるべく、きわどい質問をして、あいつを困らせようじゃないか」

B君「女体の呼び名など言わせて、使用方法



を聞くのも面白いよ」

A君「いろいろ話が發展して、まりこの奴、うずうずしているのじゃないかな。おいまりこ。お前、聞いているのか。何とか返事をしたらどうだい」

(まりこ、さっきから、ずっとお聞きしていますのよ。お願いもっと、もっと、淫らなおっしゃって!)

C君「ところで、A君の別荘には、たしか犬を飼っていたな」

A君「うん、ブルドックとシェパードを二匹飼っている」

C君「どちらも、牡だろ」

A君「そうだ。それが、どうした」

C君「大体、分りそうなもんじやないか。あいつは、メス犬だぞ」

B君「そうか、それも一興だ」

A君「しかし、それには、かなり訓練が必要だろ。とても、来週には間に合わないよ」

C君「これは、是非、実現させ

たいな」

A君「それもそうだ。まりこを、長期に借り出して、特訓をやってみるか」

C君「恩師が猛犬と交るの図なんて、最高の傑作だよ。奇ク誌に是非、発表したいな」

(ひどい方たち。とうとう、こんな浅ましいことまで、お考えになるなんて。でも、まりこは畜生ですもの、仕方がないわ。いいえ、畜生で幸せよ)

A君「ところで、大分暗くなって来たな」

B君「俺は腹が減ったよ」

C君「まりこの奴の縄を解いて、食事の支度でもさせるか」

A君「いや、もう少し、今夜のプランを練ろうよ」

C君「縛り、鞭打ち、吊り、木馬、石抱き、花電車、剃毛。もう大抵のことは、やってしまったからな。後は、浣腸位か」

A君「恩師の排泄ショーも面白いな」

B君「俺は、早く先生を抱きたいよ。あの先生を抱くのが、俺の長年の念願なんだ。中学生の頃からの夢なんだ。それが、今晚、叶えられるんだからな。丸裸の先生を自由にできるんだからな。ああ、俺はもう、たまらないよ」

A・C「俺だって、同じだよ」

B君「それじゃ、最後の仕上げにかかるか
るか」

A君「その方法だ。ジャンケンじゃ味気がないから、競売しようか。まりこは奴隷だから丸裸で競売台に立たせて、俺達三人で、競りをやるんだ。一番いい値をつけた者が、一晚あいつを自由にすることができんだ。奴隷競売の実演だ」

C君「それは不公平だ。君のような金持ちと俺のような貧乏学生とじゃ、勝負が決まっているよ。折角の獲物を前にして、指を咥えて見るだけとは、少しひどすぎるよ」

B君「俺も反対だ。俺は、何としても、今夜先生を抱きたいんだ」

A君「まあ、そう、いきり立つなよ」

C君「あいつに目隠しをして、交互で犯すのは、どうだい。一人済むたびに今のは誰と、あいつに当てさせるんだ。間違えると、罰に鞭打ち二十回」

A君「順番を決めるのが問題だよ」

B君「俺を一番、先にしてくれ。俺は、もう我慢できないんだ。俺が一番槍ならいいよ」

A君「三人、同時にしようか」

C君「そんなこと、できるのかい」

A君「上の方と、下の方の表裏を使わせるんだ。奇ク誌に連載されて好評だった、(花と蛇)のヒロイン静子が、川田と鬼源の二人の調教師を、同時に慰めているんだ。二人は、静子の肉体を媒介にして、兄弟の契りを結んでいるんだ。まりこは、静子夫人に憧れているそうだから、きつと涙を流して喜ぶよ。俺達も恩師の躰を媒介にして兄弟になろうじゃないか。上の唇はM、下の方はVとA、俺は断然Mを採るよ」

B君「俺は、矢張りVがいいな」

C君「それじゃ、俺はAだ。あいつ、Aの方の経験があるのかな」

A君「主人の話じゃ目下、訓練中だそうだ。本人は、余り好きじゃないそうだが、嫌がるのを、無理に犯すのもいいじゃないか」

C君「それじゃ、俺はAに決めるよ。その前に何度も浣腸して、清めておかなければ」

(浣腸好きのC君。まりこは、浣腸が一番苦手なのよ。それにA感覚の良さは、まだ分らないのよ)

B君「これで決まった、早速、始めようよ」

A君「待て、待て。折角、まりこの主人からこの場所を、一晚、借りているんだから(女郎ごっこ)をやろうじゃないか」

B君「(女郎ごっこ)とは何のことだい？」
A君「君達も、この建物が一風、変っているのに、気がついただろ」

B・C「確かに、変った建物だ」

A君「これは、昔の遊廓を真似て作っているんだ。まりこの主人は、土建屋さんだから、自分の道楽で、こんなものを、建てたんだ。(北川楼)なんて、もっともらしい看板を掲げて、まりこに女郎の役をやらせて楽しんで

いるんだ。この部屋が、女郎の折檻部屋。隣が、女郎がお客をとる部屋。一階は、土間と板の間で、境に格子の仕切りを作っているんだ。女郎は、板の間から格子越しに、お客を誘うんだ。まりこは、腰巻一枚か丸裸で、女郎役を実演するらしいよ」

C君「それは面白い。まりこに是非、それをやらせよう。俺達の世代は、女郎買いの経験が、全くないからな」

B君「先生を女郎扱いするなんて、素晴らしいな。まりこ先生が丸裸で、俺を誘うなど、夢にも思わなかったよ」

A君「まりこの奴、どんな顔をして、(ちょっと遊んでいらっしやいよ。あたし、うんとサービスしますわ)なんて言うのかな」

(本当にA君は、女言葉がお上手)

B君「俺はもう、むずむずしてきたよ」

C君「じゃ、始めるか。(女郎ごっこ)を」

A君「その前に、一風呂浴びて、さっぱりしようじゃないか。まこりの奴に、背中を流させて、女郎らしく厚化粧させようよ。俺はMコースだから、口紅を、こっそり塗らすよ」

C君「VとAにも、お化粧させようよ」

B君「賛成、大賛成」

A君「牀の楽書きも書き直して、(裸女郎ま

りこ)にしようじゃないか」

B・C「賛成、賛成。大賛成」

A君「じゃ、始めよう。C君、まりこの縄を解いてやれよ」

旭様。貴男様のお話の続き、お気に召したでしょうか。この後、いくらでも話が展開してゆきそうです。でも、まりこには、とてもこれ以上、書き続ける元気がございません。貴男様の拔群の空想力で、もっと、もっと、まりこに羞かしい惨めな想いをさせて下さい

ませ。貴男様のお話を期待しております。それに、今日のまりこの話で、御参考になるところがありましたら、イメージ画にお描き下さいませ。できますれば、七月号のように、女性の牀に楽書きして頂ければと、マゾ女の切なる望みを書き添えさせて頂きます。

旭様。

まりこのような女のために、どしどし立派なイメージ画を御発表下さいませ。全国の奇クファンも、きっと期待して下さると思いますわ。できれば、全誌面を貴男様の作品で埋めた、『須坂旭イメージ画特集号』のようなものを、刊行して頂ければと、一途の望みを抱いております。まりこも、せっせと書き溜めているものを、発表させて頂きます。ドレイメカケの羞かしい写真の発表につきまして、主人のお許しが得られるよう努めます。貴男様のお書きになられました通り、一度、ドレイ妾の生活に陥ち込んだ女は、人間としての、意志も生活も捨てて、動物や家畜並みになって、ただ、ひたすら、殿方のために尽くすことが、生甲斐であり、悦びであることを肝に銘じて、奴隷として暮すつもりでございます。

(動物並み家畜なまりこより)

新発足 懸賞／告白、手記、体験／原稿募集

☆賞金☆

優作	一篇につき	五万円
良作	一篇につき	参万円
秀作	一篇につき	貳万円
佳作	一篇につき	壹万円
可作	一篇につき	五千元

☆規 定☆

一、本誌の内容刷新、充実を期して、ここに新しく、「告白、手記、体験」の原稿を広く懸賞募集いたします。

一、従来、「告白」の分野で文献味豊かな告白特集を度々刊行して、輝やかしい金字塔をうち樹てた本誌が、あらゆる傾向の告白をもって誌面を飾る考えであります。

一、真実味溢れる告白、万人の共感を得る

手記、数奇な体験、どうしても誌上に発表したいという熱意のこもった原稿を求めます。どうか奮って御応募下さい。

一、文章の巧みさとか、表現や描写のうまさは求めませんから、実際に体験されたもの、事実の裏付のあるものが大切だと思います。従って必ず自作の未発表のものに限ります。

一、枚数に制限はありませんが、一回の掲載分としては、三十枚乃至五十枚が適当です。用紙はなるべく原稿用紙をご使用下さい。締切日は毎月十日。翌月号より発表。

一、入選作には掲載誌発売後賞金をお送りいたします。応募原稿は読者原稿と区別するため「告白懸賞」とお書き下さい。